

---

# 僕たちの世界

岡崎結弦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕たちの世界

### 【Nコード】

N8272M

### 【作者名】

岡崎結弦

### 【あらすじ】

かつて一人の、ごく普通の少年がいた。

少年はありきたりな日々を求め、そのために必要な力をつけた。つけてしまった。

それが自分にどんな結果をもたらすかも知らず……

戦乱の世。

人々は様々な力を持っていた。田舎の村で住んでいた少年にも、特別な力を持っていた。

その力は守る力であり、壊す力であり、消す力であり、殺す力であり、忌み嫌われる力であり、そして、

“運命”に抗う力でもあった。

今、世界を変える物語が始まる――……

## プロローグ（前書き）

文章は下手だと思いますが、最後まで読んでくれるとうれしいです。

## プロローグ

### 戦乱の世

人々は不思議な力を持っていた。

ある者は超能力、ある者は魔法、ある者は忍術、ある者は鬼道と呼ばれる力、ある者は剣と呼ばれる力。

それらの力を持つものを人々はこう呼んだ。“能力者”と。

「お願いします！」

早朝の森に元気な声が響く。

「はっはっはっ。遠慮はいらん。かかってこい！」

さっきとは別の声が響く。森の中には二人の人間が、互いに剣を持って向かい合っている。

1人は小柄な少年。顔も中性な顔立ちをしていて、女の子に間違われても不思議ではない。

もう1人は見た目は三十半ばの青年。こちらの顔つきは一言で言う

なら、だらしなかつた。なかなか整った顔立ちをしているが髪は寝癖が目立ち、目は半分閉じていてほとんど寝てる状態だ。だがそれでも、青年には隙がなかつた。いつどの方向から攻撃されても対応できるだろう。

先に動いたのは、少年だつた。

剣を持っている手とは逆の左手を前に突き出し、呪文を唱える。

「求めるは雷鳴・稲光<sup>いひち</sup>！」

すると少年の左手から魔方陣が浮かび上がり、その中心から電撃が放たれる。

「火遁・業火球の術！」

青年が印を結びそう叫ぶと、口から炎が出た。その炎は少年の放つた雷は相殺する。

「どうしたどうしたあ！その程度かあ！」

「だつたら接近戦だ！我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

少年がそう唱えると、魔方陣が少年を囲む。すると少年の足が光つた。それと同時に魔方陣も消える。

「いくぞ！」

すると少年は人間とは思えない速度で青年に突っ込む。

「強化魔法か……じゃあこっちも、我・契約文を捧げ・大地に眠る  
悪意の精獣を宿す」

少年と全く同じ呪文を唱え、青年も突っ込む。  
そして2人の激しい打ち合いが始まった。

## 第一話 剣をにぎる理由（前書き）

プロローグ読んでくれてありがとうございます！引き続き第一話どうぞ！

## 第一話 剣をにぎる理由

「つてー。師匠少しは加減して下さいよー」

僕は仰向けに寝転がりながら師匠に文句を言う。

「あほ。十二分に手加減してるよ」

師匠は欠伸をしながら俺に答える。

「くっそー。今日こそ勝てると思ったんだけどなー」

頭を掻きながら僕が言うと、師匠は爆笑しながら「十年早いわバーカ」と言ってきた。ちなみにこの人、腕は一騎当千だが、頭はとても残念な人である。

「やかましい」

そう言っつて師匠は、剣の峰でおもいつきり僕の頭をどついた。

「~~~~っつっ！モノローグにツッコミいれなくてください……」

「細かいこと気にすんな」

「全然細かいくないと思うんだけど……まあいいや。僕朝食食べてきます。さっきの続きはそれからです」

「続きもなにも、俺の勝ちだっただろ」

「…………じゃあ僕朝食食べてきます。さっきの続きはそれからです」  
「全く同じ台詞を二回言いやがった。そんなに悔しかったのか。一回も勝てたことないくせに」

「聞こえない！僕は何も聞こえない！」

「あー、わかつたわかつた。いくらでも相手してやるから、さっさと飯食ってこい」

「次こそ勝つ！」

「また負けたのか。相変わらずだなー、ミカドさんは」  
そう言うと、父さんが豪快に笑う。ちなみにミカドとは師匠のことだ。

「あの人強すぎるよ。未だに一回も勝てないんだけど」

「ははは、そりゃ簡単には勝てないだろうな。そっぴやミカドさんって、何者なんだろうな？」

「本当に何者なのかしら」

台所にいた母さんが、朝食を持って居間に来た。

師匠は七年前にこの村にやってきた。父さんと知り合った経緯は、何でも飲み屋で飲んでいると気があったとか。その縁で僕は師匠に弟子入りする事になった。師匠はすぐにここから出るつもりだったらしいが、居心地が良いという理由でこの村に住むことになった。森の奥に家を建て、街に降りてきてはみんなと飲みまくっている。僕からしたら、森に家を建てず、もうこの家に住んでしまえばいいのと思う。

「お前何かミカドさんのこと知らないか？」

父さんが僕に聞いてくる。

「僕も詳しくは知らないけど、二十年くらい前に戦場で戦ってたらしいよ。結構有名だったとか」

「へー、あの人もいろいろありそうねえ。この子と同じ『体質』というのも気になるし」

「……………」

母さんの言う体質とは、本来、人は一人につき一種類の能力しか使えない。例えば、超能力を使える奴は魔法や鬼道を使うことができなかつたり、忍術を使える奴は超能力や剄を使えないことだ。だから普通、能力が開花する前にどの能力を使えるように鍛えるかを決める。だが僕と師匠は何故か全ての能力を使うことができた。ついでに、僕にはもう1つ特殊なものがある。それは……

「しっかし、何でももない田舎で生まれた奴が、特殊な体質アルファ・ステイグマに加えて複写眼まで持つてるんだろっなあ。俺達は能力も使えないのに」

「本当よねえ」

「……………」

そう、それがもう一つの僕の特殊なもの、複写眼だ。

複写眼とは、その特殊な瞳で目の前の現象を見ると高速に処理解析する、いわゆる魔眼という代物だ。その目で見たものは一部の能力を除き、使うことができるようになる。使用時には目に五方星が浮かぶのが特徴だ。その目をもってしても勝てない師匠って本当に何者？

そんな話をしながら、にぎやかな朝食を楽しんだ。

「じゃ、行ってくるよ」

僕は父さんと母さんにそう言った。

「負けんなよー」

「ケガだけはしないでねー」

「わかってるよー」

僕は父さんと母さんにそう返事をして、師匠の所に向かった。

「お、来たか」

僕が行くと、師匠はすでに剣を抜いていた。

「行きます!」

そう言い僕も剣を抜く。まずは魔法で足止めだ。

「求めるは雷鳴・稲光!」

この魔法を師匠が相殺したのと同時に、強化魔法を使って懐に一気に潜りこむつもりだった。しかしそれはいきなり失敗に終わった。

「求めるは侵入・蝕走」

その魔法は、相手の魔法に関与し、無効にする効果がある。相殺の技だったら爆発に紛れて近付けたはずだったのに。

「だったら……散在する獣の骨、尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪動けば風、止まれば空、槍打つ音色が虚城に満ちる……破道の六三、雷哮炮!」

稲光の数倍の威力をもつ雷哮炮を放つ。さあどう出る?

「縛道の八一、断空」

師匠の目の前に透明の壁が現れる。八九番以下の鬼道を全て防ぐこ

とができる。詠唱破棄で断空って反則でしょ！

「今度はこっちの番だ。内力系活剽・疾影」

「なっ！？」

スピードに緩急をつけられる上に、気配を四方に散らせてるので感覚が狂ってしまう。複写眼で見抜かないと。

「内力系活剽・旋剽」

すると師匠は疾影の動きをやめ、僕に向かってすごい速度で突っ込んできた。

「くっ、外力系衝剽・閃弾！」

攻撃を放つが全くあたらない。やばい！こうなったら……

「内力系活剽・金剛剽！」

腹に剽を集中し、師匠の一撃にそなえる。だが師匠は僕の目の前でいきなり呪文を唱えた。

「求めるは光陣・縛呪ばくじ」

結果から言おう。僕の負けだ。普通あそこで捕縛系の魔法なんて使うか？

「また負けた」

「まあ、落ち込むなって負け犬君？」

「ぐはっ」

それはトドメですか師匠。

「でもお前才能あるぜ。実際、才能だけはお前の方が上だ」

「え？……本当ですか？」

「ああ。まあ俺に勝つには、後最低でも十年は修行が必要だな」

「……ですよねえ」

「まあいい。次は能力なしだ。剣術の修行するぞ」

「はい！」

そうして両腕が動かなくなるまで修行した。正確には師匠が解放してくれなかった。

僕は疲れていたので、玄関につくなり倒れるように眠りについた。

翌日。

いつものように早朝に師匠と打ち合いをしていた。

「求めるは雷鳴・稲光<sup>いしんち</sup>！」

「外力系衝剄・閃弾」

爆発にまぎれ、僕は一気に師匠の懐にもぐり込む。

いける！

そう思いおもいつきり剣を真横に振る。もちろん峰で。だが師匠はそれを軽く受け流し、剣を片手で回転させ柄の底の部分で僕の顎をついてくる。

「おわっ」

なんとか後ろに下がってよける。しかし師匠は剣を僕に向かって投げてきた。

「くっ」

ギリギリよけることができたが、目の前から師匠がいなくなっていた。

「なっ、どっ」

「後ろ」

「え！？」

振り向いたときにはすでに遅かった。剣先を僕に向けている師匠の

姿が目映った。ああー、また負けかあ。

「お前はちつとは頭を使えよなあ」

「これでも結構考えているけどなあ」

師匠って本当に何者なんだよ。この際聞いてみるか。

「師匠って何者ですか？」

「一般人」

「いやいや。嘘つくなら分らない嘘つかないと」

「……………」

すると師匠はいきなり真剣な表情で僕を見てこう言った。

「お前は何のために剣を抜く？」

「え？」

さっきの質問を質問で返されたので間抜けな声をあげてしまった。  
何のために？うーん。

「この戦争の絶えない時代、お前は何のために剣を抜くのかと聞いている。家族のためか、友人のためか、村の人々のためか、人を救うためか、欲望のためか、上に申し上がるためか、生きるためか、自分のためか……………お前はどんな想いで剣を振っている」

「……………」

あんまりそういうのを考えたことがなかった。始めは父さんや母さんを守るために強くなりたくないと願ったからだ。でも、いつのまにか師匠との修行も楽しくなってきた。気がつけば僕は師匠に勝つことが目標だった。理由は父さんが昔、「師匠をこえることが弟子の最大の恩返しなんだぞ」と言っていたからだ。師匠に恩返しをしたい一心で剣を振っていた。でも今はどうだろう。本当に僕は何のために剣を振っているんだ？

「……………」  
「……分かりません。でも家族や村の人達は大切だし、僕も死にたいとは思いません。だから僕は大切な人達を守るために剣を振りたと思います」

僕の素直な想い。師匠はどんなことを言うだろう。

「……………」  
「……一つ聞こう。もしその大切なもの達が、お前の目の前で殺されたとき、お前はどうする？」

「……………」  
「……分かりません」

いやわかっている。多分、その時僕は……

「相手を殺すかもしれない」

「え？」

「顔に出てるぞ」

「……………」  
「……そうですか」

「まあ、よく考えるんだな。今日の訓練はここまで。俺は昼から用事があるし、お前は今日一日ゆっくり考えとけ」

「……はい」

「……もし答えが出たなら、お前はどんなことがあってもそれを貫き通せ。わかったな」

「……はい」

「返事が小さい！」

「はい！」

「よし、いい返事だ！さっさと飯食ってゆっくり考えてこい！」

「はい！」

師匠は満足そうな顔で家に戻っていった。

## 第一話 剣をにぎる理由（後書き）

第一話いかがでしたか？正直魔法や鬼道の呪文とか詠唱を調べて書くのって結構面倒くさいですね。特に鬼道は詠唱ながいから……

第一話の感想待ってます！

## 第二話 日々と別れ 前編（前書き）

まだ二話なのに前編とは……まあ自分で言うなって話ですよ。それではどうぞ！

## 第二話 日々との別れ 前編

「……」

僕は森を歩きながら、さつき師匠に言われたことをずっと考えていた。何のために剣を抜くのか、大切な人達が殺されても殺した人を殺さずにいられるのか。

「……取り敢えず朝食を食べてから考えよう」

そう言っただけで家に駆け出そうとしたら、一人の少女が目映った。金髪にツインテール。整った顔に勝ち気そうな目は何者も寄せ付けない雰囲気を出していた。服装からしても豪華で、まるでどこかの王女のような。

関わらない方がいいと思ったがそうもいかない。何故ならその少女は足をケガしているのだから。僕は少女のもとに向かった。

「なんだお前は？」

いきなり睨み付けられてしまった。

「えーと、僕、治癒能力を持っているから、君のケガを治してあげようと思って」

「いらん。帰れ」

少女は強がっているが、足からはかなり血がながれている。治さないとそこから病原菌が体内に入り込み手遅れになることだってある。

「治した方がいいよ。治さずに放っておくと取り返しがつかない」とだつてあるしよ」

「そんなもの知るか。帰れ」

「……」

はあ、しょうがない。こつなつたら……

「じめんねえ」

一言少女に言つと、少女の足に手をかざす。

「な、なにをする!」

「ちよつと動かないでよ。治せないだろ」

「いらん!汚い手で私に触るな!」

「はあ、もういいや。とつとと治そう」

そう言い僕は傷口に手をもつ一度かざした。本来なら治癒は時間がかかるものだが、師匠に教えてもらった術式はとても効率が良く、普通よりもずつと早く治せるのだ。

「ふう、治つた」

意外なことに、少女は治癒中はおとなしくしてくれた。口からは暴言の嵐だつたが。

「どろろ？足は」

「……大丈夫」

「そっか、よかった」

「あ、ありがとう」

「え？」

意外だ。意外すぎる。まさかお礼を言われるとは。

「どついたしまして」

お礼を言われるのは意外だったけど、うれしいな。

「お前、名前は？」

「時風みなど。君は？」

「私は三千院ナギだ。よろしく」

「え？三千院って……まさか」

「ああ。私はこの国の王女だぞ」

「ええええええええー！！！！！！！！！！」

お、王女！？さっきから僕は王女と話していたのか！？王女を年下

の女の子として扱ったのか!?

「え、えーと。王女様。さっきはすいませんでした!！」

僕はものすごい勢いで頭を下げた。

「なあに、気にするな。堅苦しいのってきらいなんだ。それと、ナギでいいよ。話し方もさっきのでいいし」

「え、でも……」

「王女の命令を聞かないのか？」

薄く笑いながらいう王女。それは反則だと思えます。

「わかりじゃなかった、わかったよ、ナギ」

「うん、物分かりがいいなお前は。どっかの堅物執事に聞かせてやりたい」

なにやらぶつぶつ言っている。

「ねえ、ナギ。何で王女のナギがこんな所に？」

僕は疑問に思ったことを聞いてみた。

「ああ、どうやら最近頻繁に起きているテロを起こしている組織、“暁”のリーダーがこの近辺にいますという情報があつてな。我が特別精鋭隊が、この近辺を調べることになったんだ」

「え！？暁ってあの！？」

暁とは、数年前に忍術の発展した国、ルナト帝国で反乱を起こした忍者集団だ。集団と言ってもメンバーは九人しかおらず、その全員がピンゴブツクス級の犯罪者達らしい。そんな奴等のリーダーが、この近くにいてるって？

「ああ、その暁だ。奴等は目的もなく人を殺すことも普通にある。だからこの近隣の村の人達には避難するように伝えないといけない。でないと取り返しのつかないことにー」

ドオン！！

「！？」

村の方から爆発音が聞こえる。

「まさか……」

「お嬢様！」

どこかから、1人執事がナギに頭をさげながら言った。

「暁のリーダーペインが、この先の村に表れました！現在、村人の避難誘導を行いながら抗戦中！戦況はこちらが押されています！援護を！」

「ヒナギクとハムスターの部隊は東から、咲夜と伊澄の部隊は西から、私とお前はここから、三方向から一気に攻めるぞ！」

「はい！」

「僕も戦う！」

僕がそう言つと、ナギと執事がこちらを向いて言った。

「お前はここにいろ。お前じゃ何もできない。無駄死にするぞ」

「言い方は悪いけどお嬢様の言つとおりです。一般の方じゃ歯がたちません」

「僕にはこれがある」

そう言つて僕は複製眼アルファ・ステイグマを発動させた。

「お前……それ」

「それに僕は普通とは違う。お願いだ！僕も一緒に行かせてくれ！」

「……お前にとって、つらい光景になるかもしれないぞ。それでもいいのか？」

「ああ」

ナギの問いに、即答する。

「よしわかった。みなとは私達と共に来い！」

「ええ！？いいんですかお嬢様！！」

「ああ、こいつの覚悟は本物だからな」

「お嬢様がそう言うなら、僕はもう止めません。綾崎ハヤテです。よろしくお願いします」

「時風みなとです。よろしく」

僕とハヤテは握手を交わす。

「では行くぞ！ハヤテ！みなと！」

「はい！」

「ああ！」

## 第二話 日々との別れ 前編（後書き）

やっと主人公の名前がわかりましたねえ。正直リトルバスターズの時風瞬とNARUTOの波風ミナト足しただけなんですけど……二話読んでくれてありがとうございます！

### 第三話 日々と別れ 中編

「僕は魔法で先にいきます！」

「僕も行く！」

ハヤテが呪文を唱える横で僕も唱える。

「我契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

「私は遠距離から銃で援護する！二人とも死ぬなよ！」

「ああ！」

「はい！行きますよ、みなとさん！」

僕とハヤテは速度をあげ、村に向かった。

〈ヒナギクside〉

ナギからの伝令で、私達は今東の森から村へ向かっている。早く行かないと犠牲が増える！

そう思いさらに速度をあげる。もうすぐで村につくという所で、人が立っていた。その人は、顔のあちこちに黒い棒状の何かを埋めていた。そして服装は、黒いコートに赤い雲の模様。

暁！

そう思うと同時に剣を抜き、そいつに向かって振る。そいつは私の一閃をそでから出した、体に埋めてあるのと同じ棒で防ぐ。

「歩ちゃん！こいつは私にまかせて、みんなで村に向かって！」

「ヒナギクさん……わかりました！行くよ、みんな！」

そう言つと、部下のみんなも歩ちゃんに続いて村へ向かった。

「あなたの相手は私よ！」

みんなを追おうとする女に、剣を向けながら言う。

「ならばお前に問おう。三千院ナギはどこだ」

「!?!」

こいつらの狙いはナギ!?

「悪いけど知らないわ」

「……そうか、なら死ね」

「桂ヒナギク、参る！」

そうして私の戦いが始まった。



はず。

「あたしの心配より村人の心配せえ」

「隊長……わかりました。ここは任せます！」

そう言い先に進む部下たち。

「あなたの相手はあたしやで」

そう言い、両足のホルダーから出かいナイフを二本取り出す。

「……二刀流か」

「そうや。これでお前なんかこてんぱんにしたる」

「お前に裁きを与える」

そうしてあたしの戦いも始まった。てか伊澄さんはよ戻ってきてー！

「みなとside」

「ハヤテ、こいつ……」

「ええ、暁です」

こいつがあああの暁のメンバーか……既に二人表れている。村を襲っている奴と合わせて……

「四人もいるのか」

「いえ、六人いるはずですよ」

「どづいづこと？」

「あの目を見てください。あの目は輪廻眼といって、伝説の目です。ペインはあの目を持っているんですが、何故かペインが現れる所にはあの目を持つものが六人現れるらしいですよ」

「じゃあ村に……」

「ええ、三人いるかもしれませんが」

「!?!」

こんなヤツが三人？一人でも厄介そうなのに三人？しかもこいつらが狙っているのはナギだ。あんな女の子をこんなヤツが六人で狙っているのか？

なんだよ……それ。

「なんだよ、それ！ハヤテ、ここは任せるよ！僕は村に向かう！」

「わかりました！」

「お前たちに問う。三千院ナギはどこにいる」

「「教えない（ません）よ！」」

そう言つてハヤテはペインに、僕は村に向かった。

（西園side）

「……ひどい」

村を見て私は呟いた。村人の半数以上が瓦礫に埋もれていたり、ペインに直接刺されて動けなくなっていた。

「みんな！ペインを止めるよ！」

ペインの数は三人。すでに先行していた部隊も半数近くが戦闘が不可能だった。でも大丈夫だ。援軍は私達だけじゃない。絶対にペインを倒す！

（みなとside）

「な、なんだ。これ」

目の前には地獄が広がっていた。村の人達や軍の人達が血を流し倒れている。子供を抱き泣き叫ぶもの、もう体を動かさないほど傷つき嘆くもの、瓦礫から抜け出すために助けを求めるもの。

「っ！………ペイン！！」

ペインの一人に突っ込む。

「求めるは雷鳴・稲光！」

しかしペインの一人は僕の放った雷を吸収した。

落ち着け。複写眼で解析するんだ。

「破道の六三・雷哮炮！！」

さあさっきのを見せる！

すると雷哮炮も吸収した。

……成る程。今の術は封術吸引だな。体内のチャクラ循環を逆回転させて術を体内に吸いよせそのまま霧散させる術だ。だったら……

「我契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

一気に距離をつめ、剣の峰で思い切り後頭部を殴る。

ゴン！

鈍い音と共に、ペインが崩れる。や、やった。まずは一人。殺してはいないが確実に脳震盪をおこしたはずだ。

「やるな」

後ろから声が聞こえた。

「怪腕ノ火矢」  
かいわんのひや

ペインの腕がはずれこちらに向かってくる。ロケットパンチか！幸いにも強化魔法を使っていたので、なんとかかよけることができた。

「次はお前か！」

「ああ、そうだ」

そう言い戻ってきた腕をくつつけた。

「三千院ナギはどこにいる」

「知らないよ！」

「そうか。なら死ね」

ペインの右腕から、いくつものミサイルが飛び出す。  
ドンドンドンドンドンドンっ！！！！

次々に向かってくるミサイルを魔法で打ち落とす。

「今度はこつちだ！」

このままやりあっても被害が広がるだけだ。師匠、奥義を使います！

「ミカド流奥義・霞楼」  
かすみろう

そう叫び奥義を放とうとしたら、横から吹っ飛ばされた。

ドオン！

地面に叩きつけられる。

何だ………今のは。

「ぐっ。くそっ」

衝撃波とは違う。じゃあ一体……

さっきのペインのいた場所を見ると、もう一人のペインがいた。さっきのはこいつの術か。

「お前が軍のトップか？」

ペインがそんな質問をしてくる。どうやら何か勘違いをしている。だったら……

「……ああ、そうだ」

こいつらの狙いはナギだ。なら情報を聞き出すためになるべく地位の高い人を狙うはずだ。多分ペインを一人倒したからそんな勘違いをしてるんだと思うけど。

「お前に問おう、三千院ナギはどこにいる」

「だから知らないって………言ってるだろ！」

ペインに向かって突っ込む。

「新羅天征」

「！」

また吹っ飛ばされた。今度は家の壁にぶつかった。

「ぐあっ！」

まずい。このまま何発もくらったらすげに……

それにさっきの技。周りの被害が尋常じゃない。このまま戦ったら本当にまずい。森の中に誘い込んで、奇襲するか。

そう思っつて、村の人達が避難している南の森ではなく、北の森に向かおうとして、走りだした。

「万象天引」

いきなり僕の体が何かに引つ張られる。何だ！？なんなんだ、あいつの力は……！

さっきは引き離されて、今度は引き寄せられる……そう、まるで斥力と引力のような……

「そうか！あいつの力は……」

ペインの能力で、僕の体は宙に浮き、一直線に向かっていた。

「くそっ！求めるは光陣・縛呪はくじゆ！」

そう言つて光の縄を瓦礫に引っかけてなんとか持ちこたえる。危ない所だ。もしそのまま向かっていたら、いつの間にか三面六手となっている、もう一人のペインから生えているノコギリみたいなしっぽで刺されていただろう。

「反則みたいに強いな」

「三千院ナギの居場所を言え」

「断る！」

「ならもう問わない。自分で探す。この近くにいるのはわかっているからな。お前はここで、死ね」

引力の力がどんどんあがっている。本当にやばい！

そう思った時、縛呪を握った手が滑った。

しまった！やられる！

死を覚悟したその時、別の場所から手榴弾と閃光弾がペインに向かって投げられた。

ドオン！

「って」

ペインの力から解放され、地面に尻餅をつく。

「大丈夫！？」

そう言っ僕と同じ年くらいの子がかけてきた。

「あなたは？」

「三千王国直属部隊・シツジ第二部隊副隊長、西園歩です！加勢にきたよ！」

「助かります！気を付けてください、三面六手の方は腕からミサイルを放ちます。そして奥の方にいるペインはものを自在にはじいたり引き寄せたりすることができます！」

「そ、それって人間なのかな」

そう言いながらアーチェリーを構える西園さん。

「西園さん、こっちにはあまり人を回さないでください。数でいつて勝てる相手じゃないです！それより人の救助に回してください！」

「わかった！」

そう言い部下に指示を出す西園さん。僕も集中しなきゃ。

「求めるは焼原・紅蓮くれない！」

呪文を唱え、ペインを追撃する。この魔法は威力が高い上に攻撃範囲も広い炎を放つが、周りの被害が結構すごい。だが、今ペインの周りに人はいない。だからおもいつきり放った。

「新羅天征」

紅蓮がはじかれた。どうやら魔法にも有効らしい。

「くらえ！」

紅蓮がはじかれた瞬間、西園さんが弓を放つ。ただの弓ではない。魔法で強化された弓だ。またその弓をはじかれると思ったが、三面六手のペインがしっぽではじいた。

今は……もしかして！

「破道の五八・嵐！」  
てんらん

竜巻をペインに向かって放つ。いけるか！？

「新羅天征」

嵐ははじかれた。だがこれで確信した。あの能力の弱点！

「西園さん。今から僕の言う通り動いてください」

「え？」

「この戦い……勝てます！」

#### 第四話 日々と別れ 後編

くヒナギクside)

「はあ……はあ……」

「口寄せの術」

目の前のペインがサイの化け物を口寄せする。既に鳥とカメレオンの化け物を口寄せしている。

何なのよこいつ！一体何体口寄せする気！？

鳥の方は何とか倒したが、また新しく口寄せされては意味がない。

「さて……どうするか」

「……時間か」

「え？」

ペインが口寄せした動物たちがいきなり姿を消した。ペインの姿もなくなっていた。

逃げた？……いや、さっきペインは「時間か」と呟いていた。まさか……

「ナギが見つかった？」

だとしたらまずい！ナギの所に向かわないと！

私はナギのいる所に向かって走りだした。大体の位置はわかるけど、一体どこにいるだろう……

〈咲夜 side〉

「三千院ナギはどこにいる」

今、あたしはペインに片手で首をしめられながら持ち上げられていた。

「し、知らん……ゆづとるやる」

「……」

あたしが質問に答えると、いきなりペインの後ろから化け物が現れた。

な、なんや……こいつ。

「次、俺の質問に答えなければ、後がないぞ」

なんやねん、それ。脅してるつもりか？

「三千院ナギはどこにいる」

「だ、か、ら、知らん！」

精一杯大声で宣言してやった。どうや、満足か？

「そうか。判決をくだそう」

すると、化け物の口から一つの手が出てきた。そして、今度はあたしの口から触手みたいなのが出てきた。

な、なんや？何が始まるんや！？

得体の知れない恐怖が体を襲う。

あたし、死ぬんか？

化け物から出てる手が、あたしから出てる触手を掴んだ。そしてすぐに放す。

……え？

「どうやらお前は本当に知らないらしいな」

するとペインはあたしを地面に叩きつけた。

「ぐあっ！」

「もうお前に用はない。死ね」

そう言い、武器を振りかぶるペイン。

今度こそ死ぬ!!

そう思った時、ペインの武器が目の前で止まる。

「……時間か」

「……え？」

すると、ペインは目の前から消えていた。

「は、はは……。命拾いした」

死からの恐怖が無くなった途端、気が抜けてしまって、そのまま気絶した。

（ハヤテside）

「はあああああああ————!!」

そう叫びペインの腹をおもいつきり蹴る。

入った!!

だがペインはすぐに体勢を立て直して武器を向けてくる。

「うわっ!!」



「螺旋丸！」

いきなり僕の後ろからすごい衝撃が走る。後ろを振り替えると、ペインが回転しながら吹き飛ばされていた。

「ふん。口寄せで逃げたか」

ペインを吹き飛ばした人が、吹き飛ばした方向を見ながら呟いた。僕もそつちを見ると、ペインの姿は消えていた。

「あなたは……一体」

「詳しい説明をしてる暇はないのう。それより王女様はどこにいる？」

くみなとside

「じゃあ、今の通りに動いて下さい」

「うん、わかった」

僕の言葉に頷く西園さん。僕の仮説が正しかったら、この作戦で勝てるはずだ。

「我・契約文を捧げ…」

僕の持つてる魔法の中でも最上位の魔法だ。

「宙を覆う精霊の力を放つ！」

くらえ！

空から一つの光がペインに向かって放たれる。

「新羅天征」

それすらもペインははじく。

「西園さん！」

「うん！くらえ、破戒ノ矢！」  
はかいのや

そう言い弓矢を放つ。さつきとは比べものにならない速度だ。

ペインはそれを避けようとする。

今だ！

「縛道の六一・六杖光牢！」

三面六手のペインの動きを止める。詠唱破棄の縛道だからすぐに抜け出されるだろうが、西園さんの弓矢が届くまで拘束するには充分だ。

バキィッ！

ペインに弓矢は見事に命中した。

まだだ！

僕は三面六手のペインの懐に一気に潜り込む。

「ミカド流奥義・霞楼かすみろう！！」

さっき失敗した奥義を放つ。ペインを縦や斜めに切り裂く。ペインの体からは血ではなく機械の部品などが出てきた。

やっぱりこいつは改造人間か。遠慮なしでやってよかった。

僕は剣を最後のペインに向かってふる。

「新羅天征」

「ぐあっ！」

ドサッ

「はあ……はあ……」

今ので大体わかった。ペインの能力のインターバルは約五秒だ。

さっきの作戦は、まずペインの能力にはインターバルがあるとわかったので、威力の高い魔法で能力を使わせて、そのインターバルの間にペインを倒すという単純なもの。インターバルがまさかたったの五秒なのは予想外だったけど。



められる。

「破戒ノ矢！」

西園から放たれる矢を、ペインは一步下がってよける。

体勢が少し崩れた。今だ！

僕は剣を手放し、ペインに向かって手を向ける。

これで終わりだ！

「破道の六三・雷哮炮！！」

電撃を……放てなかった。

まさか……こんな所でガス欠！？まずい！！

「新羅天征」

「ぐあぁっ！」

どこかの家に吹っ飛ばされる。もう体の感覚がほとんどなかった。

「くっ……ま、だ……だ」

戦うために体を無理やり起こす。すると信じられないものが目に映った。そこには……

「父さん……母さん……」



## 第五話 伝説の英雄現る

くみなとside)

見慣れた家に飛び散っている血。

ウソだ……

母さんを守るために、母さんに覆いかぶさって倒れている父さん。

ウソだ……

父さんを貫いて刺されている母さん。

ウソだ！

二人の体からとめどなく流れる血。





「……………」

「しつこい奴だ……もうお前に用はない。死ね」

そう言い、手を僕に向けるペイン。

「新羅天征」

〈西園side〉

「うっ……」

少し気絶してたかな……情けない。みなとくんは何発もくらってそれでも戦ってたのに。

みなとくんが民家に吹き飛ばされた後、助けようとしたら私も吹き飛ばされた。

本末転倒ってこういうことかな？

早く起きて戦わないと……

「痛っ」

右腕と肋骨をやられたか。まずいなあ。これじゃ弓をひけないよ。

そう思いながら立ち上がって、顔をあげると、みなとくんがペインに吹き飛ばされていた。

「なっ!?!」

まずい!このままじゃ本当にみなとくんが死んじゃう!

ペインを止めるために、折れている右腕を無理やり動かし、弓を放とうとしたが、放つ寸前で右腕から力が抜けた。

やっぱり無理か!

すると、みなとくんが叫びながらペインに向かって走りだした。

「みなとくん!?!」

みなとくんが死ぬ!

そう思った瞬間、ペインが技を放つ。

「新羅天征」

私は目を閉じた。みなとくんが死ぬのを見たくなくて。だが、何故か人が吹っ飛ぶ音が聞こえない。

恐る恐る目を開けると、そこにペインとみなとくんの姿はなかった。

〈ペイン天道 side〉

「ペイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
ーン!?!」

そう叫びながら男が突っ込んでくる。こいつも痛みを理解したのだろっ……

だが俺の痛みはお前以上だ。

「新羅天征」

男を吹き飛ばす。これでもう動けないだろう。ここに三千院ナギの居場所をばく奴はいないな。人間道の戦っている相手が知っていたら、直にわかるだろうが……

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおー！！」

男がまた向かってくる。口からはすでに血が大量にながれ、身体中の骨が折れているはずだがな。

「しつこい奴だ……もうお前に用はない。死ね」

そう言ってこいつに止めをさすために手をむける。時間がない。さっさとこいつを殺すか。

「新羅天征」

そう言って技を放った瞬間、いきなり別の男が男の前に現れた。そして次の瞬間、二人の姿が消えていた。

「……今の男は、……時間か」

畜生道に退却させる。後は畜生道が6人を口寄せさせて撤退するだけだ。

「逃がさないよ」

「！」

いきなり目の前にさっきの男が現れたと思ったら、俺は森の中にいた。

「……………これほどの時空間忍術、やはり貴様か。波風ミナト……………いや、四代目火影」

くみなとsideく

どこだ……………ここ。

さっきペインに吹き飛ばされそうになった時、いきなり人が目の前に現れたと思ったら、ここにいた。

辺りを見れば、ここが森だとバカでもわかるが、問題は森のどこかだ。

「はあ……………はあ……………」

もう術一つ発動できない上に、身体中の骨が折れているのだから、ほとんど動かない。

まだ……………だ！

ペイン……あいつだけは、許さない!!

そう思い、足に力をいれる。

僕は……

僕は!!

「みなとさん？」

「え？」

急に名前を呼ばれた。声のした方を見ると、そこには……

「……ハヤテ？」

ハヤテと、見知らぬ白髪のでかいおじさんがいた。

くナギsideく

……くそ。

何も出来なかった。敵の狙いが私だとわかった途端、ハヤテやヒナギクから隠れるよう言われたのだ。

「……みんな無事なのか？」

心配のあまりそう思う。隠れるのをやめて、みんなの援護に行こうか？

それやったらハヤテから大目玉くらうだろうなあ。

でもやっぱり……

「一人だけじつとなんかしてられるか……」

私は隠れるのをやめた。

みんなと戦うために。

くミナトsideく

「波風ミナト……いや、四代目火影」

ペインが僕に手を向ける。

来るか！

「新羅天征」

僕はあらかじめマーキングしていた内の、一つに飛ぶ。

僕の目的は一つ。ペインを倒すことではなく、ペインにマーキングをつけることだ。

さて、どうするか……

「万象天引」

体がいきなり何かの力に引っ張られる。

また、マーキングの一つにとぶ。今度はかなり距離があり、方向もペインの後ろだ。

「ちょこまかと……」

奴に逃げられるより早くマーキングをつけないと。

こうなったら……

僕はペインに突っ込む。ペインは僕に手を向け、技を放つ。

「新羅天征」

今だ！

僕はマーキングつきのクナイを上へ投げ、そのクナイに移動してペインの技をよける。

続けてクナイをペインに向かって投げる。ペインが顔を横に傾きよける。

その瞬間、僕はクナイに移動する。即ちペインの真後ろに。

「なっ」

「螺旋丸！」

僕は螺旋丸をペインの背中に加減なしで放つ。

ドオン！

螺旋丸をくらい、吹き飛び木に叩きつけられるペイン。

よし！マーキングをつけた！

ボンッ

ペインが消える。何とか間に合ったか。

さて、何としても奴等のアジトを掴まないと……

まず自来也先生と合流しないと。

〈みなとside〉

「ハヤテ？」

「！？どうしたんですかその傷！？」

僕のポロポロの体を見て顔を蒼白にしながら、ハヤテが駆け寄ってくる。

「ペインとの戦闘でやられた。たいした傷じゃないよ。それよりナギは？無事なのか？」

「お嬢様は隠れられているので大丈夫です。それよりあなたは自分の身体の心配をして下さい！」

そう言いながら、回復魔法を僕にかける。

「僕のことはいいから。早くナギの所に……」

「行きません。みなさんの傷を治すまで」

ハヤテは僕の言葉を頑なに断り続けている。

成る程、ナギの言っていた堅物執事は。

「……ナギの気持ちがわかる気がする」

「なにか言いましたか？」

「いやなにも」

地獄耳でもあるのか。気を付けないといけないな。

「……少しは落ち着きましたか？」

「え？」

ハヤテの言葉に啞然する。

「さっきのみなとさんは、怒りや憎しみをはらすために、ただがむ

しやらに暴れる人のようでした……」

「……」

「でも、それではペインに勝てません。それに憎しみをはらすために復讐して、それが成功しても……後に残るのは虚しさだけです」

「……じゃあ、僕はどうすればいいの？この胸の内から込み上げる葛藤をどうすればいいの？この憎しみを、どうすればいいの！？」

「……」

「ペインに復讐したって、父さんと母さんが戻って来るわけじゃない！でもだからって、このままペインを許すことなんてできないよ！」

「それが戦争の引き金だ」

いきなり白髪の男が口を開いた。

「お前みたいな奴を、わしは腐る程見てきた。両親を殺された者、恋人を殺された者、友人を殺された者……みな、大切なものを殺された。そいつらは、今のお前とおんなじ目をしとつたのう」

男が静かに目を閉じる。その人たちを思い出しているのだろう。

「……その人たちは、どうなつたんですか？」

僕は気になったことを聞いてみた。

「みな、死んでしまったのう」

「え？」

「あるものは仇を討った相手の縁者に殺され、あるものは仇討ちに失敗して、またあるものはその死んだ人間を追いかけて……みな、死んだ」

「……………」

「何が正しいのかはわしにもわからん。だが、それぞれの人が、その“答え”を出す。たいていの人はその“答え”を憎しみにかえる。だから戦争がおき、また人が死に、憎しみは生まれる」

「……………」

「この憎しみの連鎖を止めない限り、戦争は続く。みなそれをわかっていても、戦争は起こってしまう……………」

「だったら……………だったら僕はどうしたらいいんですか!？」

僕は男に叫ぶ。もうどうしたらいいのか、僕にはわからない。やることの全てが間違ってるんじゃないかと思ってしまう。

僕は……………僕は……………

どうしたらいいんだ!!

「そんなものは、自分で考える!」

男が僕に向かって怒鳴る。

「さっき言ったはずだのう。何が正しいかは誰もわからない。誰もがそれぞれの“答え”を選ぶって。だから、お前も自分で選べ！」

「でも……僕は」

「お前は、わしが復讐しろと言ったら復讐するのか？人を殺せと言ったら殺すのか！？」

「……」

「違うはずだのう。だったら、お前が自分で選べ。それに、お前はもう“答え”を選んだんじゃないのか？」

……そうだ。僕の“答え”は決まっていたはずなのに……

ペインが憎くて仕方がなかったけど、一度も急所を狙わなかった。そんな奴が復讐？

「はは……」

笑えないなあ。僕の“答え”は決まっていたのに、何で僕はそれと逆の道に行こうとしてたのだろう。

それは多分、僕が認めたくなかったから……

父さんと母さんが死んだのを、認めたくなかったから。

父さんと母さんのためにとつた剣。そのために七年間必死で修行し

た。その七年を否定された虚無感。

一番大切な人を守れなかった悔しさ。

そして、二人が僕に笑いかけられなくなってしまった悲しさ。

それらを認めたくなくて、その原因を作ったペインに、体が動かなくなっていくらいボロボロになっても、がむしゃらに挑み続けた。

僕は……バカだ。

もちろん憎しみがなかった訳じゃない。でも、僕の頭はぐちゃぐちゃになっていたのでそんなことを考える余裕なんてなかった。

本当に僕はバカだ。

僕は男に向かって頭をさげて言った。

「ありがとうございます！」

男はそれを見て満足そうに笑うと、「気にすることはないのう」と言った。

「あの……あなたの名前は？」

僕は男に聞く。恩人の名を知りたくて。

「わしか？わしの名は……」

男は一旦間を置いて、そしてその名を告げた。

「自来也、だ」

## 第六話 自来也の理由

くみなとside

「自来也、だ」

「え!？」

男の名前を聞いて、ハヤテが驚く。

「どうした、ハヤテ？」

僕がそう言つと、ハヤテはさらに驚いた。

「知らないんですか!？伝説の三忍の一人ですよ!！」

「伝説の三忍？」

「……本当に知らないんですか？」

僕は頷く。すると、ハヤテが説明を始めた。

「伝説の三忍というのは、ルナト帝国の中でも、飛び抜けて秀でた三人の忍者につけられた呼称です。その実力は軍の総帥より上だそうですよ」

「本当に!？」

僕は自来也さんを見る。たしかに雰囲気はただ者じゃないけど、そ

こまですごい人だとは思わなかった。

「もう三忍じゃないけどのう」「どづいうことですか？」

ハヤテが自来也さんに聞く。

「まだ他国にはあまり知られてないようだのう。三忍の一人、大蛇丸は知ってるな？」

「はい。確か国を裏切って、国外に逃亡した抜け忍ですよね」

「そつだ。そいつが殺された」

「え！？誰にですか！？」

「同じ抜け忍の、うちは一族の生き残り、うちはサスケだ」

「そんなことがあったんですか……。でもそれより、何で自来也様がここに？」

ハヤテが自来也さんに一番気になっていたことを聞く。

「それはのう……」

「自来也先生！」

いきなり知らない男が目の前に現れた。この男は……

「ああ！！さっきの！！！」

僕は大声を上げてしまう。

「ん？君はさっき助けた子か？」

そう。さっきペインの攻撃から僕を守ってくれた人だ。

「さっきはありがとうございました」

僕は頭をさげる。

「いいよ別に。それより君、傷は大丈夫か？」

「そういえばこいつ、ペインとやりあったんだっただのう」

「すごかったですよ、彼。三人のペインをほとんど一人で相手してましたから」

「……さすがは……だ」

自来也さんが何か言ったが、聞こえなかった。

「で、傷はどうだ？えーと……」

「みなとです。時風みなとです」

「え？」

「は？」

すると二人は黙った。

「……そういえばみなとと呼ばれていたのう」

「?どうかしたんですか?」

「いや、驚いただけだよ。君の名前が俺と同じだったから」

「え?そうなんですか?」

「ああ。俺は波風ミナト。よろしくみなと」

「よろしくお願いします、みなとさん」

「自来也様……まさかと思いますが」

「四代目火影だ」

「やっぱりですか!?!」

「?この人もすごいのか?」

「ルナト帝国の王様の四代目ですよ!」

「……王様?」

「そうです」

「この人が?」

「そうです」



自来也さんは真剣な顔で告げた。

「暁が近々行う大規模な戦争を、この国の王女様に伝えるためだ」

「えっ!？」

「なっ!？」

僕とハヤテは絶句する。戦争をおこす?何のために……

「で、でもどうしてこの国なんですか?」

ハヤテが顔を蒼白にして聞く。当たり前だ。自分の国で戦争が起こるのだ。いくら軍のトップだからといって怖くないわけがない。だが、

「勘違いするな。戦争が起こるのはこの国じゃない。キー王国とカラスモリだ」

「え?キー王国もカラスモリも、戦争とは無縁の国なんじゃ……」

キー王国は、今代の王様が、何でも昔自分の妹が死んだことをきっかけに、人が死ぬのを嫌うようになったとか。それに昔から、争い事はキライらしい。

対するカラスモリの王も、人が死ぬのを嫌っている。

だから戦争の絶えない時代でも、この二国はここ数年戦争を起こしていない。

その二国が戦争するなんて……

しかも、

「キー王国は同盟国なのに……」

そう、キー王国は三千王国と昔、同盟を結んだ関係だ。

「……キー王国が戦争するから、同盟国の王女に教えにきたんですか？」

僕が聞くと自来也さんが首をふる。

「わしが王女に伝えにきたのは、暁がその戦争の引き金をひこうとしていることだ」

「……え？」

「な、なんですか、それ」

「……それが暁だよ」

僕とハヤテが信じられない顔をしていると、ミナトが鋭い口調で言った。

「そして俺たちがここに来た本当の理由は、それを王女に教えて、キー王国の王にこのことを伝えて、戦争を止めてほしいからだ」

「……」

僕とハヤテは口を開けてポカンとしている。

この人たちは、僕と生きている次元が違うと思った。

「そして、わしらがやるうとしてることが、暁の連中にはれた。すると奴等はずとんでもない方法をとることにした」

「なんですか、それは……」

ハヤテが自来也さんに聞く。気になるのだろう……

当然僕も気になる。

「それは、王女を殺すことだ」

「な……」

「どづいつことですかっ!?!」

ハヤテが叫ぶ。僕も叫びそうになってしまった。

「つまりだ、まずこの近辺にペインがいると情報をリークしたんだ。そしたら王女の性格上自分が部隊を率いてやってくると思ってたな」

「じゃあ僕達は……」

「はめられたってことだのっ」

「そんな……」

「……………」

そのためだけに、父さんと母さんは死んだのか……

くそっ

「落ち着けみなど」

ミナトさんが僕の肩に手をおく。

「……………もう大丈夫です」

僕はミナトさんにお礼を言う。

「……………わしらがそのことを知ったのが昨日。そしてわしらは昨日、ある計画をたてた」

「なんですか、それは？」

ハヤテが身を乗り出して聞く。

「暁のアジトを見つける」

「どっっちゃってですか？」

「ミナトの能力を使う。こいつはマーキングをつけた場所に自由にとべる。そして、さっきペインにミナトがマーキングをつけた」

「苦労しましたよ。向こうも僕等が来るのがわかってたみたいで、すぐに逃げようとしてましたから」

「じ、じゃあ……」

「ああ、作戦は成功だ」

「や、やった」

アジトを突き止めて、暁を潰せば、戦争を止められる。

「人が死なないですむ……」

「それはどうかな」

「……!?」「……」

僕達は驚いた。いきなり、暁のコートを着て、仮面をつけた男が現れたからだ。

「!? お前、あの時の……」

「十六年ぶりだな、波風ミナト」

「知ってるのか? ミナト」

「はい、九尾の封印を解いた奴です」

「! こいつがマダラか! ?」

うちはマダラ……僕でも知っている。昔、初代火影と一緒に今は木の葉帝国を作った人……

木の葉帝国とは、昔のルナト帝国の昔の名前だ。

でも……

「……もつうちはマダラは死んでるはずですよね？」

そう、うちはマダラは初代火影に殺されたはずだ。それに、うちはマダラが生きていたのは百年近く前のことだ。生きているわけがない。

「さあ、どうかな？」

仮面の男が答える。そして、消えた。

「え？」

「後ろだ！」

振り返ると、仮面の男が僕に掌底を繰り出してきた。僕はそれを受け止めようとして……

「そいつに触るな！」

「！？旋廻！」

僕は後ろにすごい速さで下がる。ミナトさんがいきなり忠告してきたのだ。

「どづいづことだ？」

自来也さんがミナトさんに聞く。

「あいつに触れると、体の中に引きずり込まれます」

「？」

訳がわからない。

「別空間にとばされるのか？」

「はい、おそらくは……しかもこっちの攻撃はすべてすり抜けます。唯一あたるのは相手をとばすために実体化したときだけです」

「やっかいだのう」

確かにやっかいだ。勝ち目なんてあるのか？

「波風ミナト。お前のマーキングはすでに消した」

「なっ！？」

ミナトさんが驚く。

そんな……くそっ。

「そしてお前たちに勝ち目はない」

そう言うと、男の周りの景色が歪んで、いつの間にか男の手にくぐったりとしたナギの姿があった。

「ナギ!？」

「お嬢様!？」

僕とハヤテが驚いた声を出す。

「こいつを殺されたくなければ、おとなしくしている。そう、戦争が起こるまでな」

「貴様っ!」

自来也さんが怒鳴る。ミナトさんも唇を噛み切るくらい悔しがっている。

「くそっ」

こんなとき、師匠がいれば……

「求めるは光陣・縛呪まわくまじ」

いきなりどこかから声があった。すると、光の縄がナギを捕らえ、そのまま仮面の男から引き剥がす。

「ちっ、貴様は……」

仮面の男が忌々しげにある一点を睨む。そこには……

「よう、みなと。えらい大変そうだな」

「し、師匠!？」



## 第七話 動き始める世界

くみなとSide)

「師匠!？」

師匠はへらへら笑いながら近づいてくる。

「自来也とミナトもいんのか。久しぶりだな」

「え？知り合いですか？」

僕は自来也さんに聞く。

「さっき言ってた旧友だよ」

「……………」

啞然とするしかなかった。

「ん？珍しい珍客もいるなあ」

「……………何故貴様がここにいる」

師匠がマダラに向かって話しかけると、マダラは忌々しそくに呟いた。

「……………ここが俺の拠点なんだよ」

「……おいミカド、あいつのこと知ってるのか？」

自来也さんが驚いたように聞く。

「まあ、昔にちよつとな」

師匠は言葉を濁しながらこたえた。

妙だな。師匠が言葉を濁すなんて。

「さて、じゃあ珍獣を捕えますかね」

そう言っつて師匠はマダラと向き合う。

「……捕まえられると思っつているのか？」

「……まあ、無理だろうな」

さっきの時空間忍術を使われたら、追うことなんてできないだろう。

「だが、お前の目的は阻止できたぜ」

そう言っつて脇に抱えているナギを指差す。

「……確かにそうだ。だが、もうお前たちに戦争を止めることはできない」

「……どういふことだ？」

「いずれわかる。そして新たな時代が始まる」

最後にそう言つて、男は消えた。

「新たな時代？」

「……おい、その執事！」

師匠がハヤテを呼ぶ。

「全軍を王都に戻せ！今すぐキーに向かう準備を始めろ！」

「え、でも……」

「早くしろ！手遅れになる。王女の手当ではキーに向かう道中にする！」

「は、はい！わかりました！」

そう言つてハヤテは無線で部下たちに指示をだす。

正直、師匠がこんなに大声を出したのに驚いた。いつもだるそうに眠そうにしている、気がむいた時だけやる気をだすような人なんだ。その師匠が真剣な顔で自来也さんたちと、これからのことを話していた。

「ミナトはすぐにこのことをルナト王国に報告。俺と自来也は情報収集するために各地をまわる。これでいいな？」

「ああ」

「はい」

「師匠」

僕は話終わった師匠に聞く。

「僕はこれからどうしたらいいんですか？」

「知るか。自分で考えろ」

「ええええええええええ！！！！」

ひ、ひどすぎませんか師匠。

「冗談だ。冗談」

うそだ。目が本気だった。

「お前は自来也に同行しろ」

「え？なんでですか？」

「お前、強くなりたいだろ？」

「え？はい、まあ」

「あいつには、お前に教えてほしい術があるって言うってあるから。その術でまた強くなるんだな」

「でもそれ複写眼アルファ・ステイグマで見たらすぐ覚えれるんじゃ……」

「いや無理」

「え？」

「まあ見ればわかるって。じゃあ俺もっ行くわ」

「もうですか？」

「お前もすぐにいけよ。時間がないからな。自来也にいろいろ教えてもらえよ。じゃな」

そう言うと師匠は消えた。いや時空間忍術でどこかにとんだんだ。僕も早く行かなくちゃ！

「自来也さん！行きましょう！」

「お姉ちゃん可愛いのう」

ナンパしてやがった！

「自来也さん！」

「何だみなと？出発ならもう少し後にしろおの」

「いやいや！そんな時間なんてないですから！」

「冗談だのう」

この人も目がマジだ。

「じゃあ、最期になるかもしれないからな。別れの言葉でもかけてこい」

「え？最期？」

「お前、これから戦争を止めるためにわしらは動くんだぞ。死なない保証がどこにある？」

「……………」

「そうだ……………僕はこれからする事で、死ぬかもしれないんだ……………覚悟、決めないとな。」

「……………わかりました」

そうやって僕はハヤテに声をかけた。

「ハヤテ、いろいろありがとう！もう行くよ！」

「え？もうですか!？」

「うん」

「そうですねか……………もし……………もし、また会えたら、王宮で盛大にもてなします！だから必ず生き残ってください！」

「そつちもね。……………じゃあ、また」

「はい。村の皆さんのことは任せてください」

「ありがとう！」

そう言っつて僕達は手を振って別れた。

「行きましょう」

「あんな簡単でいいのか？」

「いいんですよ。また会えますから」

「……死ぬかもしれんぞ？」

「死にません。約束しましたから」

そつだ。僕もハヤテも死なない。戦争も起こさせない。絶対！

「……じゃあ、行くか！」

「はい！」

行つてくるよ、父さん、母さん。

## 第八話 実戦経験

「みなとside」

「い、今どの辺ですか？」

僕は前を歩く自来也さんに聞く。

「なんだ？もうばてたのか？」

「そりゃばてますよ！もう二日も歩きっぱなしじゃないですか！」

「？ 国と国の間だったら、これくらい普通だけどのう」

「僕は国からでたことないんですよ！それどころか、都会とかにも行ったことはありません！」

僕がそう言つと、自来也さんは何か考えるような顔をしたあと、僕に言った。

「お前、実戦経験がないじゃろ？」

ギクッ

僕は文字どおりギクッとしてしまった。全く以てその通りだったからだ。

「そんな奴がペイン三人と渡り合った、か。確かに才能はずば抜けてあるようだのう……そうだ」

自来也さんが何か思いついたように声をあげる。ていつか目が怖い  
です。

僕は寒気がした。少しではなくとも。

「みなと、このまま真っ直ぐ五キロほど行くと、今から行く国の重  
要文化遺産の砦がある」

「そ、それがどうかしたんですか？」

「今からわしがその砦の中に、この巻物を置いてくる」

そう言っつて巻物を見せる。まさか！

「当然、重要文化遺産の上、砦だから警備はかたいが、わしは顔が  
きくから中に入れる」

嫌な予感しかしないんですけど！

「お前、この巻物をとってこい」

「やっぱりですか！」

—————

そんなわけで今僕は砦の近くに隠れている。この砦は森の中にある  
ので、隠れる場所には困らない。

『わしが中に入って5分後に攻め込め。ああちなみに、この砦ね奴

らは殺す気でお前を襲うが、お前は殺すなよ』

というのが、さっき自来也さんから仰せつかったことだ。

無茶苦茶だ。あの人師匠並に無茶苦茶だ。

そろそろ5分たつ。

ちなみに5分たつても騒ぎなどが起きなかった場合、僕にとつてもつらい口では言えないようなお仕置きがまっているらしい。

行くしかないか。

僕は目の前に魔方阵を描く。

『求めるは雷鳴>>>・稲光いしゅく！』

空に向かって電撃を放つ。

ドオン

轟音が辺りを支配する。警備の兵たちはいきなりの轟音に混乱していた。

「な、なんだ!?!」

「敵か!?!全員……!」

だが警備兵たちは突如、混乱の声をあげなくなる。いや、あげれなくなる。

その原因は、僕の使った魔法、『閻庭』だ。閻庭は空気の振動を止める魔法だ。

最初に轟音と光を伴う攻撃魔法を放ち、危険な状況に置かれていることを理解させてから、だめ押しのように音のない世界を作りだし恐怖を煽る。

師匠に教えてもらった不意討ちの常套手段だ。

「今のうちに……」

『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』

魔方陣を描き、呪文を唱える。

兵の数は約百人。さすがに多い。始めにできるだけ倒さないと、後がきつい。

僕は隠れていた場所から一気に砦に向かう。

閻庭のおかげで後少しの間は声をあげられないはずだ。

僕はまず目の前で混乱している七人を手刀で気絶させた。

そして僕に気付いた兵たちに向かって、魔方陣を描く。

そして閻庭が途切れた瞬間、呪文をとなえる。

『求めるは焼原>>>・紅蓮』

魔方阵からいくつもの炎弾が放たれ、警備兵たちを襲う。加減をしているから、せいぜい気絶ですむだろう。そしてさらに魔方阵を描く。

今の紅蓮くれないでほとんどの兵が僕に気付いた。だからもう一度あんで闇庭使うことにしたのだ。

『求めるは静寂>>>・闇庭あんで』

そして辺りは静寂に包まれる。残念ながら今回はさすがに混乱させることは出来なかったが、目的は別にある。

僕は強化魔法で限界まで加速し、一気に砦の中に入る。周りの兵たちには僕が消えたように映るはずだ。

よし。このまま自来也さんの所まで行く！

だが、思ったほど甘くはなかった。

中にも兵はかなりいた。その兵たちから逃げていると、床の一部が凹んで、トラップが作動したり、自分がどこにいるかわからなくなったり、どこからともなく激流が流れてきてそのまま外まで流されそうになったりと大変だった。

そして自来也さんのところにようやくたどり着くと、

「おうみなと、来たのかあ」

なんて言いながら女の人達と酒を飲んでいたので、ドロップキック

をかましてやった。

## 第九話 螺旋丸（前書き）

主人公 時風みなと

身長 165cm 体重 48kg

髪の色 黒

性格 温厚？

服装 伝勇伝のライナみたいな感じのもの

簡単に主人公の設定作ってみました。  
感想とかあったらよろしくお願いします。

## 第九話 螺旋丸

「まさかこんなに早くつくとは思わなかったのう」

自来也さんが僕にドロップキックをつけて倒れていた状態から起き上がって言った。

「言い残すことはそれだけですか？」

僕は自来也さんに剣を向けながら言う。

「待て待て！いい修行になっただろ！？」

「天誅！」

僕は剣の腹でおもいきり殴ろうとして……

「えっ？」

ドンッ

「いてっ」

吹っ飛ばされた。

何だ今の？

「螺旋丸」

「え？」

自来也さんの方を見る。今自来也さんの言ったものが気になるからだ。

「今の術の名前だ。まあ威力はかなりセーブしてるがの」

「螺旋丸……」

「この術は、これからお前に教える術でもある」

「もう一回使ってください」

僕は複写眼を発動させる。

「無駄だ」

自来也さんが右手をあげる。すると、手のひらでとつもないエネルギーが、すごいスピードで乱回転している。なのに形はきれいな球形だ。

「すごい……」

複写眼で解析。解析完了。

「できるか？」

自来也さんが聞いてきたので頷く。

手のひらに集中し、エネルギーが乱回転して、そして弾けるように

四方に霧散した。

「うわっ」

その勢いに吹っ飛ばされる。

「な、なんで……」

理解できなかった。複写眼で解析してできるようになったはずなのだ。

「複写眼で解析できるものが、限定があるのは知ってるな？」

自来也さんの言葉に頷く。

「で、解析できる中で、見ただけで使えるようになるのも限定されとるんだのう。お前の体質でもな」

僕は驚きを隠せなかった。そんなことを今まで知らなかった。

「見てすぐに使えるようになるのは構造が複雑なだけのものが多い」

「複雑？普通単純なものの方が使いやすそうですけど……」

「複雑なものは合理的に作るために仕方なく複雑したというのがほとんどだ。使い方を覚えたら、あまり使わなくてもすぐに使いこなせる」

「はあ……」

「しかし単純なものは合理性より使いやすさを求める。だからその術を覚えても、その術を極めなければただのがらくただ」

「じゃあ螺旋丸は……」

「ああ。エネルギーの回転、威力、留めるの三つを極めた術だ。この術を修得するには三段階の修行が必要だ」

「じゃあまずは回転の修行ですか？」

「察しがいいのう。ここに寄った理由の一つが、修行に必要な材料があるから、それをもらうためだ」

「材料？」

「まあ見ればわかる。それと、ここに寄った理由はもう一つあるからな」

「？ 何ですか？」

「ここに昔のミカドの弟子がいてな。そいつもわしらについてきてもらうためだ」

「師匠の！？」

何だか嫌な予感しかない。

「……取り敢えずその人の話はおいとして修行のはなぐぎゃっあ！  
！」

いきなり後頭部を誰かに殴られた。僕は今地にひれ伏している。

「だ、誰だ!」

僕は顔をあげて殴った相手に文句を言おうとして、勢いよく飛び起きる。すると、目の前にバカでかい剣を持った少女がいた。

すると少女は、剣を振り返って、腹の部分で僕を殴った。

「げぶらっ!!」

少女の剣を見ることができなかった。それくらい少女の動きが速いのだ。

「な、何で殴るんだだべしっ!!」

またしても殴られる。少女の顔はかなり整っていて、というよりも絶世の美女と言っても全然過言ではないくらいきれいだった。

だけど無表情でいきなり初対面の僕をバカス力殴ってくるので、僕は今もこの子とはかわり合いたくないと思うほど、好感度は落ちていた。

すると少女はまるで悪びれた様子もなく一言、

「うるさい」

「誰のせいがあるあああああああああああああああああ!」

今度は何をされたかというところ、まず剣の腹で見えない速度による往

復ビンタ。そして地にひれ伏した僕を何度も何度も足蹴。最後に何故かジャーマンスープレックスを決められ、意識が遠退きかけた。

僕は解放されてから少女にへこへこと、

「な、何で殴ったんですか？」

「うるさいからだ」

それだけかよー！

もちろん声には出さない。今度は多分死ぬ。

「は、初めに殴ったのは」

「美人の話が終わらせて、別の話に移行しようとする愚か者に天誅をくだしたまでだ」

「……………」

もう言葉もでない。

「自来也さん……………まさかと思えますけど……………」

「ああ。そいつがわしらに同行する、ながれくも流雲さえた」

「ん」

軽く手をあげて挨拶するさえ。

「……ぎいやあああああああああああああああああああああ  
あ！！？」

またぼこぼこにされる。なぜ！？ホワイ！！？

「この世界一美しい美女が名を教えたのだぞ。なのにお前はなぜ名  
乗らない。罰当たりだぞ」

場が静まりかえる。

「……冗談だ」

少し顔を赤らめて言う。

「恥ずかしくなるならはじめから言わなげっぎゃあああああああ  
あああああああああああ！！」

「で、名前は？」

「今の暴力をスルーして何事もなかったかのように言っな！！」

僕はボロボロになった体を立ち上がらせる。足がガクガクいつてる。

「で、名前は？」

「……はあ。時風みなど。よろしく、さき」

「うむ、覚えたぞ。よろしく色情狂」

「何でだよ！？」

「早速仲良くなってるのう」

「どこが？」

「この時だけ、僕とさきの心がつながった。」

## 第九話 螺旋丸（後書き）

オリキャラヒロイン登場させてみました。まんま伝勇伝のフェリスをパクってます。すいません。

これからみなととどう接触させるか迷ってます。意見とかあったらよろしく願います。

## 第十話 暴力女と変態師匠

「みなとside」

「……で、何ですかこれ？」

今僕は、皆から離れたところで自来也さんから修行の説明をつけていた。で、僕が質問したのは、何故か水風船を渡されたからだ。

「水風船だ」

僕の質問に答えたのは、さえだった。

「お前に聞いてないし見ればわかつぶぎゃっ」

剣の腹で殴られる。

「で、これをどうするんだ？」

さえが自来也さんに聞く。お前は修行に関係ないだろ、と思ったが言わない。いや言えない。

「これを割れ」

パン

さえが剣で水風船を割る。

「割ったぞ」

「違う！これをエネルギーだけで割れって言ってるんだ！」

「無理だ。私は能力者じゃないからな」

「お前に言っていないだぐぎゃっあ！」

さえが自来也を剣で殴る。伝説の三忍と呼ばれてる人が……哀れだ。他人事ではないが。

「と、取り敢えず実演するぞ」

そう言つて水風船を持っている手を僕達の前に持つてくると、その水風船がぼこぼこして、割れた。

「おお」

さえが少し、ほんの少し、もう呼吸の音と同じくらい小さく感心したような声をもらす。

「できるか？みなと」

「エネルギーで水風船の中の水を回して割ればいいんですよ？」

僕は水風船をもらう。

そして水風船を持っている手に集中する。

そして……

パン

一発成功。

「ま、まじか……」

自来也さんが驚いていた。

「これくらいはできますよ」

「言うのう」

「次はなんだ？」

自分がやった訳でもないのに、次はなんださっさとしろという態度をとるさえ。

「次はこれだ」

そうやって今度はゴムボールを投げってくる。

そして、自来也さんがまたゴムボールを持った手をあげて、

パンッ！

割れた。水風船の時の比じゃない音が響く。

「水風船の百倍硬い」

「……威力、か」

僕は集中した。そして、

「……………」

変化なし。ゴムボールは割れなかった。

「ふん、情けないぞ」

「お前何にもしてないぎゃあああああああああああああ！  
！」

さへの暴力に悲鳴をあげる。だ、ダメだ。このままじゃ暁の奴らと戦う前に死ぬ。

「まあ、歩きながらそれをやれ。時間がないからもう」

自来也さんが言う。さへの暴力に耐えながらゴムボールに集中して歩く。

「……………無理だ」

そんなことできてる自分が想像できない。

「文句を言うな。時間がない」

「いやそりゃわかってるけどさ、歩きながらこれをやるのはただでさえ難しいのに、その上性格も力も悪魔並のお前の暴力くらいがらなんて無りゃあああああああああああああああああああ  
あ！……！」



「無知め」

「お前は黙ってすいませんごめんなさい僕が悪かったからその剣を鞘に戻してくれ」

「分かればいい」

そう言いながら剣をしまつ。

「……いつか殺す」

さえに気付かれないよう呟く。

因みに今、僕の右手にはゴムボールが握られている。そのゴムボールはたまに形をゆがめているが、割れるまではまだまだだった。

「今日はこちらから一番近い町に泊まるぞ」

「？　こういう情報って王都とか都会のほうがあるんじゃないですか？」

「いや、たまたまこの近くに暁のアジトがあるんでな。そこに明日行くから、今日はその近くに泊まるんだのう」

「……たまたまですか？」

「たまたまだ」

「本当に？」

「しつこい」

これ以上聞いても無駄だな。

「じゃあさっさと行くぞ」

「――宿

「ふんっ」

僕の手のゴムボールの形が一気に歪み、そして――

プシュー

穴があいた。

「くっそー、割れないなー」

「何言つとるんだ。普通その段階に入るまで、一ヶ月はかかるんだぞ。それをたった一日でそこまでいってさらに不満をもらす……天才ってのは贅沢だのう」

「別に天才じゃないですよ。僕は」

僕達は夕方に宿についた。宿についてから僕はずっとゴムボール片手に修行して、やっと穴があくまでに至った。

「そつだ。変態色情狂のそいつが天才なわけないだろう」

「……なあ。ひょっとして名前をわねてるっ」

「変態色情狂だろうっ？」

「だから何でだよ!？」

「顔だな」

「はあ!？」

「だから顔だ」

「……」

自分で言うのにはひどく抵抗を感じるが、僕はどちらかというとな顔だ。なのに顔って……

「はあ……集中できないから外でやってくるよ」

「おっ、ついに本性を現したな」

「は？」

「幼女を誘拐しに行くのだろう？」

「何でだよ?!」

「じゃあ婦女暴行……」

「違うわ!?!」

もうこの部屋でやろう。なんか外に行ったら少女誘拐だの婦女暴行だのをしに行つたと判断されそうだし……

もちろん冗談だとはわかっているが……「冗談だよね？」

「じゃあ、わしはそろそろ行くぞ」

そう言つて自来也さんが立ち上がる。

「どこに行くんですか？」

自来也さんはニッと笑つと、

「こんな時間に行く場所は一つだのう」

「？」

僕は首を傾げる。

「ああもう。これだからガキは……ヒント１・酒を飲みに行く」

酒場？情報収集か？

「ヒント２・若くて可愛いお姉ちゃんたちがいっぱいおるのう」

自来也さんがだらしなく顔を歪めながら、欲望にまみれた笑みを浮かべた。

「はあ……」

呆れるしかない。

「さえ、あれは変態に入らないの？」

「大人の魅力だ」

「何でそうなる!？」

「冗談だ。あれは変態神だ」

「ただのスケベじゃん」

「違う! わしはスケベじゃない!」

自来也さんが反論する。あなたのさっきの顔と発言から否定しても無理ですよ？

「ドスケベだ」

手をわきわきさせながら言う。

「……………」

もう言葉もないよ。

そこで僕はあることに気付いた。

自来也さんがいなくなるということは、さえと二人?この狭い密室(宿の部屋だからそこそこ広く、別に密室でもないが)の中二人?

この見た目と暴力しか取り柄のなさそうな女と二人？

「い、いやだあああああああああああああああああああああ  
あ！！」

僕が叫んだとき、自来也さんはすでにいなかった。

ぼ、僕も避難しないと！

部屋からダッシュで逃げようとしたら、肩をつかまれた。冷や汗を  
身体中から流しながら振り返ると、そこには目だけ無表情で悪魔  
の笑みを浮かべたさえがいた。

「……さえ様、何でございましょうか？」

「お前の特訓に付き合ってたやろう。味方が弱いと足手纏いになるか  
らな。仕方がない奴だ……いい暇潰しができた」

「最後の言葉聞こえるぞー」

「うるさい、やれ」

ビュオンッ

すごい音が聞こえたと思ったら、僕の前髪が数本落ちた。さえが剣  
で超高速で斬ったのだ。

「わかったよ……」

僕はゴムボールに集中し、そして、

プシュー

割れなかった。

ビュオンッ ゴンッ

「ぐはぁっ」

さえに剣の腹で殴られる。何故だ？

「……さえ、何で殴った？」

「割れなかったからだ」

「はぁ！？……ちょっと待てまさかとは思つが……」

「ん。これから割れない度に殴るぞ」

「やっぱりいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！？」

その後、ゴムボールに穴があく度に殴られた。朝までそれをやってようやくゴムボールが割れたとき、僕の顔は原型を留めていなかった。部屋に散らかつてる数十個あるゴムボールの数だけ、殴られたのだろう。

因みに自来也さんは朝まで帰って来なかった。

今から暁のアジトに乗り込まなければならぬと思つと……

はあ

ため息しか出なかった。

## 第十一話 ふざけんな

くみなとside)

「お前、魔法以外使うな」

いきなり自来也さんがそんなことを言ってきた。

因みに今僕は右手に風船を持っている。これを割らないようにしないといけないらしい。はつきり言って難しすぎるだろこれ。

「な、何ですか？」

僕は自来也さんに聞く。

「お前の体質は特異なんだよ。そんな体質ミカドとお前以外見たことないぞ」

「はあ……」

曖昧に頷く。

「そんな体質を他国で見せるのはちょっといろいろまずいんだよ。で、これからは本当に危ない相手以外には一種類の能力だけ使えてことだ」

「それで何で魔法なんですか？」

「お前、魔法が一番使い慣れてるだろ？皆の戦いでも魔法ばっか使

つてたしのう」

「見てたんですか？」

「ああ。危なくなったら止めようと思ってな。で、一番得意なのは魔法か？」

「はい」

魔法が一番得意だというより、魔法を一番特訓したからなあ。いろいろと便利だから。

「じゃ、魔法以外使うなよ」

「わかりました」

特に問題はないだろう。

「話は終わったか？なら行くぞ」

さえがそう言っつて先々歩いていく。

「じゃ、行くか」

「はい」

――アジト前

「お前ら二人で行け」

自来也さんがそんなことを言う。

「何故？」

さえが自来也さんに聞く。僕だって反対だ。こいつと二人でなんて……後ろを任せたら逆に刺されそうだ。

「修行だ修行。いいから行ってこい」

そう言っつて自来也さんは手を振る。行くしかないようだ。

「行くか」

「ん。行ってこい」

「お前もだよ！」

さえを引きずってアジトに乗り込んだ。

「何だ貴様ら！」

「敵だ」

「いや答えんなよ」

敵の問いにわざわざ敵って答えるさえに突っ込む。敵の数は……8人か。問題ないな。

「てか、お前って戦えんの？」

「無論だ」

そう言つて剣を抜いたかと思うと、一瞬で8人を気絶させた。

「な」

「な、じゃねえよ！情報聞き出さなきゃいけないのに気絶させてどうするんだよ！？」

「問題ない」

そう言つてさえはアジトの奥に続く扉を指差す。

「まだまだいるだろ」

「いやそりゃいるだろうけどさ、こいつらに中の人数とか、一番情報持つてる奴とか、トラップの位置とかいろいろ聞き出せただろ？」

「気にするな」

「お前は気にしろ！」

そんな漫才をしながら扉を開けると、十人位の奴らが待ち構えていたかのように魔法を放ってきた。

「うあっ」

アルファ・ステイグマ  
複写眼で解析。

超高速で魔法陣を描く。

「求めるは侵入>>>・蝕走<sup>じつ</sup>」

描かれた魔法から黒い煙が放たれ、相手の魔法を消す。

「ば、馬鹿な！」

「<sup>アンチ・マジック</sup>反魔法だと!？」

「あのタイミングで……」

敵はかなり驚いているらしい。まあ<sup>アンチ・マジック</sup>反魔法自体、かなり難しいからなあ。不意討ちの魔法消されたら、そりゃびつくりするよね。こんなことがどきるのは、<sup>アルファ・スニークマ</sup>複写眼保持者か、師匠くらいだろう。本当に師匠って何者？

そう思いながら、次の魔法陣を描く。

「求めるは光陣・縛呪<sup>ばくじ</sup>」

魔法陣から光の縄が現れ、僕はそれをつかむと、

「目標の敵の一人を捕縛——捕縛後収縮」

呟く。瞬間、手にした光の縄が一気にのび、敵の一人に巻き付くと、そのまま縮まって、僕のもとにくる。

「さえ、後よろしく」

「ん」

瞬間。ヒュゴオとか、ビュルンツという音が聞こえた。その音が止むと、立っているのはさえだけだった。

「って何で僕もなんだよ!?!」

「おお。意識があるとはさすがだな」

「やかましい!」

僕は立ち上がりながらさえに突っ込む。

「お、お前ら何物だ?」

「んー、何だろう?」

「変態色情狂」

「はいはい」

適当にあしらうとさえは何故か寂しそうな顔をした。

「いやそんな寂しそうな顔をされても……」

「うるさいマスター変質者」

「マスター変質者!?!なんかどんどんグレードアップしてるような気がするんですけど!?!」

僕が全力で突っ込むと、何故か満足したような顔になって、捕まえ  
た奴に向き直った。

「言え。暁の目的はなんだ？」

剣を首筋1ミリのところで止めて聞くさえ。はたから見たらどつち  
が悪だろう？

「ひ、ひいつ！し、知らねえよ！」

「本当か？」

剣が首筋にあたる。あくまであたってるだけで、斬れてはいない。  
相手からしたら感触だけ伝わっている状態だ。

「ほ、本当だ！」

「なら知ってる奴はどこだ？」

「こ、ここのボスのアラキさんなら、し、知ってるはずだ！」

「このアジトにいる人数は？」

「ぜ、全部で50人。あんたらが倒したのを除けば後32人だ」

「し」  
「苦勞」

情報を聞き終わったさえは、そいつを気絶させた。

「行くぞ」

「おいおい。マジで32人も相手する気かよ」

「問題あるか？」

「まずボスの顔がわからないからなあ」

「全員倒せばいい」

「だからボスは気絶させちゃダメだって！」

「意識が戻ってから聞けばいい」

「できれば時間を使いたくないんだけどなあ」

「うるさい行くぞ」

「はあ……まいつか」

「――一番奥の部屋」

「まさか32人に待ち伏せをくらうとは思わなかったね」

僕はため息をつきながら呟く。今僕達は一番奥にあったとてつもな  
く無駄に広い部屋で、32人の敵に囲まれていた。

「はっはっはっ。バカが。こんな単純な罠にひっかかるか普通？」

「おいみなと。あいつお前のことをバカにしているぞ」

「いやお前もだろ。てか名前初めて呼んだな。なんか少しうれしい」

「お、お前まさか私を……」

「それはありえないから」

「てめえら無視してんじゃねえぞ！」

さつき僕達を大笑いしていた奴が怒鳴る。多分あいつがアラキだな。

「さえ。わかっているとと思うけど、あいつは気絶させるなよ」

「わかってる」

そう言うと同時にさえが動いた。その動きを目で追うことができないのは、おそらく僕だけだろう。

「がっ」

「ぐあ」

「ぎゃっ」

次々と敵が倒れる。

「すげー」

思わず感嘆の声をもらす。いつも僕はあんな奴に殴られてるんだな  
！。

「よそ見してんじゃねえ！」

僕に数人向かってくる。僕は魔法陣を描き、呪文を唱える。

『求めるは雷鳴>>>・稲光いねひかり』

魔法陣から電撃が放たれる。手加減してるからあまり多くは倒せなかつた。

「火遁・炎弾！」

後ろで印を結んでいた奴が術を放ってきた。僕はそれを複写眼アルファ・ステイグマでそれを解析して、

『求めるは水雲>>>・崩水みずみ』

そいつから放たれた炎弾を全て消し飛ばすほどの激流を放つ。その激流で術を放った奴とその周りの奴らを倒す。

「くそつ。内力系活剱・旋剱！」

「外力系衝剱・閃弾！」

「破道の三一・赤火砲しやくかほう！」

「風遁・烈風掌！」

次々と術が放たれる。けど僕は慌てず冷静に文字を描いていく。

『我・契約分を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』

瞬間、脳のリミッターを無理矢理はずし、限界まで加速された動きで、術を全てかわす。

「なっ」

「そんな馬……」

高速で動きながら『闇庭』<sup>あんて</sup>を放つ。一瞬の静寂が余計に敵を混乱させる。その間に次々気絶させる。

「ふう……あとどれくらいだ？」

「一人だ」

後ろからさえの声がする。振り返ると、さえに間接を決められて、動けず地にひれ伏しているアラキがいた。

「もうあの人数をやるなんて……さすがだな」

「ん。で、こいつから聞けばいいんだな」

「ああ」

そしてさえは鞘から剣を抜き、アラキの首にあてる。あくまであてるだけ。これ結構怖いな。

「言え。暁の目的は何だ？」

「ふん。誰が言うべがあ！？」

剣の腹で殴られるアラキ。

「言え」

「誰が言つぼがあっ!?!?」

また殴られる。

「言え」

「言わはがあっ!?!?」

またまた殴られる。

「言え」

「も、もう勘弁してくぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ!?!?」

トドメの往復ビンタ! もちろん剣の腹で。

「って待て待て! こいつ僕みたい頑丈じゃないから! 死ぬぞ!?!?」

「む。それはまずいな。吐くことを吐いてから死んでもらわないと」

天使のような顔（無表情だが）で悪魔みたいなことを言う。

「で、吐くのか?」

さえがもう一度アラキに尋ねる。そろそろ言わないとマジで死ぬぞ。

「わかった！言う！言うから！」

「うむ」

剣を鞘に収める。

「おいみなと。念のためこいつを縛れ」

「ええー」

さすがにこのボロ雑巾のようになった人間を、さらに拘束するのは抵抗がある。

「やれ」

剣を片手に言うさえ。

「わかった」

自分の保身のために良心を一瞬で捨てた。もし父さんと母さんが今の僕を見たらどう思うだろう。

『求めるは光陣>>>・縛呪<sup>はくじ</sup>』

魔法陣を描き、呪文を唱える。そして魔法陣からでてきた光の縄でアラキを縛る。

「よし。話せ」

さえがアラキに剣を向けながら言う。うん、こいつは悪魔だ。

アラキから話を聞き終わる。暁はどうやら国を乗っ取るのが目的らしい。カラスモリの王女を暗殺し、殺したのはキーのものだと情報をリークし、王に戦争を起こさせるつもりらしい。簡単な話だが、こんな世の中じゃ、戦争をする充分な理由になる。そして戦争に勝ったほうの国を乗っ取る。一気に二国を奪えるわけだ。それは多分、今は鎮静化している世界中の戦争の引き金になるだろう。

「……じゃあまずカラスモリに向かって王女の守りを強化してもらったほうがいいかな？」

「そうだな。自来也にこの事を伝えてすぐに行くぞ」

「ああ」

さえはアラキを気絶させてから出口に向かった。哀れな。

外に出ると、自来也さんの代わりにこんなことが書いている紙があった。

『ちょっと用ができたからここからは別行動だ。ま、せいぜい頑張るんだのう』

P・S・

二人仲良くイチヤイチャしながら旅しろや』

それを見て僕は、

「ふざけんあなああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

と叫んだ。

さえはそんな僕を剣の腹で往復ビンタした。

ぜっつつったいこんな奴と旅するのはいやだっ！！

## 第十二話 追いかけて

くみなと side

「うおおおおおおおおおおおおお！！？」

今、僕は必死に走っていた。それはもう全身の筋がいかれるんじゃないかと思うくらい力で走った。走り続けた。そして、

ヒュゴッ　ゴンッ

見事に地にひれ伏した。

「く、くそつ。まだだ！」

僕はまた走りだす。

「懲りない奴だ」

そう呟いたのは、さえだ。何故僕たちがこんなことをしているかという、話は数十分前に遡る。

\*

「あんのかせれじいふざけんなあああああああ！！」

僕は叫んでいた。喉仏が裂けるんじゃないかと思うくらい大声で。

場所は暁のアジト前。そこには自来也さんの置き手紙があり、今僕

はそのじじいの文句を叫んでいるのだ。

「うるさい」

毎度のようにさえに殴られる。

「くっ！僕はお前と旅なんて絶対嫌だぞ！」

「奇遇だな。私もだ」

「ならここで別れよう。そのほうが情報も集まるだろ」

「却下」

あっさり否定された。

「何で!?!」

「私は金を持っていないんだ。まさかとは思うがお前はこんなかく美しい地上の女神とでも呼ばれるべき存在である私に、野宿しろなどとは言わないよな？」

「野宿しぎゃああっ！」

剣の腹で殴られる。もうなんか慣れてきたよ？

そんな自分に恐怖を覚えながら、さえに言う。

「じゃあどっすりゃいいの?」

「有り金全部よこせ」

「嫌じゃー!」

「ふむ……なら、こつこつのはどつだ?」

「さえが僕に提案してくる。それは、

「私と追いかけてこをしよう」

「僕に勝ち目ないじゃん」

「もちろんハンデをやる。ハンデはまずお前は魔法を使っていい」

「え?マジで?」

「何それ?ボク滅茶苦茶有利じゃん。」

「そしてお前は参ったと言わない限り何度捕まってもいい」

「……」

何かある。ここまで僕に有利な条件をだしてくるなんて何が狙いだ?

「勝ったほうがお前の有り金全部をもらうことができる」

「って僕にメリットないじゃん!」

「だからそれだけハンデを与えたんだ。何だ?それとも無理矢理奪おうか?」

「くっ……」

この勝負つけるしかない！

「じゃあ一分後にスタートだ」

さえがそう言うと、目を閉じた。僕も逃げないと。

かなり距離をとったし、気配をけして隠れているから見つからないだろう。このままいけば勝てる！

あれ？まてよ？

そう思った瞬間、誰かに頭を殴られる。

「だ、誰だ！？」

「女神だ」

さえがいた。

「なっ！？」

早すぎるだろ！？いやそれより！！

「僕の勝利条件って何？」

「私に見つからないこと」

「勝ち目ないじゃん!！」

「なら降参か？」

「いや!やる!」

「なら早く逃げろ」

僕はまた全速力で走る。その瞬間、あることに気付いた。

さえがこんなハンデを僕にくれたのは……

「僕で弄ぶためかあああああああああああああああ  
!?!」

僕は叫んだ。それは自分の位置はここですよと言ってるようなもので、結果。

「ぎゃあああああああああああああああああ  
?」

と、さえにぼいぼいにされる。

\*

さつきからその繰り返しである。

「おい、飽きた。もう諦める」

「嫌じゃ！」

そう叫びながら空に文字を走らせる。

『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』

この魔法で逃げ切って見せる！

「遅い」

一瞬、とまではいかないがすぐに追い付かれた。この女の戦闘能力はチート並か？

「くっ、まだだ」

超高速で魔法陣を描く。

『求めるは雷鳴……』

「だから遅い」

魔法陣を斬られる。

「う、うおおおおおおおおおおおおお！！」

無謀にも剣で勝負を挑む僕。

数秒後、何故か僕は倒れていた。

「参った、は？」

「まだぎゃあああああああああああああー!!」

関節を決められる。

「ギブツ！ギブツ！タップ！タップ！」

僕は地面を叩きながら訴える。

「ん？違つたろう？お前が言う言葉は？」

「参った！参った！だからもう許して!?!」

「嫌だ」

「この悪魔がつあああああああああああああー!!  
？」

関節を外された僕の悲鳴が虚しく響く。

「さあ有り金をだせ」

さえが容赦なく僕にそう言う。

「……………わかったよ」

そう言ってさえに全財産をわたす。が、さへのリアクションは……………

「……………何だこれは？」

と、まるでがらくたのオモチャをもらった子供のような反応だった。

「僕の全財産」

「……たったこれだけか？」

「え？」

意味がわからない。

「これだけじゃ一晩しか泊まれない」

「ええ！？ そうなの！？」

「……これだから田舎者は」

「お金を持ってないお前には言われたくない……で、どつするの？」

さえは少し考えた後、

「仕方ない。しばらくは一緒に行動するか」

「……はあ。もうそれでいいや」

さへの提案に、今度は頷いた。

——宿

「はあー、すっきりした」

宿のシャワーを浴びた僕は、ベッドに寝転がる。

「おいみなと。間違っても私を……」

「襲わないから思う存分寝てください」

「うむ」

「じゃあ電気消すぞ」

僕は電気を消し、目を閉じた。

「……おいみなと」

「今度はなんだ？」

「今回の勝負、私が勝ったが賞品がなかった。だから代わりに一回だけ私の言うことを聞け」

「また唐突だな。いいよ。で、何？」

「考えておく」

「決めてないのかよ」

思わず突っ込む。

「ふふ。どんなことを命令してやるっ？」

「物騒だな」

その後、互いに会話はなかった。この先宿に泊まることはできないので、今夜はぐっすりと寝るべきだと互いに判断したからだ。

そういえば、あいつの笑い声初めて聞いたな、と思いながら、僕は眠りについた。

第十三話 ライナ・レポート（前書き）

ヒロイン？ 流雲さえ

身長160cm 体重??kg

髪の色 金

髪型 膝まで伸びたストレート

好きな食べ物 だんご

簡単にさえのプロフィール作りました！。

## 第十三話 ライナ・レポート

——ローランド 王都

〈みなとside〉

「なあさえ。一つ聞いていいか？」

僕は前を歩くさえに言う。

「何だ？」

振り返らず、歩きながら僕に聞くさえ。

「僕達はキーとカラスモリの戦争を止めるために、行動してるんだよな？」

「ああ。それがどうした？」

「どうしたじゃねえ！なんでカラスモリにすぐ向かわずにわざわざ他国の中心の王都に来てるんだよ！？」

するとさえは振り、こう言った。

「この国の王都にある、ウイニットだんご店という店のだんごが絶品らしくてな。ぜひ一度食べてみたくて」

「ああ、だったら仕方ないなどでも言うと思ったか！？ふざけんな！」

「うるさい」

剣の腹で殴られる。もう慣れたさ。

「うるさいじゃないよ！そんなことに時間使ってどうするんだよ！？」

「大丈夫だ。ちゃんと考えがある」

「どんな？」

「この国の王に暁の情報を聞く」

「はあ！？無理に決まってるだろ！王と話せるわけないだろ！？」

「なら力付くだ」

「いやそれができたとしても、もう情報は聞きだせたじゃないか！するとさえはため息をつき言った。

「あの男の情報が正しいとは限らないだろ」

「？ どういうこと？」

「あんな下っぱクラスの奴に、国家を動かすレベルの作戦の情報を渡していると思うか？おそらくあの情報はダミーだ」

「はあ！？」

さえの言葉に驚く。

「じゃあ何で自来也さんはあのアジトを僕達に……」

「おそらく私達を試したのだろう。あんな所で死ぬようなら、これから先の戦いには邪魔なだけだろうからな。で、私達がそれくらいの実力があると判断したら、別行動に移す。なければ私達はこの戦いから外されただろうな」

「成る程」

納得はした。が、

「マジで力付くで王に話を聞くつもりか？」

「ああ。行くぞ」

「うっ……なんか僕達の方がテロリストのような気がするよ……」

——ローランド城内

「ぜえ……ぜえ……」

僕は荒くなった息を必死に整える。

「なんだあれくらいで……情けない」

「城壁素手で登ってぴんぴんしてるお前が異常なんだよ!」

そう。僕達は城の城壁を登ってここに侵入したのだ。途中何度か落ちかけて、死を覚悟した。

「行くぞ」

「わ、わかった……」

呼吸の荒いまま、さえについていく。

——王室

「うそーん」

僕は思わずそう呟く。奇跡的にも誰とも会わず、というより気配を完全に消して、兵士たちの死角を移動したからなのだが……

いや今はそんなことより、

「何で王様いないの？」

「どつやら今は謁見の間にいるようだな」

「何でわかるんだよ」

すると手にした紙を僕に向かって放り投げる。その紙はどつやら予定表みたいだ。

「成る程ね。じゃあここで待ってればそのうち……」

「行くぞ」

「……念のため聞くけど、どこに？」

「謁見の間だ」

「いやいや！それやったらまずいから！」

「大丈夫だ。天井にぶら下がって、様子を見るだけだ」

「はあ……やらなきゃ僕の首が宙を舞うんだろうなあ……まあ、ただ見るだけならいいか」

僕も頷いて、さえについていった。

——謁見の間

「シオン！てめえ覚えてろよ！」

僕達が天井からぶら下がりながら聞いていると、ライナとかいう人が、さえに似ているフェリスという人に引きずられて消えた。

「勇者の遺物、か」

さえが呟く。今の話の内容からすると、ライナって人が牢にいる間に書いたレポートを王が気に入って、それをライナにやらせようとしている、ということだろうか。

「……ライナって人に同情するよ」

「それより今がチャンスだな」

「へ？」

するとさえは剣の腹で殴って僕を落とした。

「ぐぎゃっ」

地面に叩きつけられ、変な悲鳴をあげる。そんな僕に、王は落ち着いた声音で聞いてくる。

「俺に何か用か？」

「……ひょっとして気付いてました？」

「ああ」

「……はは」

もう渴いた笑いしかだせない。

「ぐぎゃっ…！」

またしても悲鳴をあげる僕。さえが僕の背中に落下したのだ。

「さえ……てめえ」

「ん？なんだいたのか」

「いるよ…！」

僕達は、とても王の御前でやるとは思えない会話をしていた。

「ははっ」

すると、意外なことに、王が笑ったのだ。普通なら、「バカにしおつて!」、とか叫びながら僕達を牢にぶちこみそうだけど……

「お前たち面白いな。名前は？」

「時風みなどです」

「流雲さえだ」

「そうか。俺はローランド王のシオン・アスタールだ。で、俺に何の用だ？」

するとさえが剣を片手に言った。

「暁の情報で、知ってることを全て吐け」

「いやいやさえ。相手は一国の王なんだからもうちよっと言葉遣いとかさあってごめんなさい申し訳ございません生意気言ってますいませんでしたからその剣をお収めくださいお願いします」

「ははっ。やっぱり面白いな。それに少し似ているかもな……あいつらに」

「あいつらに」

「さっきの二人だよ。ライナとフェリスって言うんだ。お前たちにそっくりだぞ」

「そんなことはどうでもいい。早くさっきの質問に答えろ」

「お前な……」

「ははっ。やっぱり似てるな。いいぞ。教えてやるよ」

「!?!? 本当ですか!?!?」

「ああ」

そして僕達はシオンさんから情報を交換した。

「いや、そついうわけじゃ……」

「まあ無理もないな。俺もつい最近知った情報だ。近々このことを同盟国に知らせるつもりだが……」

「その必要はない」

シオンさんの言葉を遮ったのは、さえだ。

「どつして？」

「私達が今から出向いて、そいつらごと潰すからだ」

「……はあ!？」

僕はついつい叫び声をあげる。さえのせいでここが王宮で、王の御前ということをついつい忘れてしまう。

「……本気か？」

シオンさんがさえに聞く。

「私はいつでも本気だ」

「いやいや何でそんなことすんだよ!？」

「はっ。バカかお前は」

鼻で笑われた。

「そいつらなら確実に今回のことの詳細な情報を持っているだろう。だからそいつらに吐かせる」

「いやそりゃ吐かせることができたらいいけど、まずそんなこと可能なのか？」

「私に不可能はない」

「あーもう！やっぱり何を言っても無駄なのね！？」

「はははっ」

「他人事みたいに笑わないでください！」

「他人事だろ？」

「……もういいです」

「うむ。では行くぞ」

「あ、ちよつと待って。シオンさん。その二人の情報を詳しく教えてくれませんか？」

「ああ、それなら資料をやるよ。フィオル」

シオンさんが言うと、男の人が入ってきた。

「フィオル、この二人に暁の資料を」

「わかりました。こちらです。ついてきてください」

そう言つて、フィオルさんは歩きだした。

「じゃあ僕はこれで。ありがとうございました」

「あ、みなと。ちょっと待ってくれ」

僕はフィオルさんについていこうとすると、シオンさんに呼び止められた。

「? 何ですか?」

「この最初のページを読んでくれ」

そう言つてレポートみたいなものを渡してくる。

「これは?」

「さっきいたライナが2年かけて書いた、レポートだ。その最初のページには、ライナの想いが書いてある。読んでくれ」

そのレポートのタイトルは、『昼寝王国を作るためには?』、だった。

こんなタイトルを書いた人と似てるって言われたんだな、僕。

そう思いながら、レポートの最初を読んだ。

そこには、こう書いていた。

人が死ぬのは嫌いだ。

殺すのも嫌い。

泣かれるのだって、泣くのもだっていやだ。

人生を選べないというのはどういう気持ちだろう？

家族が死ぬのは？

好きな人が死ぬのはどうだろう？

誰もそんなことを望まないはずなのに、なぜか世界は、そんな無意味な悲しみばかりを、笑いながら欲しがる。

なにかを無理矢理変えたいと思ったことはなかった。

けど、変えなきゃ悲しいし、もう何も失いたくないから……

めんどくさい話だが……

そろそろ前に進もうかと思う。

いままでずっと目をそらしてきたけど、必要なら、自分の過去だつて見つめてみよう。

そして、もう誰もが、なにも失わない世界を手に入れるために。

あの子も、キファも泣かないし、マイルやトニー、ファルは死なな

いいし、シオンは思いつめなくていいような世界。

みんなが笑って、昼寝だけしてればいいような世界へ。

ライナ・リユート

「……」

僕はそれを読み終わった後、何度もそれを読み返した。

隣からさえもそれを覗きこんでいるのに気付いたのは、読むのが5回目になったときだった。

「ずいぶんと読み返していたな。で、どうだった？」

シオンさんが聞いてくる。

「正直、心打たれました」

僕は素直にシオンに言った。さっきはこんな人と似てるのか、と思っていたが、今はこんな人と似ているわけがないと思った。一緒にやねえか、と思うかもしれないが、軽蔑が尊敬に変わったのだ。かなりライナという人の見方は変わった。

「そっか」

シオンさんは笑ってそう言った。

「ライナさんと一度話してみたいとも思いました」

僕が言うと、シオンさんは苦笑して言った。

「それは夢が潰れるからやめた方がいいな」

「はい？」

「いや、こつちの話だ。それより、フィオルが待ちくたびれてると  
思うから、行ってくれ」

「あ、はい。ありがとうございます」

僕はシオンさんにお礼を言ってから、謁見の間を後にした。そうい  
えばさえがレポート読んでからおとなしかったな。何でだろ？こい  
つに限って感動したとかはありえないし……

「なあさえ……」

「腹が減った……」

「……」

もう本当に呆れるしかなかった。

## 第十四話 少年の対策と少女の一日 前編

――ローランド城前

「それでは、気を付けて」

「はい。ありがとうございました」

僕は見送りに来てくれたフィオルさんに礼を言った。資料室に行く途中、シオンさんがどれだけすばらしいかを、フィオルさんは教えてくれた。それはもうとても丁寧かつ熱く教えてくれた。それだけシオンさんは人望があるのだろう。

「今度会ったら妹を紹介してくださいね」

「む、ついには友の妹にまで手を……」

「かけねーよ!？」

「ははっ。わかりました。ではお二人とも、お元気で」

「フィオルさんも」

そう言っつて僕達は別れた。

――宿

今僕達は、シオンさんからもらったお金で、ローランドの端にある街の宿にいる。

「うん。厄介だな……」

僕はそこで、資料とにらめっこしていた。

その資料にある暁のメンバーの名前は、デイダラとサソリというらしい。

デイダラは爆弾使い、サソリは毒使い、か。爆弾はともかく、毒は厄介だな。

僕はさえの方に向かい言った。

「なあさえ。一日時間をくれないか？」

「何故だ？時間がないのは知ってるだろう？」

「でも、負けたら意味ないだろ？今から毒消しの魔法を、何とか一日で開発するから。そうすれば、勝率はかなりあがる」

「成る程……しかし一日でできるのか？」

「やるしかないだろ」

「ふむ……いいだろう。一日時間をやる。但しできなかつたら、お前の首と胴体が離婚することになるぞ」

「こええよ！」

僕はため息をつきながら、開発にいそしんだ。

「暇だからその辺を散歩してくるぞ」

「わかった」

さえはどこかに行った。これで集中して開発ができるな。まさかその辺も考えてくれてるのか？

「……サンキュ」

僕は小さく呟いた。

「さえ side」

「さて、どうするか……」

少なくともみなとは今日一日は動けないだろう。

「ん？あれは……」

歩いていると、ある一つの店が目に入った。だんご屋だ。そしてその神聖なるだんご屋に、汚物と呼べる頭の悪そうな奴らが群がっていた。

「ああん？てめえのこのだんごのせいで、うちのアニキは腹くたしたんだよお！」

「なのに金を払えだあ！？誰が払うかよっ！」

「そ、そんな……」

汚物は全部で三人。よし、すぐ殺ろう。

私はそのだんご屋に近づいた。

「おい、その汚物ども。神聖なるだんご屋に、汚らしい分際で近づくな」

私が汚物どもにそう言うと、初めは私の美貌に見とれていたが、徐々に憤りをあらわにした。

「て、てめえ！」

「美人だからって何言ってもいいと思ってるのか！？ああっ！？」

「ああ」

瞬間、場が静まり返った。

「冗談だ」

私は誰も突っ込んでくれなかったのが恥ずかしくなり、そう呟いた。

「ア、アニキ。俺、この女に惚れちゃいました」

「お、俺も」

「よ、よし。持ち帰るぞ」

そう言った瞬間、汚物どもが私に向かってきたので……

ドガッ

「ブギユッ」

バキッ

「ぐげえっ」

ゴキッ

「がはっ」

瞬殺した。

「あ、ありがとうございます」

だんご屋の店主と思われる男が、私に礼を言ってきた。

「気にするな。当然のことをしたまでだ」

神聖なだんご屋の前で不埒なことをしたものに天誅する。うん、当たり前だ。

「いえ、ぜひお礼をさせてください」

「ふむ……なら、だんごをくれ」

「それくらい喜んで！」

そして、店でだんごをたらふく食った。このだんご屋……ウィーニッ  
トだんご店に勝とも劣らない味だな。やるな。

「ん。ごちそうになった」

「あつ。ま、待ってください」

私が店から去ろうとすると、店主に呼び止められた。

「何だ？」

「差し出がましいのですが……一つお願いを聞いてもらえないでし  
ようか？」

「いやだ」

「えっ!?!」

「私は正義の味方でもなんでもない。さっきは神聖なるだんご屋の  
前で不埒なことをしている奴らに天罰をくだしたまでだ。それでは  
な」

しかしこのだんごは本当にうまかったな。この任務が終わればま  
た来よう。

私がそんなことを思っていると、後ろから店主の悲痛な叫びが聞こ  
えた。

「ああっ！お終いだあ！もうこの店は終わりだあ！！」

「お願いとは何だ？」

私はその言葉を聞いた瞬間、手のひらを返したように店主に詰め寄りながら聞いた。

このだんご屋が終わるだど？そんなことさせるかっ！

「は、はい。実は……」

・

・

・

「成る程。つまり、この街の近くに、でかい盗賊団のアジトがあり、そいつらは今日中に指定された金を用意できなければ、この街の奴らは殺されるといふことか。しかし、金を出せばもう店をやっつくことはできない、か……」

「な、何とかありますか？」

「ん。問題ない」

私は軽く答えた。

「で、でも……」

私は店の中に入り、フライパンをとって来た。

「そ、それで何を……」

ビュオンッ

そんな音がした。すると、フライパンが空中で真っ二つに割れる。そして、二つが四つに、四つが八つにとどんどん小さくなり、地面に落ちるころには粉と化していた。

「問題あるか？」

私は店主に聞く。すると店主は、

「は、はは。すごい。これだけの力があつたらあいつらから解放される。俺たちは自由になれるんだっ！！」

と、歓喜の声を叫んだ。そんな声を聞いた町人が集まってきた、店主に事情を聞くと、そいつらも店主と同じように騒ぎ始めた。

「やったあっ！」

「自由になれる！」

「俺達はもうあいつらの言いなりにならなくていいんだっ！」

「「「「ばんざああああああああああああい！！」「」「」「」

もう何かの祭りのようだった。

すると、町人の一人が私に近づいて聞いた。

「あなたは何者ですか？」

「女神だ」

「……女神様ばんざああああああああああああ  
！！」「」「」

さらに勢いを増した。うむ、みなとの奴も、こいつらみたいに私を  
崇めればいいのだがな。

そんな事を思いながら、私は叫んだ。

「ものども！だんこのために、戦うぞっ！」

「……おおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおお！……」「」「」

今、私と町人の心は一つになった！

……一方その頃のみなと

「ええつと、ここをこうしたら……いやこれじゃ描くのに時間がか  
かるな……でも効果範囲は広いほうがいいよな……あーでもその前  
にここをいじくって……よし。これで効能が少しあがったな……範  
囲は増幅魔法の応用で何とかするとして……効能の種類とかもう少  
し増やしたほうがいいな……ええつとあの毒の成分は……こここう  
やったほうが効率的だな……あー、そういえば昔師匠に教えてもら  
った解毒魔法あったな。あれも混ぜるか。じゃあえつと……」

と、解毒魔法の開発にいそしんでいた。ていうかほとんどワーカ  
ホリック（仕事中毒）みたいに思えた。

## 第十五話 少年の対策と少女の一日 後編

くさえ s i d e 〉

今、私達は盗賊団のアジトの前にいた。

「な、なんだてめえらは!」

「女神とその他だ」

私は盗賊の問いに丁寧に答えてやった。なのにその盗賊は顔をしかめた。

「……冗談だ」

また恥ずかしくなり、そう言った。すると後ろから、

「うおおおおおおお!女神様最高おおおおおおお  
おおおおおおお!」

前からは、

「か、かわいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
いいいいいい!」

と声があがった。ふむ、ツッコミ役がないと抑えがなくなり収集つかないのだな。

「……今のうちにやるか」

私は剣をぬき、次々と盗賊たちを気絶させる。

「な、なんだあの動きは!？」

「化け物か!？」

「さすがだぜ女神様！」

「怖いものなしだぜ!！」

盗賊たちからは悲鳴、町人たちからは歓声があがった。

そうしているうちにも次々と気絶させる。

「ぜ、全員逃げろっ！」

「退却だあっ！」

「アジトはどうするっ!？」

「捨てるんなもんっ！」

盗賊たちは悲鳴をあげながら逃げていく。

「逃がさん」

私は盗賊たちを気絶させながら追う。一人として逃がしはしない。

その後、全員を気絶させるのにかかった時間は、五分だった。因み

に盗賊の人数は百人いた。

・

・

・

「もう二度とあの街に手をださないな？」

私はがんじがらめにロープで縛られている盗賊の頭に聞く。

「誰がてめえのぐええっ!？」

盗賊の言葉を剣の腹で殴って黙らせる。

「もう一度だけ言う。そして次領がなかったらお前の首と胴体が離婚だな」

そう言いながら近くの木を細切れする。普通の人間からみたら私が木を斬ったと気付くのにしばらくかかるだろう。

「ひ、ひいっ」

「二度とあの街に手をださないな？」

「は、はいっ！もう二度と手をだしません！」

「私が留守の間、あの街を他の奴らの手から守ると誓つか？」

「はあっ！？何で俺達が……」

ビュオンッ

私はそいつの前で剣の素振りをした。

「誓うか？」

「ち、誓います！この命にかけてっ！」

「もし私がこの街に来たとき、守っていなかったら……わかってるな？」

「肝に銘じておきますっ！！」

「うむ」

私は満足して剣を収めた。これであのだんご屋は安泰だ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお！！！！」

町人たちの歓喜の声を聞きながら、私は街に戻った。

〈みなとside〉

「やったっ！完成だっ！！」

僕は叫んだ。作り始めて早十五時間。やっと対サソリ用の解毒魔法

が完成した。

「ん？なんか外が騒がしいな」

僕は気になったので外にでた。するとそこには、

「いやつたあ！」

「自由だあ！」

「今日は飲み放題だぜっ！」

「さすがだぜオヤジっ！」

「太っ腹あ！」

「ツケだがな」

「ふざけんなあ！」

「だははははははははははっ！！」

「こりゃ一本とられたぜえっ！」

お祭り騒ぎだ。

今、目の前には祭りのように街中の人達が騒いでいた。

「何があつたんだ？」

「ん？あんちゃん旅の人かい？」

僕の呟きが聞こえたのか、騒いでいたうちの一人が話しかけてくる。

「はい、そうですけど……何かあったんですか？」

「ああ、実はな、かくかくしかじかなんだよ」

「へー」

今の人の話だと、女神とやらがこの街から金を貢がせていた盗賊団を潰してくれたらしい。

「女神ねえ……」

なんか一人心当たりがあるが、気のせいだと思いたい。

「で、その女神は？」

「あそこにいる人だよ」

そう言っ指を差した方を見ると、さえがいた。

「……やっぱりか」

どうやらさえはだんご屋の店主と、だんごについて熱い議論を交わしているようだ。

その顔は、無表情だが楽しそうだった。

その顔を見て、思わず微笑んでしまった。

「そつとしとくか……」

僕は宿に戻って、解毒魔法の再調整と、しばらくやっていなかった螺旋丸の修行をすることにした。

「はあっ」

風船が破裂してエネルギーが飛び散る。

「うわっ」

吹っ飛ばされてしまった。

「くっそー。こりゃ螺旋丸は曉戦には間に合わないなあ。魔法の再調整をするか」

そう思って調整をしようとしたら、外がさつきと違う意味で騒がしかった。まるで襲われているような……

「ってマジかよっ!？」

僕は慌てて外にでた。すると、さえが五人の奴と戦っているのが見えた。辺りを見回したが、他の敵はいないようだ。

「さえっ!」

僕はさえの方に駆けながら魔法陣を描く。

『求めるは雷鳴>>>・稲光<sup>いづち</sup>』

魔法陣から放たれた雷が敵の一人を襲う。だが、そいつは稲光<sup>いづち</sup>をよけた。

「なっ！？よけたっ！？」

「みなとか。気を付ける。こいつら五人ともかなりの腕だ」

「……んじゃま、今までみたいに手加減できる相手じゃないんだな？」

「そっだ」

僕はため息を吐いた後、五人と向き合う。

「あんたらは何者だ？」

「貴様等に教える必要はない。ここで死ぬのだからな」

「じゃあ教えてくれてもいいじゃん」

「おい、無駄口はその辺にしておけ。くるぞっ」

五人が一斉に向かってくる。さえに三人、僕に二人。僕は魔法陣をさつきとは比べものにならない速度で描く。

『求めるは焼原>>>・紅蓮<sup>くれない</sup>』

爆発的な炎弾をいくつも放つ。だが男たちはそれを全てよけ、僕に

攻撃してくる。

「炎の女神が我らに力を貸しー……」

「風遁ー……」

魔法と忍術か……アルファ・ステイグマ複写眼で解析。

「フレイヤ・バースト！」

「烈風掌！」

空間が歪んで見えるほどの炎熱が、風でさらに勢いを増して僕に襲いかかる。

『求めるは侵入>>>・蝕走』

だがそれを蝕走ウシロで解除する。キャンセルだが男たちは間髪入れずに次の攻撃を放ってきた。

『求めるは焼原>>>・紅蓮くれない！』

「火遁・業火球の術！」

『求めるは水雲>>>・崩水みずみ』

迫ってくる炎を、全てを消し飛ばすほどの激流を放つ。

そして崩水の魔法陣を描いていた手と逆の手で描いていた文字を描き終わり、唱える。

『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』

瞬間、僕は一気に加速して片方の男に接近する。

「なっ……………」

男が驚いた隙をついて、みぞおちを剣の柄で突く。

「かはっ……………」

男は肺から空気を吐き出し気絶した。

「き、貴様何者だ!？」

「あんたらが教えてくれたら教えるよ」

そう言いながら、次の魔法を放つ準備が整った。

「悪いけど、これで終わりだ」

『我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ』

僕の前に獣が現れ、男に襲う。

「ぐわああっ!」

男は悲鳴をあげて気絶した。なんとかなるもんだな。僕はさえの方を見た。

「えっ!？」

僕は信じられない光景を見た。三人の内の一人が、逃げ遅れた子供の一人に向かっているのだ。

「人質にするつもりかっ……させるかよっ」

さえも男を後ろから追っているが間に合わない!僕は走りながら空に文字を描き、唱えた。

『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す!』

加速して男に突っ込む。

駄目だ!間に合わない!

そして男が子どもに手を……

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

僕は叫んだが、それは意味のないことだ。くそっ、くそっ、くそっ、くそっ!!

また守れないのか!?!今度は目の前で死なせるのか!?

「うあああああああああああああああああああああああああああ  
あっ!!」

がむしゃらに手を伸ばすが、それは届かず、男の手は……切り落とされた。

「……え？」

「うがつあああああああああああつ！？腕が！腕がああああああああああああ！？」

男は腕を切り落とされた痛みで悲鳴をあげていた。

「うるさい」

すると、いつの間にいたのか、男のそばに立っていた少女がそう言  
って男の顔面に蹴りをいれて、気絶させた。

この少女が男の腕を切り落としたのだろう。

「お前、何者だ」

さえが少女に聞く。すると少女は名乗った。

「私の名前は灼眼のシャナ、よ」



## 第十六話 シャナとの出会い

「みなとside」

「灼眼の、シャナ？」

今日の前にいる、黒いマントに自分の身長よりずっと長い刀、燃えるように赤い髪と瞳の少女は、そう名乗った。

「お前達の名は？さっきの戦い見てたけど、かなりの腕よね」

「えっと、僕は時風みなと。こっちは……」

「流雲さえた。それよりシャナとやら。後ろにいる奴は誰だ？」

あ、それ僕も気になっていたんだよなあ。

さっきからシャナの後ろには気弱そうな少年がいた。姿はシャナに隠れていて見えないから、しゃがんでるのかな？

「ん？ああ。こいつは坂井悠二よ」

「さ、坂井悠二だよ。よろしく」

なんか目を回しているけど、何があったんだ？

「で、みなと、さえ。あんた達何者？」

「通りすがりのただの旅人だ」

さえがシャナの質問に答える。見事なまでにうそのことを即答したな。

「いやさえ。そのつぎやあぁっ！」

剣の腹で殴られる。そしてさえが僕の首に手を回して、僕の耳の近くで囁いた。

「お前はバカか？本当のことを言っつもりなのか？」

「何か駄目なの？」

「あいつが暁だったらどうする？私達がやるうとしてしていることが相手に筒抜けになりではないか」

「だからってあんなバレバレな嘘……」

「嘘だと言わなければいいだけだ。それをお前はいきなり嘘などと……」

「……」

こいつ、顔は天使だけど、中身は悪魔のほづがかわいいと思えるくらい黒いよな。

「でも暁が子供を助けるか？」

「子供好きなかもしかもしれん」

「それはないと思うけどなあ……………」

「いいから私達は旅人だ。わかったか？」

「領かないと僕の首が宙を舞うんだろ？」

「わかってるじゃないか」

「はあ……………もうどうでもいいや」

本当にどうでもよくなってきたので、さえに合わせることにした。

「話は終わった？」

シヤナが僕達に聞いてくる。てか敵かもしれない奴等の前であんなことしてる僕らって……………

「ああ。で、他に質問は？」

「あんた達は何者？」

「通りすがりの旅人だ」

「嘘はもういいから。何者だ？」

「旅人だ」

「何者？」

「旅人」

「……」

「……」

いつの間にか、二人の間で行われていた言葉のキャッチボールがなくなり、互いににらみあっていた。

「ち、ちよつとシヤナ？」

「おい、さえさーん」

僕と悠二が、さえとシヤナに呼び掛けたが、無視された。このパターンは……

「悠二！今すぐ離れろ！ここは危険だ！」

「えっ！？わ、わかった！」

僕と悠二は全力でその場を離れる。刹那、二つの剣が交差した。

ガキーンッ

金属音が辺りに響く。しばらくつばぜり合いをしていた二人は同時にさがり、そして互いに激しい剣劇を振るわせる。周りを巻き込みながら。

「やっぱりかあっ！！！」

僕は思わず叫ぶ。こちらら十五時間休みなしで頭フル回転させて解毒魔法を開発した後、その再調整と螺旋丸の修行、そしてさっき

の凄腕の能力者との戦闘をしたんだぞ。はあ。もう疲れた。そうだ。宿に戻って休もう。

「ふんっ」

「はあっ」

二人の剣劇のせいですでに宿は半壊していた。

「だあああああああああああああつ!? 僕の安息の地がああああああああああああああつ!」

僕は思わず絶叫。そして、

「てめえら何してくれてんじゃあああつ!」

二人に突っ込んでいく僕。

「お前もやるのか!? 容赦しないぞつ!」

「ふん! 奴隷の分際でいい度胸だ! 貴様が行ってきた数々の犯罪の被害者となった女性達の代わりに、成敗してくれる!」

「誰がいつそんなことをしたあああああああああああああああああああああ  
あああああああ!」

そして、僕も加わった三人の戦いは、さらに街を壊した。

そんな中、取り残された悠二が、

「これじゃ正義より悪だよなあ。」

と呟いたことは、誰も気付かなかった。

そして、僕達の戦いは、朝まで続いた。当然宿は全壊していて、僕が、

「最悪だあああああああああああああああああああああ  
！」

と叫んだのに対し、悠二は冷たく、

「自業自得だろ」

と突っ込んだのだった。

悠二が心配してくれる。ああ、悠二が天使に見えるよ。

「こんな幼女誘拐、婦女暴行を毎度のように行っているマスター変質者に、同情はいららないぞ」

さえの説明に、シヤナがひく。

「お、お前ってそんな奴なの？」

「ちつがあああああああああああああああああああ  
つー!」

喉がだんだん痛くなってきた。叫びすぎかな？

「はあ……で、お前らこそ何者なんだよ？」

僕がシヤナたちに聞く。

「んー。一言で言えば傭兵みたいなものね。色々な国で雇ってもらってるの」

「へえ」

まあ、さえとほぼ互角の剣技を持ってるとなら、どの国も欲しがるとな。

「で、次はどこに行くの？」

「まだ決まってないわ……そうだった。みなとたちについていこうよ」

つ、悠二」

「あっ、それいいねっ」

「ちよつと待て！なに友達の旅について行こうみたいな軽いノリで命懸けの戦いに参加しようとしてんだよっ！こっちは命懸けなんだぞっ！？」

僕はシヤナと悠二に突っ込む。てか悠二まで……

「まあいいではないか。戦力は少しでもあつたほうがいいだろう」

「……はあ。後悔するなよ？」

「あたりまえよ！」

シヤナは自信満々にそう言う。悠二は少し緊張している。早速後悔したのか？

「で？暁のアジトの場所は？」

シヤナが僕に聞いてくる。僕は記憶の中にあるアジトの場所や地形を出来るだけ詳細に説明する。

「えっと、ここから西南の方角に、だいたい七八キロくらいにある溪谷の洞窟らしい。この溪谷は崩れやすく、多分魔法とかで強い衝撃を与えたら周りの岩盤とかは簡単に崩れる。そのせいで誰も近づかないらしいから、ここをアジトにしたんだと思う。アジトはその中では比較的頑丈な場所にある洞窟なんだってさ」

僕が情報を伝え終わると、悠二は考え込むような顔になる。

「暁の人数は二人……毒を解毒できるのはみなとだけ……」

「悠二。何か思いついた？」

「んー、まだ。つくまでには考えておくよ」

「へえ。悠二って作戦とかたてるの得意なんだ？」

「うん。まあ……」

あれ？何か考え込んでるから返事が素っ気ないな。すごい集中力だな。

「時間もないことだし、もう行くぞ」

「はあっ！？僕まだ一睡もしてないんだけど!？」

「私もだ」

「お前は昨日昼まで寝てたろっ!」

「うるさい」

ビュルンッ　ゴンッ

僕の意識は今度こそ沈んだ。そして何も考えられなくなり、目の前が真っ暗に……

「起きろ」

「ぐはっ」

今のがトドメだった。

## 第十七話 少女の脅しと少年のがんばり

「みなとside」

「殺す気があつ!?!?」

僕は勢いよく突っ込む。さっきさえに気絶に追い討ちをかけるように殴られたのだ。そして意識が戻った途端、真っ先に突っ込んでやったのだ。

「……あれ?」

しかし僕の周りには誰もいなかった。そしてここがどこか分からなかった。見たところ、辺りは木、木、木。つまり森の中だというのは分かった。だけど、

「何で僕しかいないの?」

さえも、シヤナも、悠二も誰もいないのは何故だ?

おそらく僕をここに運んだのはあの三人なんだろうけど……

「ん?なんだこれ?」

僕は足下に紙があつたことに気が付き、それを拾い上げた。

“お前を運びながら移動するのに疲れたから置いていく。気が付きしだい追いかける”



「……………何これ」

僕は思わず呟く。何故か。僕の目の前に大量のトラップがあるからだ。何故わかるのか。それが複写眼アルファ・ステイグマの便利なところだ。そしてここを通って行かないと、さえ達<sup>3</sup>に追い付かず、僕は死ぬ。ここを通るとトラップが作動し、僕は死ぬ。さてここで問題。さえとトラップ。どっちが危険だ？

「……………考えるまでもないか」

僕は空間に文字を走らせる。

「怖いのがどっちかなんて。そんなの……………」

『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』

「さえに決まってるっ！！」

僕はトラップの山に突っ込む。

ピッ ドカンッ バアンッ

トトトトトトトトトトトト

ドドオン ズズウン ベキバキ

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おっ……………」



う書いていた。

“トランプ突破おめでとう。あれはお前が私に復讐する気を萎えさせるためのものだ。まあ自業自得だと思え。私達は渓谷の十キロ手前で待っているぞ。”

P . S .

まだ私に何かする気なら、どうなるかわかってるな？”

「……………」

僕は静かに泣いた。悪夢だ。

・

・

・

「遅い」

さえたちに追い付いた瞬間、殴られた。

「……………はあ」

もう怒る気力などなかった。

「…で、これからどうするの？」

僕は哀れみの目で見てくる悠二と、メロンパンを食べているシヤナに聞く。

「攻めるのは明日になった。今日はここで休むよ」

「やったあつー!」

眠れる! 気絶じゃなくて眠れる!

「えっと……次の話にいつていい?」

「ああごめん。続けて」

「うん。まず戦う相手だけど、二手に別れようと思う。サソリの相手はみなととさえ。デイダラは僕とシヤナ。これでいい?」

「うん。問題ないと思う」

二手に別れる場合、まずあつたばかりの人と組むより、一緒に旅をしている人と組むほうがいいからな。そしてサソリの毒は僕にしか治せない。だから自然とこうなったということか。

「そつちは大丈夫か?」

僕が悠二に聞く。シヤナはともかく、悠二はあまり戦闘向きではないと思っただからだ。

「大丈夫だよ。シヤナがいるから」

悠二がそう言うと、シヤナは顔を赤らめた。

「ふうん……成る程ねえ」

「何よ？」

「いや別に」

シヤナが僕を睨み付ける。まあ無視しよう。何かだんだん神経図太くなってきたな。さえのおかげか？いや、さえのせい、だな。

「じゃあ今日はもう休もう。疲れたよ」

僕がそう言つと、みんなは寝る準備を始めた。僕も準備しよう。

『光の王が無数の時を編み——ライトキャンサー』

僕が印を組み、呪文を唱えると、光の網が広がり、木に引っ掛かる。ハンモックの完成だ。

「一度やってみたかつたんだよなあ。ハンモックで寝るの」

僕はハンモックの上に寝転がり、そして——

「ぐはっ」

毎度のことながらさえに吹っ飛ばされる。

「……今度は何で殴つたの？」

「ん？理由がないと殴つては駄目なのか？」

「当たり前だろっ！てか今までも絶対理由なしに殴ってただろっ！」

「冗談だ。本当の理由はだな、女神よりも美しい私が地面で寝て、貴様がハンモックで寝ることが許されるとでも？」

「要するにハンモックで寝たいのね……あと自分のこと自分で美しいって言うなよー」

「む、突っ込みに覇気がないな」

「もう疲れたんだよ。そこはもう譲るから、今日は僕にちょっとかい出すなよー」

「嫌だ」

「僕の話聞いてましたかっ!？」

「うむ、満足だ」

「ここの女っ!?!」

「はぁ……んじゃまあおやすみ」

「うむ。おやすみ……永遠に」

「怖いって!」

僕はため息を吐きながら近くの木にハンモックを作り、そこに寝転がる。

はあ。明日は暁との戦闘だったのに……さえは怖くないのかな？

さえの方を見ると、全く恐怖がないようで、熟睡していた。

「……ははっ。さえが緊張とかするわけないか」

何だか少しだけ気が楽になった。僕も寝よう。

そう思っただけ目を閉じた途端、

「みなと」

さえが話しかけてきた。

「何？」

「明日は……勝つぞ」

「……おう」

僕が頷いたのを確認すると、さえはまた寝た。

「……絶対勝つ」

僕はそう呟いて、眠りについた。



## 第十八話 溪谷の戦い？

「みなとside」

僕達は今、溪谷の洞窟、つまり暁のアジトの前に隠れていた。中の人の気配の数は二つ。おそらく向こうもこちらの存在に気付いているだろう。

「……行くぞ」

僕がそう言うと、全員が洞窟の中に入る。あらかじめ複製眼で確認アルファ・ステイグマしているから、トラップの心配はない。

「なんだあ、おまえらはあ」

目から下を、マスクで隠した、大男が聞いてくる。あいつがサソリか。

「オイラたちに何か用事があるんだろ、うん」

前髪で片目を隠した男がサソリに言う。こっちはデイダラか。二人共、ペインと同じ衣を着ている。

「んなことあわかってるんだよ。黙ってる」

「へい」

瞬間。デイダラの手から小さな鳥のようなものが向かってきた。

その鳥が僕に止まると、

「喝！」

デイダラが叫んだ途端、鳥が爆発した！

「うわっ」

僕は金剛剄を使い、衝撃を和らげた。暁の幹部相手に、魔法だけで戦うつもりはない。

「金剛剄かよ。じゃあこれならどうだ？」

そう言うと、デイダラは手から鳥を十匹放った。

「もう同じ手は通じないよ。」

僕はそう呟くと、魔法陣を描き、唱えた。

『求めるは雷鳴>>>・稲光』

魔法陣から放たれた雷が鳥にあたる。

「なっ!?!」

デイダラは驚いている。おそらく一発で弱点を見抜かれたことを驚いているのだろう。電撃を浴びせれば、あの鳥が爆発しないと。

「成る程……複製眼か。アルファ・ステイグマそれに剄と魔法を使った……あいつか。ペインと戦った異常なガキは」

「本当かよアニキ!？」

「ああ」

「へへ。面白そうだな。うん」

サソリとデイダラの話からすると、もう僕の情報は向こうに渡ってるみたいだな。

「ち、ちよつと!今の何!？」

「へ?」

シヤナが僕に詰め寄りながら聞いてくる。

「へ、じゃないわよ!なんで二種類の能力が使えるのよ!?!聞いたことないわよ!」

「え、えつと……多分体質」

「体質つて……信じらんない」

「まあまあシヤナ。落ち着こうよ。まだ戦闘中だよ?」

「わ、わかってるわよっ!」

「ふむ。自分のこともわからんとは……やはりお前はバカだな」

「はいはい」

そんな話をしながら、次の魔法陣を描く。

『求めるは焼原>>>・紅蓮<sup>くれない</sup>』

魔法陣からいくつもの爆発的な炎弾を放つ。

「ふん」

だが、それは全て弾かれた。サソリから生えたしっぽによって。

「なっ……………」

「何よあれっ!?!」

「……………人間か?」

「みなと」

「わかってるって」

アルファ・ステイグマ  
複写眼、発動。解析。えっと……………成る程。

「……………あいつは傀儡人形だ。本体じゃない」

「本体はどこだ?」

「……………わからない」

「どづいいうことだ?」

さえが怪訝な顔で聞いてくる。

「……どこからも傀儡を操る糸が伸びていないんだ」

「ふむ」

「ねえそれってさ……」

僕とさえが考えていると、悠二が話しかけてきた。

「中で操ってるんじゃない？」

「……あ」

僕とさえはそろって間抜けな声をあげた。

「ふん。そんなこともわからないとは。愚図め」

「お前も分からなかったんだらうがっ！」

僕は顔を背けながら暴言を吐くさえに突っ込む。てか分からなかったの、恥ずかしかったんだ。だからって僕に八つ当たりするのは間違ってると思うけどな。

「しゃべってないで集中してー！」

シヤナが僕達に怒鳴る。僕、サソリのこと解説してただけだったはずだよね？何でこうなるんだらう……

そう思いながらも、手を高速で動かし、空中に文字を描く。  
まずはサソリとデイダラを分断しないと。

『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』

僕が魔法を唱えると、さえが合図を送ってくる。

(デイダラをシャナの方に吹っ飛ばすぞ)

(了解)

僕とさえは、普通の人からは、姿が霞んで見える程の速度で突っ込む。

当然、サソリのしっぽとデイダラの鳥が襲いかかってくる。

僕は高速で移動突っ込みながら、両手でそれぞれ違う魔法陣を描く。

『求めるは雷鳴>>>・稲光』

『求めるは焼原>>>・紅蓮』

同時に二つの魔法を放ち、奴らの攻撃を防ぐ。

「さえ!」

「ん」

僕はサソリに突っ込み、目の前で魔法を唱えた。

『求めるは雷鳴>>>・稲光』

しかしそれをサソリ本人ではなく、その手前の地面に放つ。

ゴゴオン

「ちっ」

辺りが土煙に包まれる。

「めんどくさいなあ、うん。こんな煙、爆風で消しとばしてや……」

デイダラの言葉は最後まで続かなかった。

さえが奴の前に現れたからだ。

「なっ」

デイダラが驚いた声をあげるが、さえはそんなものは無視して剣を振る。

「おわあっ」

デイダラはそれを後ろに飛んでかわす。しかしそれが僕達の狙いだ。何故ならその先には僕がいるのだ。

「てめえ……」

デイダラが僕に気付いたが遅い。僕は魔法で強化された蹴りをデイ

ダラに放つ。

「くっ」

それを両手をクロスさせて防いだが、僕はそれを無理矢理吹っ飛ばした。

「シャナ！悠二！」

「わかってる！」

シャナはデイダラが吹っ飛んだ先にいる。シャナは飛んできたデイダラを洞窟の外に蹴飛ばし、さらに吹っ飛んでいるデイダラに刀で追い討ちをかける。

「くっ……舐めるなよ！うん！」

飛ばされながらデイダラは、右手から小さな鳥をだし、左手で印をきる。

シャナはそれをまた爆発させると思って体を退かせる。

だがその鳥は爆発せず、いきなり巨大化した。デイダラはそれに乗り、空中に一旦逃げる。

「……空も飛べるのね」

シャナが悔しそうに呟く。今のチャンスに倒せなかったからだろう。

「悠二！シャナはまかせた！」

「うん！」

悠二はシャナの所に駆けていった。

「やて、と」

僕はサソリの方に目を移す。そしてさえを一瞬だけ見る。

「じゃ、やるか」

「ん」

すると、サソリが馬鹿にしたような口調で話しかけてきた。

「たかがガキ二人が俺に勝てるんでも？」

すると、僕とさえは口元に笑みを浮かべ、そろって答えた。

「勝てるわ」



## 第十九話 溪谷の戦い？

「みなとside」

「勝てるさ」

僕とさえがそう言った瞬間、サソリから、常人なら発狂してしまいかねないほどの殺気が放たれる。

「ガキが。舐めてんじゃねえぞ」

サソリが言った途端、さつきとは比べものにならないほどの速度でしっぽが迫ってくる。

「くっ」

それを右に飛んでかわすと、しっぽは今度は右薙に迫る。

僕もさつきと比べものにならない速度で魔法陣を描く。

『求めるは光陣>>>・縛呪はば！』

魔法陣から出てきた光の縄をつかみ、叫ぶ。

「目標の岩を捕縛！捕縛後収縮！」

光の縄を、洞窟の中の、上の方にある岩をからませ、一気に収縮させ、しっぽをよける。

ブウォンッ

そんな音とともにしっぽが僕のすぐ下を通りすぎる。縛呪が収縮している間にも、次の魔法陣を描く。

さえは、サソリが僕に攻撃している間に、後ろに回り込んでいた。当然サソリのしっぽがさえに迫る。あのしっぽには大量の毒が塗っていられてる。さえがもしかすりでもすれば、さえは動けず、治療は僕がしないとイケないので、最悪なことになる。だからこの魔法を使った。

『求めるは雷鳴>>>・稲光いしゅち！』

魔法陣から放たれた電撃を、サソリはしっぽで防ぐ。その瞬間、さえがしっぽの根元を斬った。

「なっ」

サソリが振り返りさへの攻撃を防ごうとする。

「遅い」

さえがサソリの体を細切れにする。

「みなと」

「わかってる」

『縛道の六一・六杖光牢』

僕は詠唱破棄した縛道を、サソリの本体が出てきた場所に放った。サソリの本体は、六つの光の棒によって捕まえた。

「よしっ！」

僕は思いつわず歓喜の声をあげた。だが、

「まだだ」

「え？」

さえの言葉に疑問の声をあげた瞬間、六杖光牢が破壊された。

「うわっ、マジかよ……」

「そう簡単にはいかんだろう」

サソリの本体は、赤い髪の毛、体を傀儡に改造した少年だった。

「……みなと、あれは何なんだ？」

「体を傀儡に改造している……あれじゃバラバラにしてももとに戻るぞ」

「ふむ。私と相性最悪ではないか？」

「だな。しかもそれだけじゃない。あいつの刃物全部に毒が塗っている。あれじゃ近づいた途端毒の餌食だ」

「ならお前に丸投げしていいか？」

「お願いだからやめてくれ」

そんな会話をしながらも、僕とさえはサソリから目を離さない。いや、離せない。離れた途端、殺られる。

「ほう。お前の目は本当に便利だな。その目がなければ、今頃お前たちは毒の餌食だったのにな」

「御託はいい。かかってこい」

「って煽るな馬鹿っ！」

僕が叫んだが遅かった。サソリは標的をさえにしてしまった。

さえなら多分大丈夫だろうが……

「ああもっつ！」

僕は超高速で魔法陣を描く。

『求めるは焼原>>>・紅蓮くれない！』

いくつもの炎弾を放つ。サソリはそれを全て、背中から生えた六本の刃で防がれる。

その間にも次の魔法を唱える。

『我・契約文を捧げ・宙を覆う精霊の力を放つ！』

空間が渦巻き、それがサソリに向かって放たれる。

「ちっ」

サソリはそれを舌打ちしてよける。

ドドオンッ

すごい轟音が洞窟に響き、辺りが土煙で覆われる。

「さえ！」

さえはそうしてできた、一瞬の隙をつき、サソリの後ろに回り込む。

さえはそのまま剣を見えないほどの速度で振り、サソリの背中  
の刃を全て斬った。

今だ！

『破道の四・白雷』

僕は左の指から、雷の光線をサソリに放った。

その光線はサソリの腹を貫いた。

ここで畳み込む！

『破道の五八・嵐！』てんらん

今度は竜巻を放つ。それもサソリは直撃し、回転しながらぶっ飛び、

岩にすごい勢いでぶつかった。さらに、

「はぁっ」

さえの剣でバラバラに斬られる。

「やったかっ!？」

僕はさえに聞く。おそらく死んではないだろうが、しばらくは……

僕の思考はそこで途切れた。

「……………さえ?」

さえの背中に、刃が刺さっていた。さっきさえが斬り落としたはずの刃が。

「さえっ!」

「来るなっ!!!」

僕がさえに駆け寄ろうとしたら、さえに止められた。

「お前は今、戦闘中ということをおぼれたのか!? 敵に集中しろっ!」

息を荒くしながら、さえが僕に叫ぶ。さえの背中の傷は、浅いが出血が激しいうえに、毒が体を蝕むだろう。早く手当てをしないとさえは……………

そこまで考えて、僕は懷に手を伸ばした。

「さえ。一気に片付けるよ」

僕の言葉に頷くさえ。それを確認してから、僕は懐にあったもの  
だした。

それにいつの間にか、バラバラの体に戻っていたサソリは怪訝な顔  
で、

「何だそれは？鉄扇か？お前の武器は剣じゃないのか？」

僕はそれを無視して、鉄扇を広げていく。そして、小さく呟いた。

「しゅうえんのまげん  
終焉魔扇」

第二十話 溪谷の戦い？（前書き）

今回結構短いです。

## 第二十話 溪谷の戦い？

「シャナside」

「あゝもう！何なのあいつの爆弾の量！多すぎるでしょっ！」

私は忌々しげに空中にいるデイダラを睨みながら叫ぶ。

「まあ多分、限界はあると思うけど……」

悠二も、かなりまずいという顔をしていた。相手は空中。私が空を飛ぶために炎の翼をだしてデイダラに向かっつて手もあるけど、それじゃ爆弾で狙い撃ちだ。

「うーん……どうするシャナ？」

「あんたが考えなさいよ！」

思わず叫ぶ。こういう戦略とかは、悠二が考えたほうがよっぽどいいのだ。その代わり戦闘はからっきしだけど……

「で？どうするの？」

「……………じゃあ、こうするのはどう？」

悠二が私に耳打ちする。

「へえ……………成る程ね」

悠二の作戦は、完璧とまでは言い難いが、悪くはなかった。

「じゃあやるわよ」

「うん！」

くデイダラsideく

「……このままじゃまずいな。うん」

もう爆弾の数があまりない。あの複写眼のガキに、無駄に使いすぎた。

………C3で一気に片付けるか。それしかないな。サソリのアニキなら生き残るだろ、うん。

「さて……残りの数は……小さいのが4つ、C3が一つ、か」

充分だろ。後は小さいのを足止めに使って、C3を放てば………終わりだ。

くシヤナsideく

「行くわよ、悠二！」

「うん！」

悠二が私にしがみつく。正直これはかなり恥ずかしい。

そう思いながら、背中から翼を生やす。

「行くぞっ!」

私は一気にデイダラと同じ高さまで飛び、さらに飛び続ける。

デイダラの姿が小さくなるまで飛んだ後、私は一気に急降下した。

「デイダラ side」

最悪だな。よりによって唯一C3の被害をうけない場所に逃げられた。俺より高い場所に行かれたら、爆発が届かない。

「面倒だな、うん」

手のうちにある4つの鳥だけでは、かなりきついかもしれない。

「まあ、大丈夫だな。うん」

俺が鳥を放とうとしたら、いきなり相手が急降下してきやがった。

馬鹿だな。うん。

このままあれを爆発させるか、避けてC3を放つか……両方だな、うん。

この勝負に勝利を確信した俺は、先ほどまでの鳥と違い、速度がとつともなく早い鳥を、敵に向けて放った。

これで終わりだ。

〈シヤナside〉

相手が爆弾を放ってきた。さっきとは比べものにならない速度だ。

「悠二、行くわよっ！」

「うんっ！」

〈デイダラside〉

「喝！」

ドドドドドオンッ！

爆弾がぶつかる瞬間、いきなり急上昇しやがった。

「ちっ」

だが今がチャンスだ。急降下からの急上昇であまりスピードのでない今が。

オイラは相手より早く、急上昇する。上にさえ行けばこっちのものだ。後はC3でかたがつく。

だがその瞬間、背後に気配を感じた。

馬鹿な！今日の前にいるのに後ろだと！？

そこで気付いた。さっきまでいたもう一人の男がいなくなっていたのだ。今まで何もしなかったので、戦闘能力はないと判断していたが。

「くそっ」

後ろを振り返えると、自分に拳が迫ってきた。

とてもゆっくりと。

それをあっさりかわすと、そいつの腹に蹴りをいれる。

「かつ……は」

肺の空気を吐き出しふっ飛ぶ。

その瞬間。

腕を斬られた。

「ぐああっ」

しまった、あいつは罠か！

オイラはなりふりかまわず鳥に急上昇させ、懐からあるものを取り出し、印をくんだ。その瞬間、それは巨大化し、落下していった。そして叫んだ。

「喝！」

## 二十一話 溪谷の戦い？

ある所に、3つの大国に挟まれた小国があった。

その小国はたびたび戦争の舞台となり、大国は小国を奪い合うようになった。にも関わらず、その小国が滅びることはなかった。

その小国は、決して軍事力あるわけでもなく、むしろほとんどなかった。だがその国には一人の英雄がいた。

その英雄の使う鉄扇は、攻め込んできた大国の部隊を、次々に薙払い、戦いを終わらせた。

いつしか英雄は、次々と戦いを終わらせたことから、“終焉魔扇”と呼ばれた。

そして、英雄が死んだ後も、英雄の使っていた鉄扇は受け継がれ、その鉄扇は、英雄の名を受け継いだ。

（みなとside）

「そんなおとぎ話を聞いたことがあるな」  
サソリがそう呟いた。

「確かその小国は実在しているらしいな。七年前までは」

「……………」

「七年前、その小国は突然滅びた。この事に、大国は驚いたんだよな。まあ無理もないな。何せ、原因不明なんだからな」

「……………」

「で、何でお前がそんなもん持つてるんだ？」

「……………さあな」

僕は静かに扇を広げていく。

「それにどんな効果があるかと無駄だ。俺には…」

「稲光」

目の前に魔法陣が現れ、稲妻が放たれた。

〈サソリside〉

「稲妻」

いきなり複写眼のがきの前に魔法陣が現れ、稲妻を放ってきた。

「なっ」

驚いて一瞬体が硬直した。今、あり得ないことが起こったのだ。

魔法陣を描いたのでなく、現れたのだ。

ドガアアンツ

「があっ」

稲妻の直撃する。何だ？何なんだあれは？

「ちっ」

こうなれば奥の手を使うまでだ。あの鉄扇は得体が知れないが、あれを使えば敵ではない。

俺は巻物を取り出した。

くみなとsideく

この鉄扇の効力に驚いていたのだろう。でなければ真正面から撃った稲光が当たるわけがない。

そう思っていると、視線を感じた。さえだ。

どういふことが説明しろ。

目でそう言ってきたので、

後で説明する。

と返した。

おそらくさっきの稲光のことだろう。この鉄扇には、ある細工がさ

れている。それは、鉄扇の一枚一枚に魔法陣が描かれているのだ。それを組み替えて、呪文を唱えることで、複数の魔法が発動できるようになっている。そのおかげで、魔法の発動スピードが数十倍速くなる。こんなことができるのは、多分この鉄扇に使われている材料が関係しているのだろう。以前、複写眼で解析を試みたが、全く分からなかった。

さっきサソリが話していたおとぎ話の英雄は、実在していた。国だけが本当にあるのではなく、あのおとぎ話事態が実話なのだ。

何故そんなものを僕が持っているのかは、僕自身分からないし、おとぎ話が実話ということも、いつ知ったかも分からない。そもそも昔の記憶が何でか曖昧だ。

「…………… 師匠は何であるの村に来たんだ？」

分からない。師匠とどう出会ったか分からない。父さんと母さんにどう育てられたか思い出せない。知識として育てられた記憶はあるけど、思い出としての記憶がない。何でだ？

「…………… 今は戦いに集中しろ」

僕は自分に言い聞かせた。そしてサソリを睨む。いつの間にか巻物を取り出していた。気付かなかった。それだけ僕が考え事に集中していたのだろう。

「赤秘技・百機操演」

サソリの巻物からおよそ百体の傀儡が出てきた。胸の核となる部分から糸がでている。

僕は静かに鉄扇を構え呟いた。

「全部潰して、さっさとさえを治療する」

「やれるものならやってみろ」

百機の傀儡が一斉に襲い掛かってくる。

「ふう……」

僕は一度目を閉じ集中し、鉄扇をすばやく動かし叫んだ。

「崩水！みずみ稲光！いづち紅蓮！くれなひ倒地！ちがしら」

激流がうずまき、稲妻が走り、炎がうなり、大地に穴を穿つ。

様々な魔法を、一瞬のうちに何発も放つ。次々に傀儡が破壊されるが、次々にまた迫ってくる。

こいつらの全ての攻撃をよけるのはかなりきつい。

「フレイヤ・バースト！」

爆発で目の前にいた傀儡全てを吹き飛ばす。僕は一瞬さえのほうを見た。

さえはいつもより動きが鈍く、どんどん焦燥していつていた。

僕は鉄扇で魔法陣を出現させながら、もう片方の手で空間に文字を走らせる。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す！」

鉄扇で傀儡を切り裂きながらさえの元に向かう。

瞬間、サソリが新たな傀儡を出したのがみえた。

僕はさえの元に向かうのを諦め、サソリと向かい合った。向かい合わざるを得なかった。複写眼で見たあの傀儡は、この百機全てに比べれば劣るかもしれないが、単体なら今までと比べものにならないほどやばい。

「……何だよ、それ」

「三代目風影だ」

瞬間、傀儡から黒い何かが出てきた。

「……砂鉄か」

聞いたことがある。三代目風影は、練り込んだチャクラを磁力に変えることができた。あれは三代目風影の傀儡か。

やばい。かなりやばい。周りは百の軍勢、倒すべき敵は体を傀儡に変えていて、核を壊さない限り勝ち目はない。その上三代目風影の砂鉄。さらにさえの体に毒がまわるまでという時間制限付き。

勝ち目なんてない。

それでも……

「勝たなきゃいけないんだよ」

さえのために、戦争を止めるために、平穩を取り戻すために、自分のために……

負けてたまるか！

「砂鉄界法」

大量の砂鉄が降ってくる。このままじゃさえにも当たる。砂鉄にも毒が仕込まれているのに、これをくればさえは……

「させるかつ！！稲光！紅蓮！崩水！倒地！空<sup>くわく</sup>燐！」

次々に魔法を放つ。傀儡を稲妻が貫き、炎が砂鉄を焼き、激流が傀儡を飲み込む。地に穿たれた穴に傀儡を圧迫させ、閃光が砂鉄を吹き飛ばした。

「ほう………」

「まだだっ！」

僕は両手の指を前で組んで、叫ぶように詠唱する。

「千手の涯 届かざる闇の御手 映らざる天の射手 光を落とす道  
火種を煽る風 集いて惑うな 我が指を見よ 光弾・八身・九条・  
天経・疾宝・大輪・灰色の砲塔 弓引く彼方 皎皎として消ゆ

破道の九一・千手<sup>せんじゆ</sup>皎<sup>こう</sup>天<sup>てん</sup>泰<sup>たい</sup>炮<sup>ぱう</sup>！！！！」

僕の背後から無数の棒状の光弾を放つ。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオ

百機全ての傀儡を破壊した。

「なっ……………」

サソリが声をあげて驚いている。

「ぜえ…………ぜえ……………」

呼吸が荒くなっている。さすがに九十番台の鬼道を放つのはつらいな。

僕は残り少ない力で、サソリの方に人差し指を向け、唱えた。

「破道の四・白雷」

ドオンッ

白い閃光が、サソリの核を貫いた。

僕はそれに見向きもせず、毒で体の自由を奪われているさえの元に向かって走った。

「さえっ……………」

「み……など」

「喋るなっ！待ってる！今すぐ治すからっ！」

僕は超高速で魔法陣を描く。

「求めるは聖棺・無喰<sup>しごく</sup>!!」

魔法陣がさえの体を包む。この魔法は、僕があの時、さえに一日時間をもらった時に作った魔法だ。

集中しろっ！今持つてる全ての魔力を注げっ！絶対、絶対死なせないっ!!

「はあああああああああああああああああああああああああ  
っ!!」

さえの体から毒がどんどん抜けていく。

そして全ての毒が抜けた。

次だ。

僕はまた超高速で魔法陣を描く。

「求めるは安寧・薬魔<sup>やくま</sup>！求めるは活性・日輪<sup>ひのわ</sup>！」

薬魔は体の傷を治す魔法、日輪は体を活性化させる魔法。

これでさえは大丈夫だ。後は……サソリと僕だな。

僕の背中にはナイフが刺さっていた。毒の塗ってあるナイフが。

「!?!?……かはっ」

口から血を吐き出す。まずいな。

このナイフは、さえの治療中に刺された。つまりは、サソリはまだ動けるのだ。しかもこの毒、さえの毒よりも強力だ。

「はぁ……はぁ……」

サソリのほうを見る。サソリは……もう動けないようだった。その証拠に、サソリは仰向けに倒れていて、微動だにしなかった。最後の力で、ナイフを投げたのか。

「……おい」

サソリが口を開いた。どうやら死んではないようだ。その方が助かる。こいつには聞かなければいけないことがあるからな。

「何だ?」

「お前ら、何でここにきた?」

「……情報を聞き出すためだ」

「……そういうことか。いいだろう。俺に勝った褒美だ。教えてやるぞ」

「……………本当か？」

「ああ。どっちにしろ今の俺にはどうでもいいことだ。それにもう遅い」

「どういうことだ？」

「カラスモリの王……………墨村良守は、すでに殺したからな」

「なっ！？」

「どういうことだ！？殺されるのは王妃じゃなくて王だったのか！？」

「王だけじゃない。王族は全て殺した。王族を殺したのは……………ローランド王、シオン・アスタールの側近、ミラン・フロワード」

「っ！？」

「シオンさんの側近だとっ！？」

「そしてミラン・フロワードは、ローランドではなく、三千王国の者と名乗っている。これがどういうことかわかるか？」

「ちょっと待て！！戦争はキーとカラスモリじゃないのか！？何で三千王国と……………」

「ああ、それは下っぱどもに流したデマだ。本当の作戦を知っているのは、暁の幹部と、ミラン・フロワードだけだ」

「……黒幕は誰だ？」

「ミラン・フロワードだ」

「うちはマダラじゃないのか？」

「何を言っている？そいつはとっくに死んでるだろうが」

「！？」

「こいつらはマダラのことには気付いていない！？」

「シオンさんは、この件に関係あるのか？」

「ないな。全てミラン・フロワードの独断だ。シオン・アスタールはこのことを知らない」

「……くそっ」

「まずい。今、三千王国の主力はキーに向かっているんだぞっ！？絶対に今の三千王国じゃカラスモリに勝てない！生き残ってる村の人もこれじゃ……」

「最期に教えてやるよ。俺達の目的を」

「目的？」

「世界征服」

「……冗談だろ？」

「……………」

「おい聞いてんのかよ？」

「……………」

「おい！聞いてんのかよ！？おい！」

サソリはもう、口を開かなかった。いや、開けなかった。死んだのだ。

「ぐっ……………ああっ！！！」

まずい！早く解毒と止血を……………

僕の意識がもつたのはここまでだった。

## 第二十二話 気付いてしまった真実

「……?side」

「……は……どじだ？」

「……………」

何か周りがうるさいな。

「……、ばーのっ……!」

「あーっ……!のーわ……………ども……!近づくなっ……!」

何でみんなそんなことをするの?何でそんなことを言うの?

僕はみんなのためにやったのに。

「……………!こっちだっ……!」

「……………、いいよ。僕はおとなしく捕まるよ」

「でもっ………」

「僕が逃げるとお前が困るだろ?」

「くっ………」

「ま、牢獄の中で、気楽に過すすわ」

「――」

「またな、悪友」

×××××××××××××××

「よお、おっちゃん」

「何だ？また暇になったのか？」

「まあね。また話し相手になつてよ」

「いいぜ。我が愛娘の話を聞かせてやろう」

「いやその話もう軽く百つかいは聞いたからっ！」

「なんの！まだまだ聞かせてやる！」

「ええええええええええええええっ！！！」

×××××××××××××××

「やあやあ、また来たんだねえ」

「できれば来たくなかったけどな。僕も暇じゃないし」

「奇遇だね。僕もこれから寝る予定なんだ。じゃあ戻っていい？」

「……一発殴つていいか？」

「冗談じゃあん」

「はあ、まあいい……」

「あいな、……」

「ストップ……。その話はなしだ」

「でもっ！」

「それをやったら、お前終わるだろ？」

「……お前はそれでいいのか？」

「んー、外にいた時と違って一日中寝てられるから、別にいいけど……まあ、悪友と仕事できないのは、少し寂しいかもね」

「……」

「この話はここまでっ！お前も、もうここには来ないほうがいいよ。上に目を付けられるのも、時間の問題だろうっしね」

「……そんなこと、できるわけないだろ」

「相変わらず強情だなあ、お前」

「お前が、すぐに諦めるから、僕が諦められないんだよ」

「なにそれ？」

「さあな。自分でもわからん」

「うーん……じゃあさ、お前がトップになってさ、僕をここから出してくれよ」

「……わかった」

「へ？いやいや冗談だぞ？」

「いや、約束する。僕は絶対お前をそこから出す。絶対に」

「……はあ。無茶だけはすんなよ？」

「君には言われたくないな」

「違うない」

「認めるのかよ」

「まあね。自覚しているつもりだよ」

「……はあ。さっきの決意が馬鹿らしくなってきた」

「はは。それ、前の任務のときも言ってたね」

「あれはお前が……」

××××××××××××××××

「はあ〜？……マジで？」

「あ、ああ」

「うわ〜。あいつそれ黙ってないぞ……ああおっちゃん、気にすんなよ。おっちゃんのせいじゃないんだからさ。むしろ僕みたいな化け物に、よくしてくれてありがとね」

「う、う、う」

「泣くなよおっちゃん……僕なんかのためにさ」

「ごめんなあ……ごめんなあ……」

「……ありがとな」

×××××××××××××××

「おいつ、……っ！」

「やっぱり来たねえ」

「なんでお前はそんなに平然としていれるんだっ！？」

「さあ？僕が化け物だからじゃない？呪われてるんだよ、僕は」

「違っつ！お前は化け物なんかじゃないっ！」

「そう言ってくれるのはお前だけだよ。ホント、物好きだよなあ、」

お前。よく変な奴って言われるだろ?」

「お前ほどじゃないよ。それよりどうするんだ?これから」

「ん〜……ま、しゃあないな」

「!?!まさかお前、このままおとなしく殺されるつもりか!?!」

「いやいや、早とちりすんなって。僕みたいな奴のために悲しむ奴がいるんだ。なら、頑張るしかないでしょ?」

「お前……」

「で? 刑の執行はいつ?」

「明後日だ」

「なら、やるなら今日しかないな。手伝おうなんて思っなよ。自分でなんとかするから」

「でも……」

「今日まで楽しかったよ。じゃあな悪友。約束が果たされるのを、遠くの地で待ってるよ」

「……ああ。必ず」

××××××××××××××××

「脱獄したぞお！」

「どこに行きやがったあ！」

「……………もつばれるとはね。さすがSランクの犯罪者だけを投獄させる場所なだけのことはある」

「見つけたぞお！」

「やばっ」

××××××××××××××××

「はあ……………はあ……………」

「もう逃げられんぞ、この化け物があ！」

「呪われた子供がっ！今すぐ楽にしてやるっ！」

「……………なんか落ち込むなあ。そう化け物だの呪われてるだの言われると」

「撃てえっ！」

「（あ、死んだなこりゃ……………ごめんー！。約束、守れそうにならねえ）」

「諦めるのか？」

「いや諦めたくないけどさ……誰、あんた？」

「……、だ。お前は、もう化け物と呼ばれるのは嫌か？」

「当たり前じゃん」

「なら、この術を、お前にかけてやるっ」

「なっ………が、あああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああっ！！！！！！」

××××××××××××××××

「今日からここが、この家が、お前の家になるんだ。平穩に暮らし  
てくれよ」

「ん………ここは………あんた、誰だ？」

「俺か？俺はお前の父親の友達だ」

「父さんの？」

「ああ」

「じゃあ父さんの所に案内してあげるよ。えっと………あれ？どっち  
だったけ？」

「おいおいド忘れかぁ？こっちだよ」

「ああ、そうだった」

「じゃあ、行くか」

「うんっ」

××××××××××××××

.....ナンダイマノハ？

ボクノキオクナノカ？

ワカラナイ。

タダヒトツワカルノハ.....ボクハ、トキカゼミナトイウソソザイ  
ハイナイ。

ボクノナハ.....

××××××××××××××

「.....ここは」

目が覚めると、初めに映ったのは、さえの顔だった。

「.....さえ？」

「ん。やっと起きたか」

「えっと……………ここは？」

「病院だ」

さえの後ろから声がした。師匠だ。

「……………師匠」

「よっ。元気だったか？」

「……………はい」

「どうした？まさかっ、さっき鼻の穴にいれた練りわさびがとうとう効果をはっき……………」

「いや何してるのあんた!？」

思わず突っ込む。さっきの夢が現実だった……………この人には、聞かなければいけないことがたくさんある。

「どうしたみなと？」

さえが怪訝な顔で僕の顔を覗き込む。

「ああ。何でもないさ」

「ん？お前そんな口調だったか？」

「え、えと……………」

何とかごまかさないと……………そうだった！

「あの後どうなったの？てか何で師匠が？」

「ああ。それは俺が説明してやるよ」

（ミカドside）

「……………この辺か？」

俺は今、暁のアジトに向かっている。何でも幹部のアジトらしい。まあ、俺なら問題ないだろうが。

ドドオン

今向かっているほうから、爆発音がした。

まさかすでに戦闘中！？

俺は、常人には見えない速度で、渓谷に向かった。

「これは……………」

ひどい光景だった。もはや渓谷のあとなんてかけらも残っていないかった。すべてが崩れ、破壊されていた。

「……………生き埋めになってる奴がいるんだよな」

俺は即座に印を組んで、術を発動させた。

「多重影分身の術」

ざっと千人による、救出作業が始まった。魔法で一気に岩とかを払いのけると、一緒に埋まってる奴も殺しかねないからな。

すると、ある一ヶ所に、洞窟だったような形跡のある場所を見つけた。

そこを俺が掘オリジナルっていくと、

「なっ……………」

さえを守るように覆い被さって、倒れているみなとがいた。

「みなとっ!!」

まずい。さえもひどい怪我があるが、こいつ、もう死にかけだった！

特に毒がやばい！今すぐ解毒を……

「……………っ！ちっ、向こうにも死にかけがいるのかよっ!？」

俺は影分身の送ってきた情報に悪態つく。だが今はみなとが一番やばい。

「求めるは健身・凝跳コントウ!」

止血と解毒を同時に行う。

「ふう……………はあっ」

一気に毒を抜く。

止血も終わった。次は輸血だ。

俺の血で大丈夫だろう。

次はさえだが……………こっちは大丈夫そうだな。

後は、ガキ二人か！間に合えよっ！！

くみなとsideく

「ま、それでお前らの連れも治しておいたからな」

「シヤナと悠二は？」

「別室にいる。シヤナって子はまだ目が覚めていない。爆発を身近で受けすぎたな。それに悠二って子を守るために、かなり無茶したっばいな。生きてるのは奇跡だよ」

「そっか……………そうだっ！戦争なんですけど……………」

「もう終わったよ」

「…………え？」

「お前が寝ていた期間を教えてやるよ。三ヶ月だ。その間に、三千王国と、カラスモリは、戦争で弱った所を、ローランドに襲われて、終わりだ」

「そんな……………」

「唯一の救いは、ローランドの王が、二国に被害をあまり出さず、早くに戦争を終わらせたことだな」

「…………くそっ」

僕は、また…………またっ！！

強くなりたい。もっと、強くっ！！

「師匠」

「わかってるよ。強くなりたいんだろ？さえも同じこと言ってきやがったよ」

「え？」

「当たり前だ。お前の教えが悪いせいで、私は何もできなかったんだ。なら責任をとれ」

「弟子とは思えないな、こいつ」

「師匠」

「んあ？何だ？」

「強くなりたいうっていうのもあるけど、それより話してもらいたいことがあるんです」

「っ！？……お前、思い出したのか？」

「……臆気には」

「……そうか」

「何の話だ？」

「すまんさえ。席をはずしてくれ」

「何故私が……」

「さえ」

「……ふん」

さえは不満そうな顔をしながら、病室を後にした。

「何であんなに不満そうなんだ？」

「まあ、ずっとお前のそばにいたからなあ。起きてすぐに追い出されたら、そりゃ不満だろ」

「え？あのさえが？」

意外すぎるぞそれ。

「無駄話はここまでだ。じゃあ、話すぞ」

「……はい」

## 第二十三話 少年の旅立ちと少女の決意

くみなとside

僕は静かに病室を出て、屋上に出た。

屋上の扉を開けた瞬間、夜風が僕を包んだ。

そして、手すりにもたれかかっているさえが目映った。

この前まで、自分は人間だと思っていた。平穏な日々を過ごしていることが当たり前だと思っていた。さえとの旅も、楽しいと思っていた。

そんなことを、自分は望んではいけないのね。

だって僕は……

「そんなところで何をしている？」

さえが話しかけてきた。言わないとな。これからの行動と、別れの言葉を。

「さえ」

「何だ？」

「お前は師匠のところで劉の特訓だったさ。やっぱりお前には一番劉があつてるだろうってことになったよ」

「そうか。お前は？」

「……………管理世界に行ってくるよ」

「なっ……………冗談だろ？」

「冗談じゃないよ」

「何故あんなところに？」

あんなところ、ね。確かにそうかもね。外の人間からしたら、あんまりイメーজないかもしれないけど、あそこの人達は、本当に良い人ばかりだ。だから人から嫌われても、人々を守るために、ずっと……………

ま、だから僕は捕まっただけだね。

管理世界。今僕達のいる大陸ではなく、東の果てにある大陸にある国。いや、もはや国と呼べるかは疑問だな。管理世界は、その大陸の全てを領土にしているのだ。今では、その大陸全てを、管理世界と呼ばれている、世界最強の軍事国家。

その大陸では、魔法以外の能力は一切使われていないが、魔法技術は、他に類を見ないほどに進んでいる、世界最強の国。

でもだからといって侵略をしているわけではなく、その大陸で行われている犯罪を、帝都にある世界最大刑事組織、管理局が取り締まっているだけ。軍が動くのは、バカな国が無謀にも管理世界に対して戦争をしかけたときだけ。

世界で一番平和だが、世界で一番犯罪の規模が大きい国だと言われている。

外の人からしたら、自国の力を鼓舞しているようにしか見えならしい。だから、外からの印象が悪い。

それに、外部の人間の前では、絶対に魔法について話さない。そして内部の人間が、外に出るとき、いくつもの嚴重なチェックをうけなければならぬ。だから、あの国の魔法は、外の人には、誰一人知らない。

僕を除いて。

あいつは元気にやってるかな？

まあ、さすがにまだ約束は果たされてないだろうけど……

ま、死なないように頑張るか。

「……何かお前変わったな」

「え？そう？」

「ああ」

「ん、ま、気にするなっ」

「ん、わかった」

えらく聞き分けがいいな。ま、いいか。

「じゃあ僕行くよ」

昔失ったものを、取り戻しに。

「じゃあな」

「おい」

「ん？何？」

「あの時の約束を覚えているか？」

「……ああ。追いかけてこのときのか？」

「そうだ。今言っぞ」

……できればすぐに行きたいんだけどなあ。ま、最後までいいつか。

「どっぞ」

「必ず強くなって、帰ってこい」

「……無理だよ。それは」

「何故だ？」

「……………」

僕は超高速で魔法陣を描き、唱えた。

「さよなら」

くさえsideく

「さよなら」

いきなりみなとが目の前から消えた。

「どこに行つた!？」

くそっ、どこだ!？」

「もう無理だ」

後ろから声をかけられた。私に気付かれず、私の後ろに立てるものは、一人しか知らない。

「ミカド、どういうことだ?」

「今のあいつは、お前程度じゃ止められない」

「何だと?」

「あいつはな、かつて……って呼ばれてたんだよ」

「なっ……」

「その記憶が戻ったあいつを止めるなんて、俺でも無理だ」

「では、どうしたら……」

「強くなれ」

「何？」

「これからお前を徹底的に鍛える。お前の身体能力に剋が組み合わさったら、俺でも勝てない」

「……だが、そのころにみなとは」

「迎えにいけばいい」

「ん？」

「強くなって、迎えにいけばいい。拒んだら、無理矢理連れて帰ってこればいい。違うか？」

「……わかった」

「よしっ。じゃあやるぞっ」

「どれくらいかかる？」

「最低でも一年半はかかる」

「……わかった」

「そうか。じゃあ明日か……」

「今からだ」

「へ？」

「今からやるぞ」

「いやでも……」

「や・る・ぞ」

「はあ、わかったよ」

「ん」

「とんでもない弟子を、二人ももっちまったなあ」

## 第二十四話 海なんてきらいだ

くみなとside)

「さて……どうするかな」

今僕の眼前には、大きな大きな海が広がっていた。

船に乗る金なんてない。

かといってこの大海原をレッツスイミング！なんてしたら確実に死ぬ。

なら手は一つしかない。

「密航するか」

「ラッキーだったぜ」

今僕は船のうえにいる。しかも普通の船ではなく、海賊船だ。

今日の前では海賊たちが気絶真つ最中。ま、あとは警察とかにまかせて、この船はいただくとするか。

僕は海賊たちを次々に海に放った。

「ぎゃあああああああああああああつ!!?」  
悲鳴なんて気のせい気のせい。大丈夫だろ。陸までそんなに離れてないしな。

さて、方角はわかるから、後は魔法で調整すればいいか。ったく、なんで今時エンジンがついてないんだよ!?

ま、いつか。寝てよ。

僕はぐっすり寝た。

「……………どこだ、ここ?」

参った。海で迷うとは。ま、食料はかなりあるから、大丈夫っ! ……  
……多分。

「……………えっと、方角は……………」

時刻と太陽の位置で方角がわかるのは便利だなあ。

「このまま真っ直ぐか。このまま無事につけばいいけど……………」

僕はとんでもないミスを犯した。どんなことかって?僕は海賊船に乗っている。当然帆には海賊マークが……………

「って、ぶっざっけんあああああああああああああああああ

あああつ！！」

只今僕は海軍に追われている。

大砲の雨が、このボロ船を沈めにかかる。

「死ぬっ！？死ぬっ！？」

必死に魔法で撃墜する。

終焉魔扇がなかったら死んでたぞちくしょうっ！

こっとなつたらあれだ！

僕は船尾に向かい、叫んだ。

「破道の五八・嵐！」  
てんらん

加減なしで嵐を放つ。

結果。船はものすごいスピードで進んだ。

「よっしゃあああああああああああああああああああつ  
！！」

そしてあまりのスピードにボロ船は大破した。

「なんでだあああああああああああああああああああ  
つ！？」

「今だ！確保しろっ！」

「くっ、こうなったら……泳ぐまでっ！」

幸いにも乗っているのは僕だけ。見つかるのには時間がかかるはずだ。

「急げ急げ〜」

「で、今度は何でこうなった？」

僕は周りの奴らを見てそう思った。

今度は海賊に囲まれている。はあ……めんどくさいなあ。

ま、次はこの船を奪うか。幸いにもさっきのバカどものと違ってエンジンはあるし、海賊マークもどこにもない。

さて、さっさと占拠しますか。

「ああん？てめえさっさと金を……」

「求めるは雷鳴>>>……」

「あん？」

「稲光」

ドゴオオンッ

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ  
あああああああっ!!」

「はっはっはっ!我こそ霸王なりいつ!!」

頭がおかしくなってきたかも。きっと疲れてるんだ。うんそうに違  
いない。そっだ、昼寝しよう。絶対。

「管理世界までお願い。僕部屋で寝てるから」

「はっ、はいアニキっ!!」

誰がアニキだっ!!

もう本当に疲れた。一番ふかふかのベッド寝よ。

僕はベッドにダイブし、眠りについた。

「はあ……………めんどくさいなあ」

僕はベッドで寝ながら呟く。ドアのすぐそばに五人くらいの奴がい

る。寝込みを襲うとは、けしからんっ！！

ん、にしても、僕って記憶戻る前と後でかなり性格違うよなあ。

あんときは真面目だった。今は怠惰だった。

めんどくせえ。昼寝してえ。

この二つが、昔の僕の口癖だ。

本当に人って変わるよなあ。

ま、さっさと片付けるか。

ドコバキグキグシャドドン！！

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ  
ああああああっ！！」

何があったかはご想像に任せる。

ま、これで二度と逆らわないだろう。

さあ、寝よ寝よ。

「最悪だ……」

目の前の光景を見て呟く。僕、海がきれいになってきたよ。

「おとなしく捕まれ！この略奪者！」

次々に僕の汚名が増えるのは気のせいだ。

「さて……どうするか」

もういつそ僕の本名名乗ってみるか？百分逃げるだろうけど……

ま、それしたら余計めんどくさいよなあ。

只今の状況。海賊がさっきの海軍の奴らに僕がこの船を略奪したと言ったらしい。こついつとこのために船を普通にしてるんだな。

ああ〜めんどくせえ。

「何とか言えっ！この略奪者」

見たところ海軍の人数は五十人くらい、海賊二十人くらいだ。この状況なら、海賊が僕が逃げようとした所を攻撃しても、不自然じゃないよなあ。

「はあ……」

「何ため息を吐いてるんだっ！」

「てか、こんな子供一人で略奪なんかできると思うっ？」

「た、確かに……」

今気付いたのか！？どれだけアホなんだよ……

もういいや。管理世界まで後少しだし……泳ぐか！

僕は海軍と海賊の包囲網を簡単に抜けて、海に飛び込んだ。

「レッツスイミング！」

バsshャーン

「ぜえ……ぜえ……」

や、やっとついた。今、僕は一般解放されているビーチにいた。

こついう所以外から上陸すると、侵入者として捕まえられる。

「は、ははは。ついた。ついたんだあ！やっとついたあつ！……」

「動くなあつ！……」

「レッツスイミングッ!!」

ものすごい勢いでビーチから離れていく。もちろん泳いで。

「見つけたぞお!!この略奪者があつ!!」

「なんでここに!?!」

やばいやばい。旋回した先には、先ほど僕を海から追い出した軍人  
つばい人。

「は、ははは………海なんてだいっつきらいだああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ!!!!!!」

## 第二十五話 感動？の再開

くみなとside)

「こ、今度こそ……ま、まいたはずだ」

肩で息をする僕。し、死ぬ。マジで死ぬ。

「さて、と。まずはあいつを探さないとな」

僕は帝都に向けて歩いた。

只今帝都、帝都。

「ま、まさか歩いて10日もかかるとは……」

やばい。寝ないとマジで死ぬ。でも早くあいつを見つけないと……  
そうだ！

三食ただでもらえて好きなだけ昼寝できる場所があるじゃないか！  
しかもそこに行けば、あいつから来るだろ。

そうとなれば、レッツトライツ！！

「????? side」

「ふう」

「お疲れ様、艦長」

「ああ、ありがとう」

僕は資料を見ながら、部下がついでくれたコーヒーを飲んだ。

「はあ……あの件も片付いてないのにここの事件が多いと……はあっ!?!?」

「わっ!?!?ど、どうしました!?!?」

「すまない!?!?ちょっと出かける!?!?」

「ええっ!?!?この忙しい時にどこに……行っちゃった。一体何を見てたのかな?」

さっきまで見ていた資料の一つには、こんなことが書かれていた。

『質量兵器を持った一人の少年が、艦長を出せと叫ん暴れていた。幸いにも被害者は0。現在少年は………』

くみなとsideく

「あー、まだかなー」

僕は牢屋のなかをうろつろしながら呟く。

現在、投獄された身である。もし下手をすれば、数年前のことがばれて、僕は殺されるだろう。

「にしても、剣はともかく、終焉魔扇までとらなくてもいいと思うんだけどなー」

投獄されてから早一週間、ささと別れてから、もう一ヶ月になるのか。

早いなー。あー、にしても暇だなー。前は看守のおっちゃんと話してたからなー。

「ん〜」

軽く伸びをする。今日はまだ十時間しか寝てないからゆっくり昼寝

……

「おい、面会だ。でろ」

最悪だ。どうしてあいつはいつも最悪のタイミングで来るんだ？嫌がらせか？

「ま、いつか」

「早く出る」

「はいはい」

「いよつ、クロネコ。元気にしてたか？」

「……お前な」

これが、七年ぶり再開した悪友との、最初の会話か。まいいや。

「いやあ、にしても、お前艦長なんだって？出世したねえ」

「……そうだな」

「僕はお前を息子のように愛でてるからねえ」。いや。よかったよかつ……」

ドゴオッ ドサッ

「！！？……………っ~~~~っ！！！」

殴られた。まあ、予想はしていたけどね。

「いいわけないだろ……………」

悪友が低く呟く。

「……………」

「いいわけないだろっ！！！」

「……………」  
「じめん」

「はあっ……………はあっ……………何があつた？あの後に、一体何があつた？  
そして、どうしてあんな馬鹿なことをしてまで僕に会いに来た？」

「あゝ。あれは賭けだったな〜」

「……………他に心当たりがなかったんでな。意味もなく質量兵器を持っていることを管理局に知らせるような真似して、僕を呼べなんて馬鹿なことをする奴に」

「褒めるなよ」

「今の言葉を褒め言葉として受け取れる君を、僕は尊敬するよ。それより、面会時間が終わる前に話せよ」

「わかってるよ。まずは……」

その後、僕に何があったのか、どこにいたのか、何をしていたのかを話した。

我が悪友、クロノ・ハラウン艦長殿は、静かに聞いていた。

こいつは本当に……本気でこの化け物である僕のことを心配していたのだ。

本当に……物好きな奴だ。

大体のことを話し終えた。ここからが本題だ。

「ちゃんと話ついてこれてるか？」

「……何とか」

やっぱりこの話は信じられないのだろう。僕だって半信半疑だが、この話が本当だろうと嘘だろうと、僕がこれからやることに関係ない。

「じゃ、話すぞ艦長」

「ああ。どうぞ犯罪者」

グサッ

「しっしっ」

また汚名が増えた！まあ今更か。

「ごほん。気を取り直して……お前に頼みたいことがあるんだ」

「ん？何だ？」

「僕のデバイス、“アイオン”を返して欲しいんだけど………できる？」

「………できないことはないな」

「マジで！？」

こいつそこまで出世したのか！？

いや〜ダメ元だったけど、持つべきものは友達だね〜〜〜っ！！

「ただし条件がある」

訂正。持つべきものは心がきれいで見返りを求めない友達だな。

「じゃあ僕はこの辺で。デバイスよろしくね」

「じゃあこの件はなかったことで、君はここにしばらくいることだな」

「クロノさん。条件とは？」

「相変わらず友達思いで助かるよ」

「……いつか殺す」

「何か言ったか？」

「イエナニモ」

「そうか。まあいい。頼みというのは……」

「……マジでそんなめんどいことを僕にやれと？」

「ああ」

「……くっ、いつもならエスケープするのにつ！」

「OKしてくれるのか、さすが親友」

「やかましいっ！」

「……このやり取りも何年ぶりだろうな」

「さあね。過去は振り返らない主義なんだ」

「へえ、君に昼寝以外の主義があったとはね」

「……………」

否定できない。なんか悲しいな。

「まあいい。詳しい書類は明日渡すからな。今日は仕事に戻るぞ」

「行ってらっしゃい。せいぜい馬車馬の如く働いてこい」

「安心しろ。君にも明日から大量に仕事があるからな」

「……………また昔みたいな監獄ライフもいいかもな」

「はあ……………相変わらずすぎだろ、君は」

「まあね」

「……………仕事量は僕の二倍でいいね」

「ごめんなさい。冗談です。はい」

「……………はあ」

ため息を吐くと、クロノは出ていった。

懐かしいなあ。身長とか、顔つきとかは変わっても、根は変わっていないな。少し安心したけど。

にしても……………

「はあ……………こりゃめんどくさいことになるぞ」

まあいいか。これであいつが返ってくるんだし。そう考えたらマシ、  
か。

後はあれに注意すれば問題ないだろ。

ああ。考えたら眠くなってきた。寝よ。

おやすみ。

まあ、明日から大変だな、こりゃ。

## 第二十六話 パートナー

くみなとside)

「……フェイト・T・ハラウン執務官補佐アレン・ウオーカー……何これ？」

「これからの君の役職さ。よかったな。晴れて犯罪者からエリート街道まっしぐらだ」

「はあ……疲れたから、今日はもう寝るわ」

「今から出所だぞ？」

「……さすが艦長、って所か？」

「どれだけ根回しがいいんだこいつは……」

「ま、いつか。早くアイオン取り戻して、事件解決してあいつを追おう。」

「じゃあ、これからパートナーになる、僕の妹の、フェイト・T・ハラウンにあつてきてくれ」

「……この美人さんがお前の妹？」

「資料にある写真を見る。に、似てねえ。」

「てか、お前妹なんていたの？」

「まあ……ちよつとな」

訳あり、か。

まあいいや。

「それよりこんな身なりで……ええと、ファイト・Gハライオンさんとやらに会わないといけないの？」

「フェイト・T・ハラオウンだ」

「長い」

「フルネームは、フェイト・テストロッサ・ハラオウンだ」

「無理、覚えらんない」

「素直に興味がないと言えればいいだろう」

「いや、悪いかなって」

「はあ……」

何だそのため息は？まあどうでもいいか。

「で、身なりはこれでいいの？」

自分で言うのも何だけど、まあそうとうひどいな。

「服は用意してある。後はシャワーを浴びるなりなんなりしろ」

「うい」

「自分の履歴書（偽装）もちゃんと見ておけよ」

「うい」

「ふむ……まあ不安要素はたくさんあるが、まあそこは仕方ないな」

失礼な奴め。寸分違わず事実だが。

「じゃ、行きますか」

「デバイスはフェイトに預けてあるから」

「わかった」

「……ちゃんとやれよ？」

「もちろん！」

絶対仕事さぼる！昼寝する！

「……果てしなく不安になってきた」

「大丈夫大丈夫」

「……へマだけはするなよ」

「僕がそんなことをするとも？」

「ああ

即答！

「ま、期待してるよ、—————さん？」

「おいおい、その名前で呼ぶなよ」

「ああ、わかってる。じゃあな、アレン」

「はいはい」

さて、僕も行くか。

アレン・ウォーカー執務官補佐。

これが僕の新しい名と役職だ。本名だと、いろいろ本当にまずいかならなあ。

まあそんなこんなで、時風みなと改めアレン・ウォーカー、行きま  
す！

「どこだ……どこ？」

見事に迷った。何だこの入り組んだ迷路のような廊下は！ふざけんな！

いやそもそもここどこにフェイトさんがいるのかわからないからなあ。クロノの奴、よっぽどあわててたのか？それだけ仕事忙しいのか……

ま、しゃあない。やる気だして手伝ってやろう。

まあその前に、フェイトさんがどこにいるか聞かないとな。

ええと……あ、あの人に聞こう。

「すみません」

「あ、はい。何ですか？」

「え、えっと、……」

名前忘れた。確か……

「フェイトって人が、どこにいるか分かりますか？」

「ああはい。それでしたら……」

ここから真逆の方向だった。

「ありがとうございます」

「いえいえ、それでは」

さて、行くか！

いざとなると緊張するなあ。

今、フェイトさんの部屋の前のドアにいる。こういうときって、かっこよくドアを蹴破って登場！ってあったけど、それは大抵がマンガとかの話であって、ここでそんなことをしたら僕はまた監獄送りになるだろう。何せ相手のランクはオーバーS、対して今の僕はAA+。くそつ。せめてSにして欲しかった。リミッター強すぎだろ、クロノ！

まあ、そうしないと僕は捕まるんだろうけど……

まあいいや。取り敢えずノックするか。

リミッターのブレスレットに、感謝と憎悪の混じった目で睨み付けてから、ノックした。

コンッ コンッ

「はい。ちょっと待ってください」

さて、あのクロノの妹のことだ。きつと腹黒いに違いない。

そうだ！美人は怖いんだ！さえなんかもう本当に……

僕としたことが……二度と会うことのない奴のことを考えるとはな。

ガチャッ

「はい。どちらさまでですか？」

綺麗な金髪、整った容姿の女性が出てきた。いや写真で見たけどクロノの妹って嘘だろっ!？

まあ、そんなことはどうでもいいか。そう、今一番問題なのは……

“アイオン”を手に入れることだ。ま、その前に自己紹介が先だな。

「ハラオウン執務官のもとで補佐させていただく、アレン・ウォーカーと言います」

「ああ、あなたが。兄からいろいろ聞いていますよ」

嫌な予感。まさか本当のことは話してないだらうけど……

「どんなこと言っていましたか？」

「仕事をさぼっていつもその尻拭いは自分がやってたとか、昼寝のためなら、仕事が首になってもかまわないとか、無駄に頭がよく戦闘能力が高かったからお情けで執務官補佐にまで上り詰めたとか、あといろいろです」

「……………素晴らしい誉め言葉ですね」

爽やかスマイルでフェイトさんに言う。

後で絶対殺す。クロノ、いくらリミッターがあっても僕のほうが強いんだぞ？

「今この辺が誉め言葉か気になるんですが……………」

「全てです」

「ますます分かりませんよ？」

「何せ寸分違わず僕のことを言い当ててるんですから」

「……………」

あ、ちょっと引かれた。まいいや。それより……………

「僕のデバイスはどこですか？」

「ああそれなんだけどね、クロノが、『アレンがやる気を見せたら返してやってくれ』って言われてるんですよ」

「……………」

……………絶対殺す。

「その様子だと全然やる気ないみたいですね」

ギクッ

「ま、まさかあ。そんなわけないじゃないですかあ。僕はやる気満々デスヨ？」

「最後片言になってるのは気になるけど……………よろしくお願いします、ウォーカー執務官補佐」

「アレンでいいですよ。それと敬語は止めてください。あなたのほうが年齢も立場も上なんですから」

ウォーカーよりアレンのほうが呼びやすいだろう。

「なら私もフェイトでいいよ、アレン」

「分かりました。よろしくお願いします、フェイトさん」

さて、では早速昼寝……………

「じゃあ仕事しよっか」

「……………何て言いました？」

「仕事しよっか」

「……………最悪だ」

兄がワーカーホリックなら妹もか。

ああ、記憶が戻る前ならやる気満々だったろうに。

ま、デバイス取り返すためにもやるか。

「俺はやるぜっ！！」

「……………」

ドン引きされた。だが気にしない！

さっさとやって、昼寝する！

「お、終わった……………」

開始から早五時間。昼寝は一切出来なかった。

くそう。一体何時デバイスは戻ってくるんだ!?

「お疲れさま」

そう言ってフエイトさんがコーヒーをついでくれた。

「あ、ありがとうございます」

一口すする。

「……………ごまい」

思わず呟く。

「ありがとう」

お世辞じゃないんだけどなあ。まいいや。

「はい、ごまい」

「?何ですか、これ?」

いきなりプレゼント箱みたいなものを渡された。

「開けてみて」

「はあ」

スルスルとリボンを解き、箱を開ける。

「…………え」

そんな声が出てしまった。そこには、七年ぶりの相棒がいた。

「…………アイ？」

『何ですか？マスター』

「…………久しぶりくらい言おうぜ相棒」

『それはマスターもでは？』

「違うない」

びっくりしたな。プレゼントの中に、まさかデバイスが入っていたとは…………

「フェイトさん、どういことですか？」

「えっと、実は…………クロノに言われたこと。あれ、嘘なの」

「は？」

「実際は、『初日からさぼるようならデバイスを渡す必要はない』、なのよ」

「つまり、やる気がでるまでってのは…………」

「そ。私がやる気出させるためについたウソ」

ウィンクしながら言うフェイトさん。

やばい、かわいいけど滅茶苦茶ムカつく。やっぱり兄が兄なら妹も妹だな。

「……はあ。僕、ちょっと散歩してきます」

「うん、行ってらっしゃい」

手を振って見送るフェイトさん。

さて、と。

「アイ、デバイス研究室はどこ？」

くフェイトsideく

「変わった子だったよ、クロノ」

『やっぱり何かやらかしたか？』

「ううん。仕事事態は真面目にやってたよ」

『それが一番驚きだよ』

「そつなの?」

『昔一回死にかけたことがあった時、あいつ何て言ったと思っつ?』

「さあ?」

『死ぬならベッドの中で……だぞ?信じられないよ』

「あ、あはは……」

思わず苦笑する。今、クロノにアレンの働きぶりを報告している。

クロノがここまで気にするなんて珍しいことだ。

『大体初めて会ったときから……』

でも何だろっ?何か違和感を感じるような……

『?フエイト?』

「あ、ご、ごめん。何でもないよ、何でも」

『そつか……ならいいんだが』

「はは、本当にごめんね」

『気にするな。家族だろ?』

「……うん、そうだね」

クロノの言葉が、とても嬉しかった。

私を受け入れてくれた母さんとクロノ。“家族”は私にとって特別な言葉だ。

だから、家族と言われると、今でもとても嬉しい。

『おっと、もう時間か。すまないな、忙しいなか報告してもらって』

「ううん、気にしないで。じゃあ頑張ってるね、お兄ちゃん」

『ぐっ……だからお兄ちゃんは……』

「あはは。じゃ、またね」

『ああ』

通信が切れた。今日は仕事もないし、訓練でもしようかな？

私は執務室を後にした。

くアレンスィードく

「いや〜はっはっはっはっ」

乾いた笑い声をあげる僕。てか……

「まずは技術調べたほうがいいかも……知らない部品がかなりあるしなあ……あ〜めんどい。アイ、資料室はどこ？」

『今度は資料室ですか？』

「まあ、僕がない間に何があったか気になるしなあ」

『分かりました』

「ん〜、この資料は別に……あ、この技術は使えるなあ……後、これとこれを……アイ、今の資料全部記録して」

『分かりました』

「まあ、大雑把にはわかったな。後は……」

ドサッ

『マスター！？』

アイが叫んだ。僕が資料の山に倒れたのだ。

そして、

「ぐー……」

熟睡した。

『マスター……』

呆れるしかないアイオンであった。

＼フエイトside＼

訓練の後、シャワーを浴びた帰り、少し調べたいことがあったので、資料室に寄ったのだが……

「……何してんの？」

資料に埋もれるように寝ているアレンを見て、思わず呟く。

「くかー」

完全に熟睡。よくあの態勢で寝れるわね。

アレンは今、右肘に体重をかけ、資料の山に腹をのせ、両足は浮いている状態だった。こんな風に寝ている人は初めて見た。

「……起こしたほうがいい、よね？」

『多分そのほうがいいと思います、マスター』

バルディッシュも同意してくれた。

「おーい、アレン」

私が呼び掛けても、一切反応無し。揺すって起こすか。

「おーい、アレ……っ!？」

私がアレンに触れる瞬間、アレンはいきなり翻って私の腕を掴み、関節を決めてきた。

速い。いくらなんでも、今の動きは速すぎる。不意をつかれたとはいえ、私があっさり関節を決められるなんて……

「……んあ？フェイトさん？」

しかも寝ぼけていた。信じられない。いくらクロノが推薦した人材とはいえ、ここまでの動きをするなんて……

「あつ!? す、すいませんっ!」

ようやく気付いて、解放してくれるアレソ。

彼は一体何者なの?

「アレソ side」

や、やばい! 体が勝手に動いてしまった!

昔はよく暗殺者に寝込みを襲われたからな。いや、そんなことはどうでもいい。

問題は、今の動きをフェイトさんに不審に思うことだ。そうならかなりまずい。

こ、ことうなったら……

「じ、じゃあ僕はこの辺で……おやすみなさい」

フェイトさんの横を通り過ぎる。このまま研究室に……

「ちょっと待って」

行けるわけなかった。

無視するわけにもいかない。そうしたら明日また面倒なことになる。

絶対にとぼけきってみせる！

「何ですか？」

一点の曇りもない笑顔。完璧だ。

「私と組み手しない？」

ピキツ ガラガラガシャーン

ああ、僕の逃げるための三十六の策が音をたてて崩れていく。

てか組み手！？絶対やだ！めんどくさい！

え〜と、え〜と……そうだっ！

「フェ、フェイトさん、もうシャワー浴びましたよね？汗流すのも悪いしまった今度……」

「大丈夫だよ」

「……女性相手に手をあげるなんてこと僕には……」

「気にしないでいいよ」

「……三十六計逃げるに如かず……」

僕はダツシュで逃げた。かつて神速のサボリ魔と呼ばれた僕を捕えることなど……

「ぐえっ」

「逃がさないよ」

襟を掴まれて変な声をあげた。てか死にかけた。

いやそれより馬鹿な!?!この僕をいともあっさり……

「じゃ、行こうか」

「うう……はい」

『情けないですね、マスター』

「やかましいっ!」

「準備はいい?」

「はあ……いつでもどうぞ」

フェイトさんの言葉になげやりに答える。

さっさと負けて、さっさと研究室に行こう。武器をさくつと開発しないやばいんだよなあ……

「はあっ」

フェイトが向かってくる。そして、フェイトの正拳突きを……

「がはっ」

顔面に受けて倒れた。

くフェイトsideく

「がはっ」

あっさり拳がアレンに決まった。

「え？」

思わず驚きの声をあげる。あっさり決まったことに驚いたんじゃない。拳がぶつかる瞬間、一瞬後ろにとんで、衝撃を減らし、しかもぶつけるポイントを少しずらしてダメージを最小限にしていることに驚いた。

今のは本気じゃないけど、今の動きも常人離れしている。それにあんな動きができるんなら、よけることなんて簡単なのに……

「アレン、わざと負けようとしたでしょ？」

くアレンsideく

「アレン、わざと負けようとしたでしょ？」

ギクッ

何ではれた！？まさかさっきの動きがわかったのか！？

この人、魔法だけじゃないのか……

しかしまずいな……このままじゃ本気で相手しないといけない……  
女の相手に本気はなあ……

「そんなことないですよ？フェイトさんの拳が速すぎてよけれなかったんですよ」

どうだ？

「嘘はいいよ」

はいばれた。もういいや。適当に本気でやろう。それで終わりにする！

どンドン泥沼にはまっていくようだ……

「はあ……もう一度やりましょう。次は本気でやりますから」

「……わかった」

しびしび了承するフェイトさん。さて、やるか。

僕は左手を前、右手を腰にしたファイティングポーズをとる。

今即興でやった適当な構えだ。

フェイトさんも構える。

適度にやって、わざと負けたら、多分ばれない。

「はあっ」

また右正拳突きを放ってくる。僕はそれを、右に半步移動してよける。

そのまま流れるように右手を取り、投げようとする。背負い投げだ。それをフェイトさんは、左手で僕の肩をもち、それを支えに一回転して僕の前に右足で着地し、左足で直蹴りを顎に放ってくる。

顔を上に向けてそれをよける。フェイトさんは直蹴りであげた足で、そのまま踵落としを放ってくる。僕は足の側面をもち、そのまま円の動きでそれを受け流し、フェイトさんの左わき腹に右手で掌底を打ち込む。

「くっ」

決まってしまった。もちろん、あの程度の掌底は、決定打にはならない。

「やるね」

フェイトさんが笑顔でそう言う。俗に言うバトルマニアか？

いやいや、さすがにそれはないか。

「も、もういいでしょ？僕は疲れたんでこの辺で……」

「汗一つかいてないのに何言ってるのかな？」

くっ！やっぱり悪魔だ！美人はみんな悪魔だ！

「……………逃げるっ！！」

「逃がさない」

また襟を掴まれた。今度は掴まれた瞬間に止まったから、痛みはない。てかその止め方やめて欲しい。

「君はどうしてそんなにやる気がないの？」

「逆に聞きますけど、何でそんなにやる気があるんですか？」

「うーん……………何だろう？」

「こらこら、人を付き合わせてそれはひどいですよ？」

「じめんじめん。冗談よ」

「はあ」

僕って人に弄ばれる運命なのか？

「てか、今からやることあるんで、本当に失礼させてもらいますよ」

実際にあるからな。デバイスの開発という……

やっぱり最低でも三つはないとねえ……種類は多いほうがいいし。アイだけじゃ心許ないしな。いっぱい作るか。

『（マスターにとって、私はその程度の存在なのですか……）』

「（うん）」

『（それはひどすぎませんか!?!）』

「（冗談だよ。でもお前も知ってるだろ？僕は種類が多いほうがいいって）」

『（まあ確かにそうですけど……）』

「（大丈夫だよ。お前たちをぞんざいに扱ったりしないからさ）」  
『（……はい）』

「じゃあフェイトさん、僕はこれで」

「もし寝てたりしたら、ぶつよ?。」

「……肝に銘じておきます」

「うん。じゃあ、また明日」

そう言ってフェイトさんは訓練場を後にした。

「なあアイ」

『何ですかマスター』

「何か僕達、ものすごいめんどうごとに巻き込まれるような気がするんだけど……」

『奇遇ですね。私もそう思います』

「……………はあ」

ため息を吐きながら、訓練場を後にした。

## 第二十七話 デバイス開発

「アレンside」

「……………あいつ本当に殺してやるのか？」

目の前の自分の偽装履歴書を見て呟く。

今、自室でクロノからもらった履歴書の存在を思い出し、それを見ていたのだが……………

「……………これをフェイトさんも見てるんだよな。最悪だ」

履歴書の内容。

アラートが鳴っても昼寝を続け、降格を何度もし、實力だけはあるのですぐにまた昇格するということを繰り返し、やる気がなさすぎることを上司に指摘されたら、『昼寝は大義だ！』とお偉い方の前で宣言。その反省文及び始末書の山を放り、昼寝をし、一度最初からやり直せと言われ、一番下まで降格。その後わずか半年で執務補佐まで昇格し、今に至る。

「……………どんな奴だよ」

まあ態度はだいたい当たってるけど……………

しかしこんなものを真面目なフェイトさんが見たら、確実に何か言われる。絶対にめんどろつことになる。

それだけはいやだっ！

「急いで逃げないと」

僕は自室を後にして、研究室に向かった。

あそこにいたらばれないだろ。

くフェイトsideく

「あいつどこに行ったのよ……」

今、目を血眼にしてアレンを探している。

あの経歴はひどすぎる。一度ちゃんと言っておかないといけないわ。

「絶対見つける」

くアレンsideく

ぶるっ

寒気がした。ま、まあ気のせいだろ。

『どうかしましたか？マスター』

「いや、何でも……」

研究室で、パソコンの画面を睨みながらアイに答える。

僕の指は今、信じられないスピードでっ！……動いていなかった。

今はどういう形にするか悩んでいる。

「……剣でいつか。あとは拳銃を二丁……ガンソードもいいかも。いや、やっぱりナックル……なあアイ。どんなのがいいかな？」

『そうですね。マスターの多様性から言うと、やはりガンソードでは？』

「だよなあ。じゃあそれを二つ。あとは大剣と、ライフルかな？」

『それと、念のためにトンファーとかはどうでしょう？』

「あ、いいね！仕込みトンファーとかにしようー！」

『後はローラーブレードと……』

「って作るの多すぎじゃないか？」

『なら初めに作ったデバイスを、インテリジェントデバイスにして、

手伝わせればよいのでは？」

「はあ、果てしなく時間がかかるだろうな……ま、初めにガンソードからいくか」

『私も手伝いましょう』

「当たり前だ」

さて、やるか！

僕の指は今度こそ、超高速で動いた。

完成までは大体毎日徹夜で十日くらいか？し、死ぬ……

作業開始から十時間。ま、マジで死ぬ。

やっと初めのガンソードの半分くらいができた。

微調整と実戦テストもあるから、完成まで後十五時間くらいか？

「はあ……疲れた。アイ、少し寝るから、二時間後に起こして」

『わかりました』

「フェイトさんに見つかりませんように……」

僕は研究室の床に寝転がって寝た。

くフェイトsideく

「ああく、何でアレンは見つからないのよ!」

せめてもの救いは、今日が休みで仕事がないことね。

もし仕事があったら、楽しい楽しいお仕置きをしたけどね。

「本当にどこにいるのよ……そうだ!」

くアレンsideく

「ぶつぶつぶつ。やっと……やっと……やっと完成したあ!」

あれからいろいろ裏技しまくって時間短縮しまくったからなあ……

早速実戦テストだ！

訓練場訓練場

「ん、ランクは……少し高めで行くか」

徹夜で眠いけど仕方ない。

「ランクAで」

ガジェットが出てきた。数は……十五？少ないな……

「数は二十くらいにしてください」

五機追加される。

やるか。

「初めの五機くらいはアイオンでやるか。行けるか？」

『はい。行きますよ』

「おう」

『Stand Ready・Get set』

久しぶりだなあ。

僕のバリアジャケットは、少し見た目が異様だ。

黒しかないのだ。マント、手袋、服、そして、武器である鉄扇ことアイオンも。

こんな格好だから、昔は死神と呼ばれたこともあったな。

「いくぞ」

『はい』

ガジェットの一機に突っ込む。

「はあっ」

一閃。ガジェットを真つ二つにする。

続いて突っ込んできたガジェットをよけ、それに乗る。

そして突き刺す。

後、十八。

後ろに回り込んだ五機が、レーザーを放ってくる。

「プロテクションEX」

バリアでそれを防ぐ。

その瞬間、五機が左から、三機が後ろから突っ込んできた。

「やば……」

これをよけたら、残りの五機からレーザーを受けることになる……  
なら。

「アイオン、久しぶりにやるぞ」

『そこまでする必要がありますか?』

「まあまあ。テストするのは忘れないからさ」

『……わかりました』

「サンキュー。じゃ、やるぞ」

目を閉じ集中する。

「疾風迅雷」

瞬間、僕の体が雷に包まれる。

「行くぞ」

そう言つて突つ込んできたガジェットを、全て超高速移動でよけ、よけながら鉄扇で全て切り裂く。

八機撃墜。残り十機。

「じゃ、新作の出番だな」

懐からガンソードを出す。

『疾風迅雷をする必要は、やはりなかったよな……』

「いやいや、かなり危なかったって」

『本当は久々にやりたかったただけじゃ……』

バアン

ガンソードから放たれた魔法弾の音で、アイオンの言葉を遮る。

「何か言った？」

『……もういいです』

アイオンのその言葉に、満足したところで、残り十機、片付けますか。

十機全てがレーザーを放ってくる。

僕はそれを全てよけると、魔法弾を三発撃つ。

全て命中。魔法弾はガジェットを買いた。

「あ、そうだ。あれでもやってみよう」

僕はバリアをはりながら、ガンソードに魔力を集中する。

レーザーをバリアで全て防ぎながら思う。

ああ、何て弱いんだろう……

そして魔力を注入し終えて、ガンソードをガジェットに向けた。

「ディバインバスター」

ドオンッ

光の閃光に飲み込まれるガジェットを、静かに見つめる。

そして、一機だけ、わざと当てずにいた最後のガジェットに、ガンソードを投げた。

ガンソードは、ガジェットを貫いた。

僕はそれを素早く抜いて、ガジェットから離れた。

爆発するガジェットには、見向きもしなかった。

『終わりましたね、マスター』

「そうだな」

『……………どうでしたか？』

「ん〜、やっぱり歯こたえないかなあ」

『テストの方はどうですか？』

「ああ、それなら問題……………」

パチッ　プシユ〜

「……………」

『……………』

『「さ、最悪……………」』

ガンソードはぶっ壊れた。

さ、最悪すぎる。絶対ディバインバスターが原因だ。くそっ。テスト段階で使うんじゃないかった！

「はあ〜……………研究室にまたこもるかあ」

パチパチパチ

「!？」

誰だ!？

「すぐくよかったよ」

「フェイトさん!？」

ま、まずい。昨日から逃げてたんだっただけ……

経歴について何か言われる前に……

「じゃあ僕はこの辺で……」

ガシッ

肩を掴まれる。かなり痛い。

「な、何ですか？」

「アレン、私から逃げてたでしょ？」

「な、なんのことですか？」

「とぼけても無駄だよ。君の経歴」

やっぱりか！クロノめ！これが七年ぶりに悪友に対する仕打ちか!？

……………悪友だからか。納得。

てか、

「何でこの場所に？」

「昨日クロノに聞いたなら、明日あたりに訓練場にいるはずだって……」

…

「……………」

クロノ……貴様の寿命は確実に減ってると思えよ。

「……………説教ですか？やっぱ」

「うん」

満面の笑みで頷きやがった。

「でもそれよりさ」

「？」

「私と戦わない？」

ビュンッ ガシッ

エスケープに失敗。

何でこの人こんなに速いの！？

「やるじゃん…」

「ええとですね、これからやることがあつて……………」

「何？」

「このガンソード壊れちゃったんで修理に……」

「後でもいいよね？」

「……………」

この戦闘狂！バトルマニア！

だけど諦めないぞっ！！

「今すぐ直したいんです！」

「そっか……………」

あれ？何かしゅんとしてる。なんか罪悪感が……

「あ、でも、直ったら相手しますから」

って何口走つとるんじゃ僕はああああああああああああああああ……

「本当！？？」

目が爛々としてらっしゃる。うっ……腹括るしかないのか……

「本当です」

「わかった。じゃあ仕方ないね」

「すみません」

表情は笑顔だが心は泣いてる僕。

だってそうだろ？勝ち目なんて、今の僕にはないんだから……

ま、あくまで建前だけだね、それは。

「じゃあ、僕はこれで」

「うん、またね」

「くっそ〜」。全く進まない」

ガンソードを只今インテリジェントデバイスに改造中。あれからずつとやってるのに、まだ半分くらいしか進んでない。修理はなんとか終わったけど……

修繕も必要だし、他のもあるからな〜。

事件とやらが起きるまでに完成させないと……

「……仕事はさぼるか」

フェイトさんに聞かれたら絶対にぶん殴られたらろう。

三日後。

「し、死ぬ……」

三日休みなしでずっとデバイスを作っていた。

何とかガンソード二つは完成した。ちゃんと綿密に計算しつくして完成された逸品だ！

テストをしなくても大丈夫な自信がある。微調整も完璧だ。

「よ、よし。次に行くぞアイオン……」

『大丈夫ですか？マスター』

「あ、ああ。そっいえばお前たちにも名前を付けないとな……」

僕は今作ったガンソードである二つのインテリジェントデバイスを見る。

「うん。じゃあお前は『レルフレント』。レルって呼ぶから」

『はいマスター』

「んでお前が『フェルクエンス』。フェルって呼ぶよ」

『サーイエツサー』

「……………」

『冗談です』

個性的だな。レルは女、フェルは男に設定している。ちなみにアイオンは女。

「じゃあ次の作業行くぞ！」

『『『サーイエツサー』』』

「……………」

ここまで個性的になるか？普通。

まいいや。やるぞー！

くフェイトsideく



『どうかしましたかマスター？』

「い、いや。何でもない」

『前にも似たようなことがありましたね』

「あ、ああ。そうだな」

何だ、この不安は……ま、まあいいか。続き続き……

くフェイトsideく

「眠い……だるい……」

アレンがぼやきながらパソコンに向かってデータを打ち込んでいた。

まだ私には気付いていないらしい。

「なあアイ。このトンファー、完成にどれくらいかかる？」

『およそ二十時間です』

「うえ。レル、フェル、お前たちに異常はあったか？」

『問題ないです』

『ノープロブレムです』

「よかった。これ以上時間はとられたくないからな……じゃあこっち手伝つてくれ。このトンファー、仕込みトンファーにするからさ。データにミスがあったらかなりまずいんだよ」

『わかりましたマスター』

『イエス、ユアハインス』

「……突っ込まないからな」

「じゃあ私が突っ込もうか？」

「ああ、それはありがた……」

冷や汗をすごく流しているアレン。さあて、どうしてくれようか……

あ、それより先に聞かないと。

「そのデバイス、アレンが作ったの？」

「えっ！？いやまさか。そんなわけないじゃないですか」

『何故嘘をつくのですか？』

『嘘はよくないですよ』

『自分もそう思います、マスター』

「だあああああああああああああつ!?!この馬鹿共がああああああああああああつ!?!」

へえ……………

「何で嘘ついたの?」

「え、えつとお……………」

アレンが困ったように視線を右往左往させる。なんか少しかわいいかも。

「アレンく?」

「ひいつ」

そんなに怖い顔してたかな?少しシヨック。

そんなことを思っていたら、アラートが鳴り響いた。

「あつ、じ、事件ですよ!出勤しないと!」

あからさまにほっとしてるな。まあいいか。それより今は早く出勤しないと。

「行くよアレン」

「眠いなあ……………寝よっか」

「ア・レ・ン？」

「さあすぐ行きましょう！」

「うん」

やっとやる気になったなあ。次から脅そうか。

そんなことを思いながら、研究室を後にした。

～アレンside～

只今自室にて準備中。

「こ、恐かった……」

『大丈夫ですか？マスター』

「お前たちのせいだけどなコンチクショウが心配してくれてありがとう」

『欠片も感謝していませんね』

「うん」

『即答ですか……』

「当たり前だろ？」

『……まあいいです。（久しぶりの任務ですよ。やる気出してください）』

「（わかってるよ。懐かしいなあ。あの頃はクロノが指示飛ばしてたっけなあ）」

『（そうですねえ）』

じじいみたいなことを考えている。いかんいかん。まだ僕は若いんだから。

「じゃあ行きますか」

『はい』

そうアイに言って、部屋を出た。

ここに来てから五日……まだ一度も自室で寝てない。この仕事が終わったらゆっくり寝よう。



## 第二十八話 初任務

（アレンside）

「アイ、事件の内容と状況は？」

『ロスト・ロギアが盗まれました』

「……何で初任務がそんなにハードなんだよ」

『私に言わないでください。運搬中のものが盗まれたらしいです。』

現在、人質を取りながら西方十キロの地点を、二手に別れて移動中』

「何で移動してる？」

『片方は車、片方はバスです。車のほうにロスト・ロギアがあります』

「人質は全員バスか？」

『いえ、車のほうにも一人います』

「……余計めんどろだなあ」

廊下を走りながら、アイの報告を聞いた一言がめんどろだなあは、いくらなんでもないかな？

まあぜんっぜんそんなことは気にしないけどね。

「取り敢えずフェイトさんと合流するか」

「現場と状況は？」

「現在、バスのガソリンがきれ、ガソリンと人質の交換を要望してきています。ロスト・ロギアを乗せた車は、現在も西に進行中です」

「大陸を渡らせるわけにはいかないわ。ロスト・ロギアを他国に渡つたら……」

フェイトさんは今、指揮官の人と話しあっていた。

迅速に解決しないと、戦争の鍵になるかもしれないロスト・ロギアが他国に渡る。かと言って、焦って行動して失敗したら、人質を殺される。最悪だな。

バスに乗っているのは、犯人八人、人質十五人。車に乗っているのは、犯人三人、人質一人。車に乗ってる人質は、まだ七歳の子供だった。

なるべく早く助けないと。やっぱりめんどうなことになるなあ……

取り敢えず、今思い付く最善の策は……

「アイ」

『わかってます。それが一番いい手でしょう』

「だな」

僕はフェイトさんのもとに行った。

「フェイトさん」

「何？」

「提案があるんですが……」

「……本気？」

「はい」

「あなたの負担が大きいわよ？」

「大丈夫大丈夫。さっさと終わらせて、昼寝したいし」

「……はあ」

呆れられた。でも本心だからなあ。

「まいつか。で、どうですか？」

「そうね……まあ、他にいい策もないしね。それが最善の策ね」

「決まり〜。じゃあ行きますか」

「合図はアレンでいいわね？」

「うい〜。了解」

「……………」

果てしなく不安という顔をされる。でもこの策で事件解決する自信はある。

絶対に誰も死なせない。

「じゃあ、行くわ」

「はい。おきおつけてください」

「アイ、一番いい場所をリサーチ」

『もっちゃってます』

「さすが相棒。じゃあ行くぜ」

飛行魔法で作戦ポイントまで向かった。

くフェイトside

「彼、恐ろしいわね。バルディッシュ」

『そうですね、マスター』

飛行魔法で作戦ポイントに移動しながらバルディッシュとアレンについて話す。

信じられない情報処理能力と戦闘能力。並外れた頭の回転の早さ。デバイスを開発できるくらい知識の幅も広い。

はっきり言っており得ないくらい完璧な人間だと思った。あのやる気のなさを除いて。

そういえばクロノが言ってたな。

『やる気と実力が反比例している男だ』って。

まさにその通りだ。

今回だって、やる気なさに現場の報告を聞いていたと思ったら、すぐに打開策を提案してくるし……

この事件が解決したら、彼のことを少し調べようかしら？

「ずっと、着いたわね」

作戦ポイントに着いた。

他の人ももうスタンバイできている。あとはアレンの合図を待つだけだ。

「……アレンはちゃんとやってるかな？」

「アレン side」

「ぐうぐう」

「（マスター！任務中ですよ！寝ないでください！）」

「んあ？あゝ寝てたのか」

「（よく寝ながら飛べますね。いやそれより念話で話してください！もう作戦ポイントまで近いんですから！）」

「（りよゝかゝい）」

「（アイオンも大変ですね）」

「（あなたもそうなりますよ、レルフレント）」

「（自分はありませんよ）」

『(はい。あなたはどちらかというところ、世話をやかれる方になるでしょうからね、フェルクエンス)』

『(それは聞き捨てなりません、アイオン！自分がマスターなどと同じなんて……)』

「(どうでもいいけど、君たち主である僕を馬鹿にしすぎじゃないか?)」

『『『(事実ですから)』』』

「(ハモったうえに即答かいつ!!)」

そんなことをしている内に作戦ポイントについていた。

「あゝめんど……さて、そろそろかな」

僕の作戦ポイントである隠れている場所の近くに車が止まる。予想通り、ガソリンがなくなったか。

「フェイトさん」

無線機に向かって言う。

『準備できた?』

「完璧です。十秒後に作戦開始。十……九……」

カウントを始める僕。

この作戦は、第一段階をクリアしないと意味がない。そして、第一段階のクリアは、フェイトさんにかかっている。

頼みますよフェイトさん……

くフェイトsideく

『六……五……四……』

アレンのカウントダウンが無線機から聞こえる。

後三秒。

『三……二……一……』

前屈みになり、今ガソリンをいれているバスをにらむ。

『零』

突撃！

ビルのつえから飛び降りる。

この作戦の第一段階に参加するメンバーは、私とシグナムだ。

バスの屋根を突き破って中に侵入。

「な、なんがつ」

一番近くにいた人を手刀で気絶させる。

「てめえ！」

銃を向けてきたので、それを真つ二つに切り裂く。

「ながつ」

また手刀で気絶。まず二人。バス内にいるのはあと三人。

「貴様つ、人質がつ」

いちいちセリフを聞くきはない。これで三人。後二人。

「くそつ」

二人の内の一人が、銃を人質に向ける。

だが遅い。その銃を切り裂く。

「そんなばぐあつ」

驚いている間に気絶させる。後一人！

最後の一人は、人質の一人を捕まえて、銃口を向けていた。

「は、ははは。お、お前の快進撃もここまでだ。おとなしがっ」  
最後の一人が倒れる。

「間一髪だったな」

シグナムが私にそう声をかけた。最後の一人は、シグナムが気絶させたのだ。

外にいた三人も、シグナムが気絶させた。これでバスの方は大丈夫だ。

私のする事はもうほとんどない。後は……

「アレンね」

「大丈夫なのか？そいつは」

シグナムが心配そうに声をかけてくる。

それに私は笑って答えた。

「大丈夫よ」

「提案があるんですが……」

「何？」

「一気に攻めましょう」

「なっ、何言ってるのよ！人質がいるのよ!？」

「勘違いしないでください。ちゃんと策はあります」

「どんな？」

「まず、何で車のほうに人質がいるか分かりますか？」

「え？それは……何で？」

「バスのほうの仲間が捕まったときのためです」

「つまり予備ってことでしょ？」

「それもあります。でも多分、僕の予想では、バスは囷です」

「？」

「つまり、始めからバスの奴らは見捨てるつもりだったんですよ、多分」

「なっ」

「車に乗ってるほうが今回の黒幕。多分大陸をでた他国で、すでに」

それなりの地位を用意されてると思う。人質が一人なもの、身軽にするため。じゃないと、片方に人質を固める意味がわからない」

「……」

「だから、まずバスを占拠する」

「でもそれじゃ車の人質が……」

「それは僕がやります」

「え？」

「今バスはガソリン補給のために止まっている。これをいかします。ガソリンを補給するのをなるべくのばしてください。」

僕の予想なら車の方もガソリンが切れるはず。それが作戦開始の合図になります」

「……」

「まずフェイトさんは、現場で一番信頼できる人とバスをおさえてください。やりかたは、一人は上から屋根を突き破って中の奴らを、もう一人はガソリン補給の見張りで出ている外の奴らを気絶させてください。それが終わったら、無線機で車の奴らに伝えてください。バスは占拠した、と」

「え？わざわざ知らせるの？」

「ええ。見捨てるつもりでも動揺か、あるいは油断が生まれて、隙

「ができるはずです」

「動揺はわかるけど、油断？」

「相手は僕達がバスを抑えたら勝ちと勘違いしていると思うでしょう。もともと見捨てるつもりだとも知らずに、と。見捨てるつもりじゃなかったとしても、動揺は生まれます。後は、僕がその瞬間、三人を気絶させて終わりです」

「……もし奴らが仲間を見捨てる奴だった場合……」

「ええ。車の方の三人は、おそらくかなりの実力者でしょうね。でも大丈夫ですよ」

「……本気？」

「ええ」

「あなたの負担が大きいわよ？」

「大丈夫大丈夫。さっさと終わらせて、昼寝したいし」

「……はあ」

くアレンsideく

「出てきたな……」

車から出てきたのは二人だ。一人は人質の見張りか。徹底してるなあ。

代えのガソリンは後ろに積んでるのか……

二人は素人……もう一人は……

「結構やばいかな……」

かなりの使い手だ。相手に感付かれないために、実行は僕一人で行う。

まずいよまずいよ。

『相手に今から送るわ』

フェイトさんの声が無線機から聞こえた。集中しろ。

まだまだ……

まだまだ……

まだだ………今だっ！！

僕は一気に急降下する。周りが運良くビルに囲まれていたのがラッキーだ。

そのまま外の二人を一気に気絶させる。

人質を！！

三人目を相手にするより先に人質救出が先だ！

僕はアイオンで車を真つ二つにし、その切り目から手を突っ込み、人質を掴んで一気に引き寄せ、そのまま離れる。

この間、わずか零コンマ一秒。

相手もかなりの玄人だが、いきなりの不意討ちについてこれなかったか。

まあ、ランクは今の僕より少し弱いくらいだからな……AA+くらいか？

まあ、人質を救出したらこっちのものだ。後は人質を安全な所に……

げっ！

最悪だ！相手も吹っ切れて、ロスト・ロギアを持って、飛行魔法で逃げやがった！このままじゃ……

「……やるしかないか」

僕は一番近くのビルの屋上に子供を置いた。

「……置いていかないで」

泣きながら僕の袖を掴む子供。僕はその子に笑いかけて言った。

「大丈夫。すぐ戻ってくるよ。お兄ちゃんが悪者やつつけてくるから。それまで待っててね？」

「……うん」

「うん。いい子いい子」

そう言っって頭を撫でると、笑ってくれた。

「じゃあ行ってくるよ」

「うん！」

大きく頷き、手を振ってくれるのを確認して、僕は最後の犯人を追った。

あいつだけは絶対許さない……

「アイ、やるぞ」

『わかりました』

「疾風迅雷」

体を雷が包みこみ、一気に速度が加速する。

一気に犯人の前に出て、行く手を遮る。

「なっ……………」

犯人が驚いているが、そんなことはどうでもいい。

「へ、へへ。そう簡単に捕まると思うなよ」

そう言つて男が詠唱を始めた。

僕はそんな犯人を一瞥して、顔面をおもいつきり殴つた。

「があああつ……………」

吹つ飛ぶ犯人。だがこれで終わらせない。気絶しながら吹つ飛んでいく犯人より早く周りこみ、今度は腹に蹴りをいれる。

「かっはっ……………」

肺の空気を吐き出しながら、痛みで目を覚まし吹つ飛ぶ犯人。

「ま、待て！俺が悪かった！ロスト・ロギアなら返すから！」

何を言ってるんだこいつは？

そう思つて男を睨む。

「ひ、ひいつ！た、頼む！もうやめてくれ！」

黙れ。

「な、なんなんだよ！何が気に入らないんだよ！」

何が、だと？

「……教えてやろうか？」

「あ、ああ……があっ」

もう一度顔面を殴る。そして襟首を掴みながら叫んだ。

「何で………人質のガキがあんなにボロボロなんだよ！」

そう。さっき助けた人質の子供は、あちこちに傷があり、服には血が滲んでいた。

「そ、それはあのガキが抵抗するがあっ！」

また殴る。それで男は気絶した。

「……もう喋らなくていいぞ。てめえみたいな奴とはもう話したくないからな」

気絶した男をその辺に放る。後は管理局が何とかするだろう。

「さて、戻りますか……」

ロスト・ロギアを片腕に、あの子のもとに戻った。

「よっ、ちゃんといい子にして待ってたか？」

僕がそう言って帰ってくると、笑って、「うん！」、とうなずいた。

「じゃあ、ママとパパの所に戻るっか？」

「うん！」

「へえ」

後ろから悪魔の声が聞こえた。

「……フェイトさん」

「子供の前ではいい格好するのねえ」

くそっ！子供にまで僕の数々の汚名を話すか！

「君、名前は？」

「エルサだよっ！」

「そうか。エルサちゃん。あそこにいるお姉さんはとっても怖いから近づいたがあっ」

首に手刀される。ポイントずらさなかつたら気絶してたかも。

「アレっ」

「ひ、ひいっ」

やばい！早く訂正しないとっ！

「エルサちゃん！さっきの嘘！本当はえっと……顔だけ美人の悪魔………すみませんごめんなさいもつ言いませんだからデバイスをしまってくださいお願いしますっ！」

「次はないよ？」

「肝に銘じます！」

ま、まずい！子供にまで僕の数々の汚名がああああああああああああああああああああああああああ

色情狂、変質者、略奪者、犯罪者、e t c ……

い、嫌すぎる。また汚名が増えるのか……

エルサちゃんを見る。エルサちゃんは笑いながらフェイトさんと話していた。

嫌な予感。は気のせい。気のせい。

「じゃあ、パパとママの所に戻るっか」

「うん！」

「……エルサちゃん、フェイトさんと何話してたの？」

「えっとね、フェイトお姉ちゃんはね、アレンお兄ちゃんは、お仕事さぼってばっかで、いつもやる気がなくて、お昼寝のことばっか考えていて……」

泣きたくなった。

フェイトさん……あんた子供に何教えてるんすか？

さっきまで絶対僕ヒーロー的ポジションだったのに！！

「ほ、他には？」

それでも笑顔で聞く。子供の笑顔を奪うわけにはいかない。

「えっとね、最後にね、とっても優しいって」

「へ？」

優しい？僕優しいことなんてしたっけ？

うんうん唸っていると、フェイトさんと目が合った。

すると微笑みかけてくれた。あの人も結構謎が多いな……

「フェイトさん、エルサちゃんをお願いします。僕はこれで腕が塞がるんで」

そう言っただけでロスト・ロギアを掲げる。本当に、こんなサイズのものがこの国を脅かす存在なんて思わないよな

まあ、実際に脅かす存在だから怖いんだけど。

「わかった。おいで、エルサちゃん」

フェイトさんがそう言うと、エルサちゃんはフェイトさんの胸に飛び込んで、抱き付いた。

それをフェイトさんは優しく抱き止め、飛んだ。

「じゃ、僕達も行くか」

『はい。お疲れ様でしたマスター』

「本当に疲れたよ。帰ったら絶対自室で寝る！」

そう叫んで、僕もフェイトさんの後を追った。

そういえばレルとフェルの出番なかったな……

ま、  
いつか。

## 第二十九話 懐かしい顔

（アレンside）

「……………何でこうなるの？」

『自業自得ですよマスター』

「アイオンの言うとおりだよ、アレン」

『私もそう思います』

アイ、フェイトさん、バルディッシュの三人から攻められる。

皆ひどい！

任務が完了した僕に待っていたのは、お昼寝という天国ではなく、たまっていた三日分の仕事と、任務の報告書及び反省文という地獄だった。

反省文とは、犯人を捕まえずに、気絶させたのをその辺に放ったからだ。

うう……………くそう！あの場合仕方ないじゃないか！エルサちゃんが心配だったしさあ……………

まあ、その辺はフェイトさんが弁明してくれたから、量は減ったけど……………

まあ、反省文なんて、もう何回書いたかも忘れるくらい書いてるから問題ないけどさ。いつも適当にするなって怒られたなあ。

仕事だつてこの際問題ない。全力でやったら、睡眠時間くらい作れるだろう。

問題は報告書だ……僕、やったことないんだよね。いつもクロノに押し付けてたから。さすがにフェイトさんには押し付けられない。殺される。

そんなわけで、今は報告書をどうするか悩んでいる。

そんな僕に比べて、フェイトさんはスラスラと報告書を書いていく。

ああ〜どうしよう……そうだっ！適当にやろう！

初めて書いた反省文だつて適当だったんだ。報告書もそれでいいだろ。

んじゃ、これをこうしてえ〜……

はい終わり。ちよろいな。

反省文ももう書き終わったし、後は仕事だな。

この三日分の仕事は、フェイトさんが僕の分の仕事も結構やってしてくれたので、これもすぐ終わるだろう。

そして、

「終わったあああああああああああああああああー!!」

「え、もう?」

フェイトさんが驚いた顔をする。それもそうだろう。フェイトさんが報告書を書き終わってから、まだ時間があまり経っていないのだから。

よっしや、早速……

「デバイス開発するぞおっ!」

「昼寝は?」

「そりやしたいですけど、さっさと完成させないといけないんです!」

僕はそう叫ぶと、執務室を飛び出した。

時刻はすでに夜。ここに来てからの五日間のうち、まだ四時間しか寝ていない。さすがにそろそろ寝ないと死ぬかもしれない……

『大丈夫ですか? マスター』

「ぜんっぜん!」

アイの言葉に即答する僕。

「だから微調整は、アイ、レル、フェル、全部お前達に任せる」

『わかりました』

『頼りにしてください』

『ドントウォーリー』

「ありがとう。アイ、レル」

『あれ？何故自分を無視するのですかマスター？』

「さあねえ」

自分の胸に聞きやがれこの野郎！！

「よ、よし……後は微調整だけ……」

朝になってようやくこの段階まで来た。

よし、このトンファーはアイ達に任せて次は……

『マスター、少し休んでは？』

「大丈夫だよ、アイ。それよりトンファーの微調整頼んだよ」

僕は昨日買ってきたあるものを手に取った。

『？マスター、それは？』

「超強力栄養ドリンク」

そう言ってそれを一気に飲みほす。

うっ……結構きついな。

まあいいや。さ、やるぞ。

次は……ライフルか。

くフェイトsideく

「……また、か」

また、仕事をさぼってデバイス開発してるのね。

経歴のことと、仕事さぼったこと、まだ説教してないのよね……

「……やっぱり一度締める必要があるわね」

私は椅子から立ち上がり、執務室を後にした。

くアレンsideく

「ふふふふふふふふふふ……」

『マスター!?!』

あの栄養ドリンクを飲んでからどれくらい経っただろうか……頭がおかしくなってきた。

「ははははは。アイ、僕はもう無理だ。後は……任せ……た……」

ボタンッ

『マスター!?!?』

「ぐー」

『……………』

『寝てますね』

『このマスターを心配した私が馬鹿でした』

＼フェイトside＼

私はデバイス研究室の前にいる。

もう逃げられないわよ、アレン。

私は研究室のドアを少し開け、中を覗いた。そこには……

「ぐー」

寝ているアレンと、デバイスの微調整をしているデバイスが三つあった。

『あ、フェイトさん』

デスクの上に置かれているデバイスの一つ、アイオンが私に気付いた。

私はドアを開けて中に入った。

「えっと……アレン、どうしたの？」

『疲れたので寝ています。無理ありません。ここにきてからほとんど寝てませんから』

「そうなの？」

『はい。自室では一度も寝ていませんしね』

「あはは……」

苦笑するしかなかった。

「……新しいデバイス、出来たの？」

『はい。微調整ももう終わっています』

「そう」

私は床で寝ているアレンを見る。普段あんなにやる気がなくせに、こつこつのはやる気出すのか……

いや、焦ってるのかな？

何でかそういつ風に思ってしまう。

「……これ、どうすればいいの？」

『放っておくのが一番だと思いますよ。明日の朝には目が覚めると思っているので』

「そう。なら言っておいて。もし明日さぼったら、私何するか分からないって」

『わかりました』

「じゃあ、仕事があるから戻るね」

『はい。マスターの体を労ってくれて、ありがとございました』

「うっん。それじゃ」

私は研究室を後にした。

今無理矢理叩き起こして説教するのは、かわいそうだからね。

「はあ……今日の仕事は、全部一人で片付けるか」

アレンを説教する理由が増えた。

＼アレンside＼

「んあ？こじは……」

「……研究室？えっと……そうだっ！ライフル……最悪だっ！ぜんっ  
ぜん完成してない！」

「もう朝ってことは……丸一日くらい寝てたのか」

時間をかなりロスしたな。早く作業に入らないと。

『マスター、おはようございます』

「ああ、おはようアイ」

『昨日フェイトさんが来てましたよ』

「え？マジで？」

『はい。何やら説教にしに來られたみたいですが、あなたが疲れていたので、そのまま伝言だけ伝えて帰りましたよ』

「……そっか」

フェイトさんがねえ……意外だ。今日お礼でも言いにくいっかな？

「で、伝言って？」

アイがフェイトさんからの伝言をそのまま伝える。

冷や汗が流れた。

えっと……仕事が始まるのが08:30から……現時刻は10:00……

「ぬあああああああああああああああああああああ  
っー!」

僕はアイとレルとフェルを掴んで研究室を後にした。

執務室。

状況、最悪。

只今正座しながら、目の前の悪魔ごとフェイトさんとお話中。

「（た、助けてくれアイ!）」

『（自業自得ですマスター。あきらめてください）』

「（裏切り者!）」

「アレン、話聞いている?」

「も、もちろん!」

全く聞いてませんでした。

「そ、それより仕事を……」

「それより話が先」

「うう……」

くっさ……全部アイのせいだっ！あいつが起こしさえすればこんなことには……

「大体あの経歴からして……」

いや、アイのせいじゃないな。クロノのせいだな。

よし、契約果たしたらすぐぶん殴りにいこう！

「任務の報告書だつて」

……なんか僕が悪いような気がしてきた。

「聞いている!?!」

「き、聞いてます!?!」

臆気には。

「はぁ……もういいよ。話はこれで終わりにしましょ」  
た、助かった。さっさと仕事終わらせて、デバイス開発を……

「あ、そうそう。仕事が終わったら、私と模擬戦してね」

・・・はい？

「えっと……今何て？」

「ん？模擬戦してね」

「えっと……何ですか？」

「前に約束したよね。デバイス直ったら私と相手するって」

忘れてたあああああああああああああああああああああ  
！！

ま、まずい！なんとか打開策を……

「もし次逃げたらさっきの続きね」

逃げ道無くなったああああああああああああああああああ  
あああああああっ！！

「わかった？」

「……………」

「わかった？」

今度はデバイスを構えて僕に聞いてきた。

「……………わかりました。喜んで」

泣きながら答える僕だった。

休憩時間。僕は資料室でフェイトさんのことを調べに来ていた。

模擬戦とはいえ、戦うからには相手のことを知っておきたかったからだ。

「今更ながら偽装IDって便利だな」

資料を見ながらそう呟く。

僕がここの局員になれたのも、資料室や研究室、訓練場を使えるのもこれのおかげなのだから。

本当に今更だな。

「アイ、見つかったか？」

アイにフェイトさんの資料が見つかったかどうか聞く。ちなみに今見ている資料は、その辺にあったのを適当にあったものだ。つまり

全く関係ない資料だ。

その間、アイにはフェイトさんに関する資料を探してもらっていた。アイはその辺優秀で助かる。まあ、そういう風に改造したのは僕だけだね。

『見つかりました。今、古い順に表示します』

僕の前に次々と過去の出来事が表示される。

『P・T・事件』に『闇の書事件』、か……

懐かしいと思ってしまうな。

プロジェクトF、ね。あれの完成体がいたのは知らなかったな。

プレシア・テストロッサのことはデータだけ知っていた。

プレシアが起こした事件の幕切れも知っていたが……

娘の存在と、それを救った少女がいることまでは知らなかった……

あの頃はまだ……の手伝いをしていただけだから……

で、『闇の書事件』ね。

この頃もまだただの手伝いで、魔法も使えなかったっけ。

にしても、懐かしい名前だな。『八神はやて』……

まあ、出来れば今は会いたくないけど……

それで一年半前の『JS事件』、か。

ジェイル・スカリエッティによる大規模テロ……

八神はやてを中心に機動六課の設立。

エース・オブ・エースの名を欲しいまました不屈のエース、高町なのは率いるスターズ分隊、フェイトさん率いるライトニング分隊、八神はやて率いるロングアーチ。八神はやてを守るガーディアン、ヴォルケンリッター、高町なのはとフェイトさんが直々に育てたフオールド部隊……

「……何だこの反則的な部隊……あり得ないだろ……」

何やってんだあいつは？

「裏技とかコネてかいろいろしたみたいだけど……ま、さすがチビ狸ってところか？」

「誰がチビ狸やって？」

「誰ってそりゃ……」

瞬間、冷や汗が流れるのを通り越して体が凍り付いた。

な、何でこいつがここに？

「ん？久しぶりの再会やのに何も言わんのか？……？」

「そ、その名前は今禁止事項ですよ？」

僕は振り返りながら答えた。できることなら間違いであって欲しいと願いながら……

「お、お久しぶりです。八神さん」

「なんや？前みたいにはやてって呼ばんのか？新人くん？」

僕の願い虚しく、そこには昔の元同僚であり、恩人であり、初恋の人である、八神はやてがいた……

### 第三十話 またサボリ

「はやてside」

今、ウチの目の前では、ウチの登場に度肝を抜かれている旧い友人がいる。

「な、何でここに……」

「……が……っと、今はアレンやったっけ？」

アレンがそんなこと言うてくる。

「何で、やと？」

あ、さらに震えだした。睨んだからか？

「え、えと……クロノに聞いたのか？」

「いいや。聞きだしたんや」

「……………」

あ、呆れとる。失礼なやつちな！

まあ今はいいわ。

「何で僕のことかわかったんだ？」

「先日の事件や」

「？それがどうかしたのか？」

「フェイトちゃんの所に新しいのが来たのは知ってたから、どんな奴やる思ってたんやけどな、中々時間作られへんかったん。そんなときに、フェイトちゃんが担当した事件があったから、その報告書見てん」

「そ、それで？」

「あんたのへったくそな報告書はともかく、フェイトちゃんの報告書には事件の詳細が事細かに書いてあったわ。……………あんたの使うとったバリアジャケットや武器、戦い方や策をすぐに提案したってことまでな」

「ま、まさかたったそれだけでわかったのか？」

「いいや。もう一つあるで」

「な、何だ？」

「それはな……………」

「それは……………」

「勘や」

ズデーんッ！

お笑い芸人よろしく見事にずっとこけてくれた。

さすが昔の相方なだけはあるで。

「てか、本当はその報告書に、僕の態度とか書いてたんじゃないのか？」

ギクッ

地に跪きながらそう言うアレ。さすがやな。今のやりとりだけでそこまでわかるとは……

「ま、いいや。で、何か用？」

バッチーーンッ！！

アレがそう言った瞬間、ウチは力の限り全力で、アレンをビンタした。

～アレンスイデ～

バッチーーンッ！！

おもいつきりはやてにビンタされる。

七年ぶりに会った知人に対する仕打ちかよ。

全くクロノといいはやてといいどうして……

「何の用やと？どれだけ心配したと思つとんねんこのポケツ！」

どうしてこんな化け物を心配するんだよ。化け物に関わったって口  
くなことないのに……

「…………ごめん」

か細い声ではやてに謝る。今言える言葉はこれしかなかった。

「はあ…………はあ…………。クロノくんにもおんなじようなことされたん  
とちやうんか？」

「正解。顔面を殴られたよ」

頬をさすりながら言う。

「いつ戻ってきたんや？」

「大陸についたのは大体二十日くらい前。こっちについたのが十日  
前。局員になったのは、お前ならもう知ってるだろ…………」

「ああ。知ってるで。親友の補佐になる奴がどんな奴かは気になっ  
たからな…………でもどういうわけか、そいつの経歴とか名前、顔がわ  
からんかったわ」

「クロノが根回ししたんだろ。あんま広めるとボロがでるから」

「ああ。そのせいで気付くんにこんな時間かかったんやけどな」

「早いよ。充分すぎるくらいにね」

「……………何があつたんや？」

「クロノと同じ質問をするんだな」

「そら誰かって気になるわ。いきなり戻ってきた親友が今まで何してたかってのは」

親友、ね。ホント物好きな奴らだよな、お前ら。

「わかった。話すよ……………クロノと何を話したのかも、全部」

「なら場所かえよか。どこで話す？」

「なら屋上にでも行くか」

「人おるんとちゃうんか？」

「今は全員、仕事中的はずだよ」

「お前休憩しとるやん」

「他の奴らと時間ずらしてもらってるんだよ。騒がしいのは嫌いだからな」

「成る程な。お前らしいわ」

「じゃあ行くか」

「せやな」

「ここまでが、僕が大陸に来る前までの話だよ」

僕ははやてに、牢獄に入れられるまでの話をした。

「お前……………アホちゃうん？」

グサリッ

「がはっ」

アレンは980の大ダメージを受けた。

「いくらすぐに会いたいからってそれはないわ。頭わいてるんぢやうか？って疑うわ」

グサグサッ

「がっぐはっ」

アレンは1800の大大ダメージを受けた。すでに瀕死だ。

「ま、頭わいてんのは昔からか。そらすまんかったわ」

グサグサグサッ

「がっぐっごはっ」

クリティカルヒット。アレンは9999の大大ダメージを受けた。

アレンは死んだ。

「って勝手に殺すなっ!!」

「おお〜。ナイスノリツツコミ」

パチパチパチ

拍手するはやて。さっきからかなり機嫌が悪いのは気のせいと思いたいが、残念ながら事実だ。

まあ、怒って当然だ。普通なら縁を切るだろう。

それだけのことを、僕は恩人であるクロノやはやてにしたんだから

……

この七年、こいつらはどんな思いでいたんだろう……

それを知った所で、僕にできることなんて、謝ることしかできないけど……

「……………ごめんな」

僕ははやてに聞こえないように、もう一度謝った。

「で、クロノくんとは何企んどるん？」

「企んでなんてないさ。ただ、頼まれたんだよ」

「何を？」

「今追っている事件解決を」

「?どんな事件や？」

「一月前、南の海域に、今まで見たことのないガジェットが数十体現れたそうだ」

「未確認は珍しないやろ？」  
アンソウン

「こつからだよ。そのガジェットが、三週間前、結界探知にかからず、いきなり街に現れたらしい」

「なっ!?!?んなアホな!?!」

「幸いにも死傷者は出なかったけど、今後もこんなことがあるかもしれないから。早急に犯人を捕まえたいらしい」

「それであんたを？」

「そ。そのガジェットの残骸は、全部上に持っていかれたらしいけど、次現れたら僕が相手をして、そのガジェットの構成、構築を全て見抜いて、そこから、その関係の研究をしている奴を捕まえるらしいよ」

「その眼、使うんか」

「そりゃ使わないとさすがにわからないよ」

「……クロノくんは何考えとんねん。こいつに複製眼使わせるなんて……」

アルファ・ステイグマ

「まあまあ。あいつだって苦渋の決断だったんだろうしさ。それに、こんなことが続いたら、必ず死傷者が出る。そのことに比べたらマシさ」

「……そやけどっ」

「はやてはまだ納得していないらしい。いや、はやてだけじゃない。クロノも、自分で決めたこととはいえ、納得はできてないだろうな。」

「そういう奴らだ。こいつらは。」

「……なああんた。その事件が解決したらどないするん？」

「今度はそれか。クロノは何も言わなかったな。」

このまま執務官補佐を続けるか、旅でもするか……

クロノとの約束では、執務官補佐は事件解決まででいいと言われて  
いる。

さて、どうするかな……

「なあ。もし良かったら、ウチのところにこおへんか？」

「は？」

はやての所に？確かこいつ捜査官だったか……

確かに僕にとっちや役得ではあるけど……

「いいのか？」

はやてのことだ。職場の皆とはうまくやっているのだろう。そんな  
中に僕なんか……

「もちろんや」

「……………」

そうだ。こいつはこいついう奴だった。

僕みたいな奴でも快くむかえてくれるような奴なんだ。

……………こいつの下で働くのもいいかもな。

あいつを追いかけろ人生に比べたらよっぽどマシだ。

「……………考えておくよ」

「そっか……………」

でもやっぱり迷ってしまう。あいつを放っておけば、必ず世界を災厄が襲い掛かるだろう。

かといって探すあてもない。だったら捜査官という立場を利用するのも一つの手だ。

でも……………はやてを利用するのはイヤだ。もちろん巻き込むのも。

だったら、結論は決まっている。

でも、はやてと一緒にいたいとも思う。

最近胸が張り裂けるような別れがあったから、その辺繊細になったかな？

ま、とりあえずこの件は保留でいいだろ。

「じゃあ、ウチはもう行くわ。仕事がたまってるしな」

「ああ。忙しいなか来たんだろ？悪かったな、いろいろと」

「気にすんなや。友達やる？」

「……………そうだな」







か細く訴えた僕の言葉は、おそらく、いや絶対に無視されるだろう。  
こういつ時ってなんて叫べばいいんだ？

うーん……………そうだった！

「助けてくださいいいいいいいいいいい……………」

僕の叫びは、フェイトさんの拳固で遮られたのだった。

「お、おわっ……………た……………」

や、やっとお話とやらが終わった。このままエスケープと言いたいところだが、残念ながらそんなことをしたら僕にはさらに恐ろしいことが……………

駄目だ。もう考えるのはやめよう。集中集中。

目の前の仕事の山に集中する事にした。

「ねえアレン」

仕事もうすぐ終わるくらいになって、フェイトさんが声をかけてきた。

「何ですか？」

「聞き忘れてたんだけど、休憩時間何やってたの？」

「寝てました」

速攻で嘘をつく。

「へえ、寝てたんだ」

やば、墓穴掘った！

「今度は言葉じゃなくて戦いでしごいてあげるわ」

そんなの絶対嫌だっ！

でも逃げられない。

「……………はあ」

もつため息をつくことしかできなかった。

訓練場。

「準備はいい？」

「いつでも」

バリアジャケットに身を包んだ僕とフェイトさんが向かい合う。

「レル、フェル、セットアップ」

二丁のガンソードを構える。

まあはつきり言って、勝ち目なんて制限されまくってる僕にはない  
んだけどね。

ま、それでも久しぶりの戦いだ。感覚戻すのにはちょうどいいだろ。

「行くよ」

「はーっ」

そう言つてフェイトさんがバルディッシュを構えた瞬間、アラートが鳴った。

「……………」

滅茶苦茶不機嫌そうなフェイトさん。

対してホツとしている僕。

「……………行くよアレン」

「は、はい」

訓練場を急いで後にした。もしかしたら例のガジェットかもしれない。

そう思いながら、現場に向かった。

「……………はぁ」

思わずため息をついた。

事件現場に向かい、状況を聞いたところによると、またバスジャック

クらしい。

犯人はたった一人。人質は五人。

それを聞いたフェイトさんは、先日と同じときと同じ、屋根を突き破って中に侵入。そのまま犯人を捕獲。

事件はほぼ一瞬で幕を閉じたのだった。

僕としては被害がなかったし、動かずにすんだしでよかったんだけど……

僕は横をチラッと見てみる。

そこには、ため息の原因たるフェイトさんがいる。

滅茶苦茶機嫌が悪かった。

今日はもう模擬戦もなしということになったので、機嫌がすこぶる悪かった。

さっきの事件を一瞬で解決したのは、おそらく半分は腹いせだろう。

ま、犯人に同情なんてしないけどね。

「じ、じゃあ僕はこれで……」

事件の報告書を書き終えた僕は、席を立った。

「ええ……お疲れさま」

く、暗い。それに怖い。今のフェイトさんをはやてが見たらどう思うだろう。

そう思いながら、執務室を後にした。

『やあ。事件をもう二つも解決したんだって？すごいじゃないか』

自室に戻った途端、クロノが通信があった。

「図ったようなタイミングで来やがったな」

『？何のことだ？』

「いやこっちの話」

『そうか。じゃあ君に報告したいことが……』

「ストップ！それよりてめえには言いたいことが腐るほどあるんだ」

『何のことだ？』

「とぼけんな！んだよあの経歴！あり得ないだろ！」

『半分以上昔の君と同じのはずだが?』

「クロノ?そういう事実は胸の奥に締まっておくものだよ?」

『事実とは認めるんだな』

「まあね。その経歴のせいで何度フェイトさんに……………」

『そいつは災難だったな。で、話は戻るが…………』

「二つ目!何でよりによって僕をあの人の補佐にしたんだ?相性最悪だと思っただけど」

『僕と同じでいい子だろう?』

「君と同じでワーカーホリックで戦闘狂だったよ」

『僕は戦闘狂じゃないよ』

「ワーカーホリックは認めるのかよ……………それと最後。はやてに何教えてるんだよつ!」

『仕方ないだろ。君の居場所を吐けと脅されたんだから。仕事も忙しかったから、すぐに教えたよ』

「僕と仕事どっちが大切?」

『仕事』

「……………くうっ」

僕は右腕で目を覆った。悲しい。仕事以下の僕。

『それより今度こそ話を戻すぞ。例のガジェットの残骸だが、もしかしたらまだ南の海の海底に沈んでいるかもしれないらしい』

「……………まさかと思うけど」

『明日でいいから行ってこい』

「嫌だ」

『君の給料は、僕の口一つでどうとでもなるんだが？』

「……………悪魔め」

『おや？それは調査に行ってくれてくれるっていつことかい？』

「……………ああ。もつとつにでもしてくれ」

『さすが親友』

「やかましい！」

『じゃあ僕は仕事あるからこの辺で。あ、明日は休暇扱いにしてやるから、残骸を拾ったら、後は自由だからな』

「マジで…!?」

『ああ。それじゃあな』

そう言っつてクロノは通信を切った。

やった！明日は俄然やる気が出てきたぞっ！

『マスター、また通信が来てます』

「？誰から？」

『はやてさんです』

「ああ、そついえば……」

忘れてたな。

『そついえばつてなんや！？ウチのこと忘れとつたんか！？』

「うん」

あつさり頷く僕。

『くおんのお〜……ま、まあええわ。それより、明日空いてるか？』

「明日？まあ、調査任務があるけど、さっさと終わらせるつもりだから、昼ぐらいからは空いてるな」

『なら、ウチとデートせえへん？』

は？

「……………おやすみはやて、アイ」

『ちょっと待てえっ！うら若い美少女がデートに誘っとなねんぞっ！もつと食い付かんかいつ！！』

「うるせえっ！こっちはもう眠いんだよっ！いちいちネタなんかに付き合ってられるかっ！」

『なんか？今なんかって言いよつたな！？おんどれ今すぐそつちに言っってお笑い必須なネタがなんたるかを……………』

「だあああああああっ！！来なくていいからっ！ネタがどれだけ大事かはわかつたからっ！！」

『いいや！今すぐ行つてその根性叩き直したるから覚悟……………』

『はやてちゃん〜！話が進まないです〜！』

「なんだリインもいたのか。久しぶり〜」

『はい。お久しぶりなのです〜、ーーー』

「今はアレンだよ、リイン」

『あ、そうでした〜。すいませんなのです〜』

『ってこらあアレン！ウチのときは久しぶりって言わんかったのに何でリインには言うねん！！』

「あの時はお前に恐怖していてそれどころじゃなかったんだよ！」

『だから話が進まないです〜！』

『つと、そやったわ。ありがとうなリィン』

『いえいえ〜』

「??さつきから気になってたけど、話して?」

『さつき言つたやん。デートしよて』

「ネタじゃなかったのか?」

『ちやうわ!〜』

「ふ〜ん。だが断る!僕には昼寝という名の指名が……」

『付き合ってくれたら、高級羽布団の二つくらい買ったるで?』

「お供させてください」

『ん、よろしい。で、どれくらいに終わる?できれば早いほうがええねんけど……』

「じゃあ10時には終わらせるよ」

『10時!?そんな早よ終わるんか?』

「本気でやれば」

『そうか。なら、10時半に隊舎前集合なあ』

「わかった」

『じゃあこっからは楽しいおしゃべりタイム!!--』

「リン、おやすみ」

『おやすみなのです』

『無視すんなあ!!--』

その後、はやてと深夜まで漫才みたいな会話をし、あまりに疲れたのでそのままベッドに頭からダイブした。

## 第三十二話 楽しいデート？

くアレンsideく

「眠い〜だるい〜」

『しっかりしてくださいマスター。10時までには終わらせるんですよー！』

「うう……だって眠いんだもん」

僕は今、ガジェットが現れた海上にいる。

海底に沈んだガジェットを見つけないといけないのだが……

「ああ〜めんど」

『さつさと終わらせますよ』

「はいはい。じゃ、新入りの力を試してみますか」

銀のネックレスについた真紅の宝玉であるアイオン、両耳についている青く光っているピアスであるレルとフェル。

そして新しく作った、今は指輪の、トンファアのアームデバイス、フラン。

その力とくと見よ！

『まあ、見てるのデバイスの私達だけですけどね』

「言うな」

僕は指をあげ、叫んだ。

「めんどくせえ！フラン、セットアップ！」

指輪がトンファーに変わる。

『めんどくせえって言う必要がありますか？』

「気にするな。よし、行くぞ」

僕はフランを海面に向けて回転させる。

ブオンブオンブオンブオンブオンブオンブオンツ！！

回転による空気摩擦の音がうるさいな。

そう思いながらも回転させ続ける。

そして、叫んだ。

「ロスト・ストーム！」

すると、トンファーからものすごい竜巻が海に放たれ、水をよけていく。

それが海底につくと、今度は広がり、そして、竜巻の中心に穴がで

きた。

「よしつ、上出来だな」

『ですね。早速探索を開始しましょう』

「ああ」

僕は竜巻の中心に入り、海底に着地した。

「アイ、探索結果はるぞ」

『範囲は？』

「ここから半径1キロ」

『また滅茶苦茶な……いいでしょう。いきますよ』

「おう」

『……見つけました！ここから南南西の方角に、距離300』

「りよ〜かい」

僕は南南西に向けて歩いた。すると、それに合わせて竜巻も移動する。つまり、僕を中心としているのだ、この竜巻は。

まあ、とりあえず急いで回収するか。

「……………これか」

僕の目の前には、地面に突き刺さった黒いものがあった。大きさは1メートルくらいだ。結構でかい。

僕はそれを持って海上に出た。

それと同時に竜巻も消えた。

『マスター、さっそく』

「ああ」

アルファ・ステイグマ  
複写眼、発動。

『分かりましたか？』

「うん……………かなり欠けてるから全部は分からないな」

『どのくらいわかりましたか？』

「まあ、完全に解析できたのは20%くらいかな」

『そうですか。なら、早くクロノさんの所にそれを持って、解析結

果を届けましよう』

「そうだな」

僕は管理世界のあるほうに向かって飛んだ。

まあ、陸からそんなに離れてないからすぐに着いたけどね。

「で、どうだった？」

クロノが僕に聞いてくる。

「欠けてるから全部は分からなかったよ」

「そうか。ならわかる範囲で教えてくれ」

「うい。まず……………」

僕はクロノにわかったことを伝えていく。

「成る程。ありがとう。それらの研究をしていた者たちを何とか調べよ」

「んで、捕まえるのは僕の役目ね」

「お前は実行部隊のほつが性に合ってるだろ？」

「まあね。じゃあ僕はこの辺で失礼するよ。予定があるんで」

「そうか。しっかりエンジョイしてこい。また明日から仕事づくめだからな」

「……………いつか殺す」

「何か言ったか？」

「イエナニモ」

「そうか、ならさっさと行け。こっちも忙しいんでな」

「……………」

「はあ……………じゃあこれで。せいぜいエイミーさんの尻にひかれる」

「なっ……………お前……………」

「三十六計逃げるに如かず！！」

僕は大急ぎで逃げた。

後ろから「待てえ！」という声が聞こえるが気にしない。待てと言われて待つ奴はいないのだ。

僕は時計を見た。

現在の時刻は10:18。正直ギリギリだな。

僕は急いで隊舎前に向かった。

急げ急げ！

はやてのことだ。遅れたらどんな罰が待ってるか……

お、見えてきた。

あれ？はやて以外に三人いるような……

「遅いでアレン！」

着いて早々そう言われた。

「いやまだ3分前じゃん！」

「10前行動は常識や！」

「いや無茶言うな！さっきまで海の上にいたんだぞっ！間に合った  
だけ上出来だろ！」

「何やと!?!」

「まあまあはやてちゃん。時間には間に合ったんだし」

「アレンも落ち着いて」

はやてとケンカしていると、制止の音が二つ聞こえた。女性の声だ。しかも一人は知っている声だ。昨日もひどいめにあったからなあ。

つて!?!

「何でフェイトさんがここに!?!」

「それはこっちのセリフなんだけど」

「?どういふことですか?」

「私達がこの日に遊びに行くのってかなり前から決めてたことなんだけどね、はやてが昨日一人増えたって言うてきて、誰かは当日までのお楽しみって話だったんだけど……何でアレンが?」

「あ……はやてとは昔ちよつとあって、その時に知り合ったんですよ」

「へえ、そうなんだ」

「そっちの人達は?」

僕ははやてを押さえてる人と、それを応援していると子供を見て言

った。

「ああ、紹介するわ。私の親友の高町なのはと、その娘の高町ヴィオよ」

「あつ、高町なのはです。よろしくね〜」

「アレン・ウォーカーです。よろしくお願ひします、高町さん」

「なのはでいいよ〜」

「わかりましたなのはさん」

「何でフェイトちゃんとなのはちゃんはそんな丁寧な扱って、ウチはがさつやねん!〜!」

「誤解を招く言い方するな!後、それはお前を女として見てないからだつ!」

「何やと〜!〜!」

「は、はやてちゃん、ヴィヴィオが怯えてるよ」

「そつだそつだつ!お前のせいでヴィヴィオちゃんが怯えてるぞ!」

「いやアレンのせいでもあるからね」

「うっ……」

「「「「「めんなさい」」」」」

はやてと一緒にヴィヴィオちゃんに頭をさげる。

「いいよ〜」

笑って許してくれるヴィヴィオちゃん。もう怯えていないのか。

……………強い子だな。

「じゃあ全員そろったことだし、行こっか」

「高級羽布団！」

「「「???」」」

「あゝ、そんなこと言ったなあ確か」

「忘れたとは言わせないぞ！」

「忘れた」

「くぁーっ!このガキヤア!!!」

「お前のが年下やあっ!!!」

「アレんくん、はやてちゃん、いい加減にしようね?」

「「「……………はい」」」

さすがエース・オブ・エース。怖い。

「あははははははっ!!」

さっきと違って大爆笑しているヴィヴィオちゃん。さっきの演技じゃないだろうな。

「そういえばアレンは何で制服なの？」

フェイトさんが僕の格好について聞いてくる。今僕は私服ではなく制服で来ている。

「さっきまで任務やったからやる？」

「そうなの？」

「いやそもそも私服持ってないですから」

その言葉に驚く一同。

はやてが僕の首に手を回して、耳元で聞いてきた。

「どういうことや？前の大陸の服があるやる？」

「向こうの服はこつちと全然違うんだよ。んなもん着てきたら確実にこの大陸の人間じゃないってばれるんだよ」

「さよか。なら、今日の初めの目的地は決まったな」

「へ？」

「みんな！今日は初めにこいつの服買いに行くで!!」

「は？」

「「「おおーっ！」「」

「いや、僕の意味は？」

「ない」

「……別に服とかいらなただけど……」

「駄目。私達がちゃんと選んであげるから安心して」

「いや、だから……」

「じゃあ行こっか」

「……はあ。もうどうにでもしてくれ」

服なんてどうでもいいんだけどなあ。めんどくさい。

口にしたら殺されそうだな。

「ま、なるようになれだ」

『あきらめてますねマスター』

「ははは……」

乾いた笑い声をあげた後、楽しそうに話しているはやてたちの後を

追った。

「これなんかどうかしら？」

「んー、それもいいなあ。あ、こっちは？」

「これもええんとちゃうか？」

「アレんこれはー？」

現在、服を選んでいるのだが……

「……………そろそろ突っ込んでいいですか？」

「え？何を？」

「何をじゃねえっ！何で女物の服ばっか持ってくるんだよっ！！」

そう。何故か全員持ってくる服が男物の服ではなく、女物のフリルとかついたスカートとか持ってくるんだよねこれが。

「え？似合いそうだったから」

「だからって女物持ってくるのはおかしいでしょなのはさんっ!!」

「まあまあ。それより着てみてよ」

「フエイトさん？人の話を聞いてましたか？」

「アレン、これ着てー」

「ヴィヴィオちゃん、ごめんねー。僕は男だから着れないよー」

子供にまで……ううっ、僕ってそんなに女っぽいかな？

「ううっ、ヴィヴィオの選んだ服着るの嫌なの？」

涙目で言われた。

「いやいや全然そんなことないよ。着る着る」

「ホントッ!？」

一気に笑顔になりやがった。

「うん、本当だよ」

泣きたくなくなってきた。

「やったあーママ。ママの言っとおりにやったら着てくれるってー」

「よかったねーヴィヴィオ」

「って待ていつー!」

「どうかしたアレンくん？」

「いや、今何かとんでもない話が聞こえた気がする」

「気のせいだよ」

「いや、でも……」

「気のせいだよ」

「ううっ……」

は、はめられた上に誤魔化された……

こうなったら逃げ……

「じゃあ早速、ヴィヴィオの選んだ服着よっか」

なのはさんに腕を掴まれる。

「い、いやでも……」

「着てくれないの？」

また涙目。だがもう騙されなぞ。

「ううっ……」

あ、泣きそつ。

つて、ええっ!?

「いやまさか！ヴィヴィオちゃんの選んだ服なら喜んで着るよっ！  
」

つて何を口走ってるんだあああああああ——————  
——————!!!?

「よかったねヴィヴィオ」

「うんっ」

……さすが管理局の白い悪魔と呼ばれるだけはある。

「アレンくん、何か失礼なこと考えてないよね？」

「いやとんでもない！いい母親に恵まれてヴィヴィオちゃんはづら  
やましいなあ」と

「うん！ヴィヴィオ嬉しいよ！」

「にははは、照れるなあ」

「なのは、アレンの服決まった？」

「うん。フェイトちゃん達は？」

「こっちも決まったでえ」

「？何の話？」

「ああ、アレンには言っていなかったな」

「私達のなかで、誰が一番アレンに似合う服を見つけたか勝負してたのよ」

「……………それで何で女物？」

「「「だって女の子っぽいから」「」」

「う、うわあああああああああああああああああああああ  
んっ！！！」

僕は泣きながら半狂乱に走った。……………ふりをしてそのままエスケープを試みた。だが、

「逃がさないよ」

普通に捕まった。よくよく考えたらこの面子から逃げれるわけがないのだ。

「じゃあ早速試着しよっか？」

「……………はい」

ずっと黙っていたらデバイスを出したのでしぶしぶ頷いた。

なんか皆期待の眼差しを向けてくるんだけど……………そんなに僕って女っぽい？

泣いてやる！自室で一人きりになったら泣いてやる！女の人の前で  
なんて泣けないけど、一人だったら泣き放題だ！なーっはっはっは  
っはっ！！

『（自室にいつでも私がいますよ？）』

「（そうだったあああああああああああああああああ  
！！）」

一人頭を抱えて悶絶する僕に、怪訝な顔をするのはさんたち。

「な、なんでもないです……それより本当に着るんですか……」

「もちろん」

「……これを計画したのは……」

「ウチやで！」

「やっぱりか……」

「ねえアレン！早く着ようよー！」

「うう……はい」

ヴィヴィオちゃん、はやて、フェイトさん、なのはさんの選んだ服  
を受け取って、試着室に入った。

ああ、はやてが爆笑する姿が目に見えかぶ。

クロノ同様抹殺リストに入れてやるっ！！

そんなことを思いながら、嫌々着替えた。

### 第三十三話 楽しいデート？

「アレンside」

「「「……………」」」

「アレンよく似合ってるよー！」

「そうですね……………」

今、目の前では唾然とするのはさん、フェイトさん、はやての三人と、僕を見ておおはしゃぎするヴィヴィオちゃんがいる。

ちなみに僕の着ている服は、黒のフリルがたくさんついている、一言で言えばゴスロリという服だ。これを選んだのは……………」

「は〜や〜て……………」

うらめしや的な声ではやての名前を呼ぶ。最初に適当に選んだのがよりもよって……………あれ？

「何で何も言わないんですか？」

なのはさんやフェイトさん、それに大爆笑すると思っていたはやてまで黙って見ている。

ヴィヴィオちゃんは相変わらずはしゃいでいる。

「あ〜……………何か言ってくれない？」

僕がそう言つと、三人は慌てて口を開いた。

「あつ、じ、ごめん。その……」

「あ、あまりにも、えと……」

「似合いすぎやろお前」

ドスッ

「がはっ」

僕は精神的ダメージを500ポイント受けた。

「ちよっ、はやて。いくら何でもストレートに言い過ぎや」

ゴシユッ

「ぐげっ」

僕は精神的ダメージを900ポイント受けた。

「にははは。ま、かわいいよ、アレンくん」

ドグシユッ

「ぐげあっ」

僕は精神的ダメージを9999ポイント受けた。

僕のライフはゼロになった。

「じいちゃん。今そっちに……」

「って待ていつー!」

「さすがだぜはやて。絶妙なタイミングとキレのツッコミだぜ」

「ありがとなって違うやろ!何やねん自分!有り得へんやろっ!ど  
んだけ似合っとなねん!?からかう気が失せたわっ!」

「うるせえっ!似合ってるって言うなっ!」

「似合うの嫌なの?」

「いや全然嫌じゃないよ。だから泣かないでヴィヴィオちゃん」

「うん!」

「……本当に信じられないくらい似合ってるね、アレンくん」

「なんか男の子に負けた気がするよ」

「そうね」

「いやいやフェイトさんもなのはさんもそんな言われても1ミリも  
嬉しくないし、寒気しけませんからやめてください。そもそも二  
人ともとんでもない美人なのに、男の僕のほうが……その……ぬが  
あああああああああああああああっ!」

「この先を言ったら僕は終わるっ!!」

僕が悶絶していると、なのはさんとフェイトさんが顔を赤らめていた。

「に、にはは。お世辞でも嬉しいよ。ありがとうアレンくん」

「……………」

僕はさっき何を口走った？え〜つと、ポ〜ク、ポ〜ク、ポ〜ク、ポ〜ク、ポ〜ク、ポ〜ク、ポ〜ク、ポ〜ク、チ〜ン!

「ぬがあああああああああああああああああああああああああああああああつ!!!?!?」

僕は何言つとるんじゃないやあああああああああああああああああああああああああああああつ!!!?!?」

「なあアレン。ウチは？ウチは？」

「ヴィヴィオは〜？」

「うん。ヴィヴィオちゃんもかわいいよ〜」

さっきの恥ずかしさは忘れよう。

「ウチはウチは〜？」

「本当？」

「本当だよ」

「って無視すんなやゴラアツ!!」

「うるせえっ! てめえのせいでこんな辱めを受けてるんだ! 誰がんなもんに答えるかつ!」

「なんやとく? そもそもそれやったらなのはちゃんとフェイトちゃんも同罪やろっ!」

「い、言われてみれば……っていくらなんでもゴスロリはねえだろっ! やっぱりてめえのせいだっ!」

「あゝ、二人とも? 他のお客さんの迷惑になってるからね?」

「アレンもはやてもいい加減にしなさい」

「ってあなた達もおもいつきりこの件に関わってるはずですが?」

「あはは……」

「き、気のせいよ」

「あー、ずるいで! 責任全部ウチに押し付けるんか!」

「……アレン、次の服いこっ」

「って無視か!」

「はい、わかりました」

「!?!? 自分えらい素直やな?」

「少なくともこの服よりマシだろ」

「あゝ。自分で選んどいて何だけど、確かにせやね」

「だろ?そしてお前にもいつか同等の辱めを味あわせるから覚悟し  
とけコンチクショウ」

「……………変態」

「へ?いやいや!何か勘違いしてるだろ?!?」

「アレン……………あなた……………」

「フェイトさん?何ですかその蔑んだ目は?」

「ヴィヴィオ、あっちの服見に行こっか」

「うん、ママ」

「なのはさんは何でヴィヴィオちゃんを僕から遠ざけてるんですか  
?」

「……………」

「……………あの、何がいたいでございませうつか?」

「……………別に……………」

「う、うわあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああんっ！……！」

また泣きながら試着室に入った。今度は逃げるために。

なんかどどん人として墜ちていくような……

どれが一番マシだ？

僕は残りの三着を見て思った。さっきのような目に合うのはごめん  
だ。

いくら何でもこれは無理だったのは断ろう。僕にまだ人権が残され  
ているのなら可能なはず………多分。

だが、この時一つ問題がある。なのはさんとフェイトさんはともか  
く、ヴィヴィオちゃんの選んだものがもしはずれだったら……

「断れない上にまた辱めを受けること間違いなしだな………まあいい。  
一番マシそうなのは………これかな？」

さすがなのはさんとフェイトさん。はやてと違って常識を知ってらっしやる……いや僕が男じゃなかったらだけど……

まあいいや。着よう。どうせ着ようが着なかるうが僕はもう墜ちる所まで墜ちた！なら少しでも要望に応えてイメージアップを狙うのみ！

滅茶苦茶姑息だな僕。

いや、姑息というよりはしょぼいのほづがあってるかな？

まあいいや。着たしさっさとお披露目しよう。

僕は試着室のカーテンを開けた。

「」「」  
「」「」  
「」「」

「アレン、それも似合ってるよー！」

「ありがとう。全然嬉しくないけどありがとう」

「うんー！」

ヴィヴィオちゃんは今変わらなはしゃいでいる。そして大人三人組もまた啞然としている。

「アレン……………」

「フェ、フェイトちゃん〜」

「よしよしたのは。あれには適わないよ」

「くっ……………完敗や。お笑いも見た目も完敗や」

「……………泣きたい」

「?どうしたの?」

「何でもないよ。ただ人生ってつらいなって思って……………」

「?」

「……………はあ。僕の味方はヴィヴィオちゃんだけだよ」

「うん!ヴィヴィオ、アレンの味方!」

「うっ……………ヴィヴィオちゃん!」

おもいつきりヴィヴィオちゃんを抱き締めた。

ここに来て初めて味方ができたよ!!

「って己は何しとんねん!」

はやてにどっかれる。

「~~~~! お前も少し手加減しろよ。確かに今のは僕が悪かったけど」

危うくロリコンの称号が与えられるところだった……

「……………ロリコン」

はやて、そんな蔑んだ目で見ないでくれ。

「アレンくん……………」

「アレン……………」

いや二人もそんな可哀そうな子を見るような目で見ないで。

「てか、何であんたは……………あんたは……………そんなにかわいいねん  
っ!……………」

「いやそんな泣きながら言われても」

「ううっ……………アレン、帰ったら模擬戦ね」

「何で!?!」

「昨日と今日の鬱憤を……………じゃなかった。パートナーになるんだからやっぱり一回はやりたくなって」

「前半の言葉が気になるんですが……」

「あ、だったら私達でチーム戦でやらない」

「ああ、それいいな」

「はあ！？ちよつと待て！！」

「じゃあ買物も夕方くらいで終わりにして、夜までに訓練場を借りないとね」

「人の話聞いてますか！？」

「ああ聞いてる聞いてる。お前はその格好でその辺ろついでこいや」

「無茶いな！こんな格好でうるつけるかっ！」

「選んだ私としてはちよつとショックかなあ」

「ああ違つんですフェイトさん。そういう意味じゃなくて……」

「お前も大変やな」

「お前が言つな！！」

因みに今の格好は、黒のカーディガンに、またフリルのついた白のロングスカートに麦わら帽子という格好だ。

完全にこの格好つてお嬢様じゃね？

そんな疑問を抱きながら、はやてとまた漫才展開。

そしてまたデバイスを構えたなのはさんに止められる。

フェイトさんとヴィヴィオちゃんは、離れた所で楽しそうに笑っていた。

「「ごめんなさい」」

二人揃ってなのはさんに謝る。

「うん。本当に気を付けてね」

「「肝に銘じます」」

「なのは、チーム分けだけどうとする？」

「フェイトちゃん。そうね」

「アレン、ウチらチーム分け決めとくから、次の服着てきい」

「てか僕にも少しは選ばせるよ」

「ん？お前そんなん気にせえへんやろ？」

「……………言い返せない」

「やる？それと着替え終わったらヴィヴィオちゃんの相手してや。」

結構もめるかもしれんから」

「りょくかい。ヴィヴィオちゃん。着替え終わるまで待っててね」

「うん！」

今度は泣かずに試着室に入った。今思えば何で泣きながら試着室に入らないといけないんだ……

駄目だ。考えたら負けな気がする。

「……さっさと着替えよ。ヴィヴィオちゃん待たせるのも悪いしな」

僕は次の服を何にするか考えながら服を脱いだ。

次はこれにするか。

僕はそれを着て、カーテンを開けた。

「アレナー！」

「っつと」

今度はいきなり抱きついてきたヴィヴィオちゃん。かなり懐かれたな。

いいのかな？こんなに懐かれて？

……………ま、いつか。

「はやて達は……………まだ話してるか」

このままここで話すだけってのもなあ……………

「……………その辺散歩する？」

「うん！」

僕は店の人に許可をもらって、外に出た。

どうせもう墜ちる所まで墜ちたんだ。周りの目なんて気にしない気にしない。

にしてもやけに視線を感じるな。殺気の類ではないけど……………まさか男って即効でばれた！？さすがにそれは嫌すぎるっ！！

「うう……………」

「大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ」

そう言うとヴィヴィオちゃんは笑ってくれた。

ん？待てよ……………そうか！わかった！きっとヴィヴィオちゃんの瞳の色が違うのが珍しいからだ！

だから僕は関係ない！

……………多分。

「じゃ、その辺散歩しようか」

「うん！」

トントン

ヴィヴィオちゃんの返事を聞いて歩きだそうしたら、肩を叩かれた。

「？」

誰かと思って振り返ると、ガラの悪い男達がいた。

数は5人。全員嫌らしい笑みを浮かべていて気持ち悪かった。

「ねえねえ、君暇でしょ？」

これはナンパか？まさかヴィヴィオちゃんを！？こいつらが噂のR・O・R・I・K・O・Nなのか！？

「ガキのお守りなんてつまらないでしょ？」

あ、僕みたい。

「なあ俺達と楽しいことしようぜ」

肩を組まれる。

「あ、あの……」

「あん？ガキは帰ってる」

ドン

「きゃっ」

男の一人がヴィヴィオちゃんを突飛ばした。

「……………てめえら」

「あん？」

「失せろ」

そう言っつて肩を組んできた男の鳩尾に肘をいれた。

「がはっ」

「なっ。て、てめ……」

いちいちセリフを聞く気もないし、それに何より下衆の言葉なんて聞きたくなかった。

次々と気絶させる。

「ひ、ひいつ……お前一体……」

「正義の味方」

そう言つて最後の一人の顔に拳をめり込ませた。

「大丈夫？ ヴィヴィオちゃん」

倒れてる男たちに目もくれず、ヴィヴィオちゃんに手を差し出す。

「う、うん。ありがとう」

僕の手をとつて、ヴィヴィオちゃんは笑ってくれた。

「なんかこのままうついても危なそうだし、戻ろっか」

「うん！」

「あ、ど「いつとつてん!」?」

「あーわりい。その辺散歩してたんだ」

「だったらせめて一言言いやあ」

「だから悪いって」

「あ、それ私が選んだ服だ」

なのはさんが僕を見てそう言った。

なのはさんの選んだ服は、黒の薄手のフード付きコートに赤のＴシャツ、白のミニスカートだ。

ま、ミニスカートはかなり恥ずかしかったけど、ゴスロリよりはマシだ。

「その格好でうるついとってんな……」

「開き直ったのさ。さすがに視線を感じるとかなり恥ずかしかったけどね」

「……成る程。納得」

「？何で視線が集まるかわかるのか？」

「……知らんほうが幸せわ」

「はやての言う通りね」

「アレンくんは知らないほうがいいよ」

「何だ？ナンパにひっかかったのと関係あるのか？」

「ナンパにあったんや……」

「これは本物ね……」

「女の子に生まれてくればよかったのにね……」

何か滅茶苦茶失礼なこと言われてる気がする。

「ヴィヴィオね、その時にアレンに助けてもらったの」

「そうなんだ。ありがとうアレン。ヴィヴィオを助けてくれて」

「気にしなくていいですよ。それに僕がもっと気を付けていれば……」

「…」

「ん？何かやられたんか？」

「ヴィヴィオちゃん、そいつらの一人に突飛ばされたんだよ」

「！大丈夫なのヴィヴィオ!？」

「うん。大丈夫だよ。それにアレンがヴィヴィオの為に戦ってくれたの」

「そうなんだ。本当にありがとう。アレンくん」

「いえ。本当なら突飛ばされる前に全員気絶させればよかったんです……すいませんでした」

「ううん。気にしないで。私達の代わりにヴィヴィオを守ってくれたんだもの。充分だよ」

「……………そうですか」

「……………アレン。ちょっと来てくれへんか？」

「何？」

はやてが僕の首に腕を回す。

「お前、まだあんときのこと気にしてんのか？」

「……………別に」

「気にしてんねんな……………」

「もうこの話は終わろう。今日はせつかくの休日だし、楽しまなきゃ損だろ？」

「……………そうやな。この話はもうしまいやー！」

そう言っってはやては僕から離れた。

「よっしゃ！みんな、次はお待ちかねのヴィヴィオちゃんの服やで！これ見て暗い雰囲気なんて吹き飛ばそう！」

「うん！そうだね！」

「ヴィヴィオの番だあ！」

「よかったねヴィヴィオ」

うーん……………みんなの雰囲気は晴れたのはいいけど、なんか複雑だな……………

そう思いながら、試着室に向かった。

「……………何だこの服」

何でこんな服がこの店にあるの？

いやゴスロリよりはマシだろうけど……………

いやでもな……………

「アレ、早よしいや〜」

はやてから催促の声がかかった。

「……………今度こそ爆笑されるな」

僕は、腹を括ってそれを着た。

「お待たせ」

そう言っつてカーテンを開ける。

「」「」……………」

今度は完全に固まった三人。爆笑されるよりつらいかも。

「アレン似合ってるよ!」

「ありがとうヴィヴィオちゃん」

出来れば男物の服を着ているときにも言っつてね。

「な、何やそれ…………」

はやてがやっつとの思いで口を開いた。そりゃそっつだろっつな。こんな服着てりゃ。

「そ、そんな服あつたんだね……」

「でもそれすら似合ってるのってすごいよね」

「……ははは」

僕の着ている服とは………

「にしてもお前、セーラー服なんてよお似合うなあ。お前何着せても似合うんとちゃうか？」

そう、僕が着ているのはセーラー服だ。襟と袖の部分が水色で、リボンは赤。スカートも水色で、後は全部白だ。

何でこんなもんがあるんだ？

そう思わずにはいられない。

「……何この微妙な雰囲気？」

「いやだって……なあ？」

「え、えつと……ねえ？」

「わ、私にふらないですよ」

「何のはなし？」

「……はあ。疲れたし、もう……で寝るわ。おやすみ」

『…………マスター』

「ぐー」

「「「寝るなっ！！」「」

ドスッ×3！！！！

「ぐぼあっ」

悪魔3人に無理矢理起こされた。

「げぼっげぼっ。死ぬわっ！！」

「アレンが悪い」

「いくら何でもここで寝るのは駄目だよ」

「聞いてた通り、どこでも寝るんだね」

「…………因みに誰から聞きましたか？」

「フェイトちゃんから」

「…………どんな誉め言葉でしたか？」

「いつもやる気がなくて仕事さぼってばっかで、たまに仕事をやってると思ったら寝ているし、事件の報告書は適当。一言で例えるなら万年グータラ男だって」

「…………素晴らしい誉め言葉ですね」

「相変わらず神経図太いな……」

「失礼な！僕の心はシルクより繊細なんだぞっ！」

「くくへえくくくく」

「………すみません。昔蚤の心臓って呼ばれてましたはい」

「くくくくよるしいくく」

「くくくく………」

「元気だしてアレン」

小学一年生に慰められる、アレン・ウォーカー18歳。情けなさすぎる……

「はあ………まだ始まったばかりかなんだよなあ………次はどんな地獄が待ってるんだろう………」

そんなことを呟きながら、元の制服に着替えた。



第三十四話 楽しいデート？

「アレンスィデ」

「うん……」

「何て言うか……」

「微妙やな」

グサグサグサッ！

「ひ、酷すぎる……」

僕達は今、今度こそ僕の服を買いに来たのだが……

男物の服を着た感想が、全員なんか微妙らしい。

こういつときって泣いていいよね？もう泣きまくってるけど。

「アレン似合ってるよ」

グサッ

ヴィヴィオちゃんにまで言われた。

「ま、まあ気を落さないでアレン。きっとアレンに似合っているからっ！」

フエイトさん……すでにそのセリフは18回目です。

「そうだよっ、必ずあるよっ!」

なのはさん……そのセリフも18回目です。

「お前、やっぱり女の子の格好のほうがあえんとちゃう?」

はやて……そのセリフはもう数えてねえよっ!!

てか皆して僕のコンプレックスである顔のこと散々馬鹿にしゃがって!チクショーツ!!

「ふむ……なのはちゃん、フエイトちゃん。今度こそ決着のときや」

「成る程……いいわよ。その勝負、受けて立つ!」

「あ、いいね。私も受けて立つよ!」

「よっしゃ。なら、制限時間は10分や。それまでに選んだもんで勝負ってことでもいいな?」

「ええ」

「うん」

「さっきから何の話をしてるんだ?」

「ん?ああ。さっきの勝負の続き。お前女物の服は何着せても似合

ったけど、男物の服全然似合っていないじゃん？だからこそ、これで勝負を決める！勝ったらそやな……………どうしょ？」

「じゃあ勝った人の昼食は、アレンのおごりね」

「へ？」

何で僕？

「よっしゃ！絶対負けへんで！」

「私だって！ヴィヴィオ、行こっ！」

「あ、フェイトちゃん！フライングはズルいで！」

……………この人達って、役職はかなり上だよな？つまり給料もたんまりな訳で……………何でこんなにけちくさいんだ？

「……………ま、なるようになれだ」

『マスター随分落ち着いてますね』

「そりゃさつきと違ってちゃんとした服だからな」

『成る程。にしてもマスター……………本当に男ですか？』

「……………そんなに酷いことを言われたのは生まれて初めてだよ相棒」

女に生まれれば良かったとかは聞いたけど、男なのか？と聞かれるなんて……………

「最悪だ……」

『今日はマスターにとって厄日ですね』

「お前も原因の一つだけだな」

『いやあ』

「褒めてないからっ!」

まあ、そんな会話をアイとしたり、服を選んでも四人を眺めたりしながら、この十分をすごした。

「で、これらを着ればいいのね。判定はどうすんの?」

「ん〜、多数決でええやろ。あ、もちろん自分の選んだ服に投票するのはなしな」

「わかった」

「りょうかい〜」

「絶対負けないよ！」

「こっちだって！」

これが女と女の戦いか。

すごい気迫だ。

ま、いいや。さっさと着替えよう。

「……………ん？」

何だ？ 周りから殺気を感じる。かなり多いけど、全員素人だな……………  
…数は……………駄目だ。多すぎてわからない。まるでここにいる客全員  
が敵のような……………

そこまで考えて、僕は後ろから視線を感じたので、振り返った。

するとそこには……………大量の男たちが僕のことを睨んでいた。

周りを見回しても、何故か男だけが僕のことを睨んでいた。

多分ここにいる男全員が僕を睨んでいる。

「……………何で？」

暗殺者とかではないだろうけど……………何で睨まれてるんだ？

ん……………ま、放っておいても、害はないだろ。さっさと着替  
えよ。

『相変わらずですねえ』

「?どづいづこと?」

『いや何で男たちが睨んでいるかですよ』

「?えつと……………何となく?」

『いやそれあり得ないでしょ』

「じゃああれだ。僕の男らしさに嫉妬して……………」

『嫉妬の部分はあってますが……………はあ、もういいです』

「何だよそのあきたようなため息は?」

『いえ気にしないでください』

「?変な奴……………」

「アレン、早よ着替ええやっ!」

「つと、いけねっ」

僕は試着室の前で立ち止まっていた。

あわてて中に入り、服を脱ぐ。

さて、今度はどれから着るか……………

なるべく男らしいのを……………これかな？

僕は選んだ服を着た。

「ど、どうですか？」

僕は緊張しながら四人に聞いた。てか、周りからの視線が怖いんだけど……………

「おお、ばつちちゃん！誰が選んだん？」

「私だよ」

なのはさんが声をあげた。これ、なのはさんが選んだのか……………センス結構いいな。まあ、服なんてどうでもいいんだけど、そこはやっぱり男らしくありたいじゃん？やっぱさ。

なのはさんの選んだ服は、ジーンズに黒の袖無しジャケット、赤のTシャツという男らしい格好だ。

やっぱ選ぶとしたらこうというのがいいよね。

「中々やるわねなのは……」

「しかもアレンの要望である男らしい服ってのも、アレンにとってはポイント高いで」

「えへへ」

「ママ、すごいね！でもヴィヴィオも負けないよっ！」

「ママだって負けないよっ！」

女の人の戦いはすごいな。小学一年生にまで影響を与えるとは……ま、僕としてはこの服でもういいんじゃないかとも思っただけだね。それに周りの視線も辛いし……

「よっしゃ、次や！まだ決まったわけやないんやから！」

「そうだね。アレン、次行こう」

「わかりました」

この服、結構気に入ったんだけどな……ま、買えばいいか。

何か服を選ぶのに若干こだわりが出来てしまったかも……

絶対さっきの女物の服着たのが原因だろうなあ。

そんなことを思いながら、次にいった。



「これを選んだ上にその姿を見て爆笑している奴が？」

「ま、まあ確かに酷いねこれは……」

「酷いっていうより、すごいわね。一体どこにあったのかしら？」

「ああ、それは……やっぱり言うのやめとくわ」

「ええっ！？そこまで言っというて!？」

「ま、まあええやん。次行こ次」

「ねえママ」

「ん？何？ヴィヴィオ」

「何であの服フリフリついてるの？」

その質問に答えるのは難しいような……

「あれはね、アレンの頭がおかしいから……」

「こんな服を選ぶ奴にだけは言われたくない」

「確かにね……」

「じゃはは……」

「ひどいっ！なのはちゃんもフェイトちゃんも同意するんか!？」

「うん」

ガーンッ

はやての後ろにそんな文字が見えた気がした。

「じゃあ僕次の服着ます」

「あ、うん。わかった」

「ってウチのことまた無視かつ!？」

無視無視。

さて、次は………

「うーん、これまた………」

「まあ、ありっちゃありやな」

「そつだね」

「アレン似合ってるよっ！」

今着ているのはヴィヴィオちゃんを選んだ服。

この子センスが僕にはわからない。

アロハシャツに麦わら帽子、サングラス……

なんでハワイ？

「これにはどうコメントしたらええんやろ？」

「さあ？」

「似合ってる似合ってるっ！」

ヴィヴィオちゃん、おおはしゃぎ。

「うっん、じゃあラスト、フェイトちゃんを選んだ服着てきい」

「うっん」

ラストはフェイトさんの選んだ服か……

「ま、あの人の選んだものなら大丈夫だろ」

そう思つて服を見た。

「おおっ……………」

思わず簡単の声をあげる。

「これはフェイトさんの勝ちだな……………」

僕はそれを着て試着室を出た。

「……………」

「やっぱりアレンにはそれが似合ってるわね」

「？」

「フェイトさん、素晴らしいセンスです」

なのはさんとはやてがわからないという顔をして、フェイトさんと

僕が大絶賛、ヴィヴィオちゃんはわからないという顔。まだこのセンスはわからないか……

「……いや、確かにお前にはぴったりやけど……」

「そのプリントは……」

フェイトさんの選んだ服は、ジーンズに赤の文字で背中の部分に『お昼寝命!』、と赤の文字でプリントされた青のTシャツだ。

何てセンスがいいんだ。完璧だ。

「ま、まあお前がええんやったらそれでいいけど……」

「じゃあ誰のが一番良かったか、多数決しよっか」

「そうだね」

「僕これです！これに一票！」

「ああそうかい。えっとウチは……なのはちゃんのに一票」

「私はヴィヴィオの服に一票」

「ヴィヴィオはママのほうに一票！」

「私はヴィヴィオに一票ね」

「じゃあ結果は……なのはちゃん二票、ヴィヴィオちゃん二票、フェイトちゃん一票やな」

「え、じゃあ……」

「なのはちゃんとヴィヴィオちゃんの同点一位やな」

「やったあ！一番だよママ！」

「うん、良かったねヴィヴィオ」

「で、結局どれを買うの？」

「そら一位のやろ」

「……あのアロハもなのか？」

「もちろん。やないとヴィヴィオちゃん泣くで？」

「ぐっ……」

「ま、諦める」

「く、くそ……しかも二人に昼食をおごらないといけないんだよな……最悪だ」

そんなことを呟きながら、服を買った。

買った服のどつちかを選んで着ると言われたので、なのはさんの選んだ服を着た。

ヴィヴィオちゃんがちょっとがっかりしてたけど、さすがにアロハ

シャツで街はうるつけない。

それから次は昼食に行くことになり、僕は財布の中を確認した。  
問題ないな、うん。

……午前中だけで一日分の体力を使いきった気分だ。

まだ始まったばかりなのにな……

一体この後どうなるんだろう……

その事を考えると、ため息しかでなかった。

### 第三十五話 楽しいデート？

（アレンside）

「よ、よかった……」

僕は心の底から安堵した。

なぜか？

昼食がマ ドナルドという、安いジャンクフードになったからだ。

いやホントよかった。高い所だったらどうなっていたか……

「この次はどこ行く？」

「そっやね〜」

「ここなんてどうかしら？」

「ヴィヴィオは行きたい所ある？」

「うーん……ママたちと一緒にだったらどこでもいいよ」

「ヴィヴィオ……よし、今日の晩ご飯はヴィヴィオの好きな食べ物  
作ってあげる」

「ホント!？」

「うん、ホント。フェイトちゃんとはやてちゃんも来る？」

「うん、行くよ」

「なのはちゃんの家行くん久しぶりやな」

四人は昼食を食べながら、楽しそうに話している。

うん、和むなあ。出来ればこのまま僕の存在を忘れてそのまま話  
していて欲しいものだ。

僕はセットのドリンクを飲みながらそう思った。

はあ、平和最高！

「あ、良かったらアレンもうちに来る？」

……………はあ、平和最高！

「って同じこと二回言っな！」

「……………人の心読むなよ」

「で、来る？」

「あ、悪いんですけど、夜は用事が……………」

「来る？」

「いやだから……………」

「来る？」

「……………はい」

「ん、よろしい」

「……………僕は自分の人生を恨むよ、アイ」

『勝手に恨んでください』

「……………お前すら僕を裏切るか？」

『味方だった覚えがありませんが？』

「……………はあ。もう突っ込むの疲れたからやめるわ」

『懸命な判断ですね』

「ん」

「アレンのデバイスって変わってるよね」

「そうですね？」

「普通はそんな漫才みたいなことはしないよね」

「……………ま、こいつは僕が作ったから、僕の性格が反映されてるんじゃないですか？」

「アイオンってアレンが作ったの？」

「せやで。昔っからデバイスオタクで、八歳の時ついに自分で作ったっていうほどや。技術関連の才能も飛び抜けとったからなあ」

「その頃からこんなにやる気がない奴だった？」

「いや、ウチが知り合ったんはこいつが九歳の時でな。デバイス作ってたっていうのはアレンから聞かされた話やし」

「へえ〜。ちなみにその頃はやる気あった？」

「いいや。訓練とかサボりまくってたで。それにこいつ信じられんで。模擬戦のとき毎回寝ながら戦ってんねんで？ありえへんやろ？」

「そ、それは……」

「本当なの？」

「ん〜。確か模擬戦は毎回さぼってたような……ああ。そういえばよく組み手のとき寝て、気付いたら相手を組み伏せていたってのがあったっけ……」

「あ、組み手やったか」

「そうだよ。いくら僕でも、寝ながら魔法は使えないよ」

「そっかあ。さすがに無理か〜」

「いや、寝ながら組み手もあり得ないよ？」

「しかも勝ったんでしょ？アレンって一体何者なの？」

「え、えっと……何て言えばいいんだ？」

「まあ才能とやる気が反比例した奴やな」

「クロノも言ってたなあ、そういえば」

「あいつはいつか殺す……」

「ん、アレン？まさかうちの兄に何かするつもり？」

「いやまさか。僕がそんなことをするはずないじゃないですかあ」

「ならいいんだけどね」

「で、これからどうします？」

「ん、何か話そらされたような気がするんだけどなあ」

「気のせい気のせい」

「ま、いつか。それよりどこ行くか……」

ホツ……話をそらすことに成功した。僕の正体について詳しく問い詰められたら、きつとボロがでる。

いくら経歴があるとはいえ、僕はこの七年どこにも所属してないんだ。調べられたら終わりだ。その辺はクロノを信じるしかないけど

……まあ大丈夫だろ。あいつは腕だけは確かだからな。

ドドオンッ!!

「え……」

どこに行くか相談している四人を見ながら考え事していると、いきなり爆発音が聞こえた。

この時僕は一つの可能性を思い浮かべた。

例のガジェットが現れたかもしれない、と。

「アイ、セットアップ!」

僕は急いでバリアジャケットに身を包む。

「アレン!?!」

「はやて、例のガジェットかもしれないっ! 民間人の避難の誘導と救助、それと管理局に連絡を頼む! このことをクロノに伝えてくれ!」

「わかった!」

「例のガジェットって何の話?」

「詳しくははやてかクロノに聞いてください! 行くぞ、アイ!」

『オーライ、マスター。いつでも』

僕は店の外に出て、飛んだ。

「例のガジェットか!？」

『はい、おそらく……場所はここから南に距離80』

「もう見えた」

僕の目に、黒いガジェットが映った。あれが例のガジェットか。クロノの話だと、あのガジェットは普通と違いは、結界探知に引っかけられないこと、攻撃を受ける瞬間アンチマジックフィールドAMFの濃度を強めること、単独ではなく連携して戦うこと、動きが速くなっていること、まあこれくらいか。

正直やっかいだな。もし大量生産できるのならかなりの脅威になる。

今のガジェットの数は二十か……

被害状況は……まだあんまりひどくないな。よし、さっさとケリをつける!

「レル、フェル、セットアップ」

両耳のピアスが二丁のガンソードに変わる。

「モードガトリング」

レルとフェルが、ガンソードの形から、機関銃の形に変わる。

その銃口をガジェットに向け、叫んだ。

「ガトリングショットッ！！」

いくつもの魔力弾が、レルとフェルから放たれる。

ドドドドドドドドオンッ！！

全弾命中。残り十三機。

今ので七機か……こりゃやっかいな代物ってのは間違いないな。

不意打ちでこの結果はショックだな。

「……これ以上は街に被害がでるな。次はフランだ。フラン、セツトアップ！」

レルとフェルをしまい、指輪のフランをトンファーに変える。

「行くぜ……………モードロング！」

トンファーが伸びる。

そしてそれを、

「はあああああああああああああああああああああああああ  
っ！！」

横薙に振る。

ドドドオンッー！

三機撃墜。残り十機。

やっぱりさっきみたいな不意打ちみたいにくましくないな。

ガジェットのうち、三機が前から、二機が右から、三機が左から、二機がレーザーを放ってきた。

マジで連携してるのな。

僕はフランを元の長さに戻し、左手にフラン、右手にアイオンを構える。

「行くぜ……」

くはやてsideく

「じゃあ、アレンはクロノからの任務をうけていて、そのガジェットを調べるために戦いにいったの？」

今、私はフェイトちゃんとなのはちゃんに、例のガジェットについて話している。どうやらこの事は一部の人間しか知らなかったらし

い。まあ私でも知らなかったし、無理もない。

もちろん、説明の際、アレンの複写眼アルファ・ステイグマのことは話していない。

『はやて、状況は？』

クロノくんから通信が入った。

「現在、例のガジェットとアレンが交戦中、被害は軽傷者5名、重傷者1名。命に別状なし」

『ガジェットの数は？』

「初めの数は20、今は10に減った」

『その程度ならアレン一人で問題ないな』

「そやな」

あいつの実力やったら、千機のガジェットに囲まれても無傷で帰ってくるやろつ。

「私、加勢に行ってくる！」

フェイトちゃんがいきなりバルディッシュをセットアップした。

「ちょ、フェイトちゃん!？」

「なのは、ヴィヴィオのことお願い!」

「わかったよ！気を付けて！」

ま、まずい！このままやったらアレンが複写眼使ったところを見られてしまう！

「ク、クロノくん……」

『……あいつならうまくやるはずだ。多分』

「？何の話？」

「ああ、気にせんとって！ほなら私は、現場の担当して来るから、ヴィヴィオ頼んだで！」

「うん、大丈夫。任せて」

私は現場の指揮を任せてもらうために、今指揮をとっている人のところに走った。

「プロテクション」

バリアでレーザーを防ぐ。

次にトンファアのしっぽの部分から重り付きの鎖を出し、それで右

から迫ってきた一体に絡めて、それで隣のガジェットを殴り、互いに爆発させる。

次に左から迫ってきたガジェットが放ったレーザーを、鉄扇を開いて、それで弾く。

「アイ、モードブーメラン」

鉄扇がブーメランに変わり、それを奥の二機に向けて投げる。

「レル、セットアップ」

それと同時にレルを出し、左から来た一機を切り裂いた。

トンファアの鎖を戻し、正面から来たガジェットに対して、間にあるガジェットを挟みこむような形になるよう移動する。

そして間に挟んだガジェットをトンファアで殴る。

殴った後、フランを戻し、かえってきたブーメランを受け取り、もう一機をブーメランで切り裂く。

奥にいた二機のうち破壊できたのは一機だけか。

残りは四機。

そろそろいいだろう。複写眼、発動――……

「アレン！」

「!？」

僕は慌てて目を隠した。何故なら何でかフェイトさんがやってきたからだ。

何で？

僕はそう思いながら複写眼を解除した。

「な、何でフェイトさんが？」

「加勢に来たよ！部下を一人で戦わせるなんて出来ないからね！」

「……………」

この人はいい人だ。いい人なんだけど……………何だかなあ

仕方がない。あれを使うか。

「フェイトさん、僕は奥の奴をやるんで、手前の三機お願いします」

「わかった、行くよバルディッシュ」

『はい、マスター』

よし、これで何とかなる。

僕は前の三機を無視し、奥の一気に突っ込み、魔法を唱えた。

「ブラックカーテン」

僕の体から黒いマントが出て、僕とガジェットを覆いつくすように広がる。

それが球状に広がり、閉じた瞬間。

複写眼、発動。

解析……………解析完了。

解析の途中でガジェットがレーザーを放ってきたが、プロテクションで全て防いだ。

僕は最後のガジェットを、アイで真っ二つに切り裂いた。

「……………ブラックカーテン解除」

僕はブラックカーテンを解除し、フェイトさんの方を向いた。

「お疲れ様」

フェイトさんの方も終わったようだ。

「そちらも」

「何かガジェットについてわかった？」

「……………何でフェイトさんがそのことを？」

「はやてから聞いたのよ」

「あ、成る程」

なら複写眼のことは話していないだろうな。

「ま、死傷者も出なかったし、良かったですね」

「重傷者は1名いるわよ」

「死ぬよりはましですよ……まあ、怪我人が出ないのがベストでしょうけど……あのガジェットじゃそれは難しいですよ」

「確か結界探知にかからないんだっけ？」

「ええ。ですから早く犯人を見つけないと……あのガジェット用の避難経路とかも調べた方がいいかも……まずはクロノに報告ですね」

「そっね」

僕とフェイトさんは、はやて達のもとに戻った。

「あ、フェイトちゃん、アレン」

「他に怪我人はいた？」

「幸いにもおらんかったわ。この程度の被害ですんだんは奇跡に近いで」

「アレンのおかげだね」

「？何ですか？」

「だってアレンが素早く行動したおかげで、被害が少なくなっただよ？」

「そんなこと……」

「ないって言える？」

「う……」

「なんや自分。褒められるのに慣れてないんか？」

「……うるさい」

「ははっ、照れてる照れてる」

「照れてませんっ！」

「ホンマかあ？」

「本当だよっ！」

僕はフェイトさんとはやてにいいように弄ばれている。はあ、何でこうなるんだろっな……

まあこんなことが起こったから、今日はもう遊べないだろうな。

「僕はこれからクロノに報告があるんで、ちょっと失礼します……」

「待ち」

肩を掴まれる。

「な、何？」

「報告やったら通信でできるよな？」

「あ、ああ……」

「ならさっさと報告しな」

「え、えっと……」

「早よしな」

「……………はい」

僕はか細く返事をした。

「アイ、クロノにつないで」

『了解』

『ん、アレンか？あのガジェットだが、何かわかったか？』

「ああ、それなんだけど今からそっちに……」

「行かんでいい」

「え、でも……」

「データ送ればいいやろ」

「お前まさか……」

「察しがええやん。ええからさっさと送れ」

「はいはい……というわけでクロノ。今からそっちにデータ送るか  
ら、それで我慢してくれ」

『は？何がというわけなんだ！？』

「送信」

『いや待て！ちゃんと報告……』

「後日あらためて。じゃあな」

『おい待……』

通信を切った。

「これで満足？」

「うん。ほな行こか」

「はやて、どこ行くの？」

「ん？決まってるやん。さっきの続き」

「あ、成る程。だからクロノの報告を……」

「そゆこと。ほら、早よ行くで」

「へい」

「なのは達は？」

「ああ、待ち合わせ場所におるで。……お、ほらあそこ」

はやての指差す方向に、なのはさんとヴィヴィオちゃんがいた。

「おーいっ」

向こうもこっちに気付いたようで、手を振ってきた。

「よっしゃ、競争や！ビリの奴が晩飯の材料おごりっ！」

「はあっ！？何だよそれってフェイトさんもはやてももう走ってるし！ああ～不幸だあっ！～！」

僕も急いで走りだした。

結果は……言いたくない。

### 第三十六話 楽しいデート？

（アレンside）

時刻はすでに夕方。

僕達はいろいろな場所に行った。

それはもうあちこちに行った。

それに対する僕の感想は、「疲れた」の一言につきる。

今は訓練場に向かって歩いている。

「はあ、疲れた……」

「ごめんね、いろいろ付き合わせちゃって」

フェイトさんが謝ってくる。

まあ荷物持ちにした上に、女の子が行くような店にしか行かなかつたからなあ……

しかも荷物の量が半端ないんだ。もう前が見えなくなるくらい。

まあでも……

「いいですよ別に。僕も楽しかったから、気にしないでください」

「そう……ならよかった」

フェイトさんは笑ってくれた。

「あ、そういえばチーム分けは？」

僕は気になったことをはやてに聞いた。

「ああ、それは私とフェイトちゃん、なのはちゃんとアレンになったで」

「わかった。よろしくお願いします、なのはさん」

「うん、こっちはこそ」

「で、また勝ったら何かあるのか？」

「うん……やったら、こん中の誰か一人に、一度だけ、言うこと  
きかせることができるってのは？」

「……何か滅茶苦茶嫌な予感しかしないんだが……」

「気のせいや」

「ヴィヴィオ、ちゃんと見ておくのよ、ママたちの戦い」

「うんー！」

ヴィヴィオちゃん、今までと比べても一際輝いてるな。そんなに楽しみなのか？

「取り敢えず、早く行こう。晩ご飯が遅くなっちゃうしね」

そう言って走りだすのはさん。それにヴィヴィオちゃん、はやて、フェイトさんも続く。

僕が戦うことになるのはフェイトさんになるだろうな……

何か仕組まれてるような気がしてきた。ま、まあ気にしないことにしよう。

「アレンーッ！早く来いや！」

はやてに大声で呼ばれる。

「はいはい」

僕ははやて達に向かって走りだした。

只今準備運動中。

それから軽いウォーミングアップをやり、模擬戦が始まった。

「行くよアレンくん」

「了解」

「絶対勝つでフェイトちゃん」

「うん」

後方支援がはやとなのはさん。で、前衛が……

「手加減しないよ、アレン」

「出来ればして欲しいですね、フェイトさん」

目の前でバルディッシュを構えるフェイトさん。

「レル、フェル、セットアップ」

僕もガンソードを両手に構える。

フェイトさんにはさっき僕の戦いを見られた。

一回くらい大したことないかもしれないが、僕は今持っている全ての武器をあの時使った……

つまり手の内はほとんどばれていると考えたほうがいい。

「……………最悪」

「試合開始！」

僕が呟いたのと同時に、試合開始の音が上がった。

それと同時にフェイトさんの姿が消えた。いや、消えたように見えるほど早く僕の背後に移動したのだ。

「はあっ！」

バルディッシュを振りおろしてくる。

僕はそれを振り返ってレルとフェルをクロスして受け止める。

「さすがね、今のタイミングで防ぐなんて……」

「いやいや、さすがに一瞬で勝負がつくのはいやでしょう……」

僕はそう言ってバルディッシュをはねのける。

「モードガトリング」

至近距離だ。ダメージは与えられるはず……

「ガトリングショット！」

僕は魔力弾を何発も放つ。

「プロテクション」

だがフェイトさんは避けられるものは避け、避けられないものはプロ

テクシヨンで防いだ。

「だったら、フラン、セットアップ」

フェルをしまい、フランを出す。

「モードロング」

トンファーが伸び、それでフェイトさんを横薙に攻撃する。

それをフェイトさんはあっさり避け、僕に突っ込んでくる。

今だ！

僕はトンファーを戻しながら、同時に鎖を放つ。

「なっ」

さすがに予想外だったのか、鎖は見事にフェイトさんを捕えた。

「もらった、ディバインバスター！」

レルでディバインバスターを撃つ。

「甘いよ」

だがフェイトさんは鎖を一瞬で斬り、ディバインバスターをよけた。

「やっぱり簡単にはいかないか」

「今度はこっちの番よ。サンダースマツシャー！」

「だったらこっちは……ボルトクラツシャーッ！」

フェイトさんから放たれたレーザーと、僕から放たれた雷撃がぶつかる。

ドゴゴガアアッ！！

激しい爆発音。土煙で相手が見えない。

くそっ、これが狙いか……後ろに……！？

「なっ！？バインド！？いつの間に……！」

僕の後ろにはいつの間にかバインドが仕掛けてあった。

成る程、初めに僕の後ろに回り込んだ時に仕組んでいたのか……

なのはさんを見る。

今ははやてと狙撃戦の真っ最中。

助けは期待できないな。なんかもはや個人戦になってるような……

「あー、てかやばいつ！アイ、解除はまだか！？」

『もうすぐです……解除完了！』

「よし、早くここから……！」

「サンダーフォールツ!!」

フェイトさんの声とともに稲妻が落ちてくる。

「なっ、ま、まずいつ!し、疾風迅雷っ!!」

神経の伝達速度を底上げし、一時的に限界速度で行動する事ができるこの魔法で稲妻から逃げる。

このままフェイトさんの後ろに……

〈フェイトside〉

「まだね……」

私は土煙を見下ろしながらそう確信する。

あのタイミングでサンダーフォールを避けるなんて……正直少しシ  
ョックだな。今ので決まると思っていたし……

多分後ろから奇襲にくるはず。ならバインドをまた設置して……こ  
れでよし。後は待つだけ……

後ろに気配、来た!

振り替えると、そこには……

くアレンsideく

多分後ろに回り込んだらまたバインドに捕まる。かといって正面から行ったら狙い撃ち。なら、

(なのはさん、聞こえますか?)

(アレン?何?)

(僕は今からフェイトさんの後ろに回り込みます。その瞬間、僕に向かって魔法弾を撃ってください)

(え?でも……)

(おそらくバインドを設置しているので、その破壊が目的です)

(成る程。でもはやてちゃんがそれを許してくれないよ?)

(僕がはやての隙を一瞬作ります。その瞬間に……)

(わかった、やってみる)

(頼みます)

僕はフェイトさんの後ろに回り込み、バインドにかかるより先にレルではやてに魔力弾を撃つ。

「ふん、甘いで」

それをあっさり防ぐはやて。しかしそれが一瞬の隙となった。その隙についてなのはさんが僕に向かって魔力弾を一発撃つ。

僕はバインドにかかり、フェイトさんがこっちに振り返る。だが遅い。すでにバインドはなのはさんの魔力弾で破壊されている。

「ふっ……」

それに気付いたフェイトさんはさらに早くバルディッシュを振る。

だけどそれでも僕のほうが早い！

「バーブルシューッッ！！」

僕はフェイトさんの腹に炎の拳を打ち込んだ。

「くっ……」

ぶっ飛ばしたがすぐに体勢を立て直すフェイトさん。だが隙は充分できた！ここを畳み込む！

「ガトリングショット！」

「プロテクション！」

「カーテナデイチショットッ！！」

風の弾丸を放つ。

「ソニックムーブ！」

高速移動でよけるフェイトさん。

まだだっ！

「デープウォルショットッ！！」

今度は水のレーザーを放つ。

「くっ」

かすって動きが一瞬止まった。

今だ！

「疾風迅雷！」

一気にフェイトさんに突っ込んでトンファーで突いた……と思った  
ら吹っ飛ばされた。

ドオンッ

床に叩きつけられる。バリアジャケットがあるとはいえ、やっぱり痛い。

これははやての攻撃に吹っ飛ばされたのか……ここから早く離れな  
いと！

僕は急いで立ち上がって、転がるように逃げた。

瞬間。

ドオンッ

さっきいた場所に魔力弾が当たる。

あ、危ねえ……

(なのはさん、何かあったんですか?)

(ごめん。フェイトちゃんが君にやられる前に私に魔力弾を飛ばしてきて、その隙をつかれたの)

(そうだったんですか。すいません、僕が気付いていたら……)

(反省は後だよ。まずは目の前の戦いに集中!)

(了解!)

僕はフェイトさんが放つ魔力弾を避けながら近づく。さっきみたいな小細工は通じない。なら、

「力技だ! フラン、アイ、セットアップッ!」

アイとフランを構えて突っ込む。

「面白いわ……バルディッシュ、こっちも行くわよ!」

『はい、マスター』

「プラズマランサーッ!」

「来たっ!行くぞアイ!」

『了解』

「モードディフェンザーッ!」

アイを開き、そう叫ぶと同時にアイが2メートルくらい大きさに  
なった。

「なっ……」

「このまま突っ込むぞっ!」

『了解!』

「ならこっちだって……」

そう言っつてバルディッシュを構えるフェイトさん。

「突っ込むわよ、バルディッシュ!」

『イエスマスター』

そう言っつて突っ込んでくるフェイトさん。

「ならこっちだって……アイ、モードオフィンザーッ!」

アイの大きさがもとに戻る。その後、アイの先端が鋭く尖る。

「行くぞっ!!」

そう叫んで僕も突っ込んだ。

「はあああああああああああああああああああああ  
っ!!!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
っ!!!!」

ドゴゴオーンッ!!!!

僕とフェイトさんの刃が交わった瞬間、さっきより爆発が起こった。

「はあ……はあ……」

あ、危なかった!

頼むからもう立つなよ。もう魔力すっからかなんだよなあ。

ま、リミッターぶっ壊せば話は別だけど……

「ここまで苦戦するなんて……さすが元六課のエース」

「褒めてくれてありがとう」

「え？」

「はあっ！」

「っと！」

ガキインッ！

フェイトさんが正面から突っ込んできた。そしてバルディッシュをアイで受け止めて、つばぜり合いをしている。

「まだ立ってたんですね……」

「それでも元エースですから。そっちこそ立っていたのね。驚いたわ」

互いに一度離れ、もう一度バルディッシュとアイをぶつけた。

ドオンッ！

さっきと比べて小さな爆発しか起こらなかったが、それでも残りの魔力全てを注ぎ込んだんだ。

これで立っていたら負けだと思いながら落ちた。

ーーン！

ん？ここどこだ？

アーー！

えっと……何してたっけ？

アレン！

あれ？僕は今気絶してるのか？だったら早く起きないと。

「……ん」

ここは……そつか。模擬戦してたんだ。

「えっと、僕は……」

確か地面に落ちて……

なのに何で大してケガがないんだ？

「ア、アレン……」

「あ、フェイトさんですか？今僕魔力使いきって体動かないんです  
「よ」

「わ、私も動けないの。同じ理由で」

「あ、なら引き分けですかね？」

あれ？おかしいぞ？何でフェイトさんの声が上から聞こえるんだ？  
それに目の前が真っ暗だし。

「フェイトさん、電気とか消してないですよね？」

「え、ええ……」

「じゃあ何で真っ暗なんですか？」

「そ、それは……あ、あなたが私の胸に顔を埋めているから……  
……」

へ？

ま、まさか……

じゃあこの顔に当たっている柔らかい感触も……

「

……………どわあああああああああああああああ  
あああああああああああああつ！！？」

僕は首が折れるんじゃないかというくらいの勢いで首だけ下がらせた。

グキッ

嫌な音が聞こえたが今は無視だ。僕は転がってフェイトさんから離れて、床に頭を打ち付けて、

「ううううめんなさいっ！！！」

と叫んだ。

「う、うん……………」

恥ずかしそうに顔を背けながら赤くなっているフェイトさん。

多分僕の顔も真っ赤だろう。フェイトさんなんか湯気がでていた。

「え、えっと……………な、何でああなったか……………その……………出来ればお教

えくございましたらまことに嬉しいのでございますが……なんて……」

やばい！フェイトさんの顔を直視できないっ！！

上ではまだなのはさんとはやてが戦っている。

この勝負はなのはさんにかかっているのか……

僕もフェイトさんも戦闘どころか動くこともままならない。

「え、えっと……」

やっとフェイトさんがさっきの僕の質問に答えてくれる。

僕は恥ずかしかったので、顔をうつむけて話を聞くことにした。

「アレンが魔力切れで地面に頭の方から落ちていったから、危ない  
と思って最後の魔力を使いきったの」

「……………」

要するに僕を受け止めて地面についたら、自分も魔力切れで倒れた、  
と。

つまり、

「全部僕が悪いんだああああああああああああああああああ  
ああああああああっ！！！！」

穴があったら入りたいっ！！

そんな風に悶絶しながら、僕達は二人の戦いが終わるのを待った。

「あゝ引き分けはくやしいなあ」

料理をしながらそんなことを呟くはやて。

因みに、決着がつくころには僕はある程度回復していたが、フェイトさんはまだ歩けなかったので、僕がおぶって帰った。

当然、二人ともゆでダコのように顔を真っ赤にしながら。

なのはさんとはやてがニヤニヤしながらこっちを見ていたが、突っ込む気力もなかったので無視した。だがそれを勘違いしたはやてが、あまりの恥ずかしさに言葉も発せないうぶな少年とに言ってきた時は、さすがにドロップキックをおみまいした。フェイトさんを抱えたまま。その時にフェイトさんから大ブーイングをうけてからはあまり恥ずかしくなくなった。

今はなのはさんの家で、回復したフェイトさんとなのはさんがヴィオちゃんの相手、僕とはやてが料理を作っていた。

「はあ……ま、滅茶苦茶な命令を受けなくてすむだけマシか」

「誰がそんなひどい命令すんねん？」

「いやお前だよ」

「はあ……さすがにもう突っ込む元気ないわ」

「僕は午前の時点で限界だったよ」

「なんや情けない」

「誰のせいだよ」

疲れているから僕達の声には覇気がない。

「しっかしお前料理できてんなあ」

「ああ、子供のころよくジャングルに放り込まれてさ、その時に食べれる物だけで味をよくするのが難しくてさ。以来料理を勉強するようになったけど、それ以降ジャングルに放り込まれなくなったから全く無駄になったってしまっただよなこれが」

「……………それって、やっぱりあいつらか？」

「ん、そうだよ」

「……………すまん」

「気にすんな。それにさっきは無駄って言ったけど、今役に立ってるしさ。だから気にするなって」

「なんか話繋がってへんぞ？」

「気のせい気のせい」

「まあいいわ。でもそれやったらなんで昔は作ってくれへんかったん？」

「いやお前作る機会なんてなかったろ」

「あれ？そういえば……………」

「はあ…………お、そろそろできるぞ」

「ホンマや。あ、それとって」

「ん、これか？」

「そうそう。それ」

「はいよ」

「ありがとうな」

「さて、んじや出来たことだし。呼んでくるか」

「何かこうしていると家族みたいやな」

「家族ねえ…………確かにそうかもな」

「やる？」

「ああ。悪くないな、そういうのも」

「ま、あんたと夫婦になるなんて死んでもごめんやけどな」

「こっちのセリフだよ」

そんな会話をしながら料理を運んだ。

「「「お、美味しい……」」」

「「そりゃどうも……」」

五人での夕食。一つのテーブルで一緒に飯を食う。

うん。他人と飯を食うのってさえ以来か？

暖かな家族ってこういうのかな？

なのはさんやフェイトさん、ヴィヴィオちゃんやはやてを見てそう思う。

この七年間、自分もそれを味わったはずなのに、どんなものだったかは思い出せない。

義父さんと義母さんを殺されて、激情した時もあったはずなのに……つまり、この七年間は僕は“人”だったんだろう。

それが“化け物”に戻ったから、その時の感情がわからなくなった……

やっぱりどんなに人間らしくしても、所詮は化け物、か。

「アレン？」

フェイトさんがこっちを不思議そうに見ていた。

顔には出していないけど、全然喋らなかつたから不思議に思ったのだろう。

「え？どうかしましたか？」

こっちも不思議そうな顔で聞く。

「ううん。何でもないならいいの。ごめんね。じろじろ見ちゃったりして……」

「別に気にしませんよ。それより今日はしゃべりだけはしゃべりましよう！明日は始末書の山ですよ……」

「うん、そうだね……」

はあ……………本当に始末書の山だろっな。僕だけ。

くそっ、やっぱリクロノはいつか कोरोース。

「あ、そうだフェイトさん」

僕は思い出したように声をかけた。実際は今までに覚悟を決めてたんだが……

「何？アレン」

「勝つた如果说こと一度だけきくってあつたじゃないですか」

「うん。それが？」

「僕、何か最後にフェイトさんに助けられたじゃないですか。だから说つこと、僕にできることなら一度だけ聞きますよ」

僕の発言に驚く一同。

そんなに驚くことか？

「アレンって意外に義理がたいのね」

「本当、意外すぎるよねー」

「なんや、自分にもええところあんなな」

「アレン、ざりがたいー！」

「……………」

これは褒められてるのか？貶されてるか？

ま、いつか。

「じゃあフェイトさん、どうぞ」

「そうねえ……………」

「無理難題押し付けたれ！」

「はやて…………お前まだそんな元気があるのかよ」

「まあな」

「うーん…………ごめんね。今すぐには思い浮かばないから、保留って  
じつで」

「そうですか。わかりました」

「私の胸に飛び込んできてーっ！」

「ぶふうわぁっ」

思わず飲んでいたお茶を吹きかけた。かろうじて踏み止まったが。

「は、はやて。お前な……………」

「ん？私何か言った？」

「う、ううっ……」

僕が睨むがケロツとしている。

対するフェイトさんの顔は真っ赤だ。多分僕も。

なのはさんはヴィヴィオちゃんと一緒にニヤニヤしている。

ころころ。小一にはまだ早いですよ。

「はやて、取り敢えずまずウメボシの刑な」

「まず！？今まずって言ったよな！？」

「さあねえ……フフフフフフフフ……」

「あ、あかん。こいつ今回はマジや。逃げ……」

ガシッ

フェイトさんに腕を掴まれるはやて。

「フェ、フェイトちゃん？」

「は……や……て……」

「ひ、ひいっ」



この日、高町家に新たな屍が、できたのだった。

「勝手に殺すなっ！ってきやあああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああっ！？」

やれやれうるさい。

「それ自分のせいや……きやああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああっ！！？」

こうして、高町家の賑やかな夕食タイムは、幕を閉じたのだった。

「……………」

「お、もう突っ込まないな」

「さすがにやりすぎたかしら？」

何をやったかはご想像にお任せします。

「ふっ」

ベランダで一息つく。

夕食の後片付けは、なのはさんとフェイトさん、ヴィヴィオちゃん  
がやっている。

はやては未だにノックアウト状態。なんかおいしい奴だな。

「今日ほど疲れたのは初めてじゃないか？お前もそう思わないか？  
アイ」

『そうですね。いつも生気の欠片もないマスターからしたら、それ  
はそれは大変な一日だったでしょうね』

「言っとくが今日はマジで疲れてるから漫才ならしないぞ」

『何だつまらないですね。レル、フェル。この情眼を貪っている駄  
目男は、今日はもう漫才をやらないらしいですよ。まだあなた達に  
笑いが何たるかも教えてないのに』

『それは駄目ですね。早く一発屋から漫才師に転職したいのに』

『オールハイルミ ドナイトスクーールッ！』

「……………どっから突っ込めばいい？」

『『『全部』』』』

「無理じゃっ!!」

突っ込んでしまった。僕のポジションはボケのはずなのに……

「なんや楽しそうやなあ」

はやてがこっちに来た。

もう復活するとはな。流石チビ狸。

「誰がチビ狸やっ!!」

「だから人の心よむなよ……」

『はやてさん、この自堕落な男に、もう一度笑いが何たるかを……』

「教えなくていいから」

『何だつまらない。マスターだって漫才好きでしょ?』

「好きじゃねえよ!?!それにオーディエンスのいない場所では、漫才をやらないんだよ、僕は」

『ネタ通りにしか漫才ができない……典型的な一発屋ですね』

「ちげえよっ!!」

「てか、それがもう漫才になっとなるやん」

「しまったあっ!!」

『フフフ。ちよろいもんです。レル、フェル、ちゃんと学びましたか?』

『はい、とても勉強になりました』

『流石ですアイコン。自分はまだまだでした……しかし、いつか追い越しますからね!』

「追い越すのは笑いじゃなくて性能にしてくれ……」

「はははっ。流石はお前が作ったデバイスやな。よおできとるで」

「レルとフェルは確実にアイの影響だけどな……フランをアームドにしたのは正解だったな。これ以上こんなのが増えたら……はあ。ため息しかでねえ」

『『『いやあ』』』

「褒めてねえっ!」

「はいはい。漫才はそこまでにしい。でないとまた白い悪魔が来るで」

「……よおしみんな。おとなしくするぞあ」

『『『はい……』』』

「なのはちゃんの影響力ってここまであるねんな」

「まああの人怒らせたなら怖いからね。まあ普通にしていれば優しいけどさ」

「私は？優しい？」

「全然」

ゴツンッ

「冗談です。優しいですはい」

「そうやるそうやる」

「はあ……美人ってみんな暴力的なのか？」

「え？何て？」

「いんや。なんにも」

美人なんて言ったら、はやてのことだ。ネタにするに決まってる。

「……なあ、あのガジェットどう思う？」

いきなりだな。まあいいか。

「まあ厄介な代物だけど、犯人が捕まったらそれで終わりだからな。後はクロノに任せるしかないよ。あ、見つかったら僕が駆り出されるのか。めんどくせえ……」

「リミッターなんかつけて大丈夫なんか？」

「平気だろ。技術関連の奴らだろうから、戦闘に関しちゃ問題ないけど、念のために僕を送るって形になったらしいから。その程度だよ」

「そうか……………」

あれ？元気がないな。いつものはやてらしくない…………

「じゃあもうすぐお別れかもしれんねんな」

「……………まだ分かんないけどね」

「そうか……………」

しばらくの間、無言になる僕達。

夜風が体を包み、満月が僕達を照らす。

ホント、黙ってたなら絵になるのにな……………

はやてを見てそう思った。

「あの子……………」

「……………何？」

「……………いや、何でもない」

「……………そう」

また無言。

「……はやて。一つ聞きたいんだけどさ」

「何や？」

「何で今日、僕を誘ったの？」

「ん〜、久しぶりの旧友と、買い物したいと思ってても不思議やないやろ？」

「それが化け物じゃなかったらな」

「自分のこと化け物なんて言うな！！お前は人間やつ！！」

「……クロノといいお前といい……。この眼がどんなものか、お前も知ってるだろ？」

「ンなもん持つてるだけで自分が化け物なるはずないやろつ！！」

「……」

「現に今日、化け物ゆうお前が何した！！私達と遊んだ！人を助けた！事件解決に協力した！料理を作りながら家族がええもんって言った！そんな奴のどこが化け物やねん！！」

「……でも、過去は消えないよ」

「それはっ……」

「僕のせいじゃなかったとしても、やったのは確実に僕なんだよ……中身はまだ人間だけど、身体はとっくに化け物だ。しかもいつ暴走するかもわからないんだ。化け物って呼ばれるには充分……」

ガバッ

いきなりはやてが僕の頭を抱いた。

「……………何してるんだよ」

「人のぬくもりを、ちっとは感じさせたる思うてな」

「化け物に同情でもしたか？」

「ちゃうわ。あのな、いくらお前が呪われた眼を持ってようと、人外の力を持ってようと、心が化け物じゃない限り、お前は人間や」

「……………僕が殺した人達にも同じことが言えるのか？」

「少なくとも、人を殺して後悔してる奴は、化け物やないと、私は思うで」

「でも……………」

「それにな、お前だって、ぬくもりは持ってるねんで？」

「……………」

「過去を振り返って後悔するのは、人間やったらしゃあない。けど



「な、なんやと!?!?」

「否定できないだろ?」

「うぐっ……………まあええわ。アレ」

「ん?」

「おかえり」

「……………ただいま」

第三十七話 楽しいデート？

「アレンside」

「アレンくんとはやてちゃんって付き合ってるの？」

「……………は？」

「え、えつと……………なじえ？」

“ぜ”を“じえ”と言ってしまっただけに心当たりがなかった。いまいち判断基準が分かりにくいな。てかベランダからリビングに戻った第一声がそれはないんじゃないでしょうか？

「だってさっきはやてちゃん、アレンくん抱きしめてたでしょ？」

「……………# @\*……………」

言葉にならない悲鳴をあげる僕とはやて。

「ナンノコトデスカ？」

「ワタシタチワカラナイ」

「いや、二人とも動揺しすぎでしょ……………」

「本当よね」

「……………で、どうなの？」

「あ、あれは……」

「誤解です。そんなわけないじゃないですか。はやてみたいな美人と僕じゃ釣り合いませんよ。あの時はちょっと昔のことを慰めてもらっただけですよ」

嘘は言っていない。そして、はやて。僕の予定では“美人”って言われたお前がネタをふってくるはずなのに何故顔を赤くしている！これで赤くなるなら普段の行動に赤くなれ！！

「はやてちゃん顔真っ赤だねー」

「そそそそそんなことことことことことなななななななないで？」

「動揺しすぎだろ」

『マスター』

「ん？」

『クロノさんから通信です』

「来たか」

僕はリビングから出ていこうとしたら、はやてに腕を掴まれた。

「じいじで話し」

「いやでも……」

「一人で抱え込むのは良くないよ」

「なのは言う通りよ。私達も力になるから」

「……アイ、繋いでくれ」

『いいんですか?』

「どうせもつぶれたんだ。構わないよ」

『わかりました』

映像にクロノの顔が映る。

『アレン、とフェイトたちもいるのか』

「……」  
『……』

『でも……』

「彼女達からのご要望だよ」

「クロノ、お願い」

『……』  
『……』  
『……』  
『……』

「妹に甘いな」

『うるさい。それと、昼に現れたガジェットだが、出所がわかった』

「もつか？えらい早いな」

『ああ。カナル・グリフィスという技術者だ。そいつの研究室ももう押さえたんだが……』

「犯人には逃げられた？」

『それだけじゃない。カナルが研究していた記録、経歴、全てが抹消されていた。これでは捕まえることができない』

「その研究室はカナルのものだろ？だったら……」

『いや無駄だ。この研究室は、カナルが無許可で作ったものだ。記録上、この研究室は“ない”ということになってる。しかもカナルの研究の種類の中には厄介なものもある』

「大量生産、か？」

『ああ。つまりこのまま放っておくと、あのガジェットはまた現れる』

「状況は最悪、か」

『だが一つだけ解決する方法がある』

「何だ？」

『これが研究室に置いてあった。今データを送る』

「……………ヒース・ヒュールド暗殺計画って……………どう考えても罠だろ？」

『だが現状、我々の手はこれしかない。奴が何を狙ってヒースを殺害するつもりかは知らんが……………あるいは我々をはめるためだけの罠かもしれない。だからその罠に引っ掛かりに行くしかないんだよ』

「計画は三日後のヒース・ヒュールド主催のパーティーで、か。おそらくテロが目的だな。わざわざパーティーを選ぶなんてそれしか考えられない」

『国に復讐が目的、か』

「で、お前は僕に、このパーティーに潜入捜査して欲しいってわけだ」

『話が早くて助かる』

「ち、ちよつと待って！そんな危ない所に、アレン一人で行かせるの!?!」

『ああ。作戦メンバーは他にも当然いるが、潜入するメンバーは、アレン一人だ』

「危険すぎるよクロノくん。さっきの模擬戦で、アレンくんが強いのはわかったけど……………」

『そう言われてもな……………生半可なメンバーじゃ、アレンの足手まといになるだけだから』

「だったら私も行くわ」

『フェイト!?!?』

「その日は大した仕事はなかったはずよ。だったら私が行っても問題ないわよね?」

『し、しかし……アレン!お前からも何か……』

「寝てるで」

「ぐー」

「『……』」

「うへへ。もう寝れないよ」

「『寝るなっ!?!?』」

「んあ?だって僕の聞くこと終わったはずだけど……」

『アレン、フェイトを止めてくれ』

「無理、怖い」

『くっ……なのは……』

「じゅんは。じゅんはね」

『はやて……』

「ええか？まず笑いつてのはボケが……………」

『成る程、勉強になります。ああ、あなたがマスターだったら私は  
どれだけ嬉しかったか』

「悪かったな。レルもフェルも同じこと思ってるだろ？」

『『はい』』

「……………ちよつとはマスターたてようぜ」

『……………』

「クロノ、諦めて？」

『……………はあ。わかったよ』

「ありがとう」

『アレン！必ずフェイトを守れよ！』

「いやまず任務成功を命令しろよ」

『命より大事じゃない』

「いい言葉だけど、お前が言つと、ただのシスコン宣言だな」

『なっ……………つてなのもフェイトもはやても笑うなっ！！』

「まあまあ」

『お前のせいだろっ!』

「取り敢えず、作戦の詳細は、アイにデータ送ってくれ」

『無視か………まあいい。フェイトのこと、頼んだぞ』

「普通は上司が部下の心配すると思うんだけどなあ………」

「あ、そうだクロノくん。私もその日非番だから、アレンくん達と一緒に行くのか?」

『それは本当か!? 助かる!なのはなら大丈夫だ』

「うわー、すげえ信頼度の違い」

『うるさい。はやては?』

「残念ながら、どうしてもはずせん仕事があんねん」

『そうか………まあ、元六課の二大エースがいれば大丈夫か』

「そーそー。大丈夫大丈夫」

『お前が一番不安だな』

「さっきそのエース様を守って言ったのはどこの誰だよ」

『何だそいつは? 言語が理解できているのか?』

「お前のことだよっ！」

「もう漫才はいいから。クロノ、データを送って」

『わかった』

アイにデータが送られる。計画は三日後。

罨の中に飛び込むのは、普通かなり恐いだろうに、フェイトさんもなのはさんも来ると言った。はやてだってはずせない仕事がなかったら確実に来ただろうな……

『僕は仕事があるからこれで失礼する』

「仕事、あんまりしすぎないでね」

『ああ、わかってる。それじゃ』

通信が切れた。

「三日後ねえ……」

「頑張ろっね、フェイトちゃん、アレんくん」

「うん」

「嫌です。めんど……嘘です。滅茶苦茶やる気出てきました。だからデバイスを構えないで……」

「なんか女の尻にしかれてるなあ」

「言うな」

「じゃあ、私達はお風呂に入るっか」

「そっだね」

「覗くなよ？」

「覗かねえよっ！なんだったらもう帰るけど!？」

「いやいや。まだまだこれからやで。風呂上がったからもどんどん話すんやからな」

「さいですか」

「……本当に覗かないでね？」

「覗きません。僕はロマンより命をとるんでね。よく言うでしょ？命あつての物種って」

「確かにアレンくんが命懸けでそんなことするとは思えないねえ」

「でしょ？」

「ヴィヴィオもう寝ちゃったけど、どっかする？」

「うん。疲れてるみたいだし、このまま寝かしと」

「そう」

「早く入ってきてください。僕暇になるんで」

「あ、ごめんごめん。じゃ行こっか、なのは、はやて」

「うん、そうだね」

「ほな行ってくるわ」

「行つてらっしゃい」

『暇になりましたねマスター』

「何言つてんだよ。今まで一人の時のほうが多かっただろ？」

僕はまたベランダに出た。

「あそこか……」

ここからでも見えるバカでかいホテル、“クイーンズホテル”。ここで行われるテロを防ぎ、現行犯逮捕をするのが三日後の作戦の内容だ。

ヒュールド一族。管理世界の中でも有数の金持ち。資料によると商業の幅は広いが、主に飲食物を扱うものが多い。表では人当たりが良く、皆から慕われているらしいが、裏では人身売買をしているという噂もあるらしい。

国への復讐ではなく、ヒース個人に恨みがあるのかもしれないな。

「ま、どっちにしる胸糞悪いな」

パーティーに参加するのは有名な人物ばかりだったな。招待状、なんかなのはさんとフェイトさんにはきているらしいけど……

さすがは不屈のエースと有名な執務官なだけはある。僕はどうすりゃいいだろう。クロノがどうにかするらしいけど……

いずれにしても、三日後の準備が必要だな。ライフルよりも、今は“あれ”を完成させよう。

じゃ、帰るとしますか。

明日フェイトさんにしぼられるだろうな〜

そう思いながら玄関に向かった。

「しくった……」

僕は体に巻き付いているバンドを忌々しげに見た。玄関にフェイ

トさん、なのはさん、はやての三人分のバインドが設置していたのだ。

くそっ、お見通しだったか。急いで解除を……………

「ほほう。やっぱりそうだったか」

「……………」

な、何か聞こえたような……………

「本当、どうしようかしら」

冷や汗が身体中を流れる。

「アレンくん、言い残すことは？」

僕は顔をあげた。そこには、バスタオル一枚の美女が三人いたが、顔が恐いので全くドキドキしていない。いや違う意味でのドキドキはあるが……………

「え、えつとお。用事を思い出したので僕はこれで失礼……………」

「……………お話しよっか……………」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああつ！！！！！！？」

『南無南無。死んでも私の枕元に出ないでくださいね』

いやお前枕で寝ないだろ!?

そんな突っ込みをする余裕もない。

てか助けるよっ!!

そんな願い虚しく、僕の悲鳴はしばらく続いた。

「すみまへんへした。もう二度としないので許してください」

バインドで縛られた状態で、事情徴収のような形で椅子に座らされている。

右になのはさん、左にフェイトさん、机を挟んではやて。

こ、怖すぎる。バインドを解こうとしたり、逃げようとしたらとても怖いことになるだろう。

「え、え〜っと、そろそろ帰らないと……………」

「うん？何か言った？」

「たくさんお話ししましょうと言いました」

「じゃあ話そっか」

「うう……………」

早く“あれ”を完成させないといけないのにつ！

「ま、冗談はこの辺にして、三日後の作戦のこと少し話そか」

「やっぱり打ち合わせくらいはしないかね」

バインドを解除しながら言う。

「そうよ。やっぱり打ち合わせくらいはしないかね」

普通はそういうもんなんだ。僕は大概一人の任務だったからなあ。打ち合わせなんて……………はやてとかとの打ち合わせは毎回さぼってたなそういえば。

「お前いつつもさぼってたからな。けど今回は参加してもらおうで」

「てか、僕新しいデバイスを早く開発したいんだけど……………」

「まだ作るの！？」

「今でもすごい数だよな？」

「そうですか？鉄扇のアイオン、ガンソードのレルフレントとフェルクエンス、トンファアのフラン。後予定ではライフルを作る予定ですよ」

「す、すごいね……」

「しかも全部自分で作っているし……それも短期間の間に」

「ちゃんと使いこなしてるしなあ」

「……………どうも」

やっぱ褒められるのは慣れないな。

「今度バルディッシュの微調整をしてくれない？何だかアレンに任せたいんだけど」

「いや技術班の人達に任せればいいんじゃない……………」

「いい？アレン」

上目遣いで言わないでください。

「は、はい……………」

「にやはは。罪な男だねえアレンくんは」

「ははは……………もう否定しても無駄だからそれでいいです」

「てか、それって私とフェイトちゃんか？ありえへんでそれは」

「そうだよなのは。ありえないわ」

「うーん。なんだか事実なのに少しショックをつけるのは男の性だ  
ろうか……」

「アレンくん、落ち込まない落ち込まない」

「あなたが原因のような気がするのは気のせいではないですよね？」

「さあ？」

笑顔でごまかされた。

「……まいつか。それよりさっさと話し合い始めましょう」

「そうだね」

「やっぱりドレスとか着るのかしら？私持ってないんだけど……」

「大丈夫！私がドレスアップしてあげるよっ！」

「ありがとうなのは」

「えーなー。私もドレス着たいわあ」

「そうだな。ドレスでも着て少しはおとなしくなってくれ」

「素直に私のドレスが見たいって言うたらどうや？」

「美人って言っただけで顔を赤らめるのに何言ってるんだか」

「うっ……………」

「まあ、ドレス着たらお前絶対綺麗なんだろうけどな。男たちが黙ってないぜ？」

「…………… / /」

「アレンくん、それは天然？」

「は？どういう意味ですか？」

「天然だね、これは」

「はやて、ほら落ち着いて」

「フェ、フェイトちゃん？わわっわわわたわしは落ち着いてマスヨ  
？」

「全然そうは見えないけど……………」

「ん〜、話が進まないのは何でだ？」

「今回はアレンくんが原因だよ」

「はえ？」

「全然わかってないね」

「こいつは昔もそうやったわ」

「あゝ、何かわかるかも」

な、何か今回は僕が悪いらしいな。

「えっと……じゃあ、作戦会議を始めましょう」

「話ごまかしたな」

そんなこんなで始まり、一時間くらい打ち合わせをして、帰ることになった。

「アレンくんもまた来てね。ヴィヴィオもきつと喜ぶから」

「はい。ヴィヴィオちゃんにもよろしく言っと思ってください」

「うん、またね」

「またなー」

「なのは、ドレスよろしくね」

「うん、まっかせといて」

「うん、任せた」

「じゃあ行こか」

「ん」

そう言って帰路についた。僕はこれからデバイス開発か。

三日で完成するかな？

そんなことを思いながら帰った。

「ほなな」

はやてとも別れ、フェイトさんと二人きりになった。ま、だから何だという話だが。

「ねえアレン、これからどうするの？」

いきなりそんな事を聞いてきた。

てか鋭いな。

「デバイス開発に勤しみますよ」

「そっか。あんまり無理しないでね」

「何言ってるんですか？この僕が無理なんてめんどくさいことをするはずないじゃないですか」

「……………そう。ならいいんだけどね」

そのまま分かれ道まで無言だった。

「じゃあ僕はここで」

「アレン、ちょっといい？」

「？何ですか？」

「明日からの仕事、どうする？」

「……………できれば任せたいです。開発の時間が欲しいので」

「わかった。この三日の仕事は、私に任せて」

「ありがとうございます、フェイトさん」

「気にしないで。じゃ、開発頑張ってるね」

「はい、それじゃあ」

そう言ってフェイトさんと別れた。

僕はこの三日の間に決めなければならない。この先どうするのかを

……………

「……………アイ、僕はどうせればいいのかな？」

『それはマスターの決めることです。例えそれがどんな結果になろうと、私達はあなたについていきます』

「……………いつもそれくらい殊勝だったらなあ」

そんな事を呟きながら、研究室に入った。

### 第三十八話 準備完了

（アレンside）

はやて達と出かけた日から二日たった。

明日はいよいよパーティーに潜入だ。

僕は二徹で完成させたデバイスを構え、ガジェットを次々に破壊する。

「ふう、「シークエンス」は完璧だな、アイ」

『ですね。たった二日でよく完成しましたね』

「まあね。さて、これからどうするか……今から明日まで寝るってのもありかな……」

時刻はすでに夕刻。今から寝れば明日の昼には目を覚ますだろう。

「ん〜、やっぱりあそこに行くか」

僕は歩き出した。

「フェイトさん。手伝いに来ましたよ」

執務室の扉を開けながらそう言う。

「あ、アレン？もう終わったわよ？」

「もうですか！？はあ、早いですね……」

「うん、頑張ったんだ。そっちもデバイスできた？」

「フフフ。正直自信作ですよ、これは」

「どんなデバイス？」

「……………」

「へ？そんなものも作れるの？」

「まあ、ぶつちゃけ不安な部分もあるけど、短期戦なら問題ないです」

「へえ。なら大丈夫かもね。これから軽く訓練するんだけど、付き合ってくれない？」

「はあ。本当なら嫌だっっていたい所ですが、迷惑かけましたからねえ。それくらい付き合いますよ」

「ありがとう」

「ねえアレン」

「何ですか？」

「な、何でこんなに動いて汗流してないの？」

「さあ？」

訓練が終わって、フェイトさんがドリンクを飲みながらそう聞いてきたのでそう答えた。

てか前は気付かなかったけど、フェイトさん、肉弾戦って苦手なのかな？

まあ魔法があればだけできるんだ。問題ないだろ。

「じゃあ飯食いにいきますか」

「そつだね」

僕達は食堂に向かった。

「やっぱり日本人は麻婆豆腐ですね！」

「聞いたことないよそんな言葉」

「だってこんなうまい麻婆豆腐食ったことないんですもん」

「よくそんな禍禍しいほど赤い麻婆豆腐食べれるね」

「確かに辛いですけど、その辛味の後の風味が信じられないほどうまいんですって。こんなうまいもの食べたことないですよ」

「……………一口もらっついていい？」

「どつぞ」

フエイトさんはラーメンを食べる手を止めて、スプーンで麻婆豆腐を一口食べた。

瞬間。

「~~~~~」

涙目で水を飲みながら悶絶するフェイトさん。かわいいな。

「あつ、からいけど本当においしい」

「でしょ？こんなうまいもの本当に食べたことないですよ」

「でもアレンの料理も美味しかったよ？」

「ん、最低限しかできないんですけどね」

「そんなことないよ。あ、私も負けられないなあ」

「あ、今度はフェイトさんの料理食べさせてくださいよ」

「私の？そんなに美味しくないよ？」

「またまたご謙遜を。はやてが言っていましたよ？なのはさんもフェイトさんも料理がうまいって」

「そうなの？」

「はい。あのはやてが言うんですから、絶対美味しいはずですよ」

「今までもはやての料理を食べたことがあるの？」

「あ、昔あまりにも僕の食生活がひどいからってよく弁当作って

くれたんですよ

「へ」

「まあ、この麻婆豆腐のほつがうまいですけどね

「でもそれ辛すぎるよ」。私には一口しか無理

「そうですかねえ

「あつ、アレンくん、フェイトちゃん!

「あ、なのは!」

「隣いい?」

「いいよ

「えへへ。お邪魔しまあす

「あ、なのは。ドレスってどんなの選んだの?」

「な・い・しよ。それよりも、いよいよ明日だね

「はあ。さっさと終わらせて、昼寝したいもんです

「そついえばアレン、あれから寝たの?」

「いいえ。一睡もしてません

「大丈夫なの？」

「……………多分」

「まあアレンくんが駄目だったら私達がいるよ」

「そうだね」

「じゃあ僕寝ててもいいですか？」

「アレン（くん）？」

「すみません。冗談です」

「はあ、大丈夫かしら？」

「ま、肉弾戦なら二人より強いですけどね」

「あはは。もしかしたらスバルより強いかもね」

「スバル？」

「私の教え子の一人だよ。ストライクアーツの使い手なの」

「へえ、さすがにその子には勝てないだろうなあ」

「にははは、だろうね」

「アレンって気配読むの得意だね？」

「え？いや別にそうでもないと思いますけど……」

「だって寝ながら戦うなんて普通できないよ？」

「ああ。まあ得意かもしれないですね」

そりゃその位できなきゃ暗殺者に殺されたからなあ。

「ま、気配読むのは不意討ちのときとかに役に立つから、今回は活躍できるね」

「一応僕事件を三件片付けてるんですけど……まあ一つはフェイトさんが先走って一人で解決しましたけど」

「あ、あはは。そんなこともあったね」

「ごちそうさまでした。じゃあ僕はこれから明日に備えて寝るんで二人でごゆっくり」

「あ、うん。お疲れさま、アレン」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

僕は食堂を後にした。

「んっ、さっぱりした」

風呂に入り、そのままベッドにダイブ。結局このベッドも二回しか使わなかったな。

あ、そういえばはやての奴、結局高級羽布団買わなかったな。

絶対今度請求してやー！ー！………

「アレン、起きて」

だ、誰だ。僕の睡眠を邪魔するのは？

「起きてってば。もう夕方だよ？」

「まだ夕方ですかっ。おやすみっ」

ぐー。

「……バルディッシュユ、セットアップ」

あゝ、バルディッシュユ、セットアップ？

……………はっ！？

「ストップストップ！起きた！起きましたからっ！！」

「やっと起きたね。もう時間よ」

目の前にはフェイトさんがいた。いつもの制服姿ということは、まだゆっくり着替える時間はあるだろう。

僕は頭を掻きながら、のっそりとベッドから起き上がった。

「ふわああ~~~~~~~~」

大きなあくびをする。

「だらしないわよ、アレン」

「仕方ないじゃないですかあ。起きたばかりだし」

「まあいいわ。早くスーツを着て、集合場所に着てね」

「うーっす」

「心配だなあ」

そんなことを呟きながらフェイトさんは出ていった。

何だかお母さんみたいな人だな。

「さて、着替えるか………今思えば、僕って不良みたいだよな」

指輪のフラン、ピアスのレルとフェル、ネックレスのアイ。それに  
ブレスレットのリミッター。

ああ後、フランと同じく、指輪のシークエンス。

うん、格好だけは不良だな。

「まあ、パーティーだったら関係ないか」

僕はクロノからもらったスーツを見た。

「……………これ売ったら羽布団くらい買えるかな？」

『マスター？変な気を起こさないでください』

「冗談だ」

『目がマジですよ』

アイと漫才をしながら、スーツを着ていく。

そして、最後の難関が待っていた。

「……………ネクタイってどう結ぶんだ？」

『……………あなたいくつですか？』

「18ですが何か？」

『……………はあ』

「ため息つくなよ……………もうネクタイなんて適当でいいや」

ちよいちよいとネクタイをする。

作戦実行の前に一度、作戦メンバーが集まることになっている。

待たせるのも悪いから早くしないとな。

「髪もセットしたほうがいいかな？」

『そうですね。パーティーに行くんですから、それくらいした方がいいですよ』

「ん〜、パーティーなんて何年ぶりだろ？」

『10の時に行って以来ですから、八年ぶりですね』

「あ〜。あん時は確か護衛の任務だったけ？プロの暗殺者を10人くらい相手にしたっけ？他にパーティーに行ったのも似たようなのが多かったよな？」

『ですね』

「ん〜。こんなもんか？」

『そうですね』

「いや〜。あれから背も伸びたし、モテモテになったりして？」

『170センチは普通ですよ』

「何でわかった!？」

『ふっふっふっ。私を誰と思っているんですか?』

「ただのデバイスだろうが」

僕は荷物をかばんの中に入れた。

「んじゃ、行きますか」

### 第三十九話 潜入

くフェイス side く

や、やばいよ〜〜!!

ドレス初めてだから、着るのに時間かかったよ〜〜!!

アレン待ってるかも……

い、急がないと……

「ア、アレン！遅れてごめん！」

ドレスのスカートをつまみながら走ったからかなり疲れた。

「あれ？アレンは？」

見たところアレンはまだのようだ。まさか寝てないよね？

私はそんなことを思いながら、同員の方々に挨拶しながらアレンを探した。

「ハラオウン執務官殿、おきれいですね」

「あ、ありがとうございます……………」

今絶対顔が赤くなってるよ～～！！

「ハラオウン殿、私と踊ってくれませんか？」

「え？す、すみませんが……………」

「なら私とも……………」

「私も……………」

断ろうとしたが、人がどんどん集まってきた。これじゃキリがないよ～～。

こ、困ったな……………」

「はいはい。皆さん！ちゃんと自分の仕事してください」

私がおろおろしていると、なのはが声をあげてそう言った。

それを合図に皆さんはそれぞれの仕事に戻った。

「た、助かった。ありがとうございます」

「うっん、気にしないで。それにしてもやっぱりフェイトちゃんは綺麗だね。羨ましいよ」

「ありがとう。でもなのはほうが綺麗よ」

「ええ、そんなことないよ」

なのはのドレスは白で、その胸元には青いバラと装飾されたレイジングハートがあり、なのはにとても似合っていた。

私のドレスは黒で、胸元に赤いバラがある。こんなに高そうなものを貰っていいのかな？

「あれ？アレンくんは？」

「それが見つからないのよ」

辺りを見回すが、やはりいない。

すると、ある一角に人が集まっているのに気がついた。

その中心にいる人物は、右手を顔にかぶせ、右肘を左手でもち、目をつぶっていた。いわゆるきざなポーズだろう。

「何だろうね、あれ」

なのはも気づいたらしい。にしても女の子ばかり集まってるわね。

「ん〜、あの人カッコいいね」

ああ、成る程。

それで皆話し掛けるのか。

「私達も言ってみよう」

「え？でも……………」

「アレンくんが来るまでだから。ね？」

「……………わ、わかった」

私達は集団の中に入って、男性がどんな会話をしているか聞くことにした。

「カッコいいですね、何歳ですか？」

「今年で18歳になります。失礼ですがあなたの年齢も教えてくださいませんか？」

「私も18です。同い年とは思えないくらい落ち着きがありますね」

「いえいえ。そんなことはないですよ。私なんてまだまだ……………」

「階級はどれくらいですか？」

「二等空尉です。一等空尉になるには、まだまだ実力が足らず……………不甲斐ないですよね」

「い、いえ。そんなことはないですよっ！」

「そうですね。あまり自分を律しすぎるのはよくないですよ」

「これはこれは。ご忠告及び慰めの言葉をありがとうございます、美しいお嬢さん方」

「い、いえ………／＼」

「あ、ありがとうございます………／＼」

そんな会話を見た私達は、

「何かすごいね」

「うん、女の子ばかりが集まるのも分かる気がする」

「ねえ、私達も話してみようよ」

「え!?!で、でも………」

「いいからいいから」

そう言っつて私を引っ張るなのは。

話すつて何話せばいいのよ……。

そう思った時には、男性は目の前にいた。

すると男性は、

「これはまた、美しいお嬢さん方ですね。私に何か御用ですか?」

「ちょっとお話がしたくて……」

「そうなんですか？それは光栄ですね」

「にははは。そこまで言われると照れますよ〜」

「おっと、これはすいません。思ったことは口にする性分です」

「じゃあえっと、お名前を教えてください？」

「アレン・ウォーカーと申します。以後、お見知りおきを」

「「へ？」

私となのが固まる。

い、今なんて言った？

「あ、あの……………」

「ん、ふわああくあ。よく寝たあ」

いきなり男性の言葉が砕けた口調になる。

「フェル、ちゃんと僕の代わりに話してくれたか？」

『はい。完璧ですよ』

「じゃあ一つ聞くけど、何で僕は女の人達に囲まれてるの？」

『話し掛けてきた方を片っ端から口説きました』

「いやお前何してんのっ!?!」

『だからフェルクエンスより私のほうがいいって言ったじゃないですか』

「いやだってアイは女じゃん。男はフェルしかいないから仕方ないだろ?」

『その結果がこれでは本末転倒では?』

「……………」

『言い返さないでしょう?』

『さすがですねアイコン。マスター程度を押さえ込むのはちよろいんですね』

「マスター程度で悪かったなっ!?!」

『てか自分に対する扱いが酷いと思います』

「自業自得だろ」

『初めてマスターに同意します』

『右に同じく』

『ひびいてっ!?!』

「「「……………」」」

「ん？何で周りの人は黙ってるんだ？」

『マスターのせいです』

「少なくともこの状況を作ったのは僕じゃないけどな」

「あ、あの〜」

私は思い切って話してみた。

「ん？ああ、フェイトさん。何なんですかこれ？何で皆さん黙っちゃってるんです？」

「や、やっぱりアレンなの？」

「僕以外の何に見えますか？」

「いやどう見てもアレン君には見えないよ」

「そうですか？うーん、髪をセットしただけなんだけどなあ」

『後スーツを着てるからじゃないですか？』

「あー、成る程。でもそんなにいつもと違いますか？」

「「うん、違う。違いすぎる」」

「んなにはつきり言わなくても……………」

『しかしマスター、モテモテでしたよさつきは』

「寝たときにモテてもなあ〜」

「じゃあ起きてる時だったら嬉しいの？」

「それはそれでめんどくさいので嫌です」

「やっぱり……………」

「それより周りの人は何で固まってるんですか？」

「アレンの豹変ぶりに驚いてるんだよ」

「そう言われてもさつきは寝てたからなあ」

「フェルが喋ってたんだよね？意外だなあ」

『ちよつとシヨックです』

「ああ、ごめんごめん。そんなつもりじゃ……………」

「気にしなくていいですよ。こんな女たらし」

『全くです』

『ひどいっ…』

「『だから自業自得だろ（）です（）』」

『うつ……』

「言い返せないんだ」

「にしても二人とも綺麗ですね。ナンパとかされませんでしたか？」

「あー、フェイトちゃんがされてたなあ」

「え！？あれってナンパだったの？」

「気付いてなかったの？」

「フェイトさんらしいですね。なのはさんは？」

「私も始めに少し。でもお仕事に行くように言ったらすぐに解放してくれたよ」

「へえ」

「それよりもう一度聞くけど……本当にアレンくん？」

「だからそうだって言ってるじゃないですかっ！何だったらもう一度名乗りますよっ！！僕の名は……」

『ボケないでくださいね』

「いやこの流れで止めるか！？」

『すみません、つい』

「ったく。行くぜっ！僕の名前は……」

『『『エワード・エルリックッ！……』』』

「お前らがボケてどうするっ！！」

『『『やっちゃったぜ』』』

「自重しろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！……！」

「あ、間違いなくアレンくんだね」

「うん、間違いないわ」

「こんなことで理解されてもちっとも嬉しくないっ！……！」

「はいはい。じゃ、移動の車に移るよ」

「うっ……はい」

「しびしがアレンは頷く。それにしても、アレンってこんなにカッ」  
「よかったんだ。」

「アレンside」

「はあ……フェルのせいでひどい目にあつた」

あの後、大量の女性が、僕のスーツを摘んだり、質問攻めをしてきたり、『私とお付き合ってください』、とか言ってきたのを丁重にお断りしたり、気付くとなのはさんとフェイトさんは先に行つてたりしてそれはもう大変だつたなあ、うん。

で、今はダツシユで二人を追いかけている。

二人曰く、『遅れたら置いていくから、走ってきてね』、とのこと。

絶対遅れるわけにはいかない。

てか、僕なんか二人に悪いことしたかな？

何でこんな罰ゲームみたいなことになつてるんだろう？

うっっん……………謎だ。

『相変わらず鈍感ですね』

「何！？まさかお前にはこの解読不能な謎がわかるのかっ！！？」

『普通に』

「教えてくれっ！」

『嫌です』

「ケチッ！」

『ガキですか……………』

「誰がガキだって見えてきた！よかった！まだ発車してない！」

『……………はあ』

ため息つきやがった。

間に合ったのに……………

「おい、アレンくん」

なのはさんが車の中から手を振りながら僕を呼ぶ。

「あと十秒よー」

フェイトさんも僕に残り時間を……………って残り十秒！？

僕は走る速度をあげた。

「うおおおおおおおおおっ！ー！」

よしっ！間に合うっ！



は、恥ずかしい……

『ガキですか……』

さっきアイに言われたことを思い出す。

今なら否定できないな。

「はい、お終い」

「あ、ありがとうございます……」

「どづいたしまして」

「何かアレンくん、大きな子供みたいだね」

「ふふっ、そうね」

「……」

い、言い返せない……

「それじゃ行こっか」

「は、はい……」

羞恥心に悶えながら、車に乗った。

「ひゃ〜」

「す、すごいね……」

「近くで見るとここまで大きいもんなんですねえ」

僕達はビルを見上げながら、それぞれの感想を呟いた。

「これって何階くらいまであるんですか？」

「えっと、確か57階よ。パーティー会場は40階」

「ふむ……」

犯人達がもしゲスト達を人質にとったら厄介だな。

それよりも早く決着をつけないと……

「よし、行くよ。フェイトちゃん、アレンくん」

「うん」

「はい」

僕はホテルに入った。

「失礼ですが、招待状を出してもらえますか？」

「はい、どうぞ」

「高町なのは様、フェイト・T・ハラウン様、アレン・ウォーカ―様ですね。確かに。パーティー会場は40階になっております。楽しんできてください」

「ありがとうございます」

受付で招待状を渡し、奥に進む。

次に荷物チェックの人が話し掛けてきた。

「失礼ですが、デバイスはお持ちですか？もしお持ちならば、危険防止のため、預からせていただきます」

「わかりました」

デバイスを渡す。

『『『マスター、土産話を期待してます』』』

「うん、お前ら後で覚えておけよコンチクショウ」

「ありがとうございます。荷物のほうも、チェックさせてもらってよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

荷物を渡した。

「……………はい、問題ありませんね。あちらのエレベーターでパーティー会場まで行けますので。それではどうか楽しんできてください」

「ありがとうございます」

僕はエレベーターに乗った。

「ア、アレンくん、慣れてるね」

「そうですね？」

「うん。正直意外ね」

まあ、あなた方はものすごいガチガチでしたもんね。

しかしマズいかもなあ……………

「ねえ、デバイス預けてよかったの？」

「僕は問題ありませんけど……………」

なのはさんとフェイトさんを見る。

「二人は大丈夫なんですか？」

「え、えっと……………」

「今回はアレンくんにかかっているよっ！」

「……………はぁ」

やっぱりか。まあ、もしもの時は、奥の手を使うまでだ。

エレベーターから降り、パーティー会場の扉を開いた。

「……………すごい豪華ですね」

「そうだねえ」

「本当ね。それに見たことのあるお方ばかりね」

「じゃ、僕はその辺見てきますね」

「え？アレン？」

僕はすぐにフェイトさん達と別れた。

くフェイトsideく

アレンはパーティーの奥のほうに行ってしまった。

「どっしたんだろっね、アレンくん」

「うっん、ナンパかな？」

「あゝ、ありえるかも……」

「おお、これはこれは。ハラウン執務官に高町教導官。来てくださったのですか」

なのはと話していると、パーティーの主催者である、ヒース・ヒュールドさんが話し掛けてきた。

「はい。この度は招待頂き、ありがとうございます」

「いえいえ。とんでもない。お二人のような方に来て頂けるなんて……」

そんな風にヒースさんと話していると、どんどん人が集まってきた。

これは結構大変だな……

そう思いながら、有名な著名人の方々と話した。

「うーん……」

僕は窓の外を見ながら唸った。

客になりすましている暗殺者がいないか確認したが……

5人くらいだった。

少なすぎる。ヒースの警護だって当然いるんだ。いくらプロでも、たった5人じゃ厳しいぞ。

囹の可能性だってある。その場合、外からの襲撃になるが……外はクロノの部隊がいるんだ。それは心配ないだろう。

なら狙いは暗殺じゃないのか？

僕は通信機である、スーツの襟に取り付けられた、ピンに向かって小声で話す。

(パーティー会場にいる暗殺者の数は5人だ、クロノ)

(よくそんなことがわかるな)

(身のこなしを見れば、一般人とは違っていてすぐにわかるよ)

(そういうものか。まあいい。引き続き中の警護は任せた)

(そっちも外は任せた)

そう言って通信を切る。

さて、この中にいる暗殺者は、全員が手練だ。5人同時に、しかも素手だからかなり苦戦するだろう。

ヒースの護衛は、ヒース以外の人間は守らないだろう。

だったら放っておくか？

でもそれでヒースを殺されたら意味がない。

ヒースの護衛は10人。全員がここにいる暗殺者と同じ位の力量だろう。

さて、暗殺側はどうやってヒースを殺すつもりなのか……

僕はテーブルの上に置いてあったワインを一つ取り、一口飲んだ。

「うまいな……」

お酒は二十歳からって言うけど、そんなことは気にしない。

さて、パーティー会場の視察はこんなもんか。後はホテルの見回りも少ししておくか。

そう思って会場から出ていこうとしたら、一人の少女が目に入った。

確かあの子は、ヒースの孫だったか？

名前は……サエ・ヒュールドだったか？

「……………」

あいつとは似ても似つかない、大人しそうな顔だ。

どうやら何か困っているようだ。

「……………はあ」

僕はため息をつくくと、サエのもとに向かった。

「お嬢さん、何かお困りですか？」

僕は紳士をイメージした笑顔を顔に張り付けて、声をかけた。

「え、えっと……………お母様とはぐれてしまって」

「そうなんですか？なら、私も一緒に探しましょう」

「本当ですか!？」

「ええ、もちろん」

僕はそう言つと、サエに手を差し出した。

確かこの子はまだ十歳のはずだ。こんな人ごみの中で母親とはぐれたら、不安だろうな。

サエが僕の手を掴んだ後、他愛ない会話をしながら母親を探した。

この子の母親の名前はカテナ・ヒュールドだったっけ？

この子も母親も、暗殺リストに含まれているはず。

なるべく三人には離れないでいてもらいたい。警護しづらい。

「あ、あなたの母君が見えましたよ」

「本当ですか!？」

「ええ、あちらに」

僕はそう言っつてカテナの方を指差した。

「では、私はこれで」

「あ、ありがとうございます。その、もし失礼でなければ、お名前を教えてもらえないでしょうか？」

「いいですよ。私なんかの名前ならいくらでもお教えしますよ。私の名前は、アレン・ウォーカーです」

「アレンさん、本当にありがとうございます。このご恩はいつか必ずお返しします」

「ええ、楽しみに待ってますよ」

「それでは、失礼します」

そう言っつてサエはカテナの元に行った。

「さて、僕も行くか……」

「アレンくん」

会場を出ようとしたら、なのはさんが声をかけてきた。その隣にはフェイトさんもいる。

「どこにいくの？」

「ちょっと見回りに行くだけです。すぐに戻りますよ」

「……………どうして私達に黙って行くことしたの？」

「え？それは……………」

この件は一人で片付けるつもりだからとは言えない。それはこの二人を侮辱する発言だから……………

「私達のこと、信用してないの？」

「そんなこと……………」

「なら私達も頼ってよ。仲間なんだから」

「……………なら、ここの人達を任せます。すでにここには暗殺者が5人いるので」

「5人も!？」

「ヒースの護衛は10いますが、そいつらはヒースしか守りませんが、金で雇われているだけでしょうから。それは暗殺者も同じですが、周りに被害が出ないわけではないので」

「わかった。ここは任せて」

「頼りにしてます。それでは」

「無茶だけはしないでね」

「……………善処します」

そう言って会場を後にした。

「なのはside」

「大丈夫かな、アレン……………」

フェイトちゃんが心配そうに呟く。

うん。なんだか子離れできない母親のようだね。

「大丈夫だよ。アレンくんが私達を信じてくれたように、私達もアレンくんを信じよ」

「……………そうだね、なのは」

そう言っつてフェイトちゃんは笑ってくれた。そうだ。三日前から気になってたこと聞いてみよ。

「ねえフェイトちゃん」

「何？」

「アレんくんのこと好きなの？」

「はいっ!?!」

すっとなきような声をあげ、顔を真っ赤にするフェイトちゃん。

「な、ななな何言っつてるるのよなのは。そそそんなわけ…………… /  
 /

いやそんなに動揺したら説得力ないよフェイトちゃん。

「で、どうなの?」

私はフェイトちゃんに詰め寄って聞く。

「……………まだわからないかな」

「……………そっか」

「なのはは好きな人いるの?」

「うっん……………いない、かな?」

「なのは、アレンのこと好きだったりして」

「え？それはないよ」

私は手を上下に振りながら否定する。

「ホント？」

「本当だつてば」

アレンくんは面白いけど、恋愛対象には見えないかな。

「あ、そうだフェイトちゃん。今度の――」

ドゴオンッ！

「全員動くなあつ――」

**第四十話 アレンの快進撃（前書き）**

今回は三話連続投稿です。

お楽しみください。

## 第四十話 アレンの快進撃

「アレンside」

ドゴゴオンッ！

「なっ!?!」

何だ今の爆発音!?!

パーティー会場のほうからか!?!

暗殺に爆弾なんて必要ない……別の奴らか?!?!

くそっ、どうする?!

今からパーティー会場に行っても意味がない。

デバイスなしの上、制限付きじゃ勝ち目がないからな。

だったら……

「まずは一階に降りないとな」

僕はある場所に向かった。

くフェイトsideく

「全員動くなあつ！」

顔をマスクで隠した男たちが、マシンガンを片手に叫ぶ。

あちこちから悲鳴の音があがる。

「静かにしろおつ！！」

ドオンッ！

男の一人が上に向けて、一発撃った。

ガツシヤアアアアン！！

シャンデリアが落ちてきて、そのガラスの欠片があちこちに飛び、人を切り裂く。

今度も悲鳴をあげたが、男たちが銃を構えると静かになった。

ガラスで切られた人達は、腕や顔から血を流し、苦しそうにしていた。

今すぐにでも男たちを捕まえたいけど、デバイスのない今の私じゃ

無理だ。

どうする？

（なのは、どうする？）

（今は様子見るしかないね）

私となのはは、会場の隅で、大人しく見ていた。

今は、なのはと念話で会話している。

（暗殺とは関係ないよね、この人達）

（そうでしょうね。こんな派手な暗殺、聞いたことないしね）

（偶然、事件が重なったのかな？）

（だとしたらまずいわね。ヒースさんはともかく、この会場の人達のほとんどが危ないわ）

（その為の私達だよ。絶対に守ろうね、フェイトちゃん）

（……………うん。そうだねなのは。絶対守ろう）

私となのはは、堅い約束をした。

くクロノ sideく

「犯人側の要求は？」

「金と、逃走用のへりを用意しろとのことです。用意しなければ、一刻ごとに人質を殺すと言っております」

「そうか……要望通り、金とへりを用意しろ」

「い、いいのですか？」

「もしもの時のためだ。ギリギリまでは使わん」

「わかりました」

僕は部下に指示を出すと、ビルを見上げた。

そして懐から通信機を出し、アレンに繋いだ。

「くそつ。やっぱり警備室も占拠されたか……」

僕は今、通信機からクロノの報告を受けている。

『お前だけでも動けてよかった。今どこにいる？』

「37階のトイレだよ。監視カメラと犯人の目を逃れながら、何とかここまでこれたけど……こっからはキツイね」

『そうか……アレン、こんなことは言いたくないが、この事件、お前にかかっている。頼んだぞ』

「りょくかい。ならこつちも一つ頼んでいいか？」

『何だ？』

「カナルとヒースの関係だ。昔恨みをかうようなことをしたとか……」

『それはすでに調べたが、カナルとヒースに面識は一切なかった』

「なら次、ヒースが裏でやってるって噂の真偽を調べてくれ」

『それももう調べた』

「さすがだぜ。結果は？」

『シロだ。裏でそんなことは一切やっていなかった』

「ふむ……ありがとう。もう切るぞ。これから動くから」

『どうするつもりだ？』

「通気口の中を移動して、デバイスの所まで行く。デバイスがどこにあるかわかるか？」

『ちょっと待て……一階の金庫の中だな』

「その警備は何人かわかるか？」

『そこまではわからない。すまん』

「気にするな。もう切るぞ」

『ああ。健闘を祈る』

「そっちな」

僕は通信を切った。

「さて、ここからは考えながらの行動になるな」

僕は通気口の入り口を開けながら呟いた。

「暗いな……誰も見てないし、久しぶりにやるか」

僕は手を超高速で動かして、魔法陣を描いた。

「求めるは光輝>>>・闇砕」

手のひらに小さな光が現れる。

「これで灯りは大丈夫だな。さて、行くか」

僕は通気口に入った。

くフェイトsideく

「……………遅いな、管理局の奴ら。おいっ！見せしめに一人殺せっ！」

男の一人がそう叫んだ。

「へへへ。了解っ！」

そう言って、銃口を人質の一人に向ける。

あの子は確か……………

「サエッ！」

ヒースさんが叫ぶ。そうだ、ヒースさんの孫のサエさんだ。

「やめる!やめてくれ!」

「うるせえっ!」

そう言ってヒースさんを銃のグリップで殴った。

「え!?!」

どういうこと?ヒースさんの護衛は一体何をしているの?

そう思考を働かせている間にも、男は銃をサエさんに撃とうとしていた。

気が付くと、私となのはは飛び出していた。

ドオンッ!

男が銃を撃った。血濺ぎが飛び散る。サエさんではなく、私の――

「フエイトちゃんっ!」

くアレンsideく

奴らの目的は何だ？

僕達を追い詰めることか？ヒースを殺すことか？金か？それともただの殺戮狂か？

……どれも辻褄が合わない。何が目的なんだ……

カナルの目的は一体……

通気口を進みながらも思考を止めない。

このまま真っ直ぐ行けば、エレベーターの通る空洞につくはずだ。

……暗殺者……護衛……テロ……ガジェット……カナル

……パーティ……

駄目だな。まだこれだけじゃわからない。

さっさと進むか。

「おっ、やっと出れ……」

僕の言葉は途中で止まってしまった。

「……ふざけてんな」

エレベーターが通る空洞の壁に時限爆弾が設置してあったのだ。

残り30分もない。

「……………そういつとか」

カナル……………くそつ。

「クロノ」

僕はクロノに通信をいれる。

(どうした?)

「時限爆弾が、エレベーターの通る空洞の壁にしかけてあった。このホテルどころか、周辺の建物も吹き飛ばすくらいでかいのだ」

(なっ!?)

〈フエイトside〉

「くっ……………はあはあ」

「おいおい、誰だよお前」

「フェイトちゃん!」

私はサエさんの前に立ち、銃弾から彼女を守った。その代償に、私はお腹に銃弾をつけ、倒れた。

「フェイトちゃん、大丈夫!？」

なのはが私を抱き上げる。

「はあはあ……な……のは……はあはあ」

大丈夫という一言が言えない。それほど私は弱ってした。

「ん？フェイトになのは？おまえらまさかあの管理局の二大エースか？」

「……だったら何よ？」

なのはが私を撃った男を睨みながら言う。

「くっくっくっ。こいつぁおもしれえ。ボス、どうしますか？」

男がそう言うと、奥から男が前に出てきた。

「管理局との交渉材料に使えるな。おいっ！管理局に伝える！エースを失いたくなければ、さっさと用意しろ！」

「了解！」

「くっ……………」

クロノ、絶対に交渉に応じないで……………」

「おっと。そいつも気絶させておけ」

ガッ

男の一人が、なのはの首を銃のグリップで殴った。

「かつ……………」

なのはが地面に倒れる。

「な……………のは……………」

手を伸ばす。けど、手に力がいらず届かない。

アレン……………」

私はそのまま気絶した。

くアレン side

(そんなことを……カナルめ)

「愚痴なら後だ。お前は周りに集まった民間人を避難させる」

(だがっ……………)

「人質も爆弾も、僕が絶対何とかする。だからお前は自分の仕事に集中しろ」

(……………わかった。アレン、死ぬなよ?)

「誰に言ってる」

(そうだったな。……………ん?なにっ!?)

クロノがいきなり慌てた声をあげる。

「どうした?」

(……………フェイトが撃たれた。このままじゃ……………死ぬ)

「!??ツ……………クロノ。使っよ」

(なっ!だが……………)

「どこを撃たれたんだ?」

(……腹だ)

「ならちんたらしている暇なんてない。もう切るぞ」

(なっ、ちょー)

僕は通信を切りながら、空間に文字を走らせる。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

僕の体が一瞬光る。

そして、壁を蹴りながら、垂直に走る。下に、下に、どんどん加速し、直前で壁を横に蹴り、反対の壁に着地し、また横に蹴るのを数回し、一階のエレベーターの上に着地した。

「さっさと決着をつける」

僕はエレベーターの扉を開けた。

くクロノsideく

「おいつーアレンー」

僕は通信機に向かって叫ぶが、反応は一切ない。

僕は犯人から送られてきた映像を見る。

倒れているのはとフェイト。フェイトは腹から血を流している。

このままじゃ5分も……

「へりと資金は用意できました」

「よし、それを犯人たちに伝える」

「はいっ」

「クロノくん！」

僕の名前を叫びながら、はやてが走ってこちらに来た。

「はやて……」

「状況は？」

「……最悪だ」

「どっついうことや？」

僕は映像を見せた。

「そんな……なのはちゃん……フェイトちゃん……ア、アレンは！」

「？」

「今必死で動いている……アレを使つらしい」

「なっ！？んなことしたらあいつの正体……」

「確実にばれる。フェイト達は助かるだろうが、あいつは……」

「くっ……私ら、見てることしかできひんの？」

「ああ。今はあいつがうまくやることを祈るだけだ……」

アレン……後は任せたぞ。

（アレンside）

「ん？おい、エレベーターの扉が……」

「なっ……」

『闇庭』<sup>あんて</sup>で静寂を作り、相手を混乱させる。

僕は相手が混乱した瞬間に、魔法で強化された蹴りをいれる。

この見張りはたった2人か。

監視カメラには映ってないはずだ。

僕は一人の着ていたものを奪い、それを着る。

そのまま受付まで行く。

受付の見張りは3人か。さすがに監視カメラに映らずに気絶させるのは……

どうやら今は全員奥の金庫を開けようとしているらしい。

あそこか。

僕はその3人に近づき、一瞬で気絶させた。

「ん？これ魔法の錠がかかっているのか。なら……」

複写眼発動。解析完了。

金庫を開ける。

その中に入ろうとしたら、後ろに人の気配がした。

慌ててそこから飛び引く。

すると、一瞬前までいた場所を、銃弾が通りすぎる。

さっきの奴か！完璧に気絶させたと思っていたのに……

僕はそいつの首に回し蹴りを放つ。

「がっ………なっ、き、貴様、複写眼――保持者、か――」

そう言って気絶する男。

ばれてしまったな……

僕はそう思いながら、金庫の中から、アイたちを探した。

『おや、パーティーはパーティーでも、コスプレパーティーだったのですか？』

「アイ……お前なあ」

なんか懐かしく感じてしまっぜ。

『何かあったのですか？』

「ああ。フェイトさんが撃たれた」

『マスターがつ！？』

「安心しろバルディッシュ。絶対助けるから」

『しかし……』

「後はレイジングハートと……あったあった。シークエンス」

僕は、アイ、レル、フェル、フラン、シークエンス、バルディッシュ、レイジングハートを持って金庫を出た。

「さあ、反撃開始だ」

僕はバリアジャケットに身を包み、会場に向かった。

＼フエイトside＼

「ぐっ………ああっ」

私はまた目を覚ました。さっきから痛みで気絶し、また起きることを繰り返していた。

血が、止まらない……

私、死ぬのかな……

なのは……はやて……クロノ……シグナム……母さん……

アレン……

知人の顔を次々にあげ、今までのことを思い出す……

これが走馬灯ってやつなのかな……

嫌だよ……

死にたくないよ……

助けて……

助けてっ!!

「な、何だと!?!」

いきなり犯人たちのボスがうるたえだした。

「それは本当かつ!?!」

『は、はいっ! 現在、ものすごい勢いで仲間達がやられています! そのいつは今そっちに向かってますっ!』

通信機からそんな声が聞こえてくる。

……………アレンなの? ……………

「く、くそっ！あいつ……話が違っじゃねえかつ！！」

あいつ？

「く、くっなったら……」

「あっ……がっ……」

そいつが私の髪を引っ張り、銃を胸に押し付けてくる。

ただでさえ出血多量で苦しいのに、そんなことをされたからさらに口からも血が出る。

恐い……

悔しい……

何で私は何もできないの？アレンを助けるためについてきたのに……

……

悔しい……

悔しいっ！

私は最後の力を振り絞って抵抗を試みた。

けど、すぐに押さえつけられた。

「調子に乗るなよクソアマがっ！てめえ以外にも、人質は腐るほど

いるんだぞっ!!」

男がそう言っても、私は抵抗続けた。

「このっ……死ねっ!!」

男が銃を私に向ける。

今度こそ死ぬ。男の目は本気だ。

嫌だ……

死にたくないよ……

助けて……

「助けて……アレン」

ドゴアッ!!

私がそう呟いた瞬間、会場の扉が爆発した。

「何してんだよ、お前」



## 第四十一話 命懸けの救出

（アレンside）

僕の目の先に、フェイトさんを押さえつけ、銃を頭に向けている奴がいた。

フェイトさんは……………泣いていた

「何してんだよ、お前」

僕は男を睨みつき、アイを構える。

「おっと、動くなよ！人質がどうなってもいいのか？」

「……………シークエンス、セットアップ」

僕は男を一瞥してから、シークエンスをセットアップさせた。

「な、なんだそれは……………」

僕の持っているシークエンスは、柄と鏢しかなく、刃が一切ない剣だ。

男がそう言うのも無理はないだろう。

だがそんな男を無視し、僕は全く感情のない声で、淡々と呟いた。

「一度だけ言う。大人しく投降しろ。今の僕は、お前達を殺しかね

ない」

「はぁ？何言ってるんだ？お前」

「もう一度だけ言う。これが最後だ。大人しく投降しろ」

「へ、へへへ……ふざけんじゃねえぞっ！！」

そう言ってる、男たちは僕に向けて銃を撃ってきた。

「チャンスはやった」

僕はそう言っていると、シークエンスを構え、呟いた。

「モードパラレル」

瞬間、鏢からいくつもの魔力の帯が飛び出し、全ての銃弾を防いだ。

「なっ……………」

「ばっ、ばかな……………」

「く、くそっ」

男がフェイトさんに向けてる銃のトリガーを引こうとした。

「モードスプレッド」

魔力の帯が、今度はいくつもの小さな球に変わり、それを男たちに向けて放つ。

いくつもの血が飛び散る。

僕はそれを感情のない冷めた瞳で見ながら、フェイトさんを押さえつけていた男に近づく。

男は今、肩と足を押さえつづけている。

「フェイトさん……………」

「ア……………レ……………」

「喋らないで。今手当てをします」

僕はヒーリングの魔法で止血する。

治療をしながらクロノに伝える。

「クロノ、制圧は完了した。今からここの人達には逃げてもらうから、誘導を頼む」

『フェイトとなのはは無事か!?!』

「人質もなのはさんも無事だけど……………フェイトさんはかなりやばい。今、ヒーリングの魔法で治療してる」

『助かるのか!?!』

「僕を誰だと思ってるんだ?」

『……………信じるぞ、悪友』

「オーライ、悪友」

『アレン！フェイトちゃん助かるねんなっ！？』

「助けてみせるさ。てかはやてもいたのか？」

『仕事が終わったから急いで来てん』

「そうだったのか……………フェイトさんは心配するな。必ず助ける」

『信じるぞ、アレン』

「ああ。さて……………」

僕は痛みで悶絶している犯人全員にバインドをかけた。

「皆さん！犯人は全員制圧しました！外に管理局員がいるので、指示に従って外に出てくださいっ！この事件は終わりですっ！」

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！…！』  
周りから歓声をあげる。

『すごいなあ』

「全くだ。皆さん！慌てずに、指示に従ってくださいね！じゃあク  
ロノ、はやて、頼んだぞ」

『『任せる』』

僕は通信を切り、治療に集中する。

「あ、あの……」

「ん？君は確か……」

「サエ・ヒュールドです。あの……その人を助けてくださいっ！私を庇ってその人は撃たれたんです……私のせいでその人は……お願いしますっ！助けてくださいっ！」

そう言うと、サエは頭をさげた。

「顔をあげなよ」

「え？それじゃあ……」

「心配すんな。必ず治すから。その代わりに、この人が元気になったら、ちゃんとお礼を言ってあげてくれないかな？」

僕はサエに微笑みながら言った。

「は、はいっ！絶対にお礼を言いますっ！」

「うん、ありがとう。この人も喜ぶよ」

「はいっ！」

「じゃあサエ、ここは僕に任せて、早く外に出るんだ」

「え、でも……」

「お爺さんとお母さんが心配するだろ？大丈夫。必ず治すから。ね」

「は、はい！わかりました！ありがとうございます！アレンさん！」  
そう言ってサエは行った。

「んん……」

「フエイトさん？目が覚めましたか？」

「アレ……ん……」

「何ですか？」

「いじめ……ん……ね」

「……何で謝るんですか？」

「足……引っ張っちゃって……」

「いつも僕が引っ張ってるんです。気にしないでください。それに、あなたのおかげで助かった命がある。他の誰でもない、あなたが助けた命がある。それは僕には出来なかったことです。そのことを誇りに思ってください」

「……ありがとう」

フェイトさんは笑ってくれた。

弾丸の摘出も、止血も、内臓の損傷も、何とかあった。十分でここまでできたのは上出来だ。魔力は大量に使ったが、命に比べればどうってことない。

もう傷は完璧に塞がったけど……血が足りない。

人間は、血液の三分の一が無くなると死んでしまう。フェイトさんはもう二十パーセントは流れている。

このままじゃフェイトさんは……今すぐにも血を与えない！でも輸血パックなんてないぞ！どうすれば……

「……そうだ。僕の血液はO型だ……O型だったらフェイトさんが何型だろうと関係ない」

『マスターまさか……』

「さっすがアイ。話が早くて助かる」

『いけません！血液を二十パーセントも与えてはマスターが……』

「それしか助ける方法はないだろっ！！」

『し、しかし……』

「バルディッシュ、安心しろ。お前のマスターは絶対助けるから」

『アレンさん……』

「ア……レン。だ……め……よ……」

「嫌です。絶対に助けます。フェイトさんが死ぬの、僕嫌ですから」

「ア……レン……わかつ……た……わ。で……も……ぜつ……た  
い……し……ない……で……」

「わかりました。フェイトさん、血を吸う元気はありますか？」

フェイトさんは首を横に振った。それができたら指から吸ってもら  
おうと思っただけど……

どうしよう……残る手なんてあと一つしか……

「ア……レン……くち……うつ……しで……のま……せて……  
……」

フェイトさんが顔を真っ赤にしながら言ってきた。

やっぱりそれしかないか。

覚悟決める！僕！

「………すみません」

僕は唇を噛み切り、フェイトさんにキスし、そこからフェイトさん  
に血を送る。

さらば！我がファーストキス！！

フェイトさんの顔は、三日前より真っ赤だ。多分僕も……

「んっ……んんっ……」

「……………ぶはっ」

しばらくして唇を放す。もう充分だろう。

「うっ……………」

血液不足でふらつく僕。

「だ、だい……………じょうぶ？」

「だ、大丈夫ですから。まだ起き上がらないでください。それと、バルディッシュです」

立ち上がるうとするフェイトさんを制止して、バルディッシュを渡す。

『マスター、大丈夫ですか！？』

「うん……………だい……………じょうぶ……………しんぱい……………かけて……………ごめん」

『いいえ。無事で何よりです』

「アレ……ン……あり……が……とっ……」

「き、気にしないでください」

明後日の方向を見ながら答える。僕はフェイトさんを直視できないでいる。

だ、駄目だ！は、恥ずかしすぎる！……三日前の比じゃないぞっ！！！！

『マスター？顔が赤いですよ？』

「バ、バル……ディッシュユっ！」

フェイトさんもか。って！

「ま、まだあんまり大きな声は出さないでください。完全に回復するまでまだ時間がかかるんですから……」

「あう………ご、ごめん……」

顔を赤くしないでください！こっちはファーストキスだったから滅茶苦茶恥ずかしいのに……

「あー……あ……ファア……スト……キス……は……もっと……ロマン……  
……チックに……したかつ……た……な……」

ん？今何て言った！！？

「フェ、フェイトさんもフフフファーストキキキキキススススだ  
だったんですか！？」

「ア、アレ……ンも？」

「は、はい……／＼」

「そ、そう……／＼」

や、やばい……さっきより数倍恥ずかしい……

「んん……はっ、フェイトちゃん！大丈夫！？」

なのはさんが目を覚ました。

「大丈夫ですよ、なのはさん。フェイトさんは無事です」

「アレンくん！？……そっか……にやはは。今回は全く役に立たなかつたなあ……」

「誰にでもそんな時はありますよ。それは例え不屈のエースでも、です」

「そうだよね……ん？何でアレンくんもフェイトちゃんもゆでダミみたいに真っ赤なの？」

「うっ……／＼」

「そ、それよりっ！フェイトさんを任せていいですか？」

「へっ、うん。いいけど……」

「ありがとうございます！これ、レイジングハートです。じゃあ僕は行くところがあるのでこれでっ！」

僕はレイジングハートをなのはさんに渡し、会場を後にした。

さて、残りの仕事は爆弾をどうにかする事だな……

「クロノ」

『アレン！？フェイトは！？』

「完璧だよ」

『よ、よかった……………』

「僕は残りの仕事を片付けるから、フェイトさんたちは任せたまえ」

『残りの仕事？』

「爆弾」

『なっ、よせっ！もう爆発まで時間がないっ！！』

「だからだよ。避難が間に合わないだろ。それよりお前はアレに備えとけ」

『し、しかし……………』

『諦め、クロノくん。こいつがこっとなったらもう無駄やで』

「はやての言うとおりだ」

『自分で言うか……』

「こっちは任せて、そっちは自分の仕事に集中しろっ！」

『……死ぬなよ？』

「さっきも言っただろ……僕を誰だと思ってるんだ」

『……わかったよ』

「さすが悪友」

『ホンマに死ぬなよ？』

「死なないよ、はやて。じゃあな」

僕は通信を切った。これ以上話すとボロがでる。

魔力も体力も、もうあまりない。

時間もないときてる。

なら、命懸けでやるしかないだろ！

『はあ……全く、馬鹿なマスターを持ったものです。私も』

「お前なあ……」

『まあ、そんなマスターについていく私も馬鹿なんでしょうね……』

「アイ………」

『安心してください。あなたは私が必ず守ります。十年前にそう誓いましたから……もう七年前みたいなことにはさせません』

「……………オーケー。信じてるぜ、相棒<sup>バディ</sup>!!」

『当たり前です!!』

僕は決意を新たにし、走り続けた。

絶対に生き残るっ!!

「だりやあっ!!」

エレベーターの扉を蹴破る。

「あつた!アイ、セットアップ!」

爆弾を見つけ、そこまで飛ぶ。

「残り時間は3分か……」

『解除できますか？』

「ちよつと待て……」

複写眼発動。解析完了。

「うん、3分じゃ無理。10分はかかる」

『それじゃあ……』

「最終手段しかないだろ」

僕は壁から爆弾を離した。

「疾風迅雷」

体が雷に包まれる。

急げ！

僕は猛スピードで上にあがる。

「レル、セットアップ！」

僕はアイを脇に抱え、レルをセットアップさせる。

「デイバインバスターツ！！」

レルから砲撃を放ち、天井を突き破る。

そのまま空に躍り出て、さらに上に行く。

ビルが小さく見えるようになってもまだ飛び続けた。

「今だっ！」

おもいつきり爆弾を上投げる。

ここまで上がったら、もう下に被害は出ないだろう。

ドゴガガアアアアアアアアアアアアッ！！

爆弾を投げた瞬間、爆発した。

空は夜空と呼ぶには、明るすぎるくらい、オレンジ色に光っていた。



## 第四十二話 不屈の魂

くクロノsideく

ドゴゴガガアアアアアアアアアアンツッ!!

「なっ……………」

遙か上空で大爆発が起こる。あんなものが地上で爆発したら……………

「あいつまさか……………」

「アレン……………」

「……………今は自分の仕事に集中するぞ」

「……………そっやね。早よ見つけないと……………」

くフェイトsideく

ドゴゴガガアアアアアアアアアアンツッ!!

「なっ……………」

なのはにおぶってもらい、地上に向かって飛んでいたら、空で爆発が起こった。

「……まさ……か、アレ……ン？」

「……かもしれないね」

「！？ツ、なのはっ！」

「わかってるよっ！」

なのは下に向かっていてのを、上に軌道修正した。

「……ありが……とう、な……のは」

「にははは。気にしなくていいよ。私も心配だしね。それと、大声  
だしたら駄目だよ？」

「……うん」

私達は爆発のあった場所に向かって飛んだ。

くアレnsideく

目の前を硝煙が覆う……

「ぜえ……ぜえ……」

煙が晴れ、自分の姿と、自分を守ってくれた相棒を見た。

モードディフェンダー。

それに全ての魔力を注ぎ込み、爆風を防いだ。全てを防ぎきれた訳ではないが、生きていただけマシだ。だが、僕の傷はかなりひどい。

魔力の全放出の影響で身体中内出血、防ぎきれなかった爆風で、バリアジャケットはほとんど裂け、あちこちから血がでてている。

これ以上血を流したら、本当に死ぬ。

血液の二十五パーセントは失った。

『マスター！このままでは危険です！急いで地上に戻って治療を！』

「アイ、ごめん。もう、飛ぶ力もないよ……」

ガクッ

僕は重力に逆らえず、下に落ちる。

このまま落ちたら死ぬなあ……

僕はそう思いながら落ちた。どっちにしるもう助からないだろう。自分の体は、自分が一番よくわかってるからなあ……

「アレン！」

この声はフェイトさん？大きな声は出さないように言ったのに……  
フェイトさんが僕をキャッチする。そんな体力ないはずなのに……

「アレン！しっかりして！アレン！……！」

「き、聞こえてますよ、フェイトさん」

「アレン！大丈夫なの！？」

「大きな声は出さないでって言ったでしょう？」

「う、ごめん……でもっ……」

「はあ……」

「ア、アレンは大丈夫なの？」

「いいえ、もうすぐ死ぬと思います……」

「……え？」

「出血がひどすぎまして……魔力ももうからで、無理っばいです」

「フェイトちゃん！無理しちゃ駄目だよっ！」

「なのはさんもいたんですか……」

「うん。大丈夫？アレンくん」

「いいえ、もうすぐ死ぬと思います」

「!?!」

「身体中もうボロボロでして……ま、ここまでみたいです」

「そ、そんな……」

「……いや」

「フェイトさん？」

「そんなのいやっ！何で!?!何でアレンが死ぬの!?!」

「フェイトさん、落ち着いて……」

「落ち着いていられるわけじゃないっ！私の……私のせいでアレンが……」

涙を流しながら叫ぶフェイトさん。

「アレンくん。ぐずっ。い、嫌だよ。せっかく友達に、ぐずっ、なれたのに……」

なのはさんも泣いている。

何で泣くんですか？

泣かないでくださいよ。

もう僕は、

人が泣くのをみたくないのに――……

「!? ツーゴフツゴフツ」

口から血が出た。これじゃあもう会話もやりにくいな……

「アレンツ!? アレンツ!?」

「アレンくん!?」

「ヒュー……ヒュー……」

すでに言葉を発する力もない……

ごめん、クロノ、はやて、ここまでみたいだ。今までありがとう――……

なのはさん、フェイトさん、少しの間だったけど、楽しかったです。できればまた遊びたかったなあ――……

さえ……あの時、勝手に行ってごめんって一度謝りたかったけど、もう謝れないなあ――……

師匠、あの時の、剣を握る理由、今ならはっきり言えます。

僕は――！……

く？？？side

くそっ！

どうなってるんだっ！？

何であの爆弾が上空で爆発した？

く、くそっ。これじゃ計画が……

「そこまでだ」

いきなり声をかけられる。

「だっ、誰だ貴様っ！」

「管理局提督、クロノ・ハラオウンだ」

「！？」

どっ、どっいうことだっ!?

何で管理局の犬がこんな所に……

「悪いがお前の計画は、全てお見通しだ。カナル・グリフィス」

「!?!?!」

ばっ、馬鹿なっ!?

この日のためにどれだけ綿密にはれないように計画を立てたと思っ  
てるんだっ!?!?

「運がなかったな。恨むんなら、僕の悪友を恨んでくれ」

「く、くそっ! やれっ、お前ら!」

周りの部下に叫ぶ。

「がっ——」

「ぐわっ——」

「ゴアッ——」

部下達は全て気絶していた。

「ばっ、馬鹿なっ!?! 全員プロなんだぞっ!?!」

「ま、あたしらの敵じゃねーな」

いきなりそんな声が聞こえた。

「ヴィータ。あまり調子に乗るのはよくないぞ」

「んだよシグナムツ！事実だからいいじゃねえかつー！」

ヴィータ……シグナム……

ま、まさか……

「ヴォ、ヴォルケンリッター……」

「なんや。シグナム達のことも知ってるねんな」

「なっ！？や、八神はやてまで……」

俺は絶望しながら、地に跪いた。

くクロノsideく

「ふう、抵抗を諦めてくれたか」

僕はカナルが跪くのを見て、そう呟いた。

「クロノくん。まだ終わってないねんから、気抜いたらあかんぞ」

「そうですね。提督ともあるうお方が、そんなことごとくするのぞ」

す

はやてとシグナムからそう言われる。

「すまないな。最近仕事づくめで疲れていたせいかもしれない……」

「あんま働きすぎたらあかんで」

「フエイトにもよく言われるよ」

「主、提督、早くこいつを運びますよ」

「あ、ああ」

「せやな。とつとと運んで、今回の事件の英雄、アレン・ウォーカ  
ーに報告したらんとな」

「そうだな」

「一体何者ですか？アレン・ウォーカーは……」

「だよなあ。たったあれだけの手掛かりで、こいつの計画見破るな  
んてありえねえだろ」

シグナムとヴィータはアレンの正体が気になるらしい。

「うーん。何者か、かあ」

「まあ、一言で言ったら……」

「やる気と実力が反比例した男、だな（やな）」

「「???」」

シグナムとヴィータは、首を傾げていた。

僕はその二人を無視し、さっき爆発のあったあたりを見た。

無事だろうな、アレン……

「フェイトside」

「アレンッ！アレンッ！」

このままじゃ本当に死んじゃうっ！！

「アレン……いやだよお」

「……フェイトちゃん。まだ諦めたら駄目だよ」

いつの間にか泣き止んだのはが、強い意志の宿る瞳で、私を見つめる。

「でも、どうすればいいの?」

「考えるんだよ。どんなに絶望的な状況でも、決して諦めない。それが、私の取柄だから……」

「……そうだ。諦めたら、可能性があるものも、全部ゼロになっちゃう……」

私は一番そういうことを知っていなきゃいけないのに……

親友が不屈のエースと呼ばれてのは、この信念があつたからなのに……

「……なのは、今すぐ医療設備の整った所に行こう!」

「!……うん!」

私となのは下に降りながらも考えていた。

「アイオンツ!何かアレンが助かる方法はないっ!?!」

『すぐに輸血と止血をするか、魔力が回復するかのどちらかです』

「魔力の回復?」

『ええ。マスターのヒーリングの高さは、さっき体験しましたよね?だから魔力さえあれば、マスターは意識がなくても、無意識のうち傷を塞ぐはずですよ』

「なのはっ！すぐにアレンに魔力を与えようっ！」

「でもどうやって……」

『なら、シークエンスを使えばいいかと』

「シークエンス？」

『はい。マスターの開発した、『形無き剣』パラレルソードのことです。これは、扱っているものの魔力を、好きな形で具現化できるデバイスなのです』

「そ、そんなことできるの？」

『はい。ただしいくつか欠点があります。一つ目は、強いイメージがないといけないんです。イメージが弱いと、魔力は空中に霧散してしまいます。二つ目は、魔力の消費が激しいことです。普通の方なら、三回も使えば魔力は無くなるでしょう』

「……それなりのリスクはあるんだね」

『はい。けど、あなた方なら問題ないはずです』

「でもどんな風にイメージすれば……」

『イメージとしては、まずマスターの体を包みこむイメージをします。その後、マスターの体の中に魔力を注ぐイメージです。それであなた方の魔力がマスターに移ります』

「わかった。なら、ビルの屋上に行こう。飛びながらじゃイメージしづらいから」

「わかった」

ビルの屋上に降りる私達。何故か大穴が空いていたが、今は気にしない。

「行くよ、フェイトちゃん」

「うん」

「シークエンス、セットアップ」

私となのは手を重ねてシークエンスを握った。

まずは包みこむイメージを……

集中しろ。強く、強く、イメージを……

シークエンスの鏢から、桜色と黄色の、魔力の煙がでてきて、アレンを包みこむ。

「くっ……」

魔力を根こそぎ持っていかれた感じだわ……

アレンはこんなものを使っていたの？

煙が一瞬ぶれる。少しでも集中をとくと、すぐにでも霧散しそうだ。

「フェイトちゃんっ！」

「わかってる……っ！」

きつい。早く次のイメージを……

魔力をアレンの中に入れることをイメージする。

どんどん魔力の塊がアレンに入っていく。

まだアレンは目を覚まさない。

もっと……

まだ目を覚まさない。

もっと……っ！

まだ目を……

もっと！

まだ……

もっ……っ！

「ん……」

「……」



そして頬を涙が伝う。

ごめん、アレン……

助けられなかった……

ごめん……

「……………何で泣いてるんですか？」

「……………え？」

「ア、アレ……………ン？」

「そうですけどっ..」

アレンは薄く目を開けながら、そう言った。まだ完治はしていないのか……………

「「アレン(くん)!!」」

「ぐえっ」

私となのはは、アレンに抱きついた。

よかったっ！本当によかったっ！！

私はなのとは一緒に、アレンを抱きしめながらそう思った。

「アレンside」

「ぐえっ」

なのはさんとフェイトさんが抱きついてきな。

てかこれどういう状況？

「ア、アイツ！説明っ！」

『マスター……本当によかった』

「????」

アイの奴、頭でも打ったか？

えっと………何で二人は泣きながら笑うなんて器用なことをしながら

抱きついてるんだ？

そして身体中が悲鳴をあげてるのは何故っ！？

「だ、誰か状況の説明を……」

『私がしましょうか？』

「レ、レイジングハート……た、頼む」

『実はカクカクシカジカなんですよ』

「うんその説明で状況がわかるような特殊能力を僕は持ってないからね」

『冗談です』

「お前でも冗談なんて言うんだな」

『まあ簡単に言いますと、爆発を間近で受けたあなたは死にかけていたんです。それをマスターとフェイトさんが、アイオンからシークエンスの能力を教えてもらい、その能力を使って、お二人があなたを復活させたんです』

「さっきと違いとても分かりやすく簡潔な説明ありがとう」

『いえいえ』

そうだ……思い出した。

僕はあの時、死を覚悟した。

もうどんなことをしても助からないと思った。

それを、目の前の、泣きじゃくりながら抱きついてくる、二人の少女が助けてくれた……………

正直信じられない話だけど、現に今、僕は生きている。それが証拠なのだろう。

「……………なのはさん、フェイトさん。ありがとうございました」

「……………」

「?なのはさん?フェイトさん?」

「……………」

寝ていた。

『無理もありません。マスターに全魔力を注いだのですから』

「そっか……………」

シークエンスは、構造などを詳しく知っていないと、本来使えないはずなのだ。それくらい扱いが難しいから、まだ短期戦でしか使えない代物なんだけど……………

構造も詳しく知らないで、あの傷を治すだけの魔力を僕に注ぐなんて……………

一体どれほどの魔力と集中力がいるのだろう……

僕は抱きついた状態で寝ているのはさんとフェイトさんの頭を撫でた。

「……………本当に、ありがとうございます」

僕は空を見上げながら、もう一度お礼を言い、意識を無くした。

第四十二話 不屈の魂（後書き）

感想待ってます（＾　＾　）！

## 第四十三話 事件解決

「アレンside」

「――！」

んあ？

「――！」

誰だ？僕眠いんだけど……

「レン！」

うるさいな。僕は早くあの綺麗な花畑のある場所で昼寝するためにあの川を泳がないと――！……………

「泳いじゃだめえっ！」

「だばばばばばばっ」

往復ビンタされる。

「いって〜。誰だ!？」

そう言って起き上がると、そこにはフェイトさん、なのはさん、はやて、クロノがいた。

場所はさっきのビルの屋上のままか。

「で？何で僕を起こしたの？」

「これを飲んでもらうためだ」

そう言つて、クロノは僕に輸血パックを投げてきた。

「？何で僕がこんなものを？」

「忘れたか？お前はすでに体内の二十五パーセント以上の血液を流している。このままだと、死ぬぞ？」

「……………」

ぐくぐくぐくぐくつ！！

渡された血液を勢いよく飲む。

「ふ、普通注射なんじゃ……………」

「それに一定量以上の血液を口から飲むと、戻すって聞いたことあるような……………」

「あれ？私平気だったけど……………」

「そういえば、アレンの血を飲んだんだっただな」

「ぶっ……………」  
「ほっ、っほっ」

の、喉つまらせたっ！

その話はしないでくれっ！まだ恥ずかしいんだっ！

『マスターはその時……………』

「アイ？」

『……………えっと、マスターが今まで見たことないくらい怖い顔してるので、この先は言いません、はい』

「「「？」」」」

「……………／／」

三人は不思議そうな、一人は真っ赤な顔をしていた。

ふう。アイの奴…………

もしこんなこと言ったら、シスコンのクロノ、友達想いのはやてとなのはさんが僕をーー……………この先は考えを巡らせるだけで恐いので考えない。

「にしても、今回のためにシークエンスを作って正解だったな。じやなきや今頃僕は……………」

「全くお前は……………心配するこっちの身にもなれ」

「今回は全面的に僕が悪かったことを認めよう。にしても、なのはさんとフェイトさんはすごいですね。使い方を聞いただけでシークエンスを使えるなんて……………」

「そうかな？そんな武器を使ってるアレンの方がすごいと思うけど……アレンって本当にAAA+なの？」

ギクッ

クロノとはやても若干動揺している。

「あゝ。そ、それよりっ！カナル・グリフィスは捕まった？」

「ああ。捕まえたよ」

「よかった……」

「？何の話？」

「ああ。まだなのはとフェイトには話してなかったな」

「今回はこいつのお手柄やで。人質救出に爆弾処理、拳げ句の果てには事件の真相まで突き止めたんやからな」

「そ、そうなのっ!？」

「ひゃゝ。アレンくん、すごいねえ」

「んゝ、そうですかね？」

「はあ……」

クロノの奴ため息つきやがったよ。

「で、事件の真相って？」

「アレン、説明しろ」

「血液補給できたし、疲れたし、眠いから寝るわ」

「アレン？」

「フェイトさん、笑顔が恐いです」

「だったらちゃんと説明しなさい」

「ん〜……簡単に言うと、カナルの目的は、管理局に汚名をきせることですね」

「?どういこと？」

「あれだけでかいパーティー。もし、そこに集まった著名人全員が死んだらどうなりますか?しかも予告つきでだったら」

「え?それは確かに……」

「管理局の汚名になるよね〜」

「でも、カナルの目的はヒースさんの暗殺なんじゃ……」

「違いますよ。著名人全員の、爆殺が目的です」

「「なっ!?!」」

「おそらく会場を選挙した奴らはそそのかされただけでしょうね。それに注意をいかせ、爆弾の存在に気づかれないようにするために爆弾を仕掛けたのは、暗殺者の誰かでしょう。恐らく15人の暗殺者にこういう依頼をしたんでしょう。10はヒースの護衛のふりを、5人は、誰でもいいから一人に爆弾を仕掛けさせて、後はパーティーに行つて、爆発する直前に退却しろつて」

「でも、15人に依頼する必要あつたのかしら？」

「ヒースさんは必ず10人の護衛を雇うそうですから」

「じゃあパーティーに5人潜入させたのは？」

「おそらく僕みたいな奴の対策でしょう」

「?どういうこと？」

「身のこなしだけで一般人との違いを見抜く奴がいたら、護衛と暗殺者の人数がわかります。その時、護衛と暗殺者の割合を考えたとき、その割合が、一番僕達に怪しまれなく、かつ油断させるのによかつたんでしょう。現に僕は、10人の護衛に安心してしまいました。まあ、5人という人数には疑問を覚えましたか……」

「じ、じゃああの暗殺計画なんて陳腐なタイトルも……」

「ま、爆弾から目をそらさせるためでしょうね」

「そ、そんな……」

「で、あのマスクたちに、金を用意しなければ、一刻ごとに人質を殺すように言った。爆弾は30分で爆発だ。マスクたちの口封じもできて、完璧です」

「で、でもなんでカナルはわざわざビルの近くに？」

「わざわざ口封じのために殺すことから考えて、カナルはかなり慎重な奴だと思ったんですよ。だから、計画の成功である爆発が見える場所で、最も遠い場所にいると思ったってわけです」

「ひゃ〜〜……」

「す、すごいね……」

「ま、カナルは利用されただけだろうけど……」

「えっ!?!」

「どおせどつかの管理局を恨んでる奴に、今回のことをしたら、何か見返りを貰えたんですよ。あのガジェットを開発するには、よっぽど強い支援金が必要なはずだ。そんな金、記録にないような研究室で研究してる人が持つてるとは思えない。今回はその支援者に依頼されたってところでしょうね」

「……………な、何かアレンくんの話聞いてると、自分が馬鹿だっと思ってくるよ」

「わ、私も……………」

「言っな。こいつに関わった人達はみんなそう思ってるんだ」

「く〜っ！！なんでお前みたいなやる気なし男がそんなに賢いねんっ！！」

「え？別に普通だろ？」

「「「「」」」」」

ガシッポコッガンガンッドゴッバキッグシャツ！！

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ  
あああっ！！？」

全員から殴る蹴るの暴行をつける。

「ぼ、僕まだ完治してないからっ！フェイトさんもあんまり動かない  
いでくださいっ！！」

「うるさいっ！」

「心配したのに何故！？」

「何で教えてくれなかったのよ！？」

「教える暇ありませんでしたから！僕がこれに気が付いたの、一人で  
行動してたときにたまたま見つけた爆弾を見たときだから！」

「う〜っ」

何故まだ睨むのですか？

「それよりクロノ。カナルを支援してた奴は……」

「あっさりカナルが吐いたよ。今、そいつらの拠点にシグナムとヴ  
イータが攻めに行っている。僕もこれから向かうつもりだ」

「おやおや？僕が目覚めるまで待ってたのかな？」

「……………そんなに死にたいか？」

「ごめんなさい。調子に乗りました」

「うん。では行ってくるよ」

そう言ってクロノは行った。さて、僕も帰るか。

立ち上がって帰ろうとする。

「アレン、どこ行くの？」

「どっかって、帰るんですけど……」

「駄目だよっ！ちゃんと病院に行かないとっ！」

「いやもう平気ですよっ？」

「なのはちゃんの言う通り、行ったほうがいいで。さっきまで死に  
かけやったんやから」

「その死にかけに追い討ちをかけたのはあなた方だけだね」

「」「」「」

「じゃあ僕はこれでー……」

ドンッ

しりもちをついてしまった。

あ、あれ？力が入らないよ？

「うっ……」

フェイトさんも倒れた。だからあんまり動かないほうがいいって言ったのに……

「フェイトちゃん、アレくん、大丈夫!？」

「僕は体に入らない、ていうか感覚がないだけですから大丈夫です」

「いやそれ結構やばいよね!？」

「フェイトちゃんは?」

「うーん、正直キツいかも……」

「じゃあ、二人揃って入院だね」

「あゝ、病院で一日中寝るのもいいかもな」

「何言ってるの？病院でも報告書とか書かされるよ？」

「うそっ!？」

「ホンマや。現に私ら全員、その経験あるからな」

「……ああ。やってらんねえ。僕今回こんなに頑張ったのに、何でこっなるの？」

「人に心配かけた罰だよ」

「女の涙は高いわよ？」

「フェイトさん、あんま意味わからずに言ったでしょ？」

「うっ……」

「はいはい。こんなところで話してないで、さっさと病院行くで」

「あっ、私のセリフ取られた」

「いつも言われてばっかやからな。たまには——……」

あれ？何か声が聞こえなくなってきた。

てかやばいかも——……

くフェイトsideく

「?アレン?」

いきなりアレンが喋らなくなった。

「……………あかん。こいつ気絶してる。早よ病院運ばんとやばいかもしれん」

「ええっ!?!」

「は、早く運んで!」

「了解や!なのはちゃんはフェイトちゃん頼んだで」

「うん、わかってるよ」

「ごめんねなのは」

「ううん。気にしなくていいよ」

「ありがとう」

私はアレンを見た。

顔色はあまりよくない。

大丈夫かな?

そう思いながら、私達は病院に向かった。



## 第四十四話 誰にでも苦手なものはある

「アレンside」

「……………んあ？」

「どこだ？ここ……………」

「まず目に入ったのは、白い天井だった。そして消毒液の臭いが鼻をついた。」

「……………病院か？」

「あの後ここまで運ばれたのか……………」

「アイ、いるか？」

『「ここにいますか？」』

顔を横に向けると、デスクの上にアイが置いてあった。

「僕はどれくらい寝てた？」

『「丸三日ですね」』

「三日も寝てたのか……………っ……………!？」

体を起こそうとしたが、痛みでそれはできなかった。

「あゝ、くっそ。三日前よりひどくなってるないか？」

『痛みを感じるだけマシになっていると思いますか？』

「あゝ。確かにそうかもな」

もう一度、体を起こすことを試みる。今度は痛みを感じないように調節した。

「……………え？」

思わずそんな声をあげる。

何故なら……………フェイトさんが、椅子に座りながら、僕の足を枕にするように、俯せに寝ていたからだ。

「な、なじえ？」

『フェイトさん、この三日の間、ずっとマスターのそばにいたんですよっ。』

はあっ！？

「止めるよっ！この人の怪我だってかなりひどいのに、こんなことしたら……………」

『それだけあなたが心配だったんでしょっ』

「……………」

『なのはさんもはやてさんも、クロノさんも止めましたが、それでもここから出ていきませんでしたから』

「……………そうなのか」

僕はフェイトさんを見る。よっぽど疲れているのか、僕が大声を出したのに起きる気配がない。

「はあ……………しゃあないか」

僕はフェイトさんを起こさないように、ベッドから体を起こし、フェイトさんを抱えて、ベッドに寝かせた。

『ずいぶんと優しいですね』

「そりゃいっぱい迷惑かけたからなあ」

『そうですね。マスターはいつもはやる気皆無のくせに、こういう時だけは何故か無謀なことにもためらいなく突っ込みますからねえ。ちよっとは周りの心配も考えて欲しいものです』

「つつ……………すまん」

『謝らなくても結構ですよ。どうせ次も同じことするでしょうから』

「悪かったなあ！同じことばっかする奴でっ！」

『あ、開き直った上に逆ギレしましたね』

「……………そんなに僕をいじめて楽しいか？」

『楽しいです』

「くっ……こうなったら、決着をつける必要があるな……」

『望むところです』

「はあああ……」

『ふおおお……』

「『ほわあっちやあああああああっ！……』」

「病院では静かに」

看護師さんが入ってきて僕とアイにそう言う。

「『す、すいません……』」

その言葉を聞くと、看護師は出ていった。

は、恥ずかしい……

アイも恥ずかしいようで、何も言わない。

「ふふふっ」

「え？」

笑い声がしたのでそっちを向くと、フェイトさんが口上品に手を

あて、笑っていた。

「フェ、フェフェイトさん……………いつから？」

「あなたがお姫様抱っここで私をベッドに寝かせた辺りから、かな」

ほとんど全部じゃんっ！しかも恥ずかしいところだけっ！！

言ったフェイトさんも顔が赤い。

恥ずかしいんだったら言わないでください。

「……………」

「……………」

何だこの沈黙は！？

何か喋らないと、何か……………

「……………アイ、ボケ」

『この状況でっ！？』

「うるさい！！いいから突っ込ませろっ！！」

『はあ……………わかりましたよ。コント、コンバニニ』

「いや誰がコントしろって言った！？」

『マスターがボケると言ったから……………』

「コント発言事態すでにボケだよっ!!！」

『コントをボケにすることは許しませんよっ!』

「あっ、これはすいません……………って違うだろっ!何だよボケにするって!馬鹿にするだろ!」

『そつともいいいます』

「そつとしかいいませんっ!!--!」

ふう……………どうだ?改心のできだぜ。

『マスター、途中から目的忘れてませんでしたか?』

「……………返す言葉もいじりません」

「ふふっ」

「フェイトさん?」

いきなりフェイトさんが笑った。何だ?成功か?

「アレんって面白いよね」

「?漫才のことですか?」

「それはつまんなかったかな……………」

ガァァァンッ！！

僕とアイの背後にそんな文字が現れる。

「アイ、修行に行くぞ。笑いの高みへ行くために」

『どこまでもついていきます、マイマスター』

「はいはい。漫才はここまでね」

「『はぁーい……………』」

「それで、体はどう？」

「ん〜……………特に問題ないですね」

「そっか……………よかった」

「それよりフェイトさんこそ大丈夫ですか？」

「うん。もう何ともないよ。アレンのおか……………／／／」

フェイトさんは途中で顔を真っ赤にした。

何故……………ま、まさかっ！！

「す、すみませんでしたっ！！」

僕は頭を下げた。

「へっ?」

「あのそのキキキスしてしまつて……………//」

ボシュッ

僕とフェイトさんはショートした。

耳どころか首まで真っ赤にして、顔から煙をプスプス、と出している。

「じ、じゃあもう体は大丈夫ですか?」

顔を背けながら聞く。

「う、うん……………歩くのはまだしんどいつてくらいかな」

「フェイトさんの病室は?」

見たところここは個室だ。ほかにベッドなんてない。

「ちゃんとあるけど、まだ行つてないわ」

「……………ちゃんと寝てるんですか?」

「うん。初めは添い寝したよ」

「!?!?ッ……………//〵〵〵?」  
「x!?!?」

「じ、冗談だからっ！」

僕のリアクションがあまりにすごかったからか、フェイトさんが慌ててネタばらしする。

「ち、ちよつと今の冗談は心臓に悪いデスヨ？」

「ごめんごめん」

「全く……これからはちゃんとベッドで寝てくださいよ。ぶっせ三日ともあんな体勢で寝てたんでしょ？」

「あはは……ばれた？」

「バレバレです。食事はちゃんととってるんですか？」

「一応……」

「……心配で喉が通らなかつたとか？」

ギクッ

本当に分かりやすい人だな。

「はあ……僕はもう大丈夫ですから、絶対安静にしてくださいね」

「……うん」

フェイトさんは、笑って頷いてくれた。

さて、

「僕はちよつと行くところがあるので、これで失礼します」

「ちよつ、駄目よ！まだ安静にしてないと……」

「大丈夫ですよ」

立ってるのもつらいけど……

「……だったら私も行く」

「はいっ!？」

「アレン一人じゃ心配だもん」

「いやでも……」

「行く」

「………はあ。やっぱり行きません。フェイトさんをこれ以上疲れさせるわけには行きませんか」

「……ごめん」

「いいですよ、別に」

クロノに僕が気絶した後どうなったか聞きたいだけだったし。

「とりあえず、フェイトさんは休んでくださいな。寝るなら僕のベッド使ってもいいし、何か食べたいなら作ってきますよ」

「え？作る？」

「ええ。どうせクロノが用意した病院でしょ？ならクロノの名前だせばそれくらいいけるでしょ」

「うん。何か家族をだしにされるのもなく」

「いつもあいつからひどい目にあってるんだ。これくらいやらなきゃ割にあわねえ！違うか！？アイツ！！」

『好きにしてください』

「ノリの悪い奴め。で、どうしますか？」

「……じゃあ、お願いできる？」

「喜んで……はないな。正直めんどい」

『マスター、最低だと思えます』

「何だと!？」

『そこは格好よく、この世のどんな料理よりもおいしいものを作って、愛しいあなたに食べさせてみせますマイハニー、くらい言わないと』

「よっしゃっ、わかつ……らねえっ!?!?んな恥ずかしいセリフ言える

「かっ!?!」

『でもせめて喜んで、くらいは言わないと』

「うっ……………」

『はあ、これだからマスターは……………』

「ほんっつっつとつに今更だけど、もうちょい主たる僕を敬わないか?」

『はっはっはっ。悪い冗談を』

「そこまでっ!?!」

「確かにアレンを敬うのは無理かなー」

「フエイトさんまでっ!?!」

『普段のあなたの素行を知っている御方でしたら誰でもそう言うかと』

「うんうん、絶対無理だよ。現に今までに敬われたことある?」

「僕だってそれくらい……………あつたようななかったような……………」

「なかったんだ」

『ありませんよ』

「やっぱりアレンにはアイがないとね」

『全く以てその通りです』

「あれっ！？何でこうなった!？」

「『やあ?』」

「……………打ち合わせでもしてた？」

「『』してないしてない』」

「絶対うそだあああああああああああああああああつ!

「!」

そう叫びながら、僕は病室を飛び出した。

くフエイトside〜

「ちょっとやりすぎちゃったかな?」

『いえいえ。あの程度、いつものことですよ』

「そっだね」

「アレンー！フェイトちゃん！」

「遊びに来たよー！」

「はやて！なのは！」

アレンが出ていった後、アイオンと話していると、はやてとなのはが見舞いにやってきた。

「あれ？アレンは？」

『フェイトさんの料理を作りに行っています。フェイトさん、最近ろくに食べていないので』

「へえ、あいつもたまにはいいことするやん」

『たまには、ですけどね』

「でもいいな。アレンさんの料理美味しいから、私も食べたいよ」

『ならマスターに伝えましょうか？』

「どっやって？」

『部屋を出る時、ちゃっかりレルフレントとフェルクエンスを持っていったから、それに繋がれば』

「じゃあ繋いで」



火の勢いが強すぎて、火が壁に燃え移った。

火はどんどん勢いを増す。

《だから言ったのに！》

《ば、馬鹿な……何故こんなことに……》

《わかりません》

《お前らのせいだろうがアホ共っ！！》

《くっ、レル、フェル、セットアップ！！行くぞっ！！》

《《はいっ！》》

《ウォーターショットっ！！》

ドゴガガアアン！！

《やったぜっ！》

《どこが！？厨房半壊してるじゃないですかっ！！》

《あ………クロノのせいによっ》

《また始末書が増えましたね》

「「「「『……………』」」」」

私達はそれを見て黙ることしかできなかつた。

《あ、マスター。アイオンから通信が来てますよ》

《ん？何だアイ？》

『マスター、今病室にはやてさんとなのはさんがいるんですよ』

《そうなのか？じゃあ二人の分も作らないとな！燃えてきたぜえっ  
！！》

「ねえ、アレンどうしちゃったの？」

私はレルに聞いた。

《実は……性格が真逆になる薬とやらがあつたので……マスター、  
おもしろ半分で飲んだんですよ》

「だから今そんな熱血漢みたいになつてんねんな……」

「なんだか今のアレンくん見てると、改めて彼が普段やる気がない  
かわかるね」

「そうね」

なのはの言葉に苦笑する。

《待つててくださいっ！すぐに料理を届けますからっ！！》

そう言つて、アレンは通信を切つた。

「すごい変容やったな」

「本当よね」

「でも責任をクロノくんに押し付ける辺り、根本は変わってないんじゃない？」

「確かにそうかも」

「でもあんな火の使い方する奴がまともな料理を作れるかなあ」

「……し、信じよう」

「二人共顔引きつってるで」

「お待たせしましたー」

「……はやっ！……」

アレンが料理を運んで入ってきたのを見て、全員が驚きの声をあげる。

ま、まだ通信が終わってから5分たってないんだけど……

そう思いながら、持ってきた料理を見た。

くアレンsideく

――厨房。

「ん〜……」

僕は唸っていた。

何故ならいつの間にか料理が完成していたのだ。

「……いつ作ったんだ？」

『覚えてないんですか？』

「？何の話だ？」

『……知らないほうがいいです』

「？」

何言ってるんだレルは？

「ん〜……見たところちゃんとできてるな。味は……」

僕は味見を試してみた。

「……この味付け、僕と一緒にだ。これ、僕が作ったのか？」

『はい。マスターが作りました』

「……何で記憶がないのか気になるが……ま、いつか。考えるのめんどいし」

後何で厨房はこんな無茶苦茶なのかも、この際無視しよう。

「じゃ、持っていけますか」

僕は料理をカートに乗せ、厨房を後にした。

「お待たせしましたー」

「「「はやっ！」「「「

入った途端そう言われた。てか何ではやてとなのはさんが？

「えっと……何で二人が？」

「「えっ？」「

「……ひょっとして覚えてない？」

「はい。さつきも、気づいたら料理ができていて……って何で呆れてるんですか？」

三人は何故か呆れていた。

アイに至っては、

『あんなのマスターじゃないあんなのマスターじゃないあんなの……』

と、延々と訳の分からないことを呟いている。

僕の身に一体何があったんだ？

……今はそれより料理が先だな。

僕はカートに乗せた料理を、三人の前に持っていった。

「どうぞ好きなのを食べてください。足りなくなったらまた作りますから」

「ありがとう、アレン」

「ちょっと見直したよ」

「お前にもいいところあってんなあ」

「お礼はいいからさっさと食べてください。せっかく作ったのに冷めてしまいますよ」

「そうだね」

「じゃあせーの……」

「」「」いただきます」「」

お行儀よく手を合わせる三人。この三人なら、これだけで足りるはずだろう。

僕はじっさり部屋を出ていじじいとする。

「アレん？どこ行くの？」

ギクッ

あっさりされた。

「ち、ちよつとトイレに……」

「はいウソ！アレん、頼むから私らにこれ以上心配かけんとして」

「」「わりい……」

「アレんくん。顔くだけじゃなくて、ちゃんと守ってよっ」

「じじい……」

「返事は？」

「は、はい……………」

何でばれた!?

「食べる前に、ドアにバンドでもしかける?」

「どうせやったら滅茶苦茶強力なバンドにしよ」

「じゃあ窓にもしかけた方がいいね」

信頼度ゼロ!?

『無理ありませんよマスター。あなたの信頼度なんてはなからないですから』

「ううっ」

言い返せない!

「バンド設置完了」

「もう!?!」

『マスターがもたもたしてるから』

「いやお前のせいだよね!?!」

もう逃げることもできないっ!?!

「……………はあ。諦めるか」

『いさぎよいですね』

「それ以外の選択があったら教えてくれ」

『はっはっはっ』

「笑ってごまかすなっ!!」

僕とアイが漫才もとい喧嘩している間に、三人はすでに料理を食べていた。

「このグラタン美味しい！」

「こっちのサラダもすごい……………」

「なあ、このスープの作り方教えてや」

……………何かもつどうでもいいや。どうせいつものことだし。

「なあ教えてや」

「ああはいはい。えっとこれは……………」

「へへ。そういう風に作るんだ」

「今度ヴィヴィオに作ったげよ」

「はやてはシグナム達に？」

「うん。そのつもりや」

「ヴォルケンリッターの人達と一緒に住んでるんだっけ？」

「ああ。皆ええ子やで〜」

「いやお前のが年下だよな？」

「細かいこと気にしたらあかんで」

「ま、確かにそうだな。んなこと気にしてたら体がもたん」

主にあなた方のせいだ。

「それにしても本当に料理が上手だよな」

「レパートリーも多いし、一品一品ちゃんと美味しくなるよう工夫されてる。本当にすごいよ」

「いやそんな……」

「アレんくんって、やる気がないの以外完璧？」

グサツ！

ぐっ、痛いところをつかれた。

そういえばクロノにも言われたことあるなあ……………

「こいつにもできひんことくらいあるでえ」

「!?!ツ」

おいはやて……まさかとは思つが……

「え、あるの?」

「なになにー」

言うつもりか!?

「それはな……」

「させるかあつ!?!」

「バインド!」

はやての口を閉じようとしたら、なのはさんが僕をバインドで動けなくした。

「!?!~~~~つ!?!」

無理に体を素早く動かして、それを止められたから、身体中を痛みが襲つ。

だが今はそれよりはやての口を……

「ぬあああつ!」

「バインド!」

無理矢理はやてに近づこうとしたら、さらにフェイトさんがバイン  
ドでしばる。

く、くそっ。もう止められないのかあっ！！

「アレンはなあ……」

やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！

「幽霊が苦手で、真夜中に一人で行動できひんねん」

「」

……はい？」「」

………言いやがった。

てか、二人とも固まらないでください。

「だから昔はよく夜中にトイレに連れて……」

「わーっ！わーっ！！わーっ！！！！」

そこまで言うなあっ！！

「なんやアレン。恥ずかしいんか？」

「ったりめえだっ！てか、今なら少しは平気だよっ！！」

「や、やっぱり事実なの？」

「……………あっ」

「しかも今でも苦手なんだね……………」

「し、しまったあああああああああああああ  
！！！！」

「自分で墓穴ほったなあ……………」

「……………ううっ。死にたい」

ああ……………ついにフェイトさんたちに弱みを握られてしまった……………は  
やてにも未だに苦手だと知られてしまった。

暗闇程度なら平気だけど、出そうな雰囲気だと足が震えて動けなくなる。

「さ、最悪だ……………」

せめてもの救いは、ここにクロノがいないことだな。もしあいつに知られたら……

「じゃあ早速クロノに……」

フェイトさんがクロノに通信しようとしていた。

「ちよつ、待ったあっ!!」

「どうかした?」

「何でクロノに報告するっ!?!?」

あ、敬語にするの忘れてた。

「だってアレン、私達に心配かけないでって言っても、聞いてくれないでしょ?だから少し憂さ晴らしを……」

「あなたそんなに黒いキャラでしたか!?!?」

「アレン、人は変わるものよ」

「変わるの早すぎでしょっ!?!?」

くそっ、非常にまずいぞ。

こんなことをクロノに知られたら……

この事はやてしか知らなかったことなのに……

こいつに知られたのは、はっきり言って偶然でしかなかった。その

時ほど自分の不運を呪ったことはない。

話は、僕がこの大陸を離れるより、更に数年前に遡る。

それは僕がはやてと同じ隊舎にいた時の話だ。

その頃、よく僕ははやてと同じ任務をする事が多かった。理由としては、僕の正体を知っているのが、はやてしかいなかったからだ。上の連中が、僕のストッパー役として、はやてを選んだ。

闇の書事件の影響で、はやての評判は悪かったが、魔導師としてのランクはオーバース。ちょうどいい生け贄だったんだろう。

はやてが僕の正体を知ったきっかけは、また別の話になるので今は話さないでおこう。

まあそんなわけで、はやてとは同じ任務によくついていた。もちろんヴォルケンリッターの人達とも一緒に戦ったこともある。正体はばらしていないが……

そうして、次々に事件を解決し、僕達は結構有名になっていた。

そして、その日は来た。

その日、僕達はある犯罪者を追っていた。その犯罪者は、何人もの人を殺していて、魔法は使えないが、殺しに関してはプロだった。

証拠は残さず、一瞬で殺し、すぐに立ち去る。

そんなやり方で人を殺すので、犯人特定にかなりの時間をようしてしまった。

そして、ついにつかんだのだ。

大陸の東にある、小さな町にいるという情報を。

僕とはやては、その町の近くの宿で、一度休んでから追うことにした。

何日も飛びっぱなしで、かなり疲れていたからだ。

節約のため、はやてとは同じ部屋になった。その頃はまだガキだったので、ドキドキするとかそんなことは一切なかったが。

その夜、僕は深夜に目を覚ましてしまった。しかも、トイレにもすぐく行きたいという条件つきで。

その頃は暗闇すら苦手だったので、僕は生まれたての子馬のようにおぼつかない足取りで、トイレに向かった。

その宿はとても小さい宿で、トイレは共同だった。つまり廊下にあるのだ。

何で部屋にないんだよ！

僕は心の中で何度もそう叫んだ。幽霊にはトラウマがあり、その事で昔、とある人物にからかわれまくったので、人には絶対知られた

くなかった。

「幽霊なんていない幽霊なんていない幽霊なんていない……」

自分に自己暗示をかけ、ついにトイレの扉が目映るくらいの場所にきた。

「や、やった……」

そう呟いた瞬間、後ろから気配がした。

ま、まさか幽霊!?

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

僕はその場をダッシュで離れた。

ヒュンッ

何かが空をきる音がした。

き、気のせいじゃなかった!!

僕は少し離れた所で、そのことを考えた瞬間、腰を抜かしてしまった。

ま、まずい!

僕はそう思いながら、後ろを振り返った。

「ちっ、外したか」

そこには、幽霊ではなく、全身黒ずくめの、一人の男がいた。

「へ？」

思わず間抜けな声をあげる。

状況を理解することに集中した。

まず男は間違いなく幽霊なんかじゃなく人間だ。そして格好から一般人じゃないことはわかる。

手にはナイフ。さっきの音はナイフが空をきる音か。避けなかったら死んでいたな。

そして気配をたつつまさ。僕が後ろをとられるなんて……

こんな辺境にいる奴で、こんなことができるのは……

「お前か？最近連続殺人をおかしている、タイチ・ネーガルは」

「ほう、お前のようなガキまで知ってるのか。俺も有名になったものだな」

いやそりゃ知ってるよ。あんた捕まえにきたんだから。

「なら、ますます生かしてはおけないな」

そう言って男はナイフを構える。

ま、まずい！腰が抜けて動けない上に、アイは部屋においてきてしまった！

「死ね」

男が僕に向かって走ってくる。

し、死ぬー……

そう思って、目を閉じた。

「……………あれ？」

しばらくしても、激痛が襲ってくることはなかった。

恐る恐る目を開けると、男が倒れていた。

「は？何で？」

「何やってんねん、お前」

「へ？」

声のした方を向く。

そこには、バリアジャケットに身を包んだはやてがいた。

「は、はやて？何で……………」

「夜中にあんな悲鳴あげられたら、誰でも目え覚ますわ。それで起きたらあんたは部屋におらんし、心配になって探したら殺されそうになってるし……」

つまり、僕を助けに来てくれたわけね。今回ばかりは助かった。

「それにしても珍しいですね。ーイーがこれくらいの相手にやられそうになるなんて」

「うっ……」

ま、まずい！このままじゃボロがでる。

「た、たまたま調子が悪くてね」

「ほんまか？実は幽霊苦手で腰抜かして、動かれへんかったりして」

ギクッ

ピンポイント！

「……まさかほんまなん？」

「ま、ま、まさかつ！幽霊なんて……」

「じっ……め……せ……」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああっ！……」

後ろから突然声がした。

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀  
仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無………」

すごい勢いでお経を唱える。魔法の詠唱より速いかもしれない。

「あ、あの〜。アレン、リンなのです〜」

「南無阿弥陀仏南無……へ？」

リン！？

後ろを向くと、苦笑いしているリンがいた。

前には腹を抱えて、必死に笑うのを耐えているはやて。

「お、お前ら……」

「ご、ごめん……あんたのそんな顔初めて見たから……くくっ」

まだ笑ってやがる。

「お、お礼に肩かしたるから許してや。で、どこ行きたいん？行く  
場所あったから部屋でてったんやる？」

「……………トイレ」

「やっぱりな〜。こんな夜中に行く場所なんか、トイレくらいやん

な〜」

なんかしきりに頷いている。

滅茶苦茶腹たつんだけど……………

「ほな、行こか。リン、そいつ縛っというてな」

「わかりました〜。アレ、お化けなんて恐くないですからね〜？  
ううっ。自分もガキだけど、それよりずっとちっちゃい奴に子供扱  
いされるなんて……………」

この時、もう絶対誰にもばれないようにすると、心に誓った。

そんなことがあり、もう二度と人にはばれないようにしてきたのに…  
…はやての奴！

しかもさっき“よく”って言ってたけど、それ以降ンなことなかっ  
ただらうがっ！！

だが今さら否定しても、なのはさんたちは信じないだらう。

「で、どうするの、アレ」

「もう私達に心配かけないって約束してくれる？」

「……………善処します」

「フェイトちゃん、クロノくん!……」

「だあああああああああっ!! わかりました! もう無茶はしないと誓いますっ!!」

「うん」

満面の笑みの三人。

何も知らない人がみたら、天使の笑顔だろうけど、僕から見たら悪魔にしか見えないよ。

なんか昔の嫌な記憶も思い出したしなあ。

はあ……… 今日も厄日だな、こりゃ。

そんなことを思いながら、楽しそうに料理を食べる三人を見た。

それを見てみると、さっきまでの鬱な気持ちも、何かどうでもよくなってきた。

「……………ま、いつか」

僕は小さく呟き、微笑んだ。



## 第四十五話 決断

（アレンside）

「……これ、最悪じゃん」

僕は手にした新聞を見て、そう呟く。

場所は病室。僕が目覚めてから二日目。事件からは四日目になる。

ここには今、僕とクロノがいる。

僕が目を覚ましたと聞き、クロノが事件がどうなったか教えにきてくれたのだ。

あの後どうなったかというと、あっさり解決したとしか言えない。

カナルを支援していた組織の名は“どらえもん 努羅獲紋”。組織名の突っ込み  
関しては受け付けるつもりはないのであしからず。

どらえもん（漢字変換するのが面倒なので、以降ひらがなになりま  
す）は、どうやら麻薬の密輸が主な行動らしい犯罪者の集まりだと  
か。

数ヶ月前、麻薬の取引現場をおさえ、組織のメンバー数人を現行犯  
で捕まえたらしい。

その腹いせを、どうにか管理局にしたかったらしいが、そんな力な  
ど当然ない。

そんな時、偶然カナルの研究所を見つけた。

その頃、カナルも研究が行き詰まっていた。理由は資金不足。

それを知ったどらえもんは、これを使ったら管理局に復讐できると考え、カナルの研究資金を援助。

ガジェットは完成。二回によるテストの結果、実用はできるが、管理局を脅かすのは無理と判断。

そこで思いついたのが、ヒース・ヒュールド主催のパーティー。

そこにいる著名人全てを殺せば、管理局の名は、地に落ちるだろう、と考え、今回の事件、CG事件の決行を決意。

三度目の襲撃は、なんとか暗殺のほうに目をくらませるため、つまりあの研究所を見つけたのは、全て仕組まれていたのだ。

どらえもんは事件の全てをカナルに押し付けた。

カナルは反対したが、あのガジェットを完成させる資金を出さないぞと脅され、実行を決意。

あのガジェットは、どうやら未完成のようだ。

そして、計画は失敗。死者を一人もださず、カナルもどらえもんも捕まえることができ、事件は幕を閉じた。

だが僕にはまだ二つの不安要素があった。

一つ目は、あのガジェット的设计図及び本体の流出。

あんなものを他の奴らに使われたら、また大きな事件がおきるだろう。

そしてもう一つは、犯人の一人に、アルファ・ステイグマ複写眼を見られたことだ。

その事を話すと、

「心配するな。口封じはすでに行っている。それに今ごろは牢獄だ。ばれる心配ない」

との事。

ホント、根回しいいよな。きっと僕が違う大陸の魔法を使ったのを見た奴らも、口封じに成功してるだろうな。こっちはばれてもごまかしがきくが。

そして、話が終わると、クロノは僕に新聞を投げてよこした。

それを見た瞬間、僕の不安要素がさらに増えた。

見出しの欄には、こんなことが書いてあった。

【ハラオウン執務官の部下、アレン・ウォーカー執務官補佐、見事に事件を解決！彼のおかげで、この事件は解決したとって間違いないでしょう。今回の事件の真相をつかみ、それをクロノ提督に報告し、自分は危険を顧みずに、人質を救出し、さらには爆弾までも処理。あのハラオウン執務官が瀕死の重症を負ったのを救ったのも

彼です。彼のおかげで救われた命は、計り知れないものでしょう！  
彼がハラオウン執務官の下についてから、たった十日で、三つの事  
件を解決した腕前といい、彼は一体何者なのでしょうか！？そこで  
私達は彼について調べたのですが……どれだけ調べても、彼に関し  
ての情報があまり見つからないのです。そんなミステリアスな彼に  
は、すでに多くの女性ファンができています。今、彼は“英  
雄”と呼ばれ、多くの著名人が彼にお礼をしたいと願い、何とかパ  
ーティーなどに呼びたいらしいのですが、今どこにいるのかはわか  
らないそうです。我々はこれから彼について調べていきたいと思  
います。」

頭が痛くなった。

これはあまりにまずすぎる。

僕の正体がばれる危険性大だ。

「ここに記者が来ないのは……」

「僕の計らいだ」

「だろうな。今、巷じゃ英雄扱いの奴と、その上司であり、事件関  
係者がそろって入院したら、カモがネギしよってるようなもんだ  
しね」

「全く以てその通りだ。報道陣はお前を出せとうるさいよ」

「やっぱり、か……」

潮時かもな。

別にここに残らなきゃいけないわけじゃない。世界中を一人で旅するの、悪くないかもな。

「アレン、これからどうする？」

選択肢はいくつもある。

今のままフェイトさんの補佐を続ける、はやての下につく、クロノの下につく、著名人たちの誰かに取り入る、このまま大陸を去る。

「……………どうすりゃいいんだ？」

「決めるのはお前だ。誰にもそれを止める権利はない。たとえばここから去るとしてもな」

クロノが冷たく言い放つ。

「つたく。んなこと言うならつらそうな顔するなよなあ。」

「ばれてないと思ってんだろっけど、こちらら七年交流がなかったとはいえ、お前の悪友だぞ？ 気付かないわけないだろうが……………」

「さて、どうするか……………いよいよ決断しないと……………もう、時間はない。」

「……………クロノ、僕は……………」

くフェイトsideく

「ふんふんふん」

鼻歌を歌いながら、なのはがリンゴの皮を包丁で剥く。

「フェイトちゃん、体の調子はどう？」

リンゴの皮を剥き終わったなのはが、そう聞いてきた。

「大分マシ。多分来週くらいには完治してると思う」

「そっかあ、よかったあ」

なのはが切ったリンゴを皿に乗せ、私に渡した。

「ありがとう。なのはこそ大丈夫なの？殴られたところ……」

「もう何ともないよ。あたりどころがよかったみたいだからね。後遺症が残るようなこともないよ」

「私も奇跡的に後遺症は残らないんだって。これもアレンのおかげだね」

「そうだね……今私達が笑っていられるのも、アレンくんのおかげ

だよね  
「

「アレンも同じこと考えてるよ。私達のおかげで命拾いしたって

「にははは。それならよかったね

「うん

私はリンゴを食べ、頷いた。

「今日の分の仕事はもう終わってるし、今日はここでゆっくりしようかな

「あ、だったらアレンの所に行かない？」

「うん、そうだね。幽霊苦手なアレンくんの所に行こっか

「あははっ、そうだね

そう言っつて、私達は病室を後にした。

「……………むじむじやいいんだっ？」

アレンの病室のドアを開けようとしたら、中からアレンの声が聞こえた。

誰かいるのかな？

「決めるのはお前だ。誰にもそれを止める権利はない。たとえここから去るとしてもな」

……………え？

い、今の声はクロノ？

いやそれより……………“ここから去る”？

どういふこと？

なのはを見る。

どうやらなのはもわからないらしい……………

「……………クロノ、僕は……………」

アレンが何か言おうとしている。

駄目っ！

何故かそう思ってしまう。この先の言葉を聞きたくないと思ってしまう。

何で？

「……ごめん。まだわかんないや」

そついう声が聞こえてきた。

何がわからないの？

「そつか……」

「今日中に決めるよ。だからそれまで待つてくれ」

「……わかった。なるべく早くしてくれ」

「そのつもりだよ。違う大陸に行くにしても、ここに残るとしても、遅くなるとまずいつてわかるからね」

「「！？」」

大陸を去る！？

なのも驚いている。

「ならいい。それと伝えるなら直接伝えてくれ。盗聴されたら厄介だからな」

「本当は最後に悪友に会いたいつて言えよ」

「……一発殴っていいか？」

「殴りたきゃ今のうちに殴っとけよ。最後かもしれないからな」

「……………いや、やめておじい」

「…どっぴりして？」

「殴ったら、本当に最後のよつな気がしたからだ」

「……………そっか」

「ではもう行く。必ず今日中に返事をくれ」

「りょくかい」

クロノの足音が近づいてきた。

（なのは！逃げるよ！）

（えっ！？う、うん！）

私達は急いでその場を離れた。

くアレンsideく

「……………クロノの奴、少しホツとしてたな」

僕は返事をのばした時のあいつの表情を思い出した。

「はぁ……………どうすっかな」

『マスターの好きにすればいいですよ。私達はどこまでもついていきますから』

「…………お前が殊勝になると不気味だな」

『何ですと！？マスターの真面目な顔のほうの不気味ですっ！』

「んっだど〜！？こんのクソデバイスがあっ！覚悟っ！！フライングニーキツクッ！！」

『幽霊が苦手で昔はやてさんにトイレについていってもらった弱虫マスターの攻撃などくらいませんっ！！』

「ぐはっ」

僕は攻撃を止め、地に跪いた。

『言葉だけで負けることを恥じるがいいですよ』

「ううっ」

僕はさらに落ち込む。

だが、内心は安心していた。アイがいつも通りで。

そのおかげで少し気が楽になった。

「ふう…………お前と話してたら埒があかないから、屋上にも行って、じっくり考えてくるよ」

『ちよつ、マスター！もう騒ぎませんから私もーー……………』

「アイ、ありがとな……………」

『……………はい。よい決断を』

僕はそれに苦笑した後、屋上に向かった。

〈フエイトside〉

「……………」

私となのはは、病室に戻ってきていた。

さっきの会話について考えていた。

「……………アレンくん、どこかに行っちゃうのかな？」

「……………わからない」

「クロノくんに聞いてみる？」

「……………多分教えてくれないと思う」

「……だよね」

「……アレンに直接聞くしかないと思う」

「……でも、教えてくれるかな」

「……」

わからない。いや、わかってる。アレンは教えてくれない。

「……」

「……はやてちゃんなら、何か知ってるかな？」

「……はやても教えてくれないと思う」

「……そうだよな……」

どうすればいいんだろう……

「フェイトさん、お見舞いに来ましたー！」

「ちょっと、もうちょっと静かにしなさいよー！ここ病院よー！」

「来るのが遅くなってますいません。こここの病院調べるのに時間かかって……」

「あれ？なのはさんもいたんですか？」

私達がどうするか考えていると、いきなり青い髪の活発な女の子、スバルが入ってきた。

その後ろから、ティア、エリオ、キャロの順に病室に入ってきた。

（アレンside）

屋上への階段を登っていた。

そして、屋上に続く扉を開けた。

ギギイ、と音をならして、扉は開く。

時刻はすでに夕方。

扉を開けた瞬間、オレンジ色の光が、僕の目に入った。

眩しい……

僕は目を右腕で覆いながら、前に進んだ。

覆っていた腕を離れた瞬間、手すりに金髪の少女がいた気がした。

だが、もちろんいるはずがない。

あいつは今頃、師匠と特訓しているはずだ。

僕は手すりのある場所までいき、夕焼けを見た。

「……………夕焼け、か」

あの日を思い出す。

別に夕焼けではなかった。

空はどんよりと濁っていて、今みたいにきれいに光っている空ではなかった。

それでも思い出してしまふ。

赤黒く濁った空と地面。

鉄と硝煙の臭いが鼻を突き、血は地面に染み込み、空気は重く湿っていた。

周りにはたくさんの人がいた。見渡すかぎりの人、人、人。

中のいい友人、魔法を覚えてくれた恩師、学校の先生、近所のおばちゃん、さっきまで夕食を何にするか話していた母さん、ストライクアーツの修行に付き合ってくれていた父さん、——と一緒に僕の修行を見学していた姉さんと——。

たくさんの人がいた。

積み重なるように倒れていた。

もう動かないことを証明するかのように血を流していた。

誰も動かない。

ねえ、何で動かないの？

聞いても返事が返ってくることはなかった。

瞳からは涙が流れた。

この、呪われた瞳から……

お前は化け物だ。

違う……

何が違う？あれだけの人を殺しておいて何が違う？

違うっ！

違わないさ。現にお前は人を殺しているだろう？

違っっ！！

何でそんなに否定する？あの時お前がしたことは正しい。あいつらはお前の大切なものを奪ったんだ。当然の報いだ。そのために化け物になって何が悪い？

違っっ！！！！

自分の居場所と幸せを壊した敵への憎悪。誰にでもある感情だ。憎む情熱はいつだって正しい。そうだろ？――！。

違っっ！！！！！！

「――」

「その名前を呼ぶなあっ!！」

「きゃっ」

僕は名前を呼んだ誰かを突飛ばした。

「はぁ……はぁ……」

息を荒くしながら、突飛ばした人物を見る。

「え?」

そんな声をあげてしまう。

「は、はやて……」

「いたた……」

「い、いめんっ」

僕ははやてに手を差出しながら、謝った。

「ううん。私もいめん。本名のほう言っつて」

「いや……ちょっと昔のこと思い出してね」

「……そっか」

「今だけは……今だけは、アレン・ウォーカーでいさせてくれ」

「……………はなからそのつもりやで」

「……………ありがとう」

偽りの居場所に逃げ込んでいる。

アレン・ウォーカーは、時風みなどと同じく、存在しないのに……………

僕の過去と、この呪われた宿命のことを知って尚、受け入れてくれる人は、世界に何人いるんだろう……………

隣で夕日を見ているはやての横顔を伺う。

真っ直ぐな瞳。

僕には眩しすぎるくらいに……………

この人を、この人達を、これ以上僕と関わらせてはいけない。

僕は、クロノに言われたことを思い出した。

『誰にもそれを止める権利はない。』

「……………そうだよな」

今までだって一人みたいなもんだっただ。だっただらこれからだつて別に……………

「……………綺麗な、夕焼け」

「……………そうだな」

こいつと見る最後の夕焼け、か。

目に焼き付けるとするか。

この呪われた目で……………

考えてたら鬱になってきた。

もう行くか。

「じゃあ、僕はもう戻るよ」

一人に、な。

そう言っつて、僕は屋上の入り口に向かった。

「クロノくんに聞いたで。決断、今日中なんやて？」

足が止まってしまふ。

あのシスコン提督がつ！

最後の嫌がらせか？

……………それもいいか。

変に気をつかわれるよりよっぽどマシだ。

はやては真っ直ぐに僕のことを見つめてくる。

真剣に、真摯に、僕の瞳を見つめてくる。

この呪われた瞳を、見つめてくる。

こんな化け物と呼ばれる、忌み嫌われた瞳を、見つめてくる。

その綺麗な、藍色の瞳で、僕の、瞳を……………アルファ・ステイグマ複写眼を、見つめてくる。

だから僕も真っ直ぐ見つめ返し、正直に話すことにした。

「……………もう決めたよ。僕は……………」

「行くねんな？」

「……………ああ」

……………ばれてた、か。

多分、クロノも僕がこう決断するのをわかってたんだろっな。

僕は執務室で僕のことを待っている、一人の悪友のことを思い浮かべて苦笑した。

「何でここに残らへんの？」

「……………お前だつて新聞見たろ？これ以上ここにいたら僕の正体がば

れ——」……」

「嘘や」

はやては僕の言葉を遮り、詰め寄ってくる。

「……………嘘じゃないよ」

「嘘や」

また詰め寄ってくる。

「本当だよ。僕は化け物って呼ばれるのが嫌だから——」……」

「恐いんやろ?」

「えっ?」

「その瞳で、私らを殺してしまうかもしれん。その事が恐いんやろ?」

「……………恐くなんてない。僕は化け物だぞ?」

「じゃあ、何でそんな泣きそうな顔してるん?」

「え?」

目の部分を手のこつで拭くと、濡れていた。

「ホンマは離れたくないんやろ?」

「……………違つっ」

「でも、離れなあかん。このままやったら、いつか自分が私達を殺すかもしれんから」

「違つっ!!」

「もう、大切な人達を傷つけないから」

「違つっ!! 僕は化け物だっ!! そんなことっ………」

僕は途中で言葉が止まってしまった。

はやてが抱きついてきたのだ。

「……………本当の気持ち、聞かせて」

耳元でそう言ってくるはやて。

「だから僕は……………」

「無理せんでいいよ。あんたがどんな人生歩んだか私は知ってる。どんなに辛かったかまではわからんけど、私はあんたの友達や。あんたを受け入れる人間が、ここにおる。だから、聞かせて。あんたの気持ち」

はやては、静かに、ゆっくり、聞き分けのない子供に聞かせるように、僕にそう言った。

優しかった。

伝わる体のぬくもりも、ゆっくりとした声も、風になびく髪も、僕を離さないように力を入れている指も、閉じられた瞳も……

全てが優しく感じた。

僕は、気が付くと涙を流しながら、言葉を発していた。

「僕は、ただ昼寝ができればよかったんだ……」

「うん」

「皆と馬鹿みたいに笑えれば、それでよかったんだ……」

「うん」

「皆を守れたら、それでよかったんだ……」

「うん」

「こんな瞳もつ、宿命もつ、才能もつ、全部いらなかったっ!!」

「うん」

「戦いなんて知りたくなかった! 絶望なんて知りたくなかった! 世界なんて知りたくなかった! ただ普通に暮らしていたかった!」

「うん」

「もう誰も失いたくない！殺したくない！離れたくない！守りたい！笑いたい！喜びたい！遊びたい！前を見据えたい！希望を持ちたい！夢を持ちたい！夢を語りあいたい！全てを話したい！受け入れられたい！本当の友達になりたい！」

「うんっ！」

「みんなと、離れたくないっ！」

「うんっ！」

「はぁ……はぁ……」

僕は全てを叫んだ。この十一年間、思い続けていた全てを。

気が付くと、はやても泣いていた。

抱きしめる力も強くなっていた。

涙ですら、優しく感じる。

ガクンッ

いきなり、はやての足元から力が失われた。

「はやてっ！」

僕は慌ててはやての肩を支えて、倒れそうだった体を止める。

何て華奢な体だ。

今すぐにも潰してしまっくんじやないかと思ってしまう。

「おいっ！しっかりしろっ！」

僕はやての顔を見る。

ひどく疲労している。

……………まさかっ！

「お前か？僕の、複写眼の口封じや、病院の場所がわからないように細工したのは……………」

僕の瞳を知っているのは、はやてとクロノだけのはず……………

クロノは事件の処理とかで、そんなことする暇ないはずだ。

はやてだってそんな暇ないはず……………

でもこの疲労は異常だ。そうとしか考えられない。

一人でそんな事を……………多分、事件のあった日から、寝てないんだろっ。

しかもこいつのことだ。僕が寝ていた間も、毎日病院に来てたに違いない……………

昨日気付くべきだった……………くそっ！

「アレン……」

はやてが薄く目を開けていた。

「ごめん……ちょっと眠くてな。もう大丈夫やから」

「寝てる」

「え？……きやつ」

僕ははやてをおんぶした。

「ちよっ、アレン！？」

「僕のベッドまで運んでやるから、おとなしく寝てる」

「なっ……／＼／＼」

ボシユッ

そんな音がしたが、気にしないことにした。

僕は空を見る。

あの日と違って、空は澄み渡り、綺麗だった。



## 第四十六話 過去？

「アレンside」

「……………」

はやては僕の背中で、心地よさそうに寝ていた。

「うっ……………」

僕はひざをついてしまった。

いくら動けるようになったとはいえ、完治にはまだほど遠い、か。

長く動き続けたり、魔力を使ったりすると、体が痛む。

それに、アイたちもメンテナンスをしないと、どこかおかしいかもしれない。

いやいつそ今からするか？

僕は立ち上がり、自分の病室に向かった。

僕ははやてをベッドに寝かせた。

『マスター。選択は決りましたか？』

「ああ」

『……よい顔になりましたね』

「まあね。って、お前は僕の師匠か何かかよっ！」

僕は突っ込みながら、自分のデバイスを全て手に取った。

『これからどうするのですか？』

「言わなくてもわかってるだろ？」

『はい』

「じゃ、行くか」

僕は部屋を出ようと、扉のほうに体を向けた。

「……………え？」

思わずそんな声をあげる。

扉のところには、フェイトさんとなのはさん。それに、いつかの資料室で見た、元六課のフォワードの人達がいた。

「アレン、聞きたいことがあるんだけど……」

「……いいですよ。教えます」

「え!？」

「僕の過去について、でしょ?」

僕はそう言った。

多分、こうなることを僕は望んでいた。

話して、楽になりたかったんじゃない。

話して、本当の意味での仲間になりたかった。

「……本当にいいの?」

「ええ。その代わり、場所を移していいですか?その、できればク  
ロノの前で話したいんです」

「……わかった」

「……ありがとうございます」

僕はアイをデスクに置いた。

『マスター?』

「はやてが起きたら、この事を伝えてくれ」

『分かりました……マスター、帰ってきた時、今と同じ顔であることを祈ります』

「わかった。本当にありがとうな」

『マスターにお礼を言われても、気持ち悪いだけです。さっさと行って来て下さい』

いつものように返してくる。それが本当にありがたかった。

「じゃあ、行きましようか」

「あの、私達はこれで失礼します」

青い髪の毛の、確かスバルという少女がそう言った。

「別にいてもいいよ」

「でも、あまり知りもしないのに……」

「うーん……わかった。じゃあ、自己紹介とかは、また会った時でいい？」

「はい！」

そう言って、スバル達は去った。

「じゃあ行きましようか」

そうやって、僕は歩きだした。

「アレン、なんか変わったね」

「そうですか？」

「うん。なんていうか……前みたいに無理矢理明るく振る舞ってるんじゃないくて、自然な感じがする」

「自然な感じ……」

いつも、昔のことを思い出さないように、無理矢理明るく振る舞っていた。

やっと自分の過去と向き合えそうだ。

そういえば、以前シオンさんに見せてもらった、ライナさんの書いたレポートにも、そんなことが書いてあったな。

ライナさんにも、僕と似たようなことがあったのかな？

人は、それぞれに闇を抱えて生きている。

ライナさんにも、いろいろあるんだろうな……

そういえばシオンさん、言ってたっけ……僕とライナさんが似てるって。

全く以てその通りだな。

僕は苦笑した。

そんな僕を、フェイトさんとなのはさんは不思議そうに見ていた。

――執務室。

「……で、何でなのはとフェイトがいる？」

「話すことにしたんだよ。全部」

「なっ!？」

クロノが血相を変えて、机から立ち上がる。

「大丈夫だよ。きっと……僕の決断は、その後話す」

「……もう決まっているんだな？」

「そういう風にしたのはお前だろ？」

「……そうだったな。いいだろう、好きなだけ話せ」

「さっすが。話が早くて助かる」

僕はなのはさんとフェイトさんのほうを向いた。

「まずは二人共、僕の眼を見てください」

そう言っつて、一度目を閉じる。

全身から冷や汗が流れる。

この目を開けたとき、僕のこれを、二人に見せることになる。

正直恐かった。

それでも、目を開けることはためらわない。

はやてが勇気をくれたから。

僕は目を開けた。

眼に、朱の五芒星を浮かばせて。

「なっ……」

「それっつて……」

二人は驚いている。

だが、僕の過去を話すなら、まずはこれを見せないといけない。

全ての始まりは、この複写眼アルファ・ステイグマなんだから。

僕は話し始めた。

今まで、消したくて仕方なかった過去を。

「では話しましょう。この僕、レイン・エグザリオの過去を」

全ての始まりは、十一年前の、僕の七歳の誕生日に遡る。

僕は、半年前まで、自分はまだ子供だから、戦わなくていい。訓練しなくていいと思っていた。

でも、半年前に起きた、闇の書事件。

それを解決したのが、自分とあまり歳の離れていない子だと知った。

僕はそれから、ストライクアーツをやっていた父さんに、肉弾戦を学び、管理局員であった、母さんと姉さんに、魔導師の家庭教師をつけてもらった。

どうやら僕は、両方人並み外れた才能があったらしく、すぐに父さんと魔導師の先生を追い抜いた。

二人共すごくびっくりしていたが、僕には才能なんてどうでもよか

った。

ただ、闇の書事件を解決した人達と同じ歳になるまでに、せめて自分の大切な人達を守れる力をつけたかった。

「今思えば、あなた方二人に憧れていたんです。自分には何の力もないのに、あなた方にはその力があつたから。だから力をつけようと思つたんです」

だからパーティー会場でフェイトさんが泣いていた時、僕は犯人を殺したいと思つた。

自分の憧れだつた人が、あんな目にあつていたら……

「そうだつたんだ……」

「じゃあ、私達のことば……」

「はじめから知ってましたよ」

「それは僕も初耳だぞ」

「言っていないもん」

「おいっ!」

「じゃあ、話を戻します」

事件の起こった七歳の誕生日。

その日はひどく空が荒れていたのを覚えている。  
でも、家のなかでパーティーをしていた僕達には関係なかった。

そうして盛り上がりが高潮になった時、僕にプレゼントが渡された。

渡された包装を解いて、中を見ると、藍色の綺麗な真珠が入っていた。

「父さん、これは?」

「それはね、デバイスだよ」

「これが!?!」

「ああ。もう大分魔法も使えるようになったからな。父さんからの

プレゼントだ」

「ありがとう！父さん！」

これである人達に一步近づいた！

「じゃあ、早速認証を……」

「名前は決めたのか？」

「まだ！」

そう言つて、僕は庭に飛び出し、魔法陣を展開させた。

「リーマスター認証。レイン・エグザリオ。術式はベルカミッド  
混合のオールラウンダー。」

僕のデバイスに個体名称を登録。

うん。名前名前……綺麗な藍色に、真珠は王様みたいだね……  
よし、決めたっ！藍色の王様、」

僕は一度息を大きく吸い込み、

「<sup>アイオン</sup>藍王」！」

それが、僕とアイオンの出会いだつた。

「え？アイオンはアレ……じゃなかった。レインが作ったんじゃない……」

「ええ。間違いなく僕が作りました」

「じゃあ……」

「話を続けます」

僕は一瞬涙が出そうになるのをこらえる。あいつはアイじゃないんだ……

僕は、認証が終わったので、皆のもとに戻ろうとした。

気が付くとみんな見ていたので、少し恥ずかしかった。

誕生日会に来てくれたのは、友達数名に魔導師の先生、学校で中のいい先生一人に、後は家族だ。

「お兄ちゃん、アイオンなんて、無駄にカッコいいネーミングつけたね」

双子の妹の、エリカ・エグザリオがそう言った。

身内びいき抜きにしても、エリカはかわいかったが、性格は死亡していた。

「くらえ」

「ぐはっ」

この歳にしてドロップキック……ストライクアーツの才能は、僕より上らしいが、魔法の才能は一切なかった。

『主をいじめないでください』

アイオンが庇ってくれる。くう。デバイスはちゃんと主の心配してくれるんだな。

みんなこの光景に慣れたのと、僕が人一倍頑丈だから、一切心配しないから、ちよつと感動を覚える。

「ちよつとバリアジャケットに着替えてみてよ」

姉さんの、サオリ・エグザリオがそう言った。

「うん、わかったよ。アイオン、セットアップ」

僕はバリアジャケットに実を包む。

「へえ、珍しいね。全身白なんて」

僕のバリアジャケットは、マントや手袋、ブーツも服も、全て白だった。

「シンプルなのでいっかなって」

「どうせあんたのことだから、考える面倒くさかったとかじゃないの？」

「どう考えてもそうだろ。なんせお兄ちゃんなんだし」

「エリカ、ちょっとは兄を尊敬してよ」

「違うのか？」

「違うけど」

ドグシッ

鈍い音が響いた。

バリアジャケット着てよかった。

「てか殺す気ですかっ!？」

バリアジャケットごしにもこれだけのダメージをつけるって……  
生身だったらやばかったよ？

「ああ、そのもちろんつもりだ」

「……………悪魔め」

「よし、今から地獄の断頭台をくらわせてやるっ」

「ごめんなさい、嘘です」

速攻で頭を下げる。

こいつの場合冗談じゃないからな。

周りからは爆笑の嵐だけだね。

「ほらエリカ。レインなんかに構ってないで、こっちにおいで」

「はいつ、姉様」

速攻でサオリ姉さんのところに行くエリカ。

姉さんにだけは従順だよな、本当。

僕は呆れながら空を仰いだ。

瞬間。

ドゴオッ！！

爆発音が聞こえた。

とても近くから。

僕の純白のバリアジャケットは、所々赤黒く汚れていた。

「え……………」

家を見て愕然とする。

潰れていた。

さっきまで話して、遊んで、料理食べて、貶しあって、笑いあって  
いたみんなが、家の下敷になっていた。

何が起こったかわからなかった。

そこではついさっきまで、笑顔のみんながいたのに……………

そこには、赤黒く染まった瓦礫と肉片しかなかった。

「……………嘘だ」

ねえ、嘘なんですよ？

またみんなで、質の悪いいたずらか何かしてるんですよ？

怒らないから出てきてよ……………

サプライズ成功！って笑いながら出てきてよっ！

どんなに願っても、そんなことは起こらなかった。

ドゴオンッ バガアンッ

あちこちから聞こえる爆発音で、現実に戻される。

今すぐ助けないと！

せめて生きてる人だけでもっ！

僕は急いで救出作業を行った。

瓦礫をどけては、知人の死顔を見、顔を歪ませ、涙を流し、吐きそうになるのを必死にがまんした。

それでも続けた。

一人でも生きていることを願って……

もう後残っているのは、父さんと母さん、姉さんにエリカの四人だけだった。

一番早く助けたいのに、一番最後になったのは、きっと僕が無意識にこう思ったからだ。

この人達の死顔だけは見たくない、と。

僕は震える手で、赤黒く染まった瓦礫をよける。

その先にあつたのは……

「その先にあつたのは、姉さんとエリカに覆いかぶさって、瓦礫から守った、父さんと母さんでした」

「……………」

なのはさんとフェイトさんは、つらそうに顔を俯けている。

僕の家族のことは見たことないはずなのに、その人達のために、こんなつらそうな顔をする……………だからこそ、この人達に話そうと思つた。だからこそ、この人達と一緒にいたいと願つた。

「これは十一年前に起こつた、爆撃事件です」

「……………知ってるわ。当時、その事件は大陸全土に広がつたから……………どれだけ被害がでたかも……………」

「原因は確か……………」

「ある一人の管理局員に対する復讐です」

僕はなのはさんが言おうとしたことを言った。

「管理局員の名前は、ユリナ・エグザリオ……………僕の母親です」

「！?ッ」

なのはさん達は驚いていた。無理もない。

あの事件の原因となった人の、息子なのだから……………

クロノは齒を噛み締めている。

当時、クロノはその爆撃犯達を追っていた張本人だ。

それがきっかけで、僕とクロノは知り合うことになるんだが……………

「続きを話しましょう」

僕は姉さんとエリカを庭に寝かせた。

まだ周りからは爆発音がする。

空を見ると、いくつもの戦闘機が飛び回っていた。

許さない……………



目を覆いたくなるような光景が広がっていた。

建物で原型を残しているものはほとんどなく、あちこちに血が飛び散り、人は泣き叫び、息絶え、また別の人が泣き叫ぶ。

あたりは血に染まっていた……………

いつもの学校の通学路も、遊んでいた公園も、買い物に行く商店街も、全てが赤く染まっていた。

そして、まだ終わってなどいなかった。

地上では、生き残った人達を、銃で撃ち殺している奴らがいた。

僕はそいつらに向かっていくつも魔力弾を放つ。

向こうもこちらに気付いていたようで、こちらに銃弾が、四方から向かってきていた。

僕はその全てを魔力弾で撃ち落とした。

そして撃ってきた全ての奴らを殺した。

殺して、殺して、殺しつくした。

もうこれ以上殺させないために。

全てを片付けたとき、僕のジャケットは真っ赤だった。

真っ白だった痕跡は、もうどこにもない。

生き残った人達が僕を見ていた。

あの目は、恐怖であり、憎悪であり、怒りであった。

『化け物』

誰かがそう呟いた。

『悪魔っ！』

『呪われた子供っ！』

『みんなお前のせいだ！』

『お前みたいな呪われた奴さえいなきゃ、こんなことにならなかつたっ！』

『この町から出てけっ！』

次々に暴言を吐いてくる。

何で？僕はみんなを助けるために、こんな………こんな人殺しをしたのに………

何でみんながそう言うんだよっ！

そして僕は見た。一人が、庭で寝ている姉さんに、金属バットを振り下ろすのを。

『化け物の家族なんて死んでしまえっ！』

そして、姉さんの頭から血が流れた。

ドクンッ

コロセ

頭の中で声が聞こえた。

コワセ

やめろ……

ニクメ

やめろっ

ホロボセ

やめろっ！

ケセ スベテマツシロニ

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
！！」

目が見開かれる。

その瞳に移るは死。

その瞳に移るは絶望。

瞳から次々と五芒星が撒き散らされる。

その一つが、姉さんを殺した奴につく。

『砂の分子なって消える』

瞬間、そいつは悲鳴をあげる間もなく砂になって消え去った。

あちこちから悲鳴があがる。

『地を這うムシケラ共が、全て消し去ってやる』

更にいくつもの五芒星を撒き散らす。

全てが壊されていく。

生まれ育った町が、僕の手で……………

やめてくれ。

何度もそう思った。

ナゼヤメル？

キサマガノゾンダコトダゾ？

タイセツナモノヲコワサレタンダロウ？

アイツラガニクインダロウ？

ナラマヨウナ。スベテケセ。

ワレハソノタメニイル。

サアノゾメ！スベテヲケシサリタイト！！

「がっ、あああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああっ！！！」

そっだ。

あいつらは僕から姉さんを奪った。

とても大切なものを奪った。

何も悪いことなんてしてないのにー……

世界は僕から全てを奪った。

なら、壊してやる。

こんな腐った世界なんて、全部っ、全部っ、全部っ！

ソウダ。ソレデイイ。

ワレハイクラデモチカラヲカソウ。

僕は右手を空に掲げた。

「暗黒の大地、漆黒の焰、空は暗闇、世界は絶望、刻は満ち、淡々と、流れは消える輪廻の輪となり、星天より降りし悪魔が全てを終わらす」

僕は詠唱を唱えると、手を地上に向けた。

「デスーーー……」

途中で詠唱をやめてしまう。

エリカが、こちらを見ていた。

ナニヲシテイル。サツサトヤレ。

「あ、ああ……」

「……お兄……ちゃん」

ドクンッ

「くっ………があああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああっ……」

ナニヲシテイル。サツサト……

「………！黙れっ……！」

僕は、わけの分からない力に抵抗する。

バカナ……キサマガニクシミニタエラレルハズガナイノニ……

「うる……せえっ！てめえの出番は終わりだっ！」

キサマー……

バキンッ

何かが壊れるような音がした後、あのわけの分からない奴の音が聞こえなくなった。

「ぜえ……ぜえ……」

辺りを見る。

全ての人間が息絶えていた。

僕とエリカ以外。

空は赤黒く濁り、醜い色になっていた。

見渡す限りの人。

全てが死んでいる。

何で？

何でこうなるの？

僕はただ、みんなとー……

泣いた。

ひたすらに泣き叫んだ。

嗚咽のように泣き叫んだ。

全てを受け入れられず、信じられず、世界という名の現実には打ちのめされた。

もう、僕には何も残ってない。

何もー……

ガンッ

いきなり物を投げられた。

「お兄ちゃん！何泣いてんだ？みっともないぞ」

エリカがそう叫んでいた。

やめろ……

見るな……

化け物である僕を……

「さっさと降りてこいっ！バカ兄貴っ！」

僕はエリカを見た。

その眼には、涙が溜まっていた。

僕は反射的にエリカのもとに向かった。

「エリカッ！」

着地した途端、エリカが抱きついてきた。

「……………エリカ？」

「みんな、死んじゃった……………」

「……………ああ」

「みんな、みんな、死んじゃった……………」

「……………ああ」

「お兄ちゃんしか、もういない……………」

「……………ああ」

「……………お兄ちゃん、私を置いていかないよね？」

「！！？ッ」

そつだ……こいつにはもつ、僕しかいないんだ……化け物である、僕しか……

「……ごめん、エリカ。僕、みんなを守れなかつたんだ……」

「……私を守ってくれた」

「でも、その代わりたくさんの人を殺したんだ。たくさん、たくさん……」

「……その瞳のせい？」

「え？」

アルファ・ステイゲマ  
「複写眼」

「!??ッ」

複写眼——……

それが僕の眼に？

だからみんな僕のこと化け物って呼んだのか？

は、はははっ！

話には聞いてたけど、本当に化け物だったよ！

こんな瞳さえなければっ！

こんな瞳さえっ!!

「お兄ちゃん、泣いてる……」

「……泣いてないよ。だって僕は化け物だから」

「お兄ちゃんは化け物じゃないよ。だってお兄ちゃんは、弱いもん」

「僕が……弱い？」

「うん。心が弱いんだよ、お兄ちゃんは」

「……」

「人が死んで、悲しくて、悔しくて、後悔して、泣いてる人が、化け物なわけないよ」

「……なら、エリカは受け入れてくれるの？こんな僕を」

「当たり前だよ」

「……即答か」

「うん。それにお兄ちゃんにはもう一人いるでしょ？」

「？」

『主、私のことを忘れてらしたか？』

「……忘れてたよ、アイオン」

『ひどいですね』

「ああ。僕はひどいんだ。そんな僕についてきてくれるか？」

『もちろんです』

「……………そっか」

僕はバリアジャケットを解いた。

「……………行こうか」

「どっくに？」

「ここじゃないどこかに。もうすぐ管理局が来ると思う。見つかったら、エリカはともかく、僕は大量殺人の罪で捕まってしまうからね」

「わかった。行こう」

こうして、僕の日常は終わりを遂げた。

「これが、あの日にあった全てです」

僕は、始まりとなった日のことを全て話した。  
体が震える。

拒絶させる不安もあったが、純粹にあの日のことを思い出したことによる恐怖のほろが大きい。

全身からいやな汗がでる。

気が付くと、顔から汗が球となり、顎から地面に落ちた。

呼吸も荒くなっている。

「はあっ……………はあっ……………」

ガクンッ

僕は膝をついた。

「「アレン（くん）！？」」「」

フェイトさんとなのはさんが駆け寄ってくる。

あんな話を聞いた直後なのに……………

「す、すいません……………」

僕はデスクに手をかけて立ち上がる。

「……………これ以上はよせ。一気に全てを話すと、お前の精神が崩壊してしまう」

「でも……………」

僕は反論しようとしたら、なのはとフェイトさんに、人差し指で口を押さえられた。

「もういいよ。ごめんね。そんなに辛い過去だったって知らなかったから……………」

「アレンくんが話せるときに、また話して」

フェイトさんとなのはさんがそう言ってくれた。

情けないなあ……………はやてから勇気もらったから、いけると思ったんだけどなあ……………

クロノとはやて、それにその他悪友数名に話したときも、こんな風に、全身からいやな汗が大量に流れた。

今回はまだマシだ。今までは発狂が普通だったから……………

「ありがとうございます……………」

これ以上はクロノの言うとおり、精神がもたない。

アイの野郎……………こうなるってわかってやがったな、きつと。

情けない話だ。自分の過去を一回で語ることができないなんて……

「本当にすいません。全部話すつもりだったのに……」

「ううん。話そうとしてくれただけで充分だよ」

「うん。なのは言う通りだよ。こっちこそ本当にごめん……そんなに辛い過去を話させて……」

「発狂する前に止めて正解だな」

「発狂？」

「クロノくんっ！レインおるか!？」

いきなりはやてが入ってきた。

「よおはやて……」

僕は力なく挨拶する。

「よおやないっ！お前滅茶苦茶弱つとるやん！いつもよりマシみたいやけど……」

「お前のおかげだよ。じゃなきゃ今頃発狂してたよ」

「……どこまで話したん？」

「始まりの日だけだよ」

「……………なら、いつも通りやな」

「あの……………発狂って?」

なのはさんがそう聞いてくる。

「こいついつも、誰かに過去の話すると、その時のこと思い出して、狂ったように暴れんねん」

「その為のリミッターだろ?」

僕はブレスレットを見せる。

「リミッターしてあの強さなの?」

「ちなみにリミッターは……………」

「五段階だ」

クロノがそう言った。

「えっ!?嘘!?!」

「本当だ。その並外れた魔力量に複写眼、さらにある特殊な体質のせいで、こいつは化け物と呼ばれ続けてきた。今までずっと、な」

「こいつの過去はともかく、複写眼保持者ってのは、それだけでも忌み嫌われてるからな」

「そうそう。そのせいで上層部の奴らに何度も殺されかけたよ」

二人は信じられない表情だ。

はやても始めはこんな顔だったなあ……………

クロノは……………まあいいや。

「では聞かせてもらおう。お前の決断を」

クロノがそうやってきた。

皆が注目している。

なのはさん達はまだあまり状況を理解してないはずなんだけど……………

まあ、本名乗った時点で、あの経歴が全て嘘ってことくらいわかるか。

僕は一度深呼吸し、呟いた。

「今までどおり、フェイト執務官補佐、アレン・ウォーカーで頼む」

「……………それでいいな？」

「多分」

「「ええっ!？」」

なのはさんとフェイトさんが同時にそう叫ぶ。

「……………はあ。まあいい。では、これからもよろしく頼むぞ、アレ  
ン・ウォーカー」

「了解、クロノ・ハラオウン提督」

僕は軽く敬礼をして、クロノの顔を見た後、何だかおかしく感じて  
しまった。

「……………お前もか？」

「ああ。やっぱここは僕達らしくないと」

「そうだな」

そう言っつてクロノは微笑む。

対してなのはさん達は首を傾げている。

クロノは立ち上がり、僕の前になると、手をあげた。

それに合わせて、僕も手をあげる。

「これからもせいぜいこき使われるよ犯罪者！」

「ふざけんなよシスコン提督！」

パアンッ

僕達はおもいつきりハイタッチをかました。

うん。やっぱり僕らはこれが一番だ。

なのはさん達は呆れてたけど、男の友情なんて、こんなものだ。

その後クロノと顔を見合せて笑った。

大笑いした。心の底から笑った。

こんなに笑ったことは今までなかった。

気がつくと、なのはさん達も笑っていた。

何が楽しくてみんなで大爆笑しているのかは分からないが、ただ一つわかったのは、僕はこの時、嬉しかったということだった。

せめて少しでも長く、この幸せが続きますように。

そう、願った。

## 第四十七話 懐かしき旋律（メロディー）

（アレンside）

あの日から、四日たった。

「……………暇だ」

デバイスは全てクロノに没収された。

理由としては、隙あらば僕がデバイス研究室に行ってメンテナンスしようとするからだ。

病人はおとなしく寝てるとのこと。

三日前に精密検査をした結果、どうやらリンカーコアが損傷しているらしい。

そんな状態で、記憶にはないが僕は魔法を使ったらしく、そのダメージが肉体にも影響を受けさせ、一週間絶対安静を言い渡された。

駄目だ……………暇すぎる。

フェイトは昨日退院したからなあ……………

「退院おめでとうフェイト」

僕は、目の前にいる金髪美人にそう言った。

あの話をした後、なのはとフェイトが、自分達も呼び捨てで呼んでくれと言ってきたのだ。

別にいつか、と思い、すぐに了承した。

クロノは頭を抱えて、「お前はもう少し上下関係を意識しろ」、「と言っていたが無視した。

「ありがとう、アレン」

よしよし。ちゃんとアレンと呼んでるな。レインの名前はちょっと出すのがまずいからな……

「はぁ………僕は後四日かぁ」

暇になるなぁ。

アイもないし………昼寝ってできるときにはあんまりたいと思わないな。

そんなことを思っていると、ドアが開いた。

「あ、あのっ。退院おめでとうございませす……」

あの子は確か………

「サエじゃん。約束通り来てくれたんだ」

「はい！」

「何の話？」

「フェイトにお礼がいたいんだって」

「お礼？」

「パーティーで助けたろ？」

フェイトがああっ、という顔をする。

自分が死にかけた理由を忘れたのかこいつは？

「呆れるよ」

「アレンだけは言わないでくれるかしら」

言い返せないよ。

サエの後ろからは、ヒース・ヒュールドがいた。

「この度は、孫娘を守っていただき、誠にありがとうございました」

ヒースが頭をさげた。

この人も不運だよな。せつかくのパーティーを台無しされ、根も葉もない噂を流され……………

まあ、それが金持ちの宿命か。

「い、いえ。当然のことをしたまでですから」

「腹に風穴空けるのは当然じゃないと思うけどね」

「死にかけて人が言うセリフ？」

「うん」

「……………バルディッシュ」

「ごめんごめん。冗談だから……………」

てか、ヒースとサエを置き去りにしてるよ……………

「えっと……………」

「あつ。す、すいません！このバカがつ」

「いやいや君も一緒にもめただろ」

「うるさいバカ」

うん。随分フランクになったなあ。ま、僕もだけど。

「フエイトさん、あの時助けてくれたご恩は、一生忘れません」

サエがそう言っただけをさげる。本当に十歳か？

「君もありがとう」

ヒースが今度は僕にお礼を言ってきた。

「いえいえ。その執務官と同じで、当然のことをしたまでですの  
で」

「あんなのを当然なんて言っただけは、今後も同じことするつもりなんだ」

「訂正。僕は精一杯頑張りましたが、お礼を言ってもらったために行  
ったのではないので一切合切気にしないでいいです」

後ろからデバイスを構える気配がしたので、速攻で訂正した。

ヒースはそんな光景に苦笑していた。

「では、私達はこれで」

「お礼はまた必ずさせていただきます」

そう言って二人はでていった。

「よかったな。今度は私語と抜きでドレスが着れるぞ」

「うん。嬉しいといえば嬉しいけど……ちょっと恥ずかしい

かな

「何で？すごく綺麗だったのに」

「……………っつ／／／」

顔を赤らめ、顔をうつ伏せにするフェイト。

「？どうした？まさかまだ体が……………」

「うっ、うっんっ！大丈夫だからっ！」

「そっか……………ならいいんだけど」

僕はホツとした。

「……………鈍感」

「は？」

「何でもないっ！」

そう言っって病室の扉に向かう。

「??？」

僕怒らせるようなことしたかな？

うっん……………駄目だ。わからん。

『全くマスターはこれだから………』

一瞬、そんな声が聞こえた気がした。

はあ。僕もそうとう疲れてるなあ。

「アレ、早くして」

扉の所で立ち止まっているフェイトが僕にそう言った。

「はいはい。今すぐ行きますよ、お嬢様」

「返事は一回。それと誰がお嬢様よっ、誰がっ！」

「フェイト。似合ってると思うけどな」

また顔を赤くするフェイト。

だから何故？

「は、早く行くよっ」

そう言ってさっさと歩きだす。

正面玄関までの見送りを希望とのことだ。

「へーい」

そう言って僕も歩きだした。

あの話をした後も、なのはとフェイトは普通に接してくれた。

本当に感謝の限りだよ。

もし同情でもされたら、僕は確実にあの二人から離れただろう。

「……………過去を見つめるなら、そろそろ返してもらおうかな」

アイは何て言うだろう。クロノは全て承知してそうだな。はやては喜んで、とはいかないだろうけど、同意してくれるだろうな。

はあ。やっぱり過去と向き合うのって、いろいろと面倒だなあ。

「……………抜け出すか」

こういうのは室内でうだうだ考えるより、もっと開放的な雰囲気のほうがいいよな。

そうと決まれば早速窓から……………

「もい逃げたら……………わかってる?」

なのは、フェイト、はやて、そして精密検査をしてくれたシャマル

先生のありがたあい忠告を思い出した。

「……………ばれなきやいいだろ」

フェイトは昨日退院したばかりだから来るはずない。なのはとはやても仕事が忙しいはず。シャマル先生も、今日は来ないはず。

基本的に安静にさえしていればいいので、僕のところには滅多に人は来ない。

行くなら今しかないっ！

僕は、窓からお空にダイブした。

ゴキッ

着地の瞬間にした、嫌な音は気のせいだろう。

「さて、行くか」

一瞬、“逝くか”って言いそうになった。

危ない危ない。

じゃあシャバにレッツラゴー！

「さて、どこに行くか……………」

病院の服なので、行ける場所は限られてくる。

こんな格好でビリヤードはなあ……………ストリートライブするには楽器がないし……………麻雀は相手がいねえ。

何故僕がこんなに詳しいのかというと、記憶を失っていたとき、よく師匠について行ってはやったからだ。

最初はカモられまくったっけなあ。まあ、ルールとか覚えたらこっちがカモったけど……………

オッサンたち泣いてたなあ。まあ全く同情しなかったけど。むしろ楽しんでやったわ。師匠と一緒に。

まあそんなわけで、大抵のことはできるんだが……………

気分じゃないな……………

「……………久しぶりにやるか」

僕はある場所に向かった。

くフェイトsideく

パソコンをうつっていた手を止めて、伸びをした。

最近にぎやかなのが一人増えたからか、随分寂しく感じる。

「まあ、後三日なんだけど……………」

もし、あの時アレンがこのままでいいと言わなかったら、どうなっていたんだろう……………

少なくとも、私からは離れただろう。

それに下手をしたら大陸からでていたかもしれない。そうならいたら二度と会えなかっただろう。

あの時、スバル達が来たとき、相談したら、満場一致で、気になるなら聞くのが一番、となったのだけ……………

正解だったと思う。アレンとの距離は、確実に縮まっただろう。

『フェイトちゃん！』

私が息抜きのためにコーヒーを淹れていたら、シャマルから通信があった。

「どづつしたの？」

『アレンくんが病室にいないの!』

ピキッ

何かが壊れる音がした。

『フエ、フエイトちゃん?』

「シヤマル、教えてくれてありがとう」

そう言って通信を切る。

ア~~~~レ~~~~ン~~~~。

私は執務室をでていった。

くはちてside

「あ〜。疲れた〜」

私はぐったりと、椅子の背もたれに体重をかけた。

「大丈夫なですか〜」

「大丈夫大丈夫。心配してくれてありがとうな、リイン」

さっきまでレジアス中将のねちっこい小言をずっと聞いたから、精神的に疲れたわ。

「ふう〜。仕事も終わったし、今日はゆっくりするかな〜」

「あつ、はやてちゃん。シャマルから通信が入ってるですよ」

シャマルから？何やる？

「繋いで」

「はいです〜」

『あ、はやてちゃん！アレンくんが病室からいなくなっちゃったの  
』！

ピキッ

何かが壊れる音がした。

『は、はやてちゃん？』

「情報ありがとうな、シャマル」

そう言って通信を切る。

「あんのボケ……」

「は、はやてちゃん？」

私はリインの呼び掛けに答えず、部屋を後にした。

くなのはside)

「お疲れ様でした、高町教導官殿」

「はい。お疲れ様でした」

ふう。今日の分は終わったな。

後はゆっくり食事でもとって、今日は休もう。

そう思って、隊舎を出たら、シャルさんから通信が入った。

「シャルさん？」

『なのはちゃん、アレンくんが病室から消えたの！』

ピキッ

何かが壊れる音がした。

『な、なのはちゃん？』

「連絡ありがとうございます」

そう言って、通信を切る。

私は、急いでフェイトちゃんとはやてちゃんに繋いだ。

＼シャルside＼

さ、三人ともすごい迫力だったわね。

アレンくん、大丈夫かしら？

何だかボロ雑巾になって帰ってくる構図しか浮かばない。

何だか余計に心配になってきた……………

どうしよう……………

＼フェイトside＼

「なのは！はやて！」

私は二人に向かって走る。

「フェイトちゃん、見つかった？」

「ううん。どこに行ったのかしら……」

「アレンくんが行きそうな場所ってどこだろう……」

「目ぼしい場所は全部探したで」

はやてが知らない場所にいるのかな？

だったら……

「クロノに聞こう」

「せやな。クロノくんやったら何か知ってるかも」

私はクロノに通信を繋げる。

『何だ？フェイト。こっちもあまり暇じゃないんだから……………』

「アレンが病室からいなくなったの」

『……………はあ。あいつは……………』

「どこが知らん？クロノくん」

『ああ、知ってるぞ』

「本当！？どこっ！」

『……………正直言っていていいかどうか迷ってる』

「え？」

あのクロノが言葉を濁してる？

『はやてにすら秘密にしてくれと頼まれていたんだが……………』

「そっなん？」

『ああ。あの場所は、あいつにとって一番大切な場所かもしれないからな』

「……………教えて」

『フェイト？』

「こっちに心配かけた罰。それくらいはないと……………」

「フェイトちゃんの言う通りや！一体どれだけ心配かけんねん！」

「お願い。教えてクロノくん」

『……………はあ。わかったよ』

ため息をつきながらも了承してくれた。

「ありがとう、クロノ」

『気にするな。そろそろあいつも、秘密基地なんて歳でもないだろ』

『う』

「ぶぶっ、そうね」

『アレンは……………』

〈アレンside〉

「……………久しぶりに来たな」

僕はボロボロの建物を見て呟く。

ここは昔、コンサートホールだった場所だ。

使われなくなったが、取り壊されることはなかった。

何でも、取り壊しの工事を行う前日、作業員が全員倒れたとか。

その後も何度もそんなことがあり、結局取り壊されることはなかった。

僕はボロボロの扉を開ける。

ギギイ、という錆びた音が響く。

この音も懐かしい。

ここは、クロノ以外の人間には話したことのない、ベッド以外の、僕にとって唯一のお気に入りの場所だ。

ボロボロになった舞台にあがる。

そこにあったピアノに、そっと触れた。

手入れは一応されている。クロノに頼んでおいたからな……

あの悪友に、本気でお願いをしたのは、これくらいではないだろうか？

不器用ながら頑張つて手入れをするクロノの姿を思い浮かべ、微笑む。

僕はピアノの椅子に座り、鍵盤をあげる。

埃が舞い散るが、そんなことは気にしない。

僕は、指を走らせた。

七年前まで、つらいことがあると、いつもここでピアノを弾いた。

何度も。何度も。

曲はいつも同じだった。

別にそれしか弾けないわけではないが、その曲しか弾く気になれなかった。

曲名は、

フランツ・リスト作曲、

詩的で宗教的な調べ、第三章――……………

『孤独の中の、神の祝福』

「フエイトside」

「……いた」

アレンを、ボロボロのコンサートホールの前で見つけた。

「捕まえる？」

「……もうちょっと様子を見よう」

「そっだね」

私達は、アレンが入った後、それに続くように中に入った。

中も本当にボロボロだ。

私達は観客席に隠れながら、ステージの上にいるアレンを見た。

そこにあつたピアノを、いとおしそうに撫でる。

……あんな顔もできるんだ。

その顔を見た瞬間、ことがアレンにとってかけがえのないものだ  
とわかった。

アレンはピアノの椅子に座り、鍵盤をあげた。

そして曲を弾き始める。

綺麗な旋律が、ピアノから流れる。

音楽にはあまり詳しくないけど、うまいと思った。

こんなに滑らかで、奥行きがあり、リズムが安定し、そして、優し  
い音が、ピアノから出るなんて知らなかった。

曲が終わった。

気が付くと、私は涙を流し、立ち上がって拍手をしていた。

なのはとはやても、泣きながら拍手をしていた。

くアレン side く

僕はピアノを弾きながら驚いていた。

腕が劣ろいてなかったことにはない。

自分の出す音が、優しくなっていることに、だ。

七年前は、ただ自分の鬱憤をはらすために、ただがむしゃらに弾いていた。

孤独な僕に、本当に神の祝福なんてあるのかと、心の中で叫びながら弾いた。

それでも、ピアノは好きだったので、気は紛れた。

あの頃は指がボロボロになるまで弾いた。

弾いていても楽しくなかった。

でも、このピアノは、つらい刻を、一緒に過ごした、僕にとっての相棒みたいなものになっていた。

だからクロノに、このピアノのことを頼んだ。

そして誰にも教えないように頼んだ。

この落ち着く空間と、自分の音楽を守るために……

あの頃は自分のためにピアノを弾いた。

けど今は、誰かに聞いて欲しかった。

曲を弾き終える。

あの時の虚無感と違って、今は満ち足りていた。

パチパチパチパチッ

いきなり拍手の音が聞こえた。

観客席のほうを見ると、なのは、フェイト、はやての三人が、涙を流しながら拍手をしていた。

「……………オーディエンスのいる場所で弾くのは、クロノ以外では初めてだな」

そんなことを呟きながら、久しぶりの相棒を撫でた。

「はい、ハンカチ」

ステージのほうに来た三人に渡す。

偶然ハンカチを三枚持っていたのだ。

「ぐすっ……あ、ありがとう」

「う、ごめん……ぐすっ」

「ええ曲やったわ……ぐすっ。ホンマに……」

え〜と……何か僕が泣かしたみたいになってるんだけど……何  
で？

「何で泣いてるんだ？」

「あ、あんまりにもいい曲だったから……」

「てか、クロノか？ここ教えたの」

「う、うん……」

「……そろそろ泣き止んでくれない？」

「と、止まらへんねん」

「……はあ」

僕はため息をつく、三人を、両手を広げて抱き締めた。

「ふえっ!？」

「ほあっ!？」

「へあっ!？」

三人とも変な悲鳴をあげる。

「ち、ちよつとアレンくん!？」

「え、えええええと………」

「な、なななな何すんねん!？」

「ありがとう」

「「「えっ?」「」」

僕がお礼を言うと、三人は疑問の声をあげた。

「演奏を褒めてくれて、ありがとうって意味」

僕は今まで、自分のためにピアノを弾いていた。

だから、人から褒められるのが嬉しかった。

「ど、どういたしまして……… / / / /」

「う、うん…………… / / / /」

「は、早よ離して…………… / / / /」

「あ、わりい」

僕は慌てて三人から離れた。

嬉しさと感謝のあまり、抱きついてしまった。

三人とも顔が真っ赤だ。

「そ、そうだっ！さ、さっきの曲何て言うの？」

なのはが恥ずかしさを隠すためにそう聞いてきた。

「フ란ツ・リストの作った曲で、曲名は、『孤独の中の神の祝福』」

途端、三人の表情が暗くなった。特にはやてが。

「何暗い顔してるんだよ」

「だ、だって……………」

「今の僕の気持ち、曲にのせて伝わったはずだけど？」

僕がそう言うと、三人はさっきの曲を思い出していた。

それを思い出し、表情が明るくなる三人。

「わかったか？ だったらとっとと帰らせてくれ。なんか眠くなってきたから」

「うん……っ て違うでしょっ!」

「何で病院抜け出してるのよっ!」

「綺麗にまとめようとしたってそうはいかんからなっ!」

「くっ、ばれたか…… ならば奥の手! 三十六計逃げるに如かず!」

「」「逃がさない」「」

この三人から逃げ切れるわけがなかった。

「ゆ、許してくれい」

取り押さえられながら、そう懇願する。

「駄目」

「そこを何とか!」

「やだ」

「もうしませんから!」

「信用できん」

「うう……ヘルプ！ヘルプミー！」

「残念」

この地上に、三人の悪魔が降り立った瞬間だった。

「うう……」

ベッドにボロボロの状態で寝かされている。

「もう無茶しないでね」

そう言ってシャマル先生は病室を出ていった。

「誰も僕を心配してくれないよお」

「逆だよ、アレンくん。みんな心配だから、こんなことしたんだよ。わかってる？」

「わかってるよ、なのは」

病室に残っているのはにそう言った。

「でもアレくんは心配かけすぎだよ。自覚ある？」

「もちろん」

「……………レイジングハート」

「冗談！冗談だから！ホントすいませんでしたっ！」

「ゆ・る・さ・な・い」

「ぎゃあああああああ……………あれ？」

痛みが襲ってこない？

「にやはは。さすがに嘘だよ」

「……………僕のリアクションを楽しんだな？」

「うん」

「……………白い悪魔」

「何か言った？」

「いや何にも」

僕はベッドから起き上がった。

身体中のあちこちが痛い。これで退院するまでの期間が伸びないのは奇跡だ。

まあ僕の場合、傷ついたのは体じゃなくてリンカーコアなんだけどね。

魔力をリミッターがあるにも関わらず、無理に使いすぎたらしいけど。

「じゃ、正面玄関までエスコートしますよ、高町教導官?」

「何だかアレンくんがそのしゃべり方すると、滅茶苦茶変に感じるね」

「ほっとけ。で、どうする?もう帰るだろ?」

「うん。今日はた〜っぷり、アレンくんとお話するつもりだから」

笑顔のエース・オブ・エース………うん、間違いなく悪魔だ。

「何か言ったかな?」

「イエナニモ」

エスパーかよっ!?

「もう絶対に無茶しないでねって、何回言えばわかってくれる?」

「お前達が無茶をしなくなったら考えてやる」

「うう……………」

否定できまい。

「それに僕の場合、魔力さえ使わなかったら問題はないからな」

「それでも心配はするよ」

ガキが何かに見えるのか？僕は……………

「……………じゃあ、今から約束するよ」

「え？」

「心配をかけるかもしれない。無茶もするかもしれない。でも、どんなことがあっても死なないって、約束する」

「……………うん。約束、してね」

「それはなのは達もだ。何だか僕の周りには、揃って無茶する奴らばっかだからなあ……………僕がこんなに頑張り屋なのは、きつとそのせいだ」

「にゃはは。面白い冗談だね」

グサッ

「ぐはっ」

くっ、言い返せない！やっぱり女は怖いよっ！

「……………ねえ、一つ聞いていいかな？」

「僕の四十八の女をおとすテク以外なら」

「えっとね……………」

無視かよっ！スルーされたボケがどんだけ……………

「アレんくんって、好きな人いる？」

は？好きな人？

「いや……………そりゃいるけどさ……………」

「っ！？誰！？」

「……………言わなきゃ駄目？」

「無理には……………」

だったらそんなに残念そうな顔するな……………

「わかった。教えるよ」

「ホント！？」

「ああ。それと病院では静かに」

「あつ、ごめん……」

「ん。じゃあ教えるぞ」

「う、うん……」

「なのは」

「……………ふっ、ふえっ!？」

何だかいきなり顔を赤くするのは。まあ気にせず続けよう。

「フェイトにはやて」

「え？」

「それに言いたくはないけどクロノに、アイ、レル、フェル。まだ会ってない悪友数名」

「……………」

「みんな、大好きな僕の友達だよ」

うわぁ……………自分で言っというてなんだけど、やっぱり恥ずかしいや……

……………

なのはの前だから言えたんだろうな……………

かつてフェイトやはやてを救ったなのはの前だからこそ、な。

「……………はあ」

「ええっ！？何でため息っ！？」

僕ため息つかれるほど恥ずかしいこと言いましたかねえっ！！？

「アレんってホント鈍感だよね」

「……………何でだろう？初めて言われたはずなのによく言われてる気がする」

「何でそういう所は敏感なの」

「??？」

さっきからいまいち話が見えないんだけど……………

「さっきから何の話なんだ？」

「……………アレんくんには、まだ早い話だよ」

「？その早い話を何故僕に？」

「知らないっ！」

何故か怒って席を立つ。

「お、おいつ。何怒ってんだよっ！？」

「怒ってないっ！」

「怒ってんだろ！」

僕もベッドの上で立ち上がる。

「よかつたら理由を教えてくださいよ。ケンカしたまま別れるなんて……嫌だからさ」

「……ごめん。でも、本当に何でもないから」

「本当か？何か仕事とかで疲れてイライラしてたとかだったらいくらでも愚痴聞けど……」

「本当に何でもないの。気にしないで」

そう言ってなのはドアに向かって歩き出した。

「あっ、送るよっ！」

僕は慌ててベッドから飛び降りる。

「うっん、いいよ。まだ体痛むでしょ？」

「うっん……じゃあ、またな」

「うんっ、またねっ！」

なのはは笑って手を振って去った。

よかつた………笑ってくれて………

「は、ははっ……情けねえ」

友達が何か悩んでたのに……それを聞くことができなかった。

あきらかに何か無理してた。

なのはに隠し事はあんまむかないな。

「はあ……情けねえ」

僕はため息をついた後、僕は電気を消して寝た。

今度会った時に、聞いてみようかな……

……いや、やめておこう。

何故かそれは、なのはを傷つけてしまうような気がするから……

〈なのはside〉

「あー、失敗しちゃったよ」

私はため息を吐きながらそう呟いた。

アレンくんが好きながいるか確かめたかったんだけど……

あの様子じゃないんだろうな……

フェイトちゃんもはやてちゃんも、きっとアレンくんのこと……

私は、一体どうなんだろう……

まだわからない。でも、アレンくんの答えを聞いてあんなにイライラしたってことは……

私は顔を紅潮させながら、帰路についた。

## 第四十八話 退院

（アレンside）

この三日間。いろんなことがあった。

冷蔵庫のものをつまみ食いしては追いかけられ、病室を抜け出しては追いかけられ、仕事さぼっては追いかけられ……

ろくな思い出がないが、とにかくいろいろあった。

そして、いよいよ退院。

……全然感慨深くないな。

まあ、退院で感慨深いってのも変な話か。

「さて、行くか」

僕は荷物をまとめると、立ち上がった。

「退院おめでとうー」

ドアの方を見ると、はやてがいた。

「珍しいな。わざわざ来てくれたのか？」

「まあな。体はもう平気か？」

「魔法はしばらく使わなくなって言われたよ」

「つまりそれ以外問題ない？」

「イエス」「じゃあ行くで」

「？行くってどこに？」

「デート」

「……………はあ？」

僕の疑問の声を無視し、はやはささと先に行く。

「おい、ちょっと待てよっ」

僕も慌てて荷物を持って追いかけた。

「荷物持ったままデート……………シユールなこった」

「こんな美人とデートできんねん。それくらい我慢しい」

「へいへい。で、どこ行くんのだ？」

「映画館」

「……………お前にしてはまともなチョイスだな。何か悪いもんでも食ったか？」

「……………一発殴っていい？」

「映画楽しみだなあっ!!！」

僕ははやての拳の届かない所にダッシュで逃げながら叫んだ。

「あっ、待てやコラッ!!！」

はやてが僕を追いかけてくる。

「待てって言われて待つ奴がいるかあっ!!！」

さらに速度をあげる。

結局、映画館まで二人して全力疾走したのだった。

「で、何て映画見るの？」

「ん？これやで」

はやてが指を差した看板には、こんなタイトルがあった。

『60億分の1の恋』

「……………」

なんだろう。いくつか思う所はあるが、取り敢えず一番気になったのは……………」

「こいつでも恋愛に興味あるんだ……………」

「うるさいわっ！」

しっかり聞こえてしまっていた。

「いや、悪い悪い。お前のことだから、コメディとかアクションを見ると思っていたからさ」

「……………そんなに变かな？」

「いんや。むしろいいだろ。僕としては、やっとお前にも春がきたことに対して、親のような感情が芽生えているよ」

「いやそれって好きな人ができた場合やる？」

「いないのか？」

「うっ……………い、いるけど…………… / / / /」

顔を真っ赤にするはやて。マジで春が来たんだなあ。

「で、誰なんだ？」

ゴスッ

みぞおちに拳を打ち込まれる。

「な、何……………すんだ」

「デリカシーのない男に天誅をくだしただけや」

「……………」

た、確かに今のは僕が悪かったかも……………

「う、うめんなさい」

素直に謝る。

「ええから早よ行くで」

「へえい」

くはやてsideく

映画が始まるまで、残り三分をきった。

私は隣の奴を一瞬睨め付けた。

こいつはどんだけデリカシーないねんっ！

言えるわけないやろっ！

心の中でそう叫ぶ。

大体私が恋愛映画見るのがそんなに意外か！？

悪かったなあっ！

色気のない青春送ってきたわあっ！

恋愛にだって、滅茶苦茶興味あるわあっ！

そんなことを知らず、隣の奴は私に、

「眠いから寝てていい？」

ブチッ

ここが映画館やなかったら確実にぶっ飛ばしていた。

「アレンくん？次そんなことぬかしたらその舌引っ込抜くで？」

隣の奴、アレンは顔を青くしながら「冗談です」、と言った。

ま、これで寝ることはないやろ。

男女が休日にデートで恋愛映画を見る。

普通少しは恋人らしい雰囲気ではずやのに、こいつの場合やとそうはいかなあ……………

そんなことを考えていると、映画は始まった。

～アレンスイド～

うん……

物語はすでに終盤。

内容は簡単に話すところだ。

貴族である女が、庭師である男と恋におちたのだ。

だが、当然それは許されず、二人はかけおち。

執拗な追っ手に逃げ切れないと判断した二人は、来世で結ばれあうを誓い心中。

時は変わり、現代。

普通の家の子供として生まれ変わった二人は出会い、結ばれ、幸せな家庭を築きましたとさ。

……ベタだな。

タイトルからして大体予想はしてたが……

はやてもこんなんじゃないじゃつまらないんじゃない……

「ぐずっ……ぐずっ」

おお泣きしていた。

僕としては映画よりもこのはやての乙女らしさに感動した。

「…………ハンカチ、いるか？」

「う、うん…………ぐすっ」

「……………」

何だか微笑ましいな。

あの有名な捜査官が、B級恋愛映画にマジ泣き。

なんか新聞のタイトルに出てきそうだな。

一応周りを警戒しているが、今のところ記者などが僕達の周りにいたのは一度もない。

カメラでも撮られたら、それを潰せばいいけどさ……………

にしても、あれだけ豪快に新聞に張り出していたのに、その被害にあってないとは……………

……………クロノだな。 100%クロノに違いない。

ま、だったらこのはやてを撮られる心配はないだろ。

僕は客が次々に帰っていく中で、はやてが泣き止むのを待っていた。

「で、次どこ行く？」

マ ドナルドで飯を食いながら訪ねる。

時刻はまだ昼。遊ぶにしる買い物するにしる、充分な時間がある。

「……………／／／／」

はやては顔を赤くしながら、チーズバーガーをちびちび食べていた。

さっきのが恥ずかしいらしい。

「……………ふむ」

なかなか拝めない光景だから、目に焼き付けるのもいいが……………

「はむ……………」

うっっん……………

やっぱりらしくないな。

「なあはやて」

「何？」



「いやあ……………」

頭をかく。

「いやあ、やあらへん！どついつつもりか聞いとんねんっ！」

「ん〜。やっぱりお前はそつちのがあってんな」

「へ？」

「いや何。恥ずかしくてしゅんとしてるよりは、お前らしいなって話だよ」

僕は笑顔でそう言った。

「……………っ／／／／」

また顔が赤くなった。

「おいおい。まだ恥ずかしいのかよ」

僕は呆れてそう言った。

「……………ちゃうわアホ」

「へ？」

「何でもないっ！」

そう言ってチーズバーガーをがっがっ食う。

さっきよりはマシだけど……………せめてもうちよっとな女の子らしく食えないのか？

そう思ったが口には絶対しない。

目の前ではすでに食べ終わったはやてが、口のなかのものをドリンクで流しこんでいた。

食べるの早いな。

僕はもう一応食べ終わってるけど……………

「……………ぶっ」

食べ物が口のなかに大量にあるせいで、顔が膨らんでるはやてを見て、笑ってしまふ。

なんかこの顔見るとどうでもよくなってきたなあ。

「くくっ」

「なっ、わ、笑うなあっ！」

「それより気付いてるか？」

「何が？」

「周り」

そう言うと、はやては辺りを見回した後、顔を赤くして俯いた。

ようやく気付いたか。僕達が注目されていたことに。

まあ、あんなだけ騒げば無理ないか。

「い、いつから知ってたん？」

「お前が脇くすぐられて騒いだとき」

「……………うう」

顔をさらに赤くする。

まあ実際は、もっと前から注目されていたが。

こいつは一応美人の上、ここじゃ結構有名だからな。

一目惚れしたアホな男とか、興味本意で見てくる奴とかが、入った時点で結構いたが……………

やっぱり言わないほうがいいよな。

「ま、いいや。食ったんなら、とっとと次行こう」

「……………うん」

僕達は店を後にした。

「懐かしいなあ」

「この前来たばっかだろうが。そして何故ここに来た？」

今いる場所は、いつかの……女装させられた服屋だ。今着ている服もその時のものなんだが……

ここにはできれば二度と来たくなかった。だってまた女装させられそうだもん。

「……女装はしないぞ」

「応釘をさしておく。」

「わかってるって。今日はちゃんと選んだらうって思ってたな」

「……べしべしとっ」

「前の勝負……私の服は0標やった」

「まあ、あんな服なら無理ないな」

「やから、今回は私のセンスをお前にわからしたるねんっ！」

「……………じゃあ僕はこの辺で」

「逃げたら幽霊恐いんクロノくんにはらすで」

「喜んで試着しましょう」

速攻で屈する。

「うんうん。じゃあ私は選んでくるで」

「……………覚えとけよ」

服を選びに行ったはやてを見て、そう呟いた。

さて、暇だな。どうするか……………

ん？

……………そうだ！

「はやてside」

「これもいいけど……こっちなかなか……よしっ。これとこれにしよう」

私は服を選び、アレンの所に戻った。

「あれ？」

元の場所に、アレンはおらんかった。

おかしいなあ。あの話クロノくんにはらしてもええんか？

トントン

いきなり肩を叩かれた。

振り返ると、アレンがいた。

「アレン、どこに行っとったん？」

「ん？ちょっとトイレにな。それより服は決まったか？」

「ああ。前みたいなふざけたものやないで。私の自信作や」

「お前が作ったんじゃないだろうが……まあいい。それより、一つ

頼まれてくれないか？」

「？何を？」

「実はな。店の人がどうしても試着して欲しい服があるらしいんだけどさ、なかなか試着してくれる人が見つからないんだよ。だから試着してくれないか？」

「何で私が？」

「そりゃ美人だからだろ。頼むよ。服が半額になるらしいから」

「半額っ！？」

私は速攻で頷いてしまった。

「で、服は？」

「これだよ」

アレンから服を受け取り、試着室に入った。

そして服を見た。

「こ、これは……………」

ホンマにこんなん着なあかんのか！？

でも着たら半額……………」

「ええい！やったるわっ！」

私は服を脱ぎ、それを着た。

くアレンsideく

今、試着室の前で、はやての着替えを待っている。

くくくくく。

今頃あいつは、あの服を見て仰天してるだろうな。

笑いが堪えられないぜ。

そしてその姿をこのカメラに納めれば……

ふっふっふっ。

今こそ復讐の時だっ！

「あ、あの……」

僕が復讐に思いを馳せていると、眼鏡をかけた中年男性が話しかけてきた。

「ほ、本当にいいんですか？」

「ああ。任せとけて。それより、ちゃんと半額にしるよ」

「そ、それはもちろんですよ。じ、じゃあ任せますよ」

そう言うと、中年男性、店長が準備にかかった。

さあて………後ははやてを待つだけだ。

試着室のカーテンが開けられた。

その瞬間、僕は大声で叫んだ。

「皆さん！ゴスロリ服をきた超美人がここにいますよおっ！！」

くはやてsideく

「皆さん！ゴスロリ服をきた超美人がここにいますよおっ！！」

「ンなっ！？」

私が試着室からでた瞬間、アレンがそう叫んだ。

たくさんの人の視線が私に集まった。

パシャッ

カメラのシャッター音。

見ると、カメラ片手に親指を突き立てたアレンが、満面の笑みでいた。

「はいしゅ〜りよ〜」

そう言っアレンはカーテンを閉めた。

え？ え？ え？

な、何が起こったん？

え、ええと、ゴスロリ服を着て、みんなが注目してきて、カーテン閉まって……

な、な、何が起こったんや？

そ、それより……

この格好をたくさんの人に見られたあつ！！

「はやてー。もう着替えていいぞー」

外からアレンの声。

よし。あいつをぼこぼこにして事情を吐かせよう。

私は急いで服を着替えた。

くアレンsideく

ふっふっふっ。

作戦は大成功だ。

はやての恥ずかし写真は撮れたし、服は半額になるし。

全く、いいことづくめですなあ。

だけど……………

「どっやってはやてに伝えよう」

下手すれば僕の人生はフィニッシュを迎えるぞ……

「ま、まあ何とかなるだろ……」

「へえ。何が何とかなるんや？」

「すみません。何とかかなりそつにありません。」

「じ、これは。」「機嫌麗しゅうございます、はやてさん」

「おかげさまで、アレンさん。で、早く説明してくださいますか？  
できれば私の血管が干切れる前に」

僕ははやての方を見た。

「っ！」

血の気がひいた。

はやては………笑顔だった。

今まで、怒った時に笑っているのは何度も見たが……

今のはやての笑顔は、一点の陰りもないほど、完璧な笑顔だ。

し、死ぬ………

今回のことをそのまま伝えたら、確実に死ぬ。

「え、えっと……」

「もし嘘ついたら、次はないわよ？アレンさん」

何か口調まで変わってるしっ！！

くそっ。腹括るしかないっ！

僕は話した。

「え〜っと……」

僕は店長を探していた。

今回の実行の要となる人物なのだ。何としてもコンタクトをとり、交渉を行わなければ。

しばらく探していると、それっぽい人を見つけた。

「すみません。この店の店長さんですか？」

「え？ああ。あなたはあの時の……」

「へ？」

「ほら、この前服を買いにきた時ありましたよね。三人の綺麗な方と一緒に」

「あつたけど……」

「その時のこと、結構話題になって、また来ないかなって話してたんですよ」

「へえ……」

「だったら交渉もやりやすそうだ。」

「私に何かご用ですか？」

「ああ。一つ頼みたいことがあって」

「はあ……」

「今、あの時の美人と一緒に来てるんだよ」

「本当ですか!？」

「食いついてきた。」

「そうだよなあ。男だったら、あんな美人とお近づきになりたいよなあ。」

まあいいや。餌に食い付いてくれたし。

「はい。それで、今から言うことをやれば、服を半額にしてくれない？」

「……………内容によります」

よし。突っ返されないだけ上出来だ。

「今来ている美人を、宣伝に使っていいよ」

「!?!?」

「しかも着る服はゴスロリだ」

「!?!?!?」

おお。驚いてる驚いてる。

「ただし、見せるのはほんの数秒です。着替えてる間にできるだけ客集めて、その姿を見せるんだ。一瞬とはいえ、あんな美人のゴスロリ姿。宣伝には充分でしょ？」

「……………わかりました」

「よっしゃあっ」

ガッツポーズをとる。

「あ、一つ言っとくけど、写真撮影は禁止ね。もし撮ったら、僕がそれ壊すから」

「わ、わかりました」

「では早速」

僕はにやけながら、戻ってきたはやてのもとに向かった。

「と、いつわけです。すいませんでした」

ほとんど土下座状態で謝る。

「……………」

黙ったままのはやて。

「何でわざわざ半額にしたかったん？」

「へ？」

「恥ずかしい写真撮るだけやったら、別にする必要ないやろ」

「……………」

さすが捜査官。やっぱばれたか……………」

「……………それはまだ話せないな」

「……………はあ。ちゃんとした理由やろな？」

「それはもちろん。じゃなきゃ、さすがにあそこまでしないよ」

「……………わかった。信じるぞ」

そう言うてはやては踵を返した。

「お、おい。服は……………」

「もうええ」

「ちよっ……………はあ」

僕はため息をつきながら、生きていることに感謝した。

「早よ来いー！」

「あ、ああっ」

僕ははやての後を追った。

その時、

ドガアアアンツ！

爆発音が轟いた。

どうやら僕は、休日<sup>ど</sup>に事件に巻き込まれるという全くありがたくな<sup>い</sup>い才能があるようだ。

またため息を吐き、爆発音のした方向に走った。

## 第四十九話 絶望的状况

「はやくside」

「アレンツ！」

アレンが爆発のした方に走る。

「お前はクロノにこのことを報告しろっ！」

そう言っただけで走り去った。

デバイスもないのに……それに魔法も使えんよ、体だってまだ……

私は舌打ちした後、急いでクロノくんに通信をいれた。

「アレンside」

爆発した場所に全速力で走る。

今、周りの人は爆発したほうを見ている。

使うか。

僕は超高速で空間に文字を走らせる。

無理なんて知ったことかつ！

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す！」

僕の体が一瞬光り、一気に速度を増す。

急げっ！

僕の目的地は、未だ黒い煙をあげているビルだ。

＼フェイトside＼

「はやてっ！」

「フェイトちゃん！？」

私が走りながら声をかけると、はやてが驚きながら声をあげた。

「何でここに……」

「クロノから連絡を受けて……それよりアレンは!？」

「……わからん」

「えっ!？」

「真っ先にここに来てるはずなんやけど……見当たらんねん」

「そんな……」

私達は今、ビルの前にしかれた包囲網の後ろにいる。

ここにいないってことは……まさかっ!!

「ビルの……中に？」

「……多分」

「……状況は？」

私は唇を震わせながら、はやてに聞く。

状況によっては、アレンの危険も……

「……現在、最上階に人質を集めて、たてこもってる。今の所わか  
ってる犯人の人数は二十人。人質は二十二。犯人からの要求は、  
金と逃走用のへり。用意できないなら、人質を殺すって」

「そんな……」



大切な人が死ぬかもしれないのにつ！またつ！

「フェイト、はやて」

いきなり私達の頭に、アレンの声が聞こえた。

「アレン！？」

「今どこおんねんっ！」

「ビルの中だよ。何とか潜入に成功した。これから人質救出に向かう」

「駄目だよ！一人じゃ危険すぎる！」

「大丈夫だよ。頼もしい味方がいるから」

「味方？」

「にはは。フェイトちゃん、はやてちゃん、聞こえる？」

「「なのは（ちゃん）！？」「」

私達は驚きのあまり叫んだ。

「どっしてなのはが……」

「ビルに向かう途中、偶然会ったんだ。そしたら一緒に行くって言い出したんだよ。危ないからやめろって言ったのに」

「「それはアレン（くん）だよ（や）っ！ー！」」

「満場一致ですか。まあいい。てわけだから、もし何かあった時のために、スタンバイしといてくれよ。なのはは僕が守るから」

「何を言ってるの？今回は私がアレンくんを守るんだよ」

「古来より、男が女を守るのは決まったことで……」

「なのは、アレンのことお願い」

「そのバカなこと頼んだで」

「了解。任せといて」

「……僕は無視か」

それを最後に、声は聞こえなくなった。

「なのはちゃんが一緒やったら……」

「うん。きっと大丈夫。私達は、何かあった時、いつでも動けるようにしておくよ」

「もちろんや」

私はビルをもう一度見上げて、願った。

なのは、アレン、どうか無事でいて。

くアレンsideく

僕は走っていた。

ようやくビルが見えてきた所で、裏道に身を潜める。すでに一階には犯人たちがいたからだ。

これからどうする？

正面突破は駄目だ。人質がいるかもしれないし、何より今の僕じゃ力不足だ。

屋上から飛び移るのも論外。絶対に見張りがいる。

なら、

僕は裏道を縫うように走り、犯人たちの立てこもっているビルの隣のビルの裏側に来た。

幸い、犯人たちの立てこもっているビルの周りは、同じくらい高いビルが建て並んでいる。裏道までは目が回らないはずだ。

僕は一階にある窓を、あんで闇庭を使って音を立てずに割り、中に入る。

その後、階段をあがり、二階の窓の前まで行く。

いくら何でもビル全てを見張るのは無理だ。

そして、一番重点的に見張っているのは一階。次に屋上。後は、人質のいる階ほどに嚴重になってるはず………なら、二階が一番警戒が薄いはずだ。

まあつまり、こっから向こうに飛び込むってわけだ。

音については心配ない。そういう技術を持っているし、何よりあんで闇庭があるから、窓ガラスを割って突っ込んでも、問題ない。

だが、それでもこんな荒技は、警戒の薄い今じゃないと、成功はしない。

飛び込む時、上からの見張りにはれる可能性もない。魔法で速度をあげて飛び込むから、姿は見えないはずだ。ビルとの距離はたった二メートル。いける。

僕は目を閉じ、深呼吸をする。

失敗は許されない。

僕は目を開け、足を踏み込んだ。

行くぞっ！

「アレンくん」

「え？」

後ろを見ると、心配そうな顔のなのはがいた。

「な、何でここに……」

「たまたま、爆破現場に近くて、そこに向かってると、裏道に入っていくアレンくんが見えたから……」

「……つけてきた？」

「……ごめん」

なのはが申し訳なさそうな顔で謝る。

「謝るなよ。別に悪くないんだから。どうせ心配だから来たんだろ？」

「うん……」

「だったら心配ないから、外で待機してな。大丈夫。人質は絶対助け……」

「駄目だよっ！」

なのはに叫ばれる。

「ねえ、何が大丈夫なの？デバイスがないのに、魔法が使えないのに、体が万全じゃないのに、病み上がりなのに、何が、大丈夫なの？」

「それは……」

「お願いだからもう心配かけないでよ……一人が無茶しないでよ……仲間を、頼ってよ」

「……ごめん」

「……いやだ。信じない。アレンくんは、また一人で先走って、無茶して、絶対みんなに心配かけるもん」

「それは……」

否定できない。

「だからもうそっちは諦める。その代わりに、約束して」

「……何を？」

「せめて、目の前にいる時くらい、私達を頼って。お願いだから、目の前にいる時だけは、助けを求めて。あなたは一人じゃない。私達がいるってことを忘れないで」

「……」

「約束、できる?」

「……………」

僕は踵を返し、窓に向かう。

「アレくんっ!」

「何してる。さっさと行くぞ。警備の薄い今しかチャンスがないんだから」

「えっ……………うんっ!」

僕の言葉を聞くと、なのはは嬉しそうに近づいてきた。

「なのは、ちょっと失礼するぞ」

「へ?……………ひゃあっ!」

僕がなのはの腰に手を回した途端、変な声をあげた。

「ア、アレくん?」

「なのはは窓を音をたてずに割る技術も魔法もないだろ?だから一緒に突入したほうがいいんだよ」

「で、でも……………恥ずかしいよ」

「僕だって重いのはを片手で持ちたくなってるよ」

「…………アレンくん？」

「冗談だ。重けりや病み上がりの体で、しかも片手で持てるかよ。むしろなのはって軽すぎないか？」

「そ、そうかな……………／／／／」

「ああ。ちゃんと飯食ってるか？」

「う、うん」

「本当かよ……………まあ育つところは育ってるし、大丈夫か」

「っ！！バカッ！！……………／／／／」

そう言っつて顔を赤くするのは。こっちも赤くなってきた。

こっち方面の冗談には、まだ免疫ないからなあ。

そう思いながら、窓を割る。

「なのは、念のためステルス系の魔法頼むわ」

「了解」

薄い膜みたいなものが僕達を包む。

こんなものは気休めにしかならないけど、ないよりはマシだ。

僕は踏み込んだ足に力をいれた。

「…………行くぞ」

「…………うん」

なのはの返事を聞くと、僕は地を蹴った。

「…………てて」

周りにはガラス片が散らばっていた。どうやらここは仕事部屋の一つのようだ。いくつものデスクと、パソコンが置いてあった。

「大丈夫かなのは？」

僕は脇に抱えているのはに聞く。

「うん。ガラス片でもどこも切ってないよ」

「そうか…………侵入成功、だな」

「うん」

僕となのはは、お互いに親指を突き出し、喜びを表現した。

「じゃ、早速はやて達にこのことを伝えますか」

「そうだね」

僕ははやてとフェイトに念話を送った。

「フェイト、はやて」

「で、これからどうするの？」

「なんとか敵にばれないよう、人質のとこまで行きたいけど……」

「無理、かな」

「ああ。人質は最上階の二十三階。ここは二階。敵は二十人。ばれずに二十一階もあがる場所なんて……いや、一ヶ所だけある」

「えっ、どっ？」

「エレベーターの空洞だよ。CG事件のときも、そこを通過して一階まで降りたんだ。多分いけるはず。問題は……」

「どうやってそこまで行くか、だね」

「ああ。でもそれなら手はある」

「どんな？」

「奴らの服を剥いで、それを着るんだよ。そうすれば怪しまれない」

「……それだったら、それ着て普通に上にあがれば……」

「それぞれ担当している場所があるのに、持ち場を二人も離れるバカがいるか？」

「た、確かにね……」

「とりあえず、近づいてきた敵を狙うぞ」

「でも近づいてくる敵なんてわからないよ？」

「気配でわかるだろ？」

「……」

「……わりい。僕の常識で考えてしまった。普通わからないよな」

「……気絶させるのは私がやる」

「駄目だ。こういうのは慣れてる奴がやるもんだよ。首筋に手刀で一発。それで終わりにする事ができるか？失敗したら終わりのプレッシャーに耐えながら、できるか？」

「……………無理かも」

「だろ？だから僕に任せとけ」

僕は仕事部屋のドアのすぐそばに待機した。

この部屋には監視カメラもないようで、かなりラッキーだ。監視力メラがないってことは、必然的に見張る必要があるわけで…………

「……………どっつ？」

「来たよ……………数は……………二人だな」

ラッキーだ。まさかちょうど人数分とはな。

僕は息を殺し、気配を断ち、相手からばれないように身を潜める。

残り五メートル…………

四……………三……………二……………一…………

ガチャッ

零！

「ぶっ」

入ってきた二人に、膝蹴りをみぞおちに、肘打ちを後頭部に食らわせ、気絶させ、音もなくドアを閉める。

「ふう……………成功」

僕は息をつくとき、なのはに向けて親指をたてた。

「うん。それより早く着替えないと……………」

「あゝ、ちよつと待て」

「ふえ？」

僕はなのはの疑問の声を無視し、犯人を確認する。

……………まずいな。

性別は二人共男。それもかなりごつい。

僕やなのはみたいなのひょろい体とは大違いなのだ。

いくらこの黒づくめの服はぎとろつが、ここまで体格に差があればすぐに気付かれる。

「うん……………」

なのはも気付いたらしく、隣で唸っている。

「……………どじするっ…」

「…………やるしかないだろ」

僕はなのはにそう言う。

「ここは警戒のレベルはかなり薄い。なら、ばれる可能性だって…」

僕の言葉は途中で止まってしまふ。

「？アレンくん？」

「…………なあ。何であいつらは、こんな所に腕っぷしの強そうな奴らを配置したんだ？」

「…………確かにそうだよな。さっきは不意討ちで一瞬で気絶させたけど、この人達、かなりできるよね？」

「ああ。そんな奴が二人……………ひよつとしたら、僕達つてとんでもない勘違いをしてたのかも」

「勘違い？」

「警戒のレベル……………この辺りが一番高いかもしれないってこと。奴らの狙いは、金じゃないかもしれない」

「成る程……………CG事件の時みたいに、爆弾使つてテロとか？」

「それだったら、下じゃなく上に戦力集めるだろうが。はやてからの情報だと、逃走用のへり用意してるらしいし……………」

……待てよ？おかしくないか？

「……へりって、二十人も乗れないよな？」

「へ？う、うん……」

警戒の薄いエリアにいた強者……

最低でも二十人はいるのにも関わらず逃走用のへりを用意しろと言った犯人……

爆発したのは上のほう……

人質も全て上……

まるで、上に注意を向けているような……

「……レイジングハート。このビルって、地下はあるか？」

「へ？」

『少しお待ち下さい……はい。あります』

「そこは下水道に繋がっているか？」

「……」

『はい。繋がっています』

「……………これで全部繋がった」

「最初の爆発も、へりを用意するように言ったのは、囿……………」

「戦力は上に集まってるんじゃないかなかったんだ……………下に集まっていたんだ」

くそつ。だとすればまずい。こいつらが戻って来ないことを、仲間が不審に思う……………そうならば人質は……………

それに人質を助けるのは、犯人たちの思うつぼだ。

奴らの目的はテロ。

上に注意が向いている間に、地下か、あるいは一階辺りに爆弾でも仕掛けていて、人質を助けた所に入ってきた管理局員どもを一網打尽、ってわけだ。

つまり、僕達がここにいるのは、奴らの思惑通り、か。

こいつらがやられたのに、誰も来ないのも、全部……………

上にいる人数は、へりに乗り込めるだけの人数のはず……………なら、決まりだな。

「なのは、人質を頼む」

「……………アレンくんはどうするの？」

「フェイト達にこのことを伝えて、下水道を封鎖してもらおう」

「……………その後は？」

「……………人質を頼む。上にはそんなに人数が……………」

パチンッ

なのはが僕の頬をおもいつきり叩く。

「……………なのは？」

「……………さっき、私達を頼ってくれて言ったでしょ……………目の前にいる時くらい、助けてって言うって言ったでしょ……………何で……………何で無茶ばかりするのよ……………」

なのはが悔しそうな、辛そうな、悲しそうな顔をする。

「……………前に言っただろ。お前達の話は、始めから知ってたって……………」

「……………」

「僕はしばらく、この大陸を離れてたけど、ここに来て、資料室で調べたんだ。今までどんな事があったかは知ってる。もちろん、お前の後遺症も……………」

「……………」

「お前の体のほうが、よっぽど危ないだろうが。いいから大人しく安全なほうに行け……………」

「でも……………」

「それにな。僕はお前を頼ってないわけじゃないぞ？」

「え？」

「人質が解放されなきゃ、僕は動けない。かと言って人質を救出したら爆弾が爆発。この作業は、同時進行で行わないといけないんだ。だから別に、頼ってないとかないよ。むしろ頼らないと、今回の作戦は成功しないしね」

「……………で、でも。やっぱり私が……………」

まだ言うか。

僕はため息をついた後、なのはに小指を向ける。

「……………アレンくん？」

僕はなのはの声を無視して、小指をなのはの小指に絡める。

「ふ、ふえっ!？」

「約束しよう」

「へ？」

「僕は絶対、無傷で帰ってくる。怪我もしないし、無茶もしない。ちやんとなのは達の所に、笑って帰ってくるって、約束する。だから、なのはは笑顔で、僕を送ってくれ」

そう言って笑った。

なのはは少し顔を赤くした後呟いた。

「…………絶対に守ってね」

「うん」

「絶対…………絶対に怪我しないでね」

「うん」

「ちゃんと、笑って帰ってきてね」

「それはなのはもだぞ。いくら安全なほうとはいえ、相手はテロリストなんだから」

「にやはは。そうだね」

なのはは少し声を低くして呟いた。

「…………きいてやるよ」

「へ?」

「この事件解決したら、一つだけ何でも言うこときいてやるよ」

「……………」

「喜べよお。僕がこんな気の迷いを起こすなんて、生涯に一度あるかないか……………」

僕の言葉は途中で止まってしまった。なのはが抱きついてきたのだ。

「な、なのは？」

「…………約束、ちゃんと守ってね」

「…………必ず」

「…………うん。信じる」

そう言うと、なのはは離れて、顔を赤くしながら、バリアジャケットに身を包んだ。

「じゃあ、行こっか」

「ああ。退院後の肩慣らしと行きますか」

僕は、さっきの奴の身ぐるみを拝借した。気休め程度にはなるだろう。

僕達は、作戦実行のために、部屋から出た。

くフェイトsideく

「……………成る程な。そういうわけか。お前となのはちゃんは無事やねんな？」

はやてがアレンから送られた念話を聞き、そう呟いた。

「ああ。今なのはは人質救出に向かつてる。お前らは中に絶対入るなよ。近くにいる民間人の避難、下水道の封鎖、後なのはが屋上で戦うかもしれないから、その援護を頼む」

「……………アレンはどうするの？」

「……………もうわかるだろ？僕がとる行動なんてさ」

「……………お願いだからやめて」

「……………無理だよ。僕がやらないと、人質は助からない」

「だったらなのはがいたのに……………」

「忘れたのか？あいつには、ゆりかごとかいうので戦った時の後遺症があるだろうが。あんま無茶はさせたくない」

「そ、それは……………」

「それに僕なら大丈夫だ。取って置きの際の手があるから」

「っ！！アレン……………あんたまさか……………」

「ああ。使うよ」

「あかんっ！その体で使ったら命に関わるっ！！何で今自分がボロボロか忘れたんかつ！！」

「忘れてなんかないよ。それに僕だって使うつもりはない。もしも  
の時に使うってだけだ。長時間は使わない」

「それでも今使ったら……………」

「人の命がかかってるんだ。安いもんさ」

「アレンツ！！」

はやてが叫んだけど、反応はなかった。それ以降アレンからは何も  
言っただけだった。念話をきったのか……………

はやては悔しそうに拳を握り、唇を噛み、今にも涙が流れてしまっ  
た。目には涙がたまっていた。

「はやて……………さっきの話」

「……………フェイトちゃん達は、まだ知らなかったな。アレンの稀少  
スキル、ドライフ“スキル臨界突破”のこと……………」

「臨界突破（ドライブ？）」

聞いたことのない稀少<sup>レアスキル</sup>技能だ。

「どんな能力なの？」

「……………」

「え……………」

そ、そんな能力聞いたことないっ！

「アレンが爆発を間近で受けて生きてたんも、リンカーコアが傷ついたんも、リミッターで魔力をS以下にしてんのも、全部それが原因や」

「リミッターも？」

「使う能力の威力が高くなるほど、必要な魔力も高なるねん」

「だからリミッターで、アレンにその能力を使わせないようにした？」

「せや。一週間大人しくしとけて言ったんは、リンカーコアが傷ついたからやなくて、その能力の後遺症が残らんようにしたからや」

「……………だったら、今アレンが臨界突破<sup>ドライブ</sup>を使えば……………」

「……………どうなるかまではわからん。けど、よくない結果になるのは  
確実や」

「そんな…………バルディッシュ！」

「あかで、フェイトちゃん」

私がバリアジャケットに身を包もうとしたら、はやてに止められた。

「何で止めるのっ!」

「落ち着きいっ!今バリアジャケット着れば、抗戦の意志をしめすようなもんやっ!」

「けどっ……………」

「だから落ち着きいっ!何も行くなとは言っていないんやからっ!」

「……………え?」

「フェイトちゃん。感情に任せて、タイミングを間違ったらあかん。チャンスは必ず来る。その時は……………わかってるな?」

「……………うん。ごめんねはやて」

「ううん。フェイトちゃんがおらんかったら、絶対に私がビルに突っ込んでたから……………」

はやてが罰の悪そうに頬をかく。

はやてだって心配なんだ。なのに私……………

「……………はやて。絶対に、なのはとアレンを助けようね」

「……………当たり前や」

私達は、突撃するタイミングを待つ。

なのはとアレンを、救うために。

〈アレンside〉

「はぁ……………はぁ……………」

今、僕はエレベーター前にいた。階段から行けば狙い撃ちにされるからな……………

なのはも、エレベーターの空洞から上に上がった。

ここに来るまでに倒した敵の数は十人。もはやここまでくると、僕の仮説は確実だろう。

僕はなのはがさつきぶち破った扉から、下に飛び降りる。

「くっ……はぁ……はぁ……」

既に魔法を使った回数は三回。体が悲鳴をあげている。

「この前“メタル”まで使ったの失敗だったかも……」

でも、今回も使わないと確実に失敗するな。

一階のエレベーターの扉を睨みつける。

今は一階にエレベーターがなかった。

「上にあるのか………地下に逃げるメンバーを迎えに行ってるのかもな」

ま、関係ない。何人いようと、絶対倒す。

絶対に、奴らの思い通りにさせない。

爆弾の解体を最優先にしないと………もしその時は、前と一緒にのとをするまでだな。

あゝあ。なのはやフェイト、はやてにどやされるなこりゃ。

「……………それでも、守らなきゃならんもんがあるからねえ」

ま、祈るか。

約束通り、笑ってあいつらのところに帰れるよう……

僕は、なのはからの合図を待った。

「なのはside」

私は今、最上階の、人質がいる部屋の扉の前にいる。

ここまで、ほとんど人がいなかった。

アレンくんの言った通り、やっぱり下に戦力が集中してるんだ……

後制圧するのは、ここと屋上だけ。

勝負は一瞬。

私はクラスターをいくつが発生させる。

「行くよ、レイジングハート」

『はい、マスター』

レイジングハートの答えを聞き、私は扉を素早く開ける。

「なっ……………」

数は八人。私は狙いを定め、クラスターを放った。

「アクセルシューター、シュートッ！」

全ての敵に当て、全員を気絶させることに成功した。

その後、全員にバインドをかける。

「よし。アレンくんとはやてちゃん達に念話を……………」

私は念話を送り、周りの人達に告げた。

「みなさん！もう大丈夫です！外に管理局員がいますので、局員が来るまで待っていてくださいっ！」

周りから歓声があがる。きっとあの時もこんな感じだったんだろうな。

私はそう思いながら、屋上に向かった。

「アレンくん……………無事でいてね」

（アレンside）

来た！

ドゴオツ！

僕は扉を蹴破った。

「なっ……………」

いきなり扉を蹴破る鈍く響く音の後、『闇庭』あんてで静寂を作る。

この手段は、向こうでも使ったことがある、攪乱の常套手段だ。

「稲光っ！」

魔方陣から稲妻を放ち、犯人の何人かを吹き飛ばす。

「ぜえ……………ぜえ……………」

くっ……………魔法はあと使えて二発くらいか？

敵は見たところ三十。地下もあわせたら五十はいそくだな……

「さて……腹括るとするか」

犯人たちはニヤニヤしながらこちらを見ている。

余裕でいられるのも今のうちだぜ。

そう思いながら、辺りを見回すと、あるものを見つけた。

バックだ。不自然すぎる場所にある、バックだ。

「……………あれか」

爆弾を見つけたのはいいが、どうするか……

理想はあれを持って安全な場所にて解体だが……

多対一の基本は狭い場所や細い道でやることだ。囲まれたらはっきり言って終わりだからな。

けど今の場所は……

「受付ホールって……でかいし広すぎだよ……」  
最悪だった。

早速使うか？

……………いや、ギリギリまで、何とかやってみよう。

魔法二発で、やれるとこまで……………

ダダダダダダッ！！

いくつもの機関銃から放たれる弾丸の嵐が、僕を襲う。

「ちっ……………」

僕は急いで柱の陰に隠れる。

だがすぐに回り込まれて、また撃たれる。

こいつら、そうとう特殊な訓練してやがるな……………

よけた先に必ず銃口が向いていて、絶対に味方には当てず、さっき  
気絶させた連中を、仲間の数人がきついで起こす。

こりゃ出し惜しみは無理だな。

僕は空間に指を走らせながら、懐をあさる。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

僕の体は一瞬光り、一気に加速し、爆弾に向かう。

銃弾が僕を襲うが、この魔法なら全てをよけることができた。

僕は爆弾を持ち、反転した。

目の前には大量の銃口をこっちに向けている犯人たち。

「へっへっへっ。終わりだなあ。管理局の犬」

「それはどうかな？」

「んだとっ!？」

「お前ら、戦闘は出来ても、頭は悪いんだな。ここに僕一人しか来てない時点で、お前らの作戦は、失敗したって気付けよな」

「!??っ……ば、ばれてたのか!？」

「今頃気付いたのか……ホントバカだな」

「て、てめえっ!！」

犯人たちが目を見開いて（顔マスクで隠してるからわかりにくいけど）、僕に銃口を向ける。

今だっ!

僕は目の前に筒状のものを投げた。

瞬間。

ピカアアアアアアンツ!!

轟音とまばゆい光が僕達を襲う。

「ギヤアアアアアッ!？」

「めっ、目がつ!!！」

「くそっ！何も見えねえっ！」

「奴はどこだっ！」

「耳も聞こえねえ……！」

「ちきしょうっ！取り敢えず撃てっ！」

「バカ野郎っ！味方に当たるよっ！」

犯人たちがそんな風に騒いでる間に、僕は二階に逃げた。

さっき放ったのは、スタングレネード。

あの気絶させた犯人の服に入っていたのを、拝借したのだ。

どこで使うか迷ったけど、うまくいったな。

僕は二階の物置に隠れた。きっと奴らはすぐ追ってくる。普通の部屋ならすぐに見つかる。だが、奴らはバカだ。

さっきだって、あんな単純な挑発に乗り、見事罠にはまってくれたからな。

本当は外に出たかった所だけど、こんなもの持って出たら、局員たちを中に入らせなかった意味がなくなるからな。

僕は急いでかばんを開いた。

爆発まで、残り十分。解体にかかる時間は……五分。

威力は凄まじいが、作りが単純だ。

これなら……

僕は思考をストップさせ、急いで物置から出た。

最悪だっ！

瞬間、さっきまで僕がいた場所は、銃弾によって蜂の巣にされていた。

まさか、爆弾の中に発信機があるとはな……

「くくく。チエックメイトだ。ボウズ」

リーダーらしき奴が、銃口を向けてくる。

「……撃つていいのかい？」

「あん？」

「僕が持つてるもの、忘れてない？」

僕は爆弾を見せる。

「撃つたらこれで防いで、お前らも道連れにしてやる」

「なっ……………」

動揺している。やっぱり馬鹿だ。人質のためにあんなとこ飛び込んだ奴が、爆弾使って犯人・人質もろとも死ぬわけないだろ。

僕はその隙に、犯人たちと逆のほうに逃げ出した。

「あ、待てこらあっ！」

「それで待つ奴はいないっ！」

爆発まで残り八分！こうなりゃ走りながら解体してやるっ！

僕は三階への階段を…………

「行かせるかあっ！」

ドオンッ

「っ！…！」

ドンッ

犯人の一人に、右足を貫かれた。

もう走るのは無理そうだ。

「……………ゲームオーバーか」

僕は覚悟を決めた。

「何だ？諦めるのか？」

「ああ……………」

僕は顔の前で、拳を握った手をクロスさせる。

「無茶しないって約束を、守ることをな……………」

「は？」

僕は目を閉じ、集中する。

「な、何だかわからねえけど……………撃てえっ！」

ドオンッ ドオンッ

右手と脇腹を撃ち抜かれる。

「ゴフッ……………はあ……………はあ……………」

口から血がでる。

あ、やばい。目が霞んできた。

もう解体は無理だ。

なら……………」

僕は爆弾を抱えた。

また空で爆発させるしかないっ！

僕は窓に向かった。

瞬間。

「があっ」

「ぐあっ」

「ごはっ」

犯人たちの悲鳴が聞こえた。

見ると、怒ったようにバルディッシュのハーケンモードを振るっつエイトがいた。

「な、何で貴様があっ……」

リーダーを気絶させた所で、フェイトがこっちに向かってきた。

「な、何でフェイトが……」

「このバカッ！」

バッチィーーンッ！！

甲高いビンの音が、ビルに響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8272m/>

---

僕たちの世界

2010年11月25日15時48分発行